デンマークにおける公共図書館の移民サービス：
越境を経験する職員と利用者を対象とした
フィールドワークを中心に

筑波大学

図書館情報メディア研究科

2017 年 1 月

和気 尚美

目次

第 1 章 序論 1
1.1. 研究の背景と目的 1
1.2. 先行研究 5
1.2.1. 公共図書館における移民サービスの変遷や提供体制に関する研究 5
1.2.2. 公共図書館における移民サービスに関与する職員の役割に関する研究 6
1.2.3. 移民の公共図書館利用に関する研究 7
1.3. 本研究の課題と意義 10
1.3.1. 本研究の課題 10
1.3.2. 本研究の意義 12
1.4. 研究の方法 13
1.4.1. 移民サービスの変遷と制度の検討 13
1.4.2. エスニック・スタッフを対象とした調査 14
1.4.3. 移民の背景を持つ利用者の図書館利用に関する調査 14
1.4.4. 研究の対象 16
1.5. 概念規定 19
1.5.1. 移民 19
1.5.2. 越境 23
1.5.3. 多文化図書館サービス 25
1.5.4. 移民サービス 27
1.6. デンマークの公共図書館 28
1.6.1. デンマークの図書館制度 28
1.6.2. デンマークの公共図書館サービスの概要 30
1.6.3. デンマークにおける近代公共図書館制度の創始 32
1.6.4. デンマークの公共図書館に関わる法制度 34
1.6.5. デンマークにおける図書館職員制度 34
1.7. 論文の構成 36
第 2 章 デンマークの公共図書館における移民サービスの変遷 47
2.1. 本章の目的 47
2.2. 公共図書館における移民サービスの草創期 48
2.2.1. 移民サービスの始動 48
2.2.2. 移民児童への図書館サービス 50
2.2.3. 地域の図書館における移民サービスの始動 51
2.2.4. スカンジナビア諸国間の協力関係の構築 52
2.3. 公共図書館における移民サービスの発展期 53
2.3.1. 移民図書館の設立 54

2.3.2. 地域の図書館におけるサービスの構築 56
2.3.3. 図書館資料と母語 57
2.3.4. 移民児童の図書館への殺到 57
2.3.5. 図書館員連盟「移民・難民グループ」 58
2.3.6. スカンジナビア諸国間の連携の強化 59
2.3.7. 新たな課題 60
2.4. 公共図書館における移民サービスの転換期 61
2.4.1. 移民図書館の経営に関する調査 61
2.4.2. 統合法の制定 63
2.4.3. 地域の公共図書館における多言語コレクションの構築 64
2.4.4. 移民図書館の経営再建 66
2.4.5. 移民サービスのプロジェクト化 67
2.5. 公共図書館における移民を対象としたプロジェクトの拡充期 69
2.5.1. 移民の背景を持つ女性および女子の支援 70
2.5.2. バイリンガル児童への支援 72
2.5.3. ウェブサービス 73
2.5.4. IT 支援 75
2.5.5. 潜在的利用者へのアプローチ 77
2.5.6. 統合の後退と図書館における移民サービス 79
2.6. 第 2 章まとめ 80
第 3 章 デンマークの公共図書館における移民サービスの提供体制 90
3.1. 本章の目的 90
3.2. 移民サービスに関与する組織の枠組みと本調査の対象 91
3.3. 地域レベルにおける公共図書館の移民サービスを支える体制：コペンハーゲン・コムーネの事例 95
3.3.1. コペンハーゲン図書館チーム・インテグレーション 95
3.3.2. コペンハーゲン・コムーネ統合・レジャー課 97
3.3.3. インターナショナル・ハウス・コペンハーゲン 99
3.4. 国レベルにおける公共図書館の移民サービスを支える体制 100
3.4.1. 文化省文化局 100
3.4.2. 統合図書館センター 102
3.5. 第 3 章まとめ 103
3.5.1. 予算措置 103
3.5.2. 多言語資料・専門的助言の提供 105
3.5.3. ネットワーク形成の支援 106
第 4 章 デンマークの公共図書館に勤務する「エスニック・スタッフ」の役割 111

4.1. 本章の目的 111
4.2. 調査対象 112
4.3. 調査結果 113
4.3.1. 図書館での勤務に至るまでに辿ってきたルート 113
4.3.2. 図書館におけるエスニック・スタッフの役割 121
4.4. 第 4 章まとめ 130
4.4.1. エスニック・スタッフの語学力と公共図書館での役割 130
4.4.2. エスニック・スタッフのこれまでの経験と公共図書館での役割 131
4.4.3. メディエーターとしてのエスニック・スタッフの役割 132
第 5 章 デンマークにおける移民の公共図書館利用 134
5.1. 本章の目的 134
5.2. インタビューの方法と対象 135
5.3. 調査結果 137
5.3.1. 出身社会の図書館 137
5.3.2. 居住地と公共図書館の利用頻度 140
5.3.3. 多言語資料コレクション 141
5.3.4. 言語の獲得と図書館 142
5.3.5. コンピュータ機器 145
5.3.6. 図書館プログラム 146
5.3.7. 児童サービス 148
5.3.8. 文化担当員 149
5.3.9. 出会いの場としての図書館 150
5.4. 第 5 章まとめ 152
5.4.1. 移住先での安息の場としての図書館 152
5.4.2. 国境間の越境と図書館に対する認識の変化 153
5.4.3. 移民の図書館利用と越境 154
第 6 章 移民を対象とした公共図書館プログラムのエスノグラフィー 156
6.1. 本章の目的 156
6.2. プログラムの概要 157
6.2.1. 「トーククラブ」 157
6.2.2. 「地域の母」 157
6.3. デンマーク語「トーククラブ」 158
6.3.1. メンバーの基礎情報 159
6.3.2. 参加の経緯 160
6.3.3. デンマーク語「トーククラブ」の基本的な展開 161
6.3.4. ファシリテーター 164

6.3.5. デンマーク語学習について語る 165
6.3.6. 育児を語る 167
6.3.7. デンマーク人について語る 168
6.4. アラビア語「トーククラブ」 169
6.4.1. メンバーの基礎情報 169
6.4.2. 参加の経緯 171
6.4.3. アラビア語「トーククラブ」の基本的な展開 173
6.4.4. ファシリテーター 177
6.4.5. プログラム中の言語 178
6.4.6. 多様な学習レベルや学習ニーズ 179
6.5. パルビンが語る「トーククラブ」 180
6.5.1. 「トーククラブ」への参加のきっかけ 180
6.5.2. デンマークへの移住と公共図書館との出会い 181
6.5.3. デンマークでの公共図書館利用 183
6.5.4. バングラデシュでの図書館利用 185
6.5.5. 「トーククラブ」への期待と現実 187
6.5.6. 「トーククラブ」での他者との関係 189
6.5.7. パルビンにとっての「トーククラブ」 190
6.6. 「地域の母」 190
6.6.1. メンバーの基礎情報 190
6.6.2. 「地域の母」と地域の女性との関係 192
6.6.3. 火曜カフェ 193
6.6.4. 地域の女性へのアプローチ 193
6.6.5. 火曜カフェにおける言語別グループ 195
6.6.6. 「地域の母」と公共図書館 196
6.6.7. 自身の経験を語る 198
6.6.8. プロジェクト終了後の「地域の母」 199
6.7. アムナが語る「地域の母」 200
6.7.1. 私的実践から「地域の母」へ 200
6.7.2. 火曜カフェと司書との関係 201
6.7.3. 「地域の母」の活動 202
6.7.4. パキスタンからデンマークへ 203
6.7.5. 移住の経験を語る 204
6.7.6. アムナにとっての「地域の母」の活動 205
6.8. 第 6 章まとめ 206
6.8.1. 非定型的学習空間 206

6.8.2. デンマーク社会に対する肯定と否定の混在 206
6.8.3. 出身社会の異なる移民との接触 207
6.8.4. 移民によるプログラムの主体的な解釈と越境 207
第 7 章 結論 211
7.1. 本章の目的 211
7.2. 研究の総括 211
7.2.1. デンマークの公共図書館における移民サービスの変遷と体制 212
7.2.2. エスニック・スタッフの役割 213
7.2.3. 移民の図書館利用 213
7.3. 公共図書館で経験する越境 214
7.3.1. 公共図書館で経験する「出身社会－ホスト社会間越境」 215
7.3.2. 公共図書館で経験する「ホスト社会－移民コミュニティ間越境」 217
7.3.3. 公共図書館で経験する「異郷出身者間越境」 218
7.3.4. 移民の背景を持つ利用者が経験する 3 種の越境 219
7.3.5. 提供側による越境のマネジメント 220
7.3.6. 3 つの越境を支えるエスニック・スタッフ 221
7.3.7. デンマークにおける公共図書館の移民サービスに見られる課題 222
7.4. まとめ 223
7.5. 本研究の限界と今後の課題 223
謝辞 226
文献リスト 227
全研究業績のリスト 260

図表目次

図

図 1.1.　ナアアブロー地区の地図 17
図 1.2.　ナアアブロー図書館の館内図 18
図 1.3.　論文の構成 36
図 3.1.　デンマークの移民に対する公共図書館サービスに関わる国・地域レベルのアクター 93
図 3.2.　移民に対する公共図書館サービスに関する予算の流れ 104
図 3.3.　多言語資料や移民への公共図書館サービスに関する専門的助言の流れ 105
図 3.4.　移民に対する公共図書館サービスに関わるアクター間のネットワーク 106
図 6.1.　デンマーク語「トーククラブ」の座席図 162
図 6.2.　アラビア語「トーククラブ」の座席図 175
図 6.3.　火曜カフェの座席図 195
図 7.1.　公共図書館で経験する 3 種の越境 215

表

表 1.1.　移民と全体の公共図書館の利用頻度の比較 7
表 1.2.　移民と全体の公共図書館利用の比較 8
表 1.3.　デンマークに滞在する移民とその子孫の数 19
表 1.4.　移民とその子孫の主要な出身社会別人口 20
表 1.5.　デンマークにおける移民数および出身社会の変遷（1960-2015 年） 22
表 1.6.　デンマークの図書館数 29
表 1.7.　オルボー図書館プログラム一覧 31
表 1.8.　公共図書館の正規職員数 35
表 2.1.　スウェーデン「国際図書館」とデンマークの移民図書館との蔵書および職員数の比較 67
表 3.1.　第 3 章インタビューの日時・場所・対象者の属性 94
表 3.2.　第 3 章インタビューにおける質問の主な構成 94
表 4.1.　第 4 章インタビューの日時・場所・対象者の属性 112
表 4.2.　第 4 章インタビューにおける質問の主な構成 113
表 5.1.　第 5 章インタビューの日時・場所・対象者の属性 135
表 5.2.　第 5 章インタビューにおける質問の主な構成 136
表 5.3.　出身社会での図書館の利用経験と最終学歴 139
表 5.4.　図書館プログラムへの参加経験 146
表 5.5.　出身社会とデンマークでの図書館利用 153
表 6.1.　デンマーク語「トーククラブ」のメンバー基礎情報 159

表 6.2.　デンマーク語「トーククラブ」活動の流れ.....162
表 6.3.　アラビア語「トーククラブ」のメンバー基礎情報.....170
表 6.4.　アラビア語「トーククラブ」タイムスケジュール.....174
表 6.5.　「地域の母」メンバー基礎情報.....191

第1章　序論

1.1. 研究の背景と目的

近年，国境を越えた人々の移動の増加によって，多様な民族が生活している国が増えている。越境を経験し出身社会以外の地に生活する者は，移住先社会において，言語の習得，教育へのアクセス，職の獲得等，日々多くの課題を抱えており，生活の安定化へ向けた過程は容易ではない。

移民は課題を抱えながらも，越境した先の社会において生活を支えるための場を発見，構築し，生活の安定化を図っている。広田康生は教会やエスニック商店，文化施設など移民が集う場には，越境移動を支える装置が作られていることを示し，そのような場を「結び目」ないし「結節点」と呼んだ[1]。そして，「結び目」や「結節点」では仕事の斡旋等，移住先における生活安定化のための情報交換が行われるとした。

公共図書館もまた移住先社会において移民が集う場として利用されていることが 1 世紀以上前から確認されている。ジュリア・A・ハースバーガー（Julia A. Hersberger）は 20 世紀前半，アフリカ系アメリカ人にとってグリーンズボロ・カーネギー黒人図書館が“単に図書の貸出と読書を行う場ではなかった。－集合し，集会するたった 1 つの場”として機能して存在していたと報告している[2]。またエレン・M・ポッシ（Ellen M. Pozzi）は“移民出版，友人や家族，宗教団体，労働者の元締め制度，情報資源として作用する他の機関－店，酒場，協会，団体など”と同様に，図書館も 20 世紀初頭のイタリア系アメリカ移民にとって「情報結節点（Informaton Nord）」になっていたことを明らかにしている[3]。このように，移民は移住先社会において，新たな地での生活を支えるために，時に集合する場として，時に情報結節点として，自ら公共図書館を発見している。

移民が移住先で図書館を利用する姿は，過去の歴史的事象としてのみでなく，現代においても確認することができる。北欧のデンマークは移民がネイティブのデンマーク人[4]より高頻度で公共図書館を利用している国である。コペンハーゲン（København），オーフース（Aarhus），オーゼンセ（Odense）[5]等の都市部の公共図書館を訪れると，頭にスカーフを巻いた女性の姿や，館内の一角に着座し，デンマーク語ではない言語で会話する高齢者のグループの姿を確認することができる。2012 年に行われた「デンマーク人文化習慣調査（“Danskernes Kulturvaner”）」は，移民は図書や音楽資料の館外利用が少ない一方，館内での図書館資料の閲覧や，講習会への参加，館内設置の PC やコピー機の利用等をネイティブのデンマーク人より高い頻度で利用しており，彼らにとって公共図書館は身近な文化施設であると伝えている[6]。

デンマークが大量の外国人労働者を受入れたのは 1960 年代である。この時期には，主にトルコ，パキスタン，北アフリカ諸国等から移民の受け入れを行った[7]。彼らの大半は数年の短期滞在後，帰国が想定されていたゲストワーカーであった[8]。しかし，その多くが国内に留まり，出身社会から家族を呼び寄せたため，移民の数は増大した。また 1980 年代から 1990 年代には，イラン革命やレバノン侵攻，ソマリアやアフガニスタンにおける内

戦等，世界各地で紛争や政変が続発し，多くの難民がデンマークに避難した[9]。そのため，デンマークの移民人口はさらに増加することとなった。2016 年 1 月の統計によると，移民人口は 703,862 人で，その数は総人口 5,707,251 人[10]の約 12%にあたる[11]。

移民の増加に合わせ，1970 年，コペンハーゲンを含むエリアのセントラル・ライブラリー（Centralbibliotek）[12]であるゲントフテ・セントラル・ライブラリー（Gentofte Centralbibliotek）が館内の一角に移民のための多言語資料コーナーを開設した[13]。その後，1983 年には公共図書館法（Lov om Folkebiblioteker）の改正がなされている。この法改正により，新たに 1）図書館は移民がデンマーク社会への統合[14]のプロセスにおいて重要な存在であること，2）図書館は移民の出身社会の言語や文化へのアクセスも支援することが明記された[15]。また，法改正にともない，新たに国立施設として移民図書館（Indvandrerbibliotek）が設置された[16]。移民図書館の設立により，移民に対する公共図書館サービスに取り組む地域レベル，国レベルの協力体制は公式に整備された。なお，移民図書館はその後 1999 年に国立図書館（Statsbiblioteket）の一部門となり，2006 年には，国立図書館は移民図書館を統合図書館センター（BiblioteksCenter for Integration）と改称した[17]。このように，デンマークは短期間に急速に図書館における移民サービスの整備を進め，法制化し，地域レベルと国レベルの協力体制を布いた国である。

ここで看過できないのは，公共図書館とはホスト社会側が作り出した制度の 1 つであるという点である。公共図書館が提供する移民を対象とした図書館サービスには，ホスト社会側が構築した社会システムによる制度化の諸力が作用していると捉えることができる。

マイケル・ハリス（Michael Harris）は，ボストン公共図書館の設立の背景に注目し，設立に携わった者の多くがボストンの名家の出であったことを示した上で，図書館設立の目的が，アイルランド出身者を中心とした移民を統制することにあったことを指摘している[18]。

その一方で樋口直人が，移民は自ら構築する組織や制度のみを基盤として移民コミュニティを形成しているのではなく，ホスト社会側が用意した諸制度や組織が移民の移住先での暮らしを支えている場合もあることを指摘しているように，ホスト社会が作り出す制度は移民の生活にとって必要不可欠なものにもなりうる[19]。

また，仮に公共図書館がホスト社会の支配階級による被支配階級への支配の諸力が作用している装置であるとして，公共図書館を利用する移民がその諸力を否応なしに受け入れているとは限らない。パメラ・J・マッケンジー（Pamela J. McKenzie）らは，カナダのにおいて公立図書館分館のプログラム室で開催された女性の編み物グループ，および乳幼児のためのお話会を参与観察し，参加者が自主的にプログラム室という公共スペースを私的スペースに変換し利用する様子を記述している[20]。このように人々が日常生活の中で，自らの置かれている環境の条件を必要に応じて，ずらす，あるいは，読み替えることを通じて生活上の課題を乗り越えていることを，ミシェル・ド・セルトー（Michel de Certeau）は「日常的実践」と呼んでいる[21]。人は制度化し尽くされることを避け，様々な

知恵を借用して“なんとかやっていく（faire avec）”のである。そのような主体的な日常的実践が移民の背景を持つ者の図書館利用にも確認できるのならば，公共図書館はホスト社会の支配階級が支配するのみではない，移民の多様な生き方を支える装置にもなりうるだろう。

その際，「ホスト社会の公共図書館が移民に対して図書館サービスを提供する」という次元とは別に，「移民が移住先において公共図書館を利用する」という次元で，移民と公共図書館の関係に迫ることが必要となる。

また上記 2 つの次元に加え，「図書館職員として図書館サービスの提供に関与する移民」が存在することも看過できない。ホスト社会側が作り出す制度の 1 つである公共図書館サービスは，往々にして，ホスト社会側が持つ，マジョリティとしての社会構造的な優位性が下敷きとなっている。そこには，ホスト社会側が，課題を抱える移民に対して図書館サービスを届け，移民を支援するという上下に対置した権力構造が隠れている。

そのような中，近年活躍が期待されているのは，移民の背景を持った図書館職員である。国際図書館連盟（International Federation of Library Associations and Institutions，以下 IFLA）の多文化社会図書館サービス分科会は，多文化サービスの指針を示した『多文化コミュニティ：図書館サービスのためのガイドライン』の第 5 章で「人的資源」について触れ，“図書館は，コミュニティのさまざまな多文化集団の構成を図書館の職員構成に忠実に反映させて，サービス対象となる多文化社会を映す鏡になるように努めなければならない”と記している[22]。IFLA のガイドラインに基づき，各国の図書館では多様な文化的背景を持つ職員を採用する取り組みが実施されている。

図書館サービスの提供側に関与しながらも，移民の背景を持つ利用者と同様の当事者性を内包する図書館職員は，公共図書館と移民との関係を，「ホスト社会」と「移民」，「図書館サービス提供者」と「図書館サービス利用者」という二項対立から脱却し，単純に二分しない関係へと引き上げる可能性を秘めている。移民の背景を持つ図書館職員のあり様を把握することは，多文化化するコミュニティにおいて公共図書館が担う役割を新たな視座から捉えなおすことに繋がるだろう。

多様な文化的背景を持つ利用者と公共図書館との関係について，これまでアメリカにおける歴史研究[23]，アメリカ[24]，カナダ[25]およびノルウェー[26]における利用者調査の観点から議論される傾向があるが，図書館サービス提供者側の視点と利用者側の視点，加えて移民の背景を持つ図書館職員の視点を含んだ包括的な研究は見られない。多文化コミュニティにおける公共図書館という場の役割を，複数の視点から包括的に検討する必要がある。

本研究の目的は，多様な文化的背景を持つ者が暮らすデンマークのコミュニティにおいて，公共図書館が移民を対象に提供するサービスを移民サービスとして取り上げ，公共図書館が担う役割を，1）公共図書館サービス提供者，2）移民の背景を持つ図書館職員，3）移民の背景を持つ図書館利用者，の 3 者の視点から包括的に明らかにした上で，移民研究において近年分析軸として用いられている越境の概念から，公共図書館における移民サービ

スの全体像を解明する。

具体的には，3 点の研究課題を検討することを通して研究目的の達成を目指して行く。3 点の研究課題とはすなわち，研究課題 1：公共図書館における移民サービスの変遷と提供体制，研究課題 2：移民の背景を持つ図書館職員の役割，研究課題 3：移民の公共図書館利用，である。以下に各研究課題について詳述する。

研究課題 1：公共図書館における移民サービスの変遷と提供体制

第一に，デンマークの公共図書館における移民サービスの歴史的・制度的な変遷と提供体制に迫る。まず移民の数が急増した 1960 年代後半以降に焦点をあて，デンマークの公共図書館における移民サービスの今日までの歴史的・制度的な変遷を明らかにする（第 2 章）。次に，公共図書館の移民サービスに関与するアクターそれぞれが持つ機能や，各アクター間における協力体制の取り方を検討する（第 3 章）。

研究課題 2：移民の背景を持つ図書館職員の役割

第二に，デンマークの公共図書館における移民サービスの特徴を踏まえ，移民の背景を持つ図書館職員が担う役割を明らかにしていく（第 4 章）。デンマークの図書館界では，これまで繰り返し多様な文化的背景を持った職員を図書館に配置する重要性が主張されてきた。本研究では，公共図書館に勤務する移民の背景を持った職員を「エスニック・スタッフ（Etniske medarbejder）」と称することとする。

本研究では，デンマークの公共図書館における「エスニック・スタッフ」の役割を明らかにすることを通して，それが移民の背景を持つ利用者の図書館利用とどのように連動しているかに迫っていく。

研究課題 3：移民の公共図書館利用

第三に，デンマークに滞在する移民が，移住先における生活の中で，どのように公共図書館を利用しているか，公共図書館は彼らの生活においてどのような場として存在しているのか，利用者である移民側から迫っていく。

まず，公共図書館を利用している移民にインタビューを行い，デンマークにおける彼らの公共図書館に対する意識や利用状況を移民自身の語りを通して明らかにしていく（第 5 章）。

次に，公共図書館のプログラムが，移民によって移住先での生活のどのような文脈の中で利用されており，彼らにとってどのような場として機能しているのかを検討する（第 6 章）。

その際，重視するのはウィーガンドの説く「利用者の生活／人生の中における図書館(the library in the life of the user)」という視点である。ウィーガンドは，これまでの図書館研究は図書館内部の閉じられた空間における利用者の過ごし方のみに照射してきたと指摘し，利用者個人の生活や置かれている状況が図書館の利用に影響する過程については十分に検討できていないと述べている[27]。本研究では，「利用者の生活／人生の中における図書館」

という視点に立ち，移民の声を図書館内部の閉じられた空間の中ではなく，その声が発せられる具体的生活の文脈の中で捉えることを目指す。

1.2. 先行研究

本研究における主な先行研究を，移民サービスの変遷や提供体制に関する研究（1.2.1），エスニック・スタッフの役割に関する研究（1.2.2），移民の図書館利用に関する研究（1.2.3），の順序で以下に示す。

1.2.1. 公共図書館における移民サービスの変遷や提供体制に関する研究

デンマークにおける公共図書館の移民サービスは常に移民政策の変化に応じてサービスの形態を変えてきた。オーゴト・ベアウア（Ågot Berger）は，移民政策の変遷と公共図書館サービスの変化との関係性について 3 つの時代区分を用い，移民を対象とした図書館サービスと移民政策との関係性を説明している[28]。第 1 段階はデンマーク政府が移民をゲストワーカーとして積極的に受け入れた 1967 年から 1982 年である。この時期は定式化した移民政策が存在しなかったため，デンマーク政府の移民に対する対応は自由放任であった。また，デンマーク政府と移民の両者は，長期的視点では出身社会への帰還を予定しており，移民のデンマーク滞在は一時的なものと捉えていた。そのため，帰還に備え，出身社会の言語との接触の機会をデンマーク政府が担保する必要があった。デンマークの公共図書館は元来，「アウトリーチ・サービス」として情報へのアクセスが困難な人々をサービス対象の一部と捉えていた。そのため，ゲストワーカーの増加に応じて必然的に公共図書館が移民の出身社会の言語で書かれた資料を収集し，提供することとなった[29]。第 2 段階は多元的統合の段階で，1983 年から 1991 年までの期間がそれにあたる。1983 年制定の公共図書館法では，1）図書館は統合の過程において重要な役割であること，2）図書館は出身社会の言語や文化を維持していこうとする移民を支援すること，の 2 点が明記された。それは，移民に対してデンマーク文化の共有を強制しない一方で，デンマーク人に対しても移民の伝統や価値観の全てを受け入れることを強いない多元的な立場によって作成された法律であるとベアウアは指摘している[30]。また，同法では移民に対する図書館サービス全体を統括する中央センターの必要性を示唆している。その記述を受け，1984 年にデンマーク統合図書館センターは設立された。第 3 段階は 1992 年から 2001 年までの期間である。この段階では右派政党が移民の流入に反対し，移民政策に関する議論が白熱した。1999 年に制定された統合法では 3 年間のデンマーク語講習の受講が必須となる等，移民にデンマーク社会への適応を強いる傾向が見られ，移民に対する規制の強化が明確であった。そのため，ベアウアはこの段階を同化の段階と呼んでいる[31]。

ハンス・エルベスハウゼン（Hans Elbeshausen）らは，公共図書館がいかにしてエスニック・マイノリティの統合を支える機関となりうるのかを検討している[32]。同研究では，デンマークのシェラン島（Sjælland）[33]西部に位置する港湾都市，ホルベク（Holbæk）にお

いて，ホルベク図書館，トルコ・イスラム文化センター，ソマリア・デンマーク協会，ホルベク・コムーネ文化局の 4 つの機関の代表者を対象にインタビュー調査を行っている。

ホルベク図書館は母語資料の収集・提供をはじめ，エスニック・マイノリティに対して多様な情報を提供してきた。調査によって図書館が統合を目的としてデンマーク語学習のための環境整備や利用者支援を積極的に行ってきた実績も示された。図書館には移民の代表者からなる統合委員会が設置され，エスニック・マイノリティの情報要求を図書館側に伝達する役割を果たしていた。

1.2.2. 公共図書館における移民サービスに関与する職員の役割に関する研究

移民サービスに関与する職員に関する研究には，ボー・C・スクト（Bo C. Skøtt）の“Ethnic Diversity in Danish Public Libraries: Four Stories”がある[34]。スクトは，公共図書館の移民サービスに関わる司書 3 名にインタビューを行い，彼らがどのように移民サービスの職務に当たっているのか，移民サービスにどのような思いを抱いているのか，どのような課題を抱えているのかを尋ねている。そして 3 名の司書から得られたインタビュー・データを横断的に取り上げ，共通に語られた 4 つの事項を “Four Stories” として示している。“Four Stories” とは，3 名の司書が 1）移民に対して接する際，平等性を重視していること，2）移民を西洋社会以外の第 3 世界を出身とする，民主主義的価値観に対する理解に乏しい者と特徴付けていること，3）移民は図書館において社会化していると捉えていること，4）公共図書館が自由な公共空間で民主主義を体現する場であることを誇りにしながら職務に当たっていること，の 4 点である。

ベンテ・ヴァイスビェア（Bente Weisbjerg）とエルベスハウゼンは，移民サービスを担当する司書に必要な専門性とは何かについて“Ilsjælenes Professionalisering: Fra Indvandrerbibliotekar til Integrationsbibliotekar”の中で論じている[35]。そして，移民を対象にサービスを奉仕する司書を「移民司書（Indvandrerbibliotekar）」と称した上で，今後は移民とネイティブ・デンマーク人との接点を支える「統合司書（Integrationsbibliotekar）」が重要な役割を担うとしている。「統合司書」に備わっているべき素養として，1）新たな知識を継続的に習得していく態度，2）変化を臆さない心，3）文脈に基づき考え，行動する能力，の 3 点が挙げられている。

上記の研究は，主に移民サービスに関与するネイティブ・デンマーク人の司書について取り上げたものである。ヴァイスビェアとエルベスハウゼンは，公共図書館に移民の背景を持つ者が勤務することは，彼らの正統的周辺参加を可能にし，移民サービスのイニシアチブが変化することに繋がりうるため重要であるとしている。

このように，移民の背景を持った図書館職員の重要性が指摘されているものの，彼らを主な研究対象に据えた研究はこれまでに行われていない。

1.2.3.　移民の公共図書館利用に関する研究

デンマークに滞在する移民の公共図書館利用について取り上げた研究としては，1999 年から 2002 年までの 3 年間，ベアウアらによるプロジェクト・グループが行った調査がある[36]。同調査は質問紙調査を主な研究手法としており，移民の背景を持つ 322 名から回収した質問紙の記述を分析している。加えて，質問紙調査の補足的にフォーカスグループ・インタビューを実施している。調査の結果，1）移民はデンマーク人の利用者よりも図書館の利用頻度が高いこと，2）移民は図書館サービスに対して全般的に満足しているが，出身社会の言語で記述された資料についての満足度は低いこと，3）移民はネイティブのデンマーク人より図書館内でのインターネットの利用率が高いこと等が指摘されている。また，移民は図書館を情報入手の目的のみでなく，他者との交流の場として利用していることを明らかにしている。特にアラブ系移民の背景を持つ子女にとって，図書館は家庭と学校以外で唯一滞在が正当化されている場所で，放課後の時間を友人と過ごす場になっていた。移民とネイティブのデンマーク人とでは図書館の利用形態に差異があり，図書館サービスの提供時に留意が必要であるとしている[37]。

量的調査法を用いた大規模調査による移民の図書館利用の傾向把握は政府機関でも行われている。2012 年刊行の「デンマーク人文化習慣」は，ベアウアらによる調査の結果と同様に，移民は全体より高頻度で図書館を利用しており，その傾向は特に移民女性や若年層の移民に顕著であるとした。また移民の資料利用について，図書利用は全体の数値と同水準であるが，CD やオーディオブックの利用は少なく，DVD の利用は多いことを示した[38]。表 1.1 は，移民と全体の図書館利用頻度を比較したものである。

表 1.1.　移民と全体の公共図書館の利用頻度の比較

（単位：%）

	成人移民（n=1,300）	成人全体（n=3,600）
毎日／ほぼ毎日	4	1
1週間に1回	10	5
1カ月に1回	22	19
3ヵ月に1回	14	15
1年に1回	8	14
それ以下の頻度	26	23
全く利用しない	16	22
合計	100	100

注1）ここで言う成人とは15歳以上の者を意味する。
注2）小数点以下は四捨五入している。

出典：Epinion og Pluss Leadership. “Danskernes Kulturvaner 2012,” Kulturministeriet. 2012, p.89.

表 1.2 は移民と成人全体の図書館の利用形態を示したものである。

表 1.2. 移民と全体の公共図書館利用の比較

（複数回答可，単位：%）

	図書館利用	成人移民（n=1,300）	成人全体（n=3,600）
資料の利用	図書・雑誌の借用	86	89
	CDの借用	11	23
	オーディオブックの借用	5	12
	DVDの借用	27	19
	ゲームソフトの借用	9	5
図書館プログラムへの参加	音楽イベントへの参加	5	8
	講演会・討論会への参加	8	14
	映画上映会への参加	3	2
	展示の観覧	14	14
	団体の活動への参加（読書会等）	3	4
	講習会への参加	7	5
物理的な場としての図書館利用	行政サービスの利用	18	15
	情報探索	19	20
	図書・雑誌・新聞の館内閲覧	40	22
	館内設置コンピュータの利用	26	7
	コピー機・FAX等の機器の利用	21	9
その他	子どもの付き添い	24	29
	図書館職員への相談	15	19
	居心地が良いので滞在する	22	17
	宿題・課題に取り組むため	18	10
	他者との面会・待ち合わせ	6	3
	その他	12	4

出典：Epinion og Pluss Leadership. “Danskernes Kulturvaner 2012,” Kulturministeriet. 2012, p.89.

表 1.2 は，移民の背景を持つ利用者が全体と比較して「図書・雑誌・新聞の館内閲覧」，「館内設置コンピュータの利用」，「コピー機・FAX 等の機器の利用」，「他者との面会・待ち合わせ」の目的で図書館を利用することが多いことを示している。

このように，デンマークではこれまで主に質問紙を用いた量的調査により，移民の図書館利用が捉えられてきた。しかしながら，質的調査法により移民自らの語りから図書館に対する意識や利用状況を明らかにした研究は行われていない。

一方，デンマークの隣国であるノルウェーでは近年，インタビューや参与観察を研究手法とした移民の図書館利用に関する研究に注目が集まっている。ラウナ・アウドンソン（Ragnar Audunson）を研究代表とする研究チームは，2007 年から 2012 年までの 5 年間，“PLACE: Public Libraries – Arenas for Citizenship: An Investigation of the Public Library as a Meeting Place in a Digital and Multicultural Context（以下，PLACE プロジェクト）”という名のプロジェクトに取り組んだ[39]。PLACE プロジェクトでは，6 名の研究者が，物理的な場としての図書館の役割を多様な文化的背景を持つ利用者間のコミュニケーションの可能性という側面から理解することを目指した。

同プロジェクトの中でアウドンソンらによって発表された “Public Libraries: A Meeting Place for Immigrant Women?”は，アフガニスタン，イラン，クルディスタンを出身とする移民 1 世の女性，計 9 名を対象に，ペルシャ語，ダリ語，クルド語を用いて実施したインタビュー調査の結果を伝えている[40]。理論的枠組みには，社会関係資本，実践共同体（communities of practice），正統的周辺参加（legitimate peripheral participation）の理論を採用し，移民女性の移住先での生活における公共図書館の役割について検討している。結果として，公共図書館は被調査者 9 名の移民女性各々の越境経験の異なった段階において異なった役割を担っていることが明らかになった。それは，移民が距離を持った「観察者」からさらに活動的な「参加者」へとシフトしていく際，正統的周辺参加を可能にしていると説明している。

また，同プロジェクトのメンバーの 1 人であるスュヌヴェ・ウルヴィク（Synnøve Ulvik）は，オスロのトアスホウ図書館（Torshov Bibliotek）において移民を主な対象として展開されている「メモリーグループ」というプログラムを調査した結果を “Why Should the Library Collect Immigrants' Memories?: A Study of a Multicultural Memory Group at a Public Library in Oslo” に示している[41]。ウルヴィクは，移民の背景を持った参加者が出身社会での過去の記憶を他者と共有する「メモリーグループ」にて参与観察を行った。そして，ノルウェー語を用いて行う「メモリーグループ」の活動が，移民にとってノルウェー語学習の場であると同時に，ノルウェーの社会的慣習を学ぶ場であることを示した。また，プログラムにおいて過去の記憶を共有することは，ファシリテーターであるネイティブのノルウェー人が移民の置かれてきた状況を理解することに繋がっており，参加者とファシリテーターの両者に影響をもたらすとした。ただし，過去の記憶を共有することは婚姻をきっかけに移住した移民にとっては難しいことではないが，戦争経験を持つ移民にとっては，心の傷を深める危険性があり，移住のプロセスに注意することが必要であるとしている。

同じく PLACE プロジェクトのメンバーだったアンドレーアス・ヴォーハイム（Andreas Vårheim）は，“Trust and the Role of the Public Library in the Integration of Refugees: The Case of a Northern Norwegian City”の中で，ノルウェー語学校に通う移民対象の図書館紹介のプログラムに焦点を当てている[42]。そしてヴォーハイムは，図書館プログラムにおいて移民の背景を持つ参加者が信頼関係と社会関係資本を醸成させていたと結論付けた。

アウドンソンは，“The Public Library as a Meeting-place in a Multicultural and Digital Context: The Necessity of Low-intensive Meeting-places”の中で，多文化コミュニティの図書館について，高度に集約的（High-intensive）と緩やかに集約的（Low-intensive）という概念を用いて論じている[43]。結果では，公共図書館が移民の集いの場として機能するためには，緩やかに集約的であることが望ましいとしている。

PLACE プロジェクトの研究結果はデンマークにも該当する示唆を含んでいるものの，ノルウェー固有の事情が絡んでおり，研究結果をそのままデンマークに当てはめることはできない。加えて， 1 つの研究の中で移民サービスの提供側と利用側，双方の視点を含んだ研究は存在していない。

1.3. 本研究の課題と意義

本節では，前節での先行研究の検討を踏まえ，1.3.1 で「本研究の課題」を示し，その後，1.3.2 で「本研究の意義」を論じることを通して本研究の立ち位置を明確にしていく。

1.3.1. 本研究の課題

先行研究を概観することを通して浮かび上がってきた，デンマークにおける移民と公共図書館に関するこれまでの議論の課題を，3 点指摘したい。

1 点目の課題は，デンマークにおける公共図書館の移民サービスに関し，現場での実践報告が先行しており，その歴史的・制度的な枠組みについて俯瞰して議論している研究が不十分なことにある。デンマークの公共図書館における移民サービスは，1970 年から着手されており，既に 45 年以上の歳月が経過しているものの，どの時期にどのような変化があったのか，その歴史的変遷について論じているのは，ベアウアの研究[44]を除き見受けられない。ベアウアの研究についても，2000 年頃までの変遷を論じており，2000 年以後，既に 15 年以上が経過しているにもかかわらず，近年の移民サービスの状況は明らかになっていない。また，デンマークは世界で初めて国立施設として 1984 年に移民サービスを専門に扱うナショナルセンターを設置した国であるが，ナショナルセンターと地域の公共図書館とが，どのような協力体制を布きながら移民サービスを提供してきたのかという点も明示されていない。

2 点目の課題は，公共図書館と移民との関係を，「図書館サービス提供側」と「図書館サービス利用者側」という二項対立で論じてきた点にある。さらに付言すると，「提供側」とはネイティブのデンマーク人を，「利用者側」とは移民の背景を持つ者を暗に意味してきた。ここで問題として挙げられるのは，マジョリティがマイノリティを支えるという関係が前提になっている点である。そこには，マイノリティとは支援が必要な弱者であり，ホスト社会側は彼らを助ける，あるいは支える必要があるという考えが潜んでいる。野入直美は，“＜支え＞の言説”として，移民や外国人居住者に対する支援が語られる時，そこに潜むホスト社会側の社会構造的な優位性が見過ごされてきていることを指摘している[45]。移民を，客体

あるいは，被支援者として捉え続ける限り，図書館サービスの提供側の論理を利用しながら，賢くしたたかに生きる移民のあり様は見えてこないだろう。しかし実際には，移民の背景を持ちながら「提供側」として公共図書館に勤務する者が存在している。彼らの実態を明らかにすることを通じて「提供か利用か」，「支援か被支援か」という二項対立から脱却し，公共図書館と移民との関係を検討していく必要がある。

3 点目の課題は，デンマークにおける移民の背景を持つ図書館利用者の利用実態に関する研究の圧倒的な不足である。質問紙を用いた大規模な利用調査が主となっており，移民の背景を持つ利用者がデンマークにおける生活のどのような文脈において公共図書館を利用しているのかという点が明らかになっていない。移民は「図書・雑誌・新聞の館内閲覧」が多いことや，「他者との面会・待ち合わせ」に公共図書館を利用していること等，大筋の利用傾向は示されてきているものの，具体的に移住先での生活の「どのような局面で」，「どのような資料を」閲覧しているのか，また「どのような人物と」，「どのような目的で」面会しているのか，といった具体的な利用実態は不明確である。換言すれば，これまでの研究がウィーガンドの言う「利用者の生活／人生における図書館」という視点で移民と公共図書館との関係に十分に迫り切れていなかったことを意味する。移民の図書館利用を，個々の移民の物語と絡めて見ていく必要がある。加えて，個々の移民を見るにあたっては，移民の経験している「越境」という現実を見過ごすことはできない。これまでの先行研究において，移民が越境を経験したことは過去の事実として捉えられてきた。しかし，実際には移住後にもヒト・モノ・カネ・情報の移動は継続されている。例えば，移住後，毎月出身社会へ送金している者がいれば，メールや SNS 等を利用して毎日他国に居住する親族に連絡をとっている移民も存在する。越境は一度国境を越えたら終わりということではない。国境を越えた後も越境経験は継続していくのである。現在進行形で越境を経験する者として移民を捉え，彼らの図書館利用を明らかにしていく必要があるだろう。

以上から導き出された課題は以下の 3 点である。

1) デンマークの公共図書館における移民サービスの歴史的・制度的変遷について，これまで十分に示されてこなかった 2000 年以降の動向，および国レベルと地域レベルの協力体制に主眼を置いて明らかにする。
2)「提供側」，「利用者側」という二項対立では捉えることができない移民の多様な公共図書館との関わりに迫るために，移民の背景を持って公共図書館に勤務する者，すなわちエスニック・スタッフの役割に着目する。
3) 移民の背景を持つ利用者の図書館利用を，「越境」を分析の軸に置き，個々の移民が置かれている日常生活の文脈の中で捉えていく。

本研究は上記の課題を検討することにより，多文化コミュニティにおける公共図書館という場の役割を分析するにあたり，独自の視座の提供を試みる。

1.3.2.　本研究の意義

本研究の意義は，大きく 2 点ある。

第一に，本研究が参与観察やインタビューといった手法を用いて，1）公共図書館サービス提供者，2）移民の背景を持つ図書館職員，3）移民の背景を持つ図書館利用者の 3 者の「声」を，それが発せられる具体的な文脈において捉えようとする点にある。ウィーガンドは，“公立図書館を形成するのは，図書館を営む人（理事，管理者）と図書館を利用する人の双方である”[46]と述べており，図書館という場を「提供」か「利用」かという二項対立で論じるのではなく，双方の相互作用（インタラクション）の中で形成されている空間と捉えていくことの重要性を指摘している。また，久野和子は公共図書館を“自分たちの私的な日常生活を図書館内に持ち込み，固有の文化や価値を主体的に構築しようとする利用者と図書館との間の「闘争」「抵抗」「折衝」「合意」がせめぎあう文化政治的な場”[47]であると論じている。多文化コミュニティにおける公共図書館という場の意味を，図書館の管理側やサービス提供者側に限定した視点から制度論や経営論のなかに見るのではなく，また利用者側からの視点に限定するのでもなく，双方向の力学が作用する相互作用的（インタラクティブ）で複雑な関係の中に見ていこうとする点に，本研究の新規性と独自性がある。

第二に，越境への注目が挙げられる。既述したように，公共図書館と移民との関係を論じた既存研究は，移民を，過去に国境を越えて移住してきた者として捉えてきた。しかし実際には，越境は過去に完結したものではなく，現実，想像上，仮想上において継続的に経験するものである。この越境という現実から出発する点は，図書館情報学の多文化コミュニティにおける図書館に関する研究に新たな視座を提示するものであると言える。

他方，移民研究では近年，越境を分析軸とした研究が増加しており，移民を超国家的な生活世界に現在進行形で生きている者として捉えようとする試みがなされている。しかし，これまで移民研究において越境が論じられてきたのは，出身社会に暮らす親族への送金の仕組みや，エスニック商店の商業形態，宗教施設を拠点にした宗教ネットワーク，移民の背景を持つ子どもの進路選択等の文脈であり，ホスト社会側が設置した公立施設を対象に行われた研究はほとんど存在しない。公共図書館という公立文化施設に焦点を当て，その中で移民の移動性を論じる本研究の試みは，図書館情報学のみでなく，移民研究にも新たな視座を提供し得るだろう。

なお，デンマークを研究対象として取り上げるのは，多文化コミュニティにおける公共図書館の役割について検討するのに最善のモデルを提供しているためである。デンマークは世界で逸早く多言語資料を扱うナショナルセンターを設置した国である。世界を見ても，多言語資料のナショナルセンターを有するのはスカンジナビア[48]の国のみである。デンマークと同様のナショナルセンターはスウェーデンとノルウェーにも確認することができる。スウェーデンでは 1991 年に国際図書館（Internationella Biblioteket）が，ノルウェーでは 1996 年に多言語図書館（Det Flerspråklige Bibliotek）が設置されているが，いずれもデン

マークにおける 1984 年の移民図書館の誕生より遅れての設置であった。デンマークにおける移民図書館の設置は，世界に先駆けた先進的な試みであったと言える。

デンマークでは，国立の移民図書館（現在の統合図書館センター）を中心に，これまで国レベルと地域レベルの間の協力体制を整備してきた。国と地域の間に張ったネットワークを基盤に，移民に対して図書館サービスを提供するという体制も，デンマークが世界に先駆けて構築したものである。

加えて，デンマークの図書館関係者は，創設から今日まで，IFLA「多文化市民への図書館サービス分科会（Section on Library Services to Multicultural Populations）」の主要なメンバーとして，世界的な多文化図書館サービスの発展を先導してきている。

またデンマークは，アメリカやカナダ，オーストラリアのような伝統的な移民のホスト国とは異なり，第 2 次世界大戦後の労働力不足を補う目的でゲストワーカーとして移民を受け入れ始めた国である。デンマークにおける移民と公共図書館に関する議論は，今後，生産年齢人口の減少を移民の受け入れによって補う可能性がある日本に示唆に富んだ助言を提供し得るであろう。

1.4. 研究の方法

本研究では，デンマークの公共図書館における移民サービスを取り上げ，公共図書館が担う役割を，図書館サービス提供者，移民の背景を持つ図書館職員，移民の背景を持つ図書館利用者，の 3 者の視点から包括的に明らかにしていくために，以下の研究方法を用いた。

1.4.1. 移民サービスの変遷と制度の検討

「研究課題 1：移民サービスの変遷と提供体制の検討」の検討のために，文献調査とインタビュー調査を採用する。

移民サービスの変遷（第 2 章）については，文献調査を行いデンマークの図書館における移民サービスの歴史や制度を考察した。主に依拠するのは，デンマークの図書館関連の国内外の文献である。また，文化局や国立統合図書館センターの刊行資料や適宜，新聞・雑誌記事にも当たった。

移民サービスの提供体制（第 3 章）を検討するにあたっては，文献調査を行い，公共図書館の移民サービスに関与するアクターの設立の経緯や活動の概況について，これまで各アクターによって刊行された報告書をもとに調査を行った。

同時にインタビュー調査を研究手法に採用した。近年政策学の領域では，政策研究におけるオーラル・メソッドの意義に注目が集まっている[49]。特に文献研究のみでは明らかにできないこととして各組織が持つ独自の「文化」が指摘されており，例として政治との距離のとり方や，民間のアクターとの関係，人事に関する考え方が挙げられている[50]。本研究のインタビュー調査では文献調査では十分に検討できなかったアクター間の関係を中心に，関係職員計 7 名に尋ねた。インタビューを行った期間は 2014 年 2 月 20 日から 2014 年 3 月 14

日までである。いずれも半構造化面接の形式を取った。半構造化面接とは，すべての質問のワーディングに柔軟性をもたせてあるか，あるいは，構造化された質問とゆるやかに構造化された質問とを組み合わせたインタビュー法を意味する[51]。インタビューの実施場所は調査対象者の勤務先オフィスで，インタビューに要した時間は一件あたり 1 時間 30 分から 2 時間ほどである。全てのインタビューは IC レコーダーで録音するとともに，音声情報以外の表情の変化やジェスチャー等はフィールドノーツ[52]に記録した。録音データはインタビュー終了後に転記し，トランスクリプションを作成して分析を行った。

本研究の第 3 章では公共図書館の移民サービスに関与する職員が，どのような事を思案しながら職務にあたり，他のアクターとの協力関係をどのように捉えているかを示すために，インタビュー記録を提示しながら論じていく。なお，インタビューの引用箇所は**ゴシック体**で記している。インタビュー引用箇所中の（）は筆者による補記を意味する。

1.4.2. エスニック・スタッフを対象とした調査

図書館に勤務するエスニック・スタッフの役割に関する調査（第 4 章）では，インタビューを研究方法として用いている。インタビュー・データは，デンマークの首都コペンハーゲンにあるナアアブロー図書館（Nørrebro Bibliotek）で行ったフィールドワークから得られたものである。インタビューは 2013 年 6 月 19 日から 2014 年 3 月 14 日までの間に実施した。インタビューの際の使用言語は英語とアラビア語で，いずれも半構造化形式で行った。インタビューの実施場所は，ナアアブロー図書館およびナアアブロー図書館に隣接するナアアブローホール（Nørrebrohallen）で，1 件あたりのインタビューに要した時間は 1 時間 30 分から 2 時間 30 分ほどである。全てのインタビューは対象者の許諾を得て IC レコーダーで録音している。加えて，音声情報以外の表情の変化やジェスチャー等をフィールドノーツに記録した。録音データはインタビュー終了後にトランスクリプト化して分析を行った。なお，本研究ではインタビューの実施からインタビュー・データの分析に至るまでの過程を通訳を介さず調査者自身で行っている。第 4 章では，インタビュー記録を提示しながらエスニック・スタッフのこれまでに辿ってきたルートと，ナアアブロー図書館における役割について論じていく。インタビューの引用箇所は**ゴシック体**で記すこととする。インタビュー引用箇所中の（）は筆者による補記を，＜中略＞は中略を意味する。

1.4.3. 移民の背景を持つ利用者の図書館利用に関する調査

(1) 移民の背景を持つ利用者を対象とした図書館利用に関するインタビュー

移民の背景を持つ利用者の公共図書館利用に関する調査（第 5 章）では，インタビューを研究手法とした。ナアアブロー図書館を利用する移民の背景を持つ利用者，計 10 名にインタビューを取った。インタビューの被調査者の選定にあたっては，調査者がナアアブロー図書館の館内に滞在する利用者に話し掛け，移民の背景があることが確認できた者にインタビューの主旨を伝え，承諾を得られた場合に質問を続けた。

インタビューを実施した期間は 2010 年 5 月 22 日から 2010 年 8 月 5 日である。インタビューの実施場所はナアアブロー図書館で，1 件あたりのインタビューに要した時間は 1 時間から 2 時間 30 分である。移民の出身社会の言語での自発的な語りを引き出すために，アラビア語話者に対してはアラビア語を用いてインタビューを行った。またその他の言語話者については英語を用いて調査した。全てのインタビューは対象者の許諾を得て IC レコーダーで録音している。加えて，音声情報以外の表情の変化やジェスチャー等をフィールドノーツに記録した。録音データはインタビュー終了後にトランスクリプト化して分析を行った。なお，本研究ではインタビューの実施からインタビュー・データの分析に至るまでの過程を翻訳者を介さず調査者自身で行っている。

第 5 章では，インタビュー記録を提示しながら移民の背景を持つ利用者の図書館利用について論じていく。なお，インタビューの引用箇所は**ゴシック体**で記している。インタビュー引用箇所中の（）は筆者による補記を意味する。

(2) 図書館プログラムのエスノグラフィー

図書館プログラムにおける移民の背景を持つ利用者の調査（第 6 章）では，エスノグラフィーを研究手法に用いた。エスノグラフィーとは，参与観察を基本とした調査である。参与観察とは，研究テーマに関するフィールドに調査者自身が入り，そこで実践されている社会生活や活動に参加し，観察する手法のことを指す。また，観察のみでなく状況に応じてフィールドにいる人々を対象に個別にインタビューを実施する場合もある[53]。未知のフィールドと向き合う時，対象とする集団の生活や関係は，調査者自身がフィールドに出て五感を使って経験をすることで初めて明らかになることも多い。参与観察は，調査者自身がフィールドに入り込んで観察することにより，多様で複雑な現実を内側から包括的に理解することを目指す手法と言える。

このような参与観察を基本としたエスノグラフィーは，人間が人間を観察するがゆえの限界を併せ持つ。すなわち，調査者，および被調査者が持つバイアスによる影響である。被調査者の語りには，その人物個人の主観が混入する。また，その語りを記録した民族誌には，調査者個人のパーソナリティ，経験，価値観，観点のフィルターがかかることを否めない。三浦綾希子は，このようなエスノグラフィーの限界を認めながら，“(参与観察時に取る）フィールドノーツを構成しているのは，調査対象者との関わりの中でエスノグラファーが獲得していった意味，あるいは対象者と共に構成していった意味についての記述と考察”であるとしている[54]。つまりフィールドノーツには，調査対象者との折衝の中で新たにわかったことと，それに関する考察が調査者の視点で記録されることとなる。調査者はエスノグラフィーを記す際，理論的志向，フィールドでの立場等，自身に内在する偏りに敏感である必要がある。

本研究では，ナアアブロー図書館で開催されている，アラビア語「トーククラブ」，デンマーク語「トーククラブ」，「地域の母」（Bydelsmødre）の 3 つのプログラムを対象に参与

観察を実施した。

対象とする活動の決定にあたっては，機縁法に依拠した。その手順としては，まずナアアブロー図書館に非常勤職員として勤務していた日本人職員に調査への協力を依頼し，移民を対象としたプログラムの運営に関与する同図書館勤務の職員と引き合わせてもらった。そして，許諾が得られたプログラムにおいて調査を実施する運びとなった。

ナアアブロー図書館のプログラムにおける筆者の立場はプログラムにより異なる。佐藤郁哉は，「参与観察」とはあくまで理念型であって，調査者のフィールドにおける立場は一定ではなく，フィールドワークの局面や時期によって「完全なる参加者」，「観察者としての参加者」，「参加者としての観察者」，「完全なる観察者」の間で揺れ動くものであるとしている[55]。「トーククラブ」において，調査者の立場は観察者より参加者の比重が強かった。調査者も「トーククラブ」の他の参加者と同様にファシリテーターの指示に従い，教材を使用して語学学習に取り組み，意見を求められた場合にはディスカッションで発言した。一方，「地域の母」において，調査者は観察者として過ごす時間が長かった。調査者は毎週火曜日に開催されていた「火曜ミーティング」と呼ばれる定例会合に参加していたが，プログラムの他の参加者による活動報告やディスカッションの場の様子を観察することに徹していた。

いずれのプログラムにも共通するのは，調査者が日本で生まれ育ち，中東に滞在した経験を有し，日本語，アラビア語，英語，および初歩的なデンマーク語を話す留学生としてフィールドに関与していたという点である。つまり，調査者はホスト社会の人間ではなく，デンマークでの長期的な定住も予定していない，デンマークの移民人口の中では少数派である日本人としてプログラムに参与していた。調査者はフィールドにおける自身の立場について自覚的であるよう常に心掛けた。なお，個別のインタビューについては許諾が得られた場合のみ IC レコーダーを使用した。また，状況が許す場合にのみプログラムの様子をデジタルカメラで撮影した。

第 6 章では，インタビュー記録を提示しながら公共図書館のプログラムにおける移民の参加の様子について論じていく。なお，インタビューの引用箇所やフィールドノーツからの引用は**ゴシック体**で記す。インタビュー引用箇所中の（）は筆者による補記を，＜中略＞は中略を意味する。

1.4.4. 研究の対象

本研究の第 4 章から第 6 章で取り上げる，ナアアブロー図書館は，首都コペンハーゲンに存在する。ナアアブロー地区はコペンハーゲンの 10 の行政区の 1 つで，広さは 3.82 ㎢，人口は 79,668 人である[56]。図 1.1 はナアアブロー地区を示したものである。

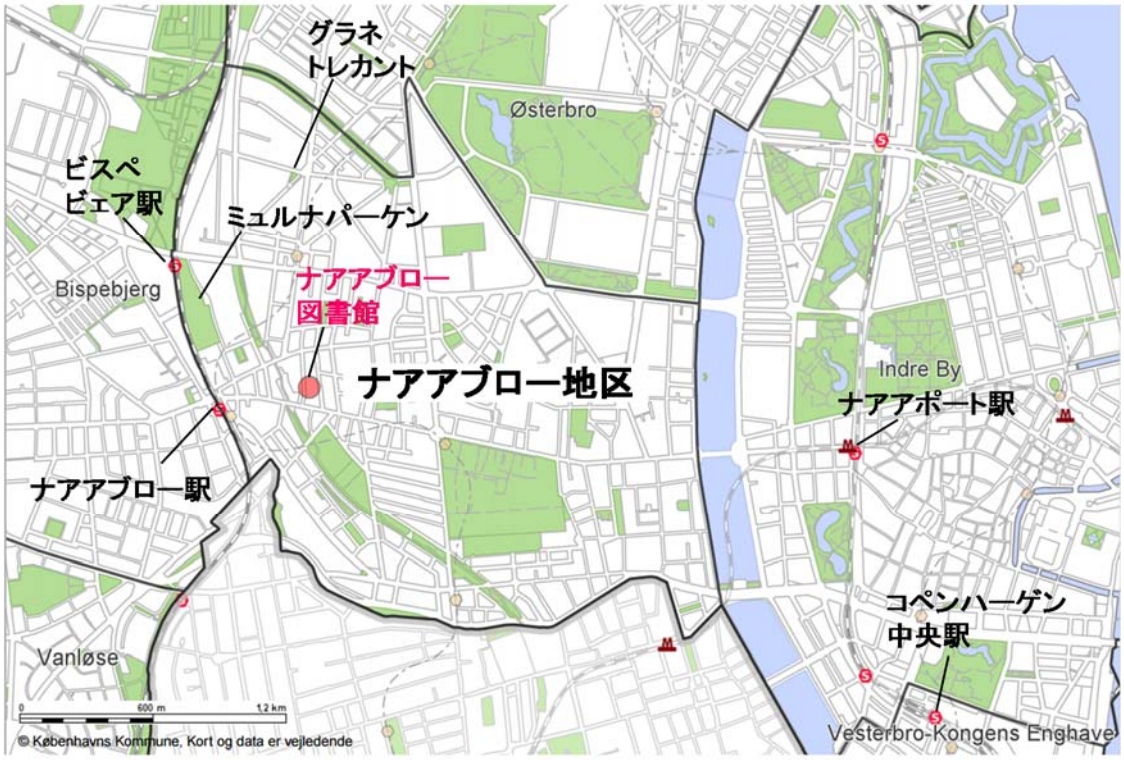

図 1.1.　ナアアブロー地区の地図

出典：Københavns Kommune. “Københavnerkortet.”を基に筆者作成。

住民全体に占める移民とその子孫の割合は 28.3%で，その中でも特にトルコ，パキスタン，旧ユーゴスラビア，イラク，レバノン出身の移民が多い。2013 年の統計による住民の平均年収は，コペンハーゲン全体では 223,000DKK（3,833,370 円）[57]であるのに対し，ナアアブロー地区では 195,500DKK（3,300,480 円）で，コペンハーゲン内にある 10 の行政区中，ビスペビェア（Bispebjerg）に並んで最も低い[58]。

そのような環境に存在するナアアブロー図書館はコペンハーゲン図書館（Københavns Biblioteker）21 館のうちの 1 館である。図 1.2 は，ナアアブロー図書館の館内の様子を示したものである。

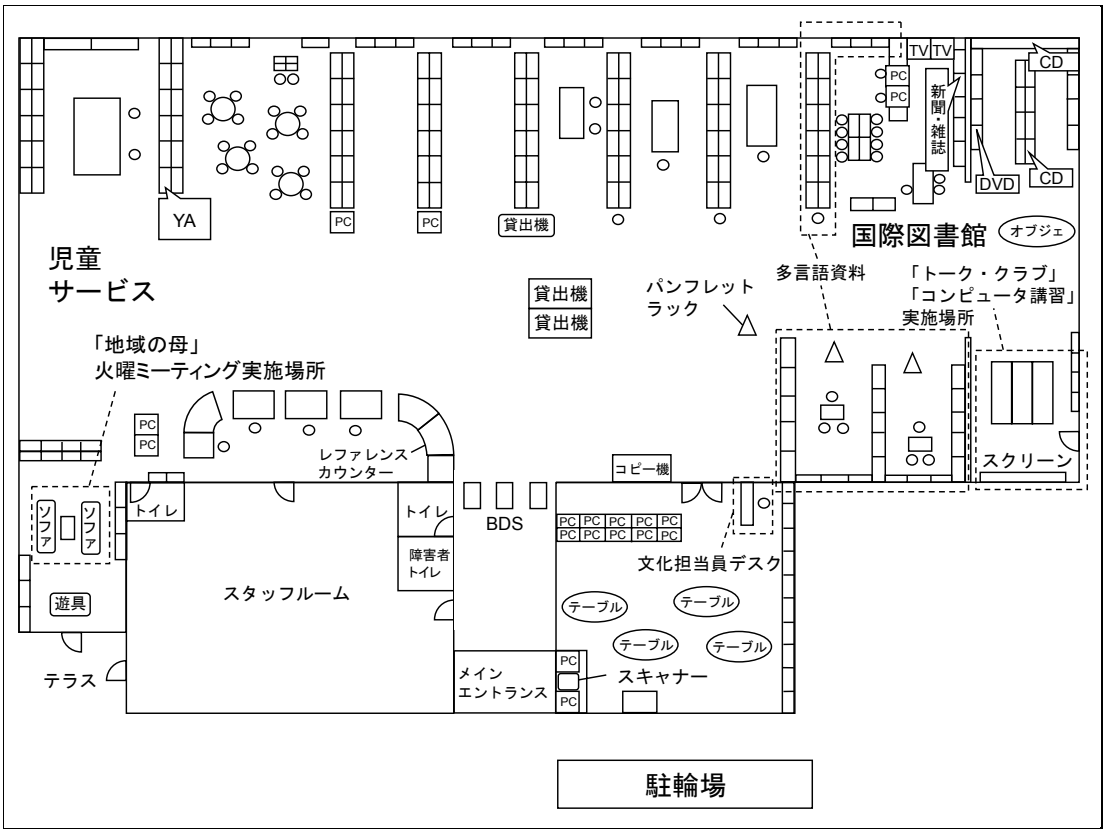

図 1.2. ナアアブロー図書館の館内図

ナアアブロー図書館の蔵書は図書 40,000 点，DVD2,000 点，CD6,500 点，雑誌・新聞 200 点で，コンピュータは 20 台が館内に設置されている。同図書館に勤務している職員は合計 15 名で，司書 7 名，事務職員 3 名のほか，プロジェクトの目的に応じて文化担当員やアドバイザーが 5 名雇用されている。

ナアアブロー図書館では，移民が移住先においても出身社会の言語と接することが可能なように，アラビア語，ペルシャ語，ウルドゥー語，トルコ語，ソマリ語，マレー語等の多言語資料を館内の一角にまとめて書架 7 連分[59]開架しており，その一角を「国際図書館（Internationalt Bibliotek）」と呼んでいる[60]。図書のみでなく，新聞や雑誌，CD や DVD も所蔵しており，利用者はそれらを自由に手にすることができる。また，語学資料も所蔵しているため，移民の第 2 世代や第 3 世代が自らのルーツとなる言語をデンマークで学習する際の一助となっている。

また，多言語資料の近辺には学習センターと呼ばれる空間が存在する。学習センターの拠点はコンピュータや無線 LAN，プリンター，スキャナーが完備されている空間で，学校の宿題の自力での解決が困難な移民の第 2 世代・第 3 世代に対する支援活動や，出身社会からの家族の呼び寄せ等の際の行政文書に関する相談，デンマークの労働市場に不慣れな移民を対象とした就職支援が行われている。また，移民の相談に応じる文化担当員のデスクも

学習センター内に設置されている。

1.5. 概念規定

本節では，本研究において用いる用語の概念を規定する。

1.5.1.　移民

本項では，まず統計上で用いられている移民の定義を確認した上で，本研究における移民の概念を規定する。

(1)　統計上の移民の定義

2016 年現在，移民とは誰であるかを特定する国際的に合意された定義は存在しない。移民という語は，使用される機関，国や地域，あるいは用いられるコンテクストによって異なる定義付けがなされている。国際連合統計部（UN Statistics Division）は“出生あるいは市民権のある国の外に 12 カ月以上居住する人のこと”[61]を移民（長期）と定義している[62]。欧州連合（European Union 以下，EU）も 12 カ月という単位を用い，“非 EU 圏から来た者が EU 圏に 12 カ月を超えて滞在する”場合，その人物を移民と見なしている[63]。

本研究が対象とするデンマークでは，政府統計局により統計上，移民とは“デンマーク国外で出生し，両親ともに出生あるいは市民権のある国がデンマーク以外である者”と定義されている[64]。加えて，政府統計局は「移民の子孫（Efterkommere）」を，“デンマーク国内で出生し，両親ともに出生あるいは市民権のある国がデンマーク以外である者”としている[65]。この定義に基づき 2015 年 1 月に公表された人口統計が表 1.3 である。

表 1.3.　デンマークに滞在する移民とその子孫の数

（単位：人　2015 年 1 月現在）

	西洋諸国出身者	非西洋諸国出身者	合計
移民	210,724	290,333	501,057
移民の子孫	23,489	132,927	156,416
移民とその子孫	234,213	423,260	657,473
デンマーク総人口			5,659,715

注）西洋諸国には，EU 加盟国，アンドラ公国（原文ママ），オーストラリア，カナダ，アイスランド，リヒテンシュタイン公国，モナコ公国，ニュージーランド，ノルウェー，サンマリノ共和国，スイス連邦，アメリカ合衆国，ヴァチカン市国が含まれる。上記した西洋諸国以外の国を出身とする者は非西洋諸国出身者と見なされている。

出典：Danmarks Statistik. Indvandrere i Danmark 2015. Copenhagen, Danmarks Statistik, 2015, p.11.

表 1.3 が示すように，2015 年 1 月のデンマークに滞在する移民とその子孫の数の合計は 657,473 人で，デンマークの総人口に占める割合は，11.6%である。移民とその子孫の数を主要な出身社会別に示したのが表 1.4 である。

表 1.4.　移民とその子孫の主要な出身社会別人口

（単位：人　2015 年 1 月現在）

	出身社会	移民	移民の子孫
西洋諸国	ポーランド	34,537	4,928
	ドイツ	28,703	3,259
	ルーマニア	18,732	1,494
	ノルウェー	15,148	1,484
	スウェーデン	13,394	2,052
	西洋諸国出身者合計	210,724	23,489
非西洋諸国	トルコ	32,352	29,282
	イラク	21,182	9,812
	ボスニア・ヘルツェゴビナ	17,272	5,425
	イラン	14,857	3,715
	パキスタン	13,451	10,319
	レバノン	12,339	13,233
	ソマリア	11,388	8,319
	非西洋諸国出身者合計	290,333	132,927
合計		501,057	156,416

出典：Danmarks Statistik. Indvandrere i Danmark 2015. Copenhagen, Danmarks Statistik, 2015, p.13.

表 1.4 が示すように，西洋諸国出身者は，デンマークと地理的に隣接しているポーランド，ドイツ，ノルウェー，スウェーデンを出身とする者が多く滞在している。また，ルーマニア出身者の滞在も多い。一方，非西洋諸国出身者は地理的な位置とは無関係にデンマークへ移住していることがわかる。

デンマークに滞在する移民の数と構成は時代と共に変化してきた。表 1.5 はデンマークに

おける移民数および出身社会の変遷を示したものである。1960 年代後半にゲストワーカーとしてデンマークへ入った者の多くはトルコやパキスタンを出身としている。イラン，イラク，レバノン，ヴェトナムを出身とする者の多くは，1985 年以降に発生した紛争や内戦の影響により出身社会からデンマークへ避難した難民である。

表 1.5.　デンマークにおける移民数および出身社会の変遷（1960-2015 年）

	1960[1]		1971[2]		1980[3]		1990[4]	
順位	国名	移民数	国名	移民数	国名	移民数	国名	移民数
1	スウェーデン	4,492	アメリカ	2,084	ドイツ	24,125	ドイツ	21,145
2	ノルウェー	2,758	ノルウェー	1,673	スウェーデン	13,911	トルコ	20,681
3	グリーンランド	2,356	ユーゴスラビア	1,416	ノルウェー	12,302	スウェーデン	11,967
4	イギリス	1,901	トルコ	1,217	トルコ	12,143	ノルウェー	11,721
5	アメリカ	1,129	スウェーデン	1,184	イギリス	6,938	ポーランド	8,512
6	カナダ	1,017	イギリス	1,145	ユーゴスラビア	6,085	ユーゴスラビア	7,928
7	ドイツ	986	西ドイツ	1,034	パキスタン	5,893	イギリス	7,907
8	フェロー諸島	769	フィンランド	794	ポーランド	5,813	パキスタン	7,611
9	フランス	594	アイスランド	611	フィンランド	3,538	レバノン	7,094
10	スイス	395	パキスタン	466	アイスランド	2,843	ヴェトナム	4,990
総移民数		19,564		35,026		134,705		181,109

	2000[5]		2010[6]		2015[7]	
順位	国名	移民数	国名	移民数	国名	移民数
1	トルコ	29,039	トルコ	32,255	ポーランド	34,537
2	ドイツ	22,889	ドイツ	28,234	トルコ	32,352
3	ボスニア・ヘルツェゴビナ	18,042	ポーランド	25,443	ドイツ	28,703
4	ノルウェー	13,095	イラク	21,306	イラク	21,182
5	スウェーデン	12,617	ボスニア・ヘルツェゴビナ	17,911	ボスニア・ヘルツェゴビナ	17,272
6	イラク	12,476	ノルウェー	14,663	ノルウェー	15,148
7	ユーゴスラビア	12,469	スウェーデン	13,233	イラン	14,857
8	レバノン	11,742	イラン	12,098	パキスタン	13,451
9	イラン	11,112	レバノン	12,012	スウェーデン	13,394
10	イギリス	10,507	イギリス	11,832	イギリス	12,976
総移民数		296,924		414,422		501,057

注1）1970年に移民数の統計は発表されていないため，翌1971年のデータを入れている。
注2）国名や地域名の表記はデンマーク政府統計局が刊行している『統計年鑑（Statistisk Årbog）』に準じている。なお「フェロー諸島」はデンマークの自治領であるが，1960年時点ではフェロー諸島出身者は移民と見なされていた。
注3）1980年以前には「移民の子孫」の数の統計が取られていないため，ここでは移民数のみを示している。
出典：(1) Danmarks Statistik. *Statistisk Årbog 1961*. Copenhagen, Danmark Statistisk, 1961, p. 60. ;(2)Danmarks Statistik. *Statistisk Årbog 1973*. Copenhagen, Danmark Statistisk, 1973, p. 51. ;(3)Danmarks Statistik. *Statistisk Årbog 1981*. Copenhagen, Danmark Statistisk, 1981, p. 54. ;(4)Danmarks Statistik. *Statistisk Årbog 1991*. Copenhagen, Danmark Statistisk, 1991, p. 62. ;(5)Danmarks Statistik. *Statistisk Årbog 2001*. Copenhagen, Danmark Statistisk, 2001, p. 69. ;(6)Danmarks Statistik. *Statistisk Årbog 2011*. Copenhagen, Danmark Statistisk, 2011, p. 44. ;(7)Danmarks Statistik. *Statistisk Årbog 2016*. Copenhagen, Danmark Statistisk, 2016, p. 31.

(2) 本研究における移民の概念規定

ここまで，統計上で用いられている移民の定義を示してきた。ここで見過ごしてはならないのは，上記した移民の定義すべてが，移民を受容するホスト社会側の都合で規定されているという点である。当事者からすれば，あくまで自身が国境を越えて移動した，もしくは両親が越境した経験を持つという事実があるに過ぎない。その行為に対し，ホスト社会が一方的な都合により規定を設け「移民」や「移民の子孫」とカテゴリーを付与している。

実際，本研究が対象とするデンマークの公共図書館の文脈で捉えると，移民が統計上用いられている定義で特定されることはない。移民は，滞在の合法性や滞在期間の長さ，両親の出生等を問われることなく公共図書館に滞在しているのである[66]。また，公共図書館が移民サービスを提供する際，その対象となる移民を滞在期間の長さや滞在の合法性で選択することもない。公共図書館において移民は，あくまで当事者による越境を経験したという自己申告に基づき特定されている。

本研究では，移民を「越境を経験する者」と規定する。ここで言う越境とは，デンマークと出身社会間の国境をまたぐ越境とともに，デンマーク国内における移民コミュニティとデンマーク社会をまたぐ越境を意味する。越境の概念については，次項で詳述する。

1.5.2. 越境

越境とは，トランスナショナリズムの訳語である。トランスナショナリズムは近年，移民研究において多用されている分析軸である。トランスナショナリズムの統一された定義は存在せず，研究者によって様々に定義付けられている。リンダ・バーシュ（Linda Basch）は“今日の多くの移民が地理的，文化的，政治的境界線をクロスして社会的フィールドを作り上げていることを強調するために，これらのプロセスをトランスナショナリズムと呼ぶ”としている[67]。トランスナショナリズムとは，その名称からまず国境間の移動が想起されやすい。しかしながら，バーシュの定義が示すように，越境の範囲は国境間の往来のみでなく，地理的，文化的，政治的な境界線を越えることをその定義に内包している。伊豫谷登士翁は，“越境移動論は，ナショナルな空間を絶対化してきた分析枠組みから解放されねばならない”[68]と述べており，国境間の移動に焦点を当て，移民の越境を議論することの限界を指摘している。

拝野寿美子もまた“国境間の越境を表す「トランスナショナリズム」だけでは，考察しきれない「越境」がある”[69]とした上で，「コミュニティ間越境」という新たな視座を示している。そして，移民は移住先において移民コミュニティに囲いこまれて生活しているわけではなく，移住先社会の言語の習得や人々との交流を通し，移民コミュニティと移住先社会との間を往来していることを指摘した。

そもそも越境という概念は，2 つの事象の間に境界が存在することを前提とする。本研究では，2 つの事象の存在が明示的になるよう，上記の議論を踏まえ，＜出身社会－ホスト社

会間越境＞，＜ホスト社会－移民コミュニティ間越境＞という名称を用いて公共図書館における移民の越境について論じたい。

＜出身社会－ホスト社会間越境＞とは，移民がホスト社会に身を置きつつも，出身社会との関係を維持するプロセスを意味する。

他方，＜ホスト社会－移民コミュニティ間越境＞とは，移民が移住を認められたホスト社会において，移民コミュニティの中で生活を完結させるのではなく，ホスト社会の言語の習得や，ホスト社会の人との交流を通して，ホスト社会と移民コミュニティとの間の文化的差異を越えることを意味する。なお，ここで示す移民コミュニティとは，冠婚葬祭や，育児，教育，レジャーや社交といった点において，ホスト社会とは異なった需要に応じることが可能な“移民特有のニーズに基づく制度が発達した社会空間”[70]を指す。

上記 2 つの越境に加え，本研究では＜異郷出身者間越境＞という視座を新たに提示する。移民がホスト社会において接触するのは，ホスト社会の人々や，同郷出身者のみとは限らない。出身社会の異なる移民と接点を持つこともあるだろう。移住先の生活拠点，学校，勤務先，公共施設等の場において，移民が出身社会を異にする他の移民と接する時，そこには何らかの文化的差異が存在しており，差異を越える，あるいは差異を受け入れ調整するというプロセスを経験していると考えられる。このように移民が出身社会を異にする他の移民と折衝し，両者の文化間にある差異を状況に応じて相互に調整しようと試みるプロセスを，本研究では＜異郷出身者間越境＞と呼ぶ。

ところで，ここまで主に物理的な身体の移動を伴う行為を中心に越境を論じてきたが，果たして，移動の時代とも言える今日の複雑化した人々の越境移動を，物理的な身体の移動のみを見て把握しきれるだろうか。新たな移動論のパラダイムを切り拓いているイギリスの社会学者，ジョン・アーリ（John Urry）は，今日人々が日常の中で実践している移動には様々な形態が存在していることを指摘し，その状態を「移動の複合体（mobility complex）」であると説明している[71]。そして柄谷利恵子は，アーリの「移動の複合体」の主張を，移動の形態別に 3 つに分類して説明している。3 つの形態とはすなわち，「現実（actual）の世界の移動」，「想像上（imaginative）の世界の移動」，「仮想上（virtual）の世界の移動」である[72]。柄谷は，3 つの移動の形態が複雑に交差している現実を以下のように描写する。

> 今日，高い移動性を実行する人々にとって，実際に本人が国境を越えて地理的に移動する，現実の世界での移動経験が豊富なのはもちろんである。それだけではなく，現実の世界では一カ所にとどまっていても，ラジオやテレビ，さらには書籍などを通じて，世界各地の情報を入手してきた。こういった，いわゆる想像上の世界の移動のおかげで，現実に足を踏み入れたことはなくても，たとえばブラジルやエジプトの経済事情に精通することができる。さらにいまや，コンピューターや携帯電話などの情報伝達・通信機器を使いこなすことで，現実の世界の距離だけでなく，時間さえも瞬時に飛び越えるような移動も可能である。こういった，いわゆる仮想上の世界での移動のおかげで，遠

くに住む友人や家族であっても，いつでも顔を見て話ができる。その結果，長い間実際に会う機会がなくても，いつまでも密接な関係を維持できる[73]。

柄谷が語るように，メディアの多様化や，目覚ましいITの発展とともに，もはや現実世界の身体性の伴った移動のみでは人々の越境移動を説明しきれなくなっている。海外からインターネットで取り寄せた本やDVD，CD等を視聴して海外の文化に触れる，あるいは思いを馳せることや，携帯電話や，SNS，テレビ電話等を使って海外にいる人とコンタクトを取り合うことは，今や特別なことではない。

この「現実の世界の移動」,「想像上の世界の移動」,「仮想上の世界の移動」という3形態の移動は，必ずしもそれぞれ別な行為として表出するわけではない。例えば,「現実の世界の移動」の道中に，テレビ電話で通話して「仮想上の世界の移動」をしたり，書籍を読んで「想像上の世界の移動」をしている場合もある。「現実の世界の移動」,「想像上の世界の移動」,「仮想上の世界の移動」は相互に関連しており同時にも発生し得るのである。

柄谷は,“現実の世界の移動をいかに自発的に，また自由に使いこなせるかは，想像上および仮想上の世界の移動性の能力に大きく依拠している”と述べている[74]。つまり多様化するメディアを運用し「想像上」および「仮想上」の世界の移動をする，その能力は,「現実」の移動と無関係ではないことを指摘している。

上記の点を，公共図書館を利用する移民の文脈の中で例示する。現実の移動とは，実際に本人が現在居住している社会から出身社会へと地理的に移動することを意味する。想像上の移動とは，例えば，移民が公共図書館の多言語資料を利用し，出身社会の文学作品や音楽，映画等に触れ故郷で過ごした時間に思いを馳せることが挙げられる。また仮想上の移動の例には，移民が公共図書館内のコンピュータを利用し，SNSやインターネット電話サービスを通して出身社会にいる家族や友人と接触することが挙げられる。

上記の点を踏まえ，本研究では，公共図書館という1つの空間に照射しながら，そこに存在する人々が経験する，＜出身社会－ホスト社会間越境＞，＜ホスト社会－移民コミュニティ間越境＞，＜異郷出身者間越境＞という3つの越境に着目する。その際，地理的制約のある現実の移動に限るのではなく，移民がホスト社会において経験する想像上および仮想上の移動も含めて越境を論じていく。

1.5.3. 多文化図書館サービス

公共図書館は20世紀初頭から多様な文化的背景を持つ市民に対して図書館サービスを提供し続けてきた。しかし，その図書館サービスの名称は今日にいたるまで統一されておらず，国や地域，あるいは組織ごとに異なった名称が採用されている。

世界的に広く知られているのは，IFLAが用いている「多文化図書館サービス（Multicultural Librarianship）」や「多文化市民への図書館サービス（Library Services to Multicultural Populations）」という名称である。

1977 年，カナダ国立図書館（National Library of Canada）において当時，多言語資料を統括していた，マリ・F・ゼリンスカ（Marie F. Zielinska）は，IFLA ブリュッセル大会の際，オーストリア，英国，デンマーク等から参加していた司書と会合の場を持ち，非公式な形で多様な文化的背景を持つ市民への図書館サービスについて話し合う国際的なフォーラムの必要性について議論した[75]。この議論に参加していたメンバーは IFLA 本部に申請を出し，3 年後の 1980 年，当時 IFLA「一般大衆への図書館サービス部会（Division of Libraries Serving the General Public）」の議長であったデンマーク出身のヨハネス・ダウビェア（Johannes Daugbjerg）の承諾を得て，3 年間限定のワーキング・グループとして活動をした[76]。その後ワーキング・グループは，1983 年にはラウンド・テーブルに昇格し，そして 1986 年の IFLA 東京大会において「多文化市民への図書館サービス分科会」の設置が承認された。

IFLA の「多文化市民への図書館サービス分科会」は，1987 年，『多文化コミュニティ：図書館サービスのためのガイドライン（“Multicultural Communities: Guidelines for Library Services”）』を策定した[77]。同ガイドラインはその後，1998 年[78]および 2009 年[79]に改訂版が刊行されている。「多文化市民への図書館サービス分科会」は，1992 年刊行の『多文化図書館：国際ハンドブック（*Multicultural Librarianship: An International Handbook*）』[80]，2005 年の「「多文化主義」の定義（“Defining “Multiculturalism””）」[81]，2009 年「IFLA／UNESCO 多文化図書館宣言（“IFLA/UNESCO Multicultural Library Manifesto”）」，の中で，多文化コミュニティにおける図書館サービスとは何かについて繰り返し論じている。以下は「IFLA／UNESCO 多文化図書館宣言」における「多文化図書館の原則」の引用である。

> 文化的・言語的に多様な状況下での図書館・情報サービスには，あらゆる種類の図書館利用者に対するサービスの提供と，これまで十分なサービスを受けてこなかった文化的・言語的集団を特に対象とした図書館サービスの提供という両面がある。文化的に多様な社会の中で多くの場合取り残される集団，すなわち，マイノリティ，保護を求める人，難民，短期滞在許可資格の住民，移住労働者，先住民コミュニティに対しては特別な配慮が必要である[82]。

上記の「多文化図書館の原則」が示すように，多文化コミュニティにおける図書館サービスとは，多様化する社会全体を対象とする幅広いサービスであると言えるが，中でもとりわけ焦点を当てているのは民族的，文化的，言語的な少数者である。

1986 年に IFLA 東京大会において「多文化市民への図書館サービス分科会」が発足したことに影響を受け，日本の図書館界では「多文化サービス」という名称が浸透している[83]。日本図書館協会には「多文化サービス委員会」が存在し，日本国内に滞在する民族的，文化的，言語的少数者の資料や情報へのアクセスを支援している。

しかしながら，世界各国が IFLA「多文化市民への図書館サービス分科会」の影響を受け，図書館サービスやそれを扱う委員会の名称を定めているわけではない。本研究が対象とするデンマークでは，民族的，文化的，言語的少数者を対象とした図書館サービスは時代によって様々な名で称されてきたが，「多文化」という語が用いられたことは一度もない。ベネディクデ・クラーウ=スヴァーツ（Benedikte Kragh-Schwarz）をはじめ，これまでデンマークの図書館関係者は主要な構成員として IFLA「多文化市民への図書館サービス分科会」に関与してきた。IFLA が示す多文化図書館サービスの指針は，デンマークにおいて民族的，文化的，言語的少数者に図書館サービスを届ける際の基盤になっているが，デンマーク国内でのサービスの名称は IFLA とは異なる。

1.5.4. 移民サービス

デンマーク政府が不足した労働力を補う目的でゲストワーカーとして移民を受け入れ始めた時期には，「外国人労働者への図書館サービス（Biblioteksbetjeningen af Udelandske Arbejdere）」という名称が使用されていた。このことは，1973 年，図書館局（Bibliotekstyrelsen）に新たに創設された「在デンマーク外国人労働者及びその家族への図書館サービス委員会（Biblioteksbetjeningen af Udelandske Arbejdere og Deres Herboende Familier）」の名から確認できる[84]。その後，1980 年代に入ると，ゲストワーカーの家族の呼び寄せや滞在の長期化が進むにつれ，「外国人労働者（Udelandske Arbejdere）」ではなく「移民（Indvandrere）」という語が用いられるようになる。1983 年に設立された民族的，文化的，言語的少数者を対象とした国立の図書館は「移民図書館（lndvandrerbiblioteket）」と名付けられた[85]。そして，図書館サービスの名称にも「移民サービス（Indvandrere Biblioteksbetjening）」や「移民に関する図書館サービス（Biblioteksbetjening af Indvandrere）」が使用されるようになった。1983 年刊行のデンマーク，スウェーデン，ノルウェーの 3 ヵ国共同指針である『キターブ：移民およびマイノリティに関するスカンジナビア諸国の図書館ハンドブック（*KITAB: Nordisk Bibliotekhåndbok om Innvandrere og Minoriteter*）』の作成に携わった「図書館員連盟（Bibliotekarforbundet）」のメンバーは，同年「草の成長過程：移民に関する図書館サービス（“Mens græsset gror：Biblioteksbetjening af indvandrere”）」を発表し，『キターブ』を指針とした今後のサービスの展開について論じられている[86]。

1999 年に「デンマークにおける外国人の統合に関する法律（Bekendtgørelse af lov om integration af udlændinge i Danmark 以下，統合法）」が制定[87]され，2001 年に「難民・移民・統合省（Ministeriet for Flygtninge, Indvandrere og Integration）」が設置されると，移民政策を論じる際，「統合（Integration）」という語が多用されるようになる。そして 2006 年，移民図書館が「統合図書館センター」へと改称[88]され，図書館界でも「統合」の語が用いられるようになった。

しかしながら，2011 年の「難民・移民・統合省」の解体を皮切りに，近年デンマークの

図書館界において「統合」という語が使用される頻度は減少している。例えば，文化局が提示する図書館政策に関する 10 の重点分野の 1 つとされていた「統合」は 2014 年をもって重点分野から外されている。

本研究では，統合図書館センターのように，統合を冠した名称がデンマークの図書館界に一部残存していることを認めつつも，民族的，文化的，言語的少数者を対象とした図書館サービスを表す語として「移民サービス」を採用する。

1.5.2 に記した「多文化図書館サービス」と「移民サービス」のサービス対象は，その大部分が重なり合っているが，先住民を対象に含めるか否かに違いがある。既述のように，「IFLA／UNESCO 多文化図書館宣言」は，多文化図書館の主なサービス対象に“マイノリティ，保護を求める人，難民，短期滞在許可資格の住民，移住労働者，先住民コミュニティ”を挙げており，「先住民」も対象に含めることを明記している。

一方，デンマークの公共図書館では，そのサービス対象を規定する図書館法の中に移民，難民の文字はあるものの，先住民という語は確認できない[89]。デンマーク領にあるグリーンランドは，総人口の約 9 割がカラーリト（Kalaalit）と称されるイヌイト系の人々で構成されており[90]，グリーンランドの図書館はグロエンランディカ（Groenlandica）という国立図書館の下部組織を中心に，カラーリトの言語や文化の保護を行っている[91]ものの，デンマーク本国における移民サービスとは別途に取り組まれている。よって，本研究は先住民を移民サービスに含めることなく論じていくこととする。

1.6. デンマークの公共図書館

本節では，デンマークにおける公共図書館と移民の関係を明らかにするために必要な基礎的事項としてデンマークの公共図書館について概説する。

1.6.1. デンマークの図書館制度

デンマークにおいて公共図書館は文化省（Kulturministriet）の管轄下に置かれている。実質的には，文化省の傘下にある「城・文化局（Slots- og Kulturstyrelsen）」が図書館政策を統括している[92]。

「城・文化局」が管轄する図書館は大きく，国立図書館，公共図書館，研究図書館（Forskningsbiblioteker）の 3 つに分けられている。ここで言う公共図書館とは，セントラル・ライブラリーおよび，コムーネ図書館（Kommunes bibliotek）であり，研究図書館には大学図書館と専門図書館が含まれる。コムーネはデンマーク語で「共同体」を指す語で，現在デンマークの自治体の最小単位（基礎自治体）となっている。1964 年に改正された公共図書館法から全てのコムーネに公共図書館の設置が義務付けられている[93]。表 1.6 は，デンマークに存在する主な図書館の数を表したものである。

表 1.6. デンマークの図書館数

（2014 年）

国立図書館		公共図書館		研究図書館（大学・専門図書館）
王立図書館	国立図書館	セントラル・ライブラリー	コムーネ図書館	
1	1	6	590	633

注 1）研究図書館には，コペンハーゲン大学図書館を兼ねた王立図書館と，オーフース大学図書館を兼ねた国立図書館が含まれている。

注 2）6 館のセントラル・ライブラリーは，コムーネ図書館内に置かれているため，セントラル・ライブラリーとコムーネ図書館の数には重複がある。

注 3）公共図書館および研究図書館の数はサービスポイント数である。

出典：“Om biblioteker,” Slots- og Kulturstyrelsen.

表 1.6 が示すように，2014 年の統計によると，国レベルの図書館は王立図書館（Det Kongelige Bibliotek）1 館，国立図書館 1 館で，公共図書館はセントラル・ライブラリー6 館とコムーネ図書館 590 館である[94]。大学図書館および専門図書館を含む研究図書館は 633 館存在する[95]。

さらに公共図書館の数を詳細にみると，2014 年時点における 590 の公共図書館サービスポイント[96]の内訳は，中央館が 97 館，分館および配本所[97]が 460 カ所，移動図書館が 33 カ所となっている[98]。2014 年にはこれらのサービスポイントに 35,998,531 人が訪問した[99]。

デンマークにおける公共図書館サービスは，全国に張り巡らされた図書館ネットワークを基盤にして提供されている。主に地域住民への図書館サービスを担当するのは，コムーネ図書館である。コムーネ図書館の情報提供能力では対応しきれない情報要求があった場合，セントラル・ライブラリーがコムーネ図書館を支援し住民の要求に応じている。2016 年現在，ゲントフテ図書館，ロスキレ図書館（Roskilde Bibliotek），オーゼンセ図書館，ヴァイレ図書館（Vejle Bibliotek），ヘアニング図書館（Herning Bibliotek），オルボー図書館（Aalborg Bibliotek）の 6 館のセントラル・ライブラリーが存在する。セントラル・ライブラリーの第一義的な機能はコムーネ図書館への支援で，セントラル・ライブラリーはコムーネ図書館が所蔵していない資料を，他のコムーネ図書館，研究図書館，王立図書館，国立図書館等から取り寄せ，提供している。そのほか，コムーネ図書館が抱える課題に対し，セントラル・ライブラリーは専門知識を用いて解決策を提案している[100]。

コペンハーゲンにある王立図書館はデンマークの法定納本図書館である。デンマーク国内で刊行される出版物の納入を受け，保存する責務を負っている。また，オーフースに存在する国立図書館も同じく法定納本図書館で，主に新聞記事，視聴覚メディア，ウェブサイト，定期刊行物の納本を担っている[101]。国立図書館は納本以外に，デンマーク全土の公共図書館を統括するナショナルセンターとしての機能も有している[102]。なお，本研究が対象とする公

共図書館の移民サービスは，国立図書館の公共図書館ナショナルセンター部門のもとに設置されている「統合図書館センター」の管轄である。その他，国立図書館は情報・メディアに関する研究機能を持ち，またオーフース大学図書館も兼ねている。

加えてデンマークの図書館ネットワークは，書誌作成機関である「デンマーク書誌センター（Dansk BiblioteksCenter）」によって支えられている。デンマーク書誌センターは全国書誌を DANBIB という名称のデータベースを用いて一括管理しており，併せて DANBIB のデータに基づき「bibliotek.dk」という全国蔵書検索システムも提供している。この蔵書検索システムを使用することで，資料の検索，所蔵図書館の所在，予約までを一挙に行うことができる[103]。

このように，デンマークにおける公共図書館サービスは，デンマーク全土に張り巡らされた図書館ネットワークを基盤に提供されている。

1.6.2. デンマークの公共図書館サービスの概要

近年，デンマークの公共図書館の資料に占める電子書籍や電子ジャーナルの割合は増加の傾向にある。しかしながら，今なお最も大きな割合を占めているのは図書資料である。デンマーク全土の公共図書館が所蔵している資料の総数は 19,747,631 点で，そのうち，81.4%は図書資料が占めている[104]。図書以外の内訳は，音楽資料 11.1%，映像資料 2.7%，録音図書 2.0%，マルチメディア 0.9%，その他 1.2%である[105]。

デンマークにおいて公共図書館が提供しているのは資料のみではなく，日々多彩なプログラム（Arrangement）を開設している。『情報学用語辞典（Informationsordbogen）』は，プログラムの定義中に“多くの図書館は，重要な業務の 1 つとして子どもおよび成人を対象とした催しを行っている。例えば，作家の講演会，映画上映会，演劇公演，お話会，ブックトーク，講習会，展示会が挙げられる”[106]と記している。2014 年には，デンマーク全土の公共図書館にて展示会 2,789 回，講習会 9,139 回，その他のプログラム 18,632 回が行われた[107]。

上記した作家の講演会，映画上映会，演劇公演，お話会，ブックトーク，講習会，展示会に加え，各図書館は多様なプログラムを提供している。公共図書館は定期的に作成するパンフレットや，ホームページを通して，今後開催予定のプログラムを市民に伝えている。表 1.7 はオルボー図書館がホームページ上で告知している 2016 年 5 月開催のプログラムを表にまとめたものである。

表 1.7. オルボー図書館プログラム一覧

（2016 年 5 月）

日付	時間	プログラム名	開催場所
2016年5月3日	10:00	ITカフェ・スヴェンストロプ	スヴェンストロプ（Svenstrup）図書館
2016年5月3日	10:00-10:30	音遊び空間	ヴォザスコウ（Vodskov）図書館
2016年5月3日	10:00-12:00	ベビーカフェ／ベビーヨガ	中央図書館
2016年5月3日	16:00-17:30	若者読書会：BOOKS AND BEYOND	中央図書館
2016年5月3日	16:00-18:00	わたしの工芸工房	トレカンテン（Trekanten）図書・文化館
2016年5月9日	13:00-15:00	インターネット操作	ハーラルスロン（Haraldslund）図書館
2016年5月10日	16:00-18:00	わたしの工芸工房	ストアヴォーデ（Storvorde）図書館
2016年5月10日	16:00-18:00	エマ・ホルテンの講演とアートコレクション「フェンス越しの叫び」	中央図書館
2016年5月11日	10:00-12:00	インターネット・セキュリティ	中央図書館
2016年5月12日	15:00-17:00	オルボー歴史図書館で家系調査	オルボー歴史図書館（HistorieAalborg）
2016年5月17日	10:00-10:30	音遊び空間	ニーベ（Nibe）図書館
2016年5月17日	16:00-18:00	わたしの工芸工房	ヴォザスコウ図書館
2016年5月18日	18:00-19:30	ディスカッション：女性と漫画	中央図書館
2016年5月19日	15:00-17:00	歴史を俯瞰してみよう	オルボー歴史図書館
2016年5月21日	10:00-16:00	移動図書館が子どもカーニバルに来る	キレパーゲン（Kildeparken）に来る移動図書館
2016年5月21日	11:00-12:30	レゴで遊ぼう	中央図書館
2016年5月24日	16:00-18:00	わたしの工芸工房	グランランス・トーウ（Grønlands Torv）図書館
2016年5月26日	09:30-12:30	フェイスブック入門	中央図書館
2016年5月26日	15:00-17:00	オルボー歴史図書館で家系調査	オルボー歴史図書館
2016年5月28日	10:00-11:30	レゴで遊ぼう	スヴェンストロプ図書館

注）オルボー図書館はコムーネ内にある公共図書館の総称で，中央館 1 館と分館 14 館，移動図書館で構成されている。

出典：“Aktiviteter,” Aalborgbibliotekerne.を基に筆者作成

オルボー図書館は特にプログラムに注力している図書館ではない。上記のようなプログラムはデンマーク全土の公共図書館で展開されている。表 1.7 から，子どもから高齢者までを対象とした多様なプログラムが催されていることがわかる。例えば，「ベビーカフェ／ベビーヨガ」は乳幼児と保護者を対象としたプログラムで，インストラクターから専門的な指導を受けながら親子でヨガに興じることができる。加えて，乳幼児を持つ保護者同士が育児について情報交換をする場にもなっている[108]。また近年では，IT に関するプログラムが増加している。IT に関する図書館プログラムは，コンピュータの操作に不慣れな高齢者や，これまで IT スキルを習得する機会なく越境して来た移民を主な対象とし，彼らのコンピュータリテラシーの獲得を支援している。「IT カフェ・スヴェンストロプ」[109]のような長期プログラムと，「インターネット・セキュリティ」[110]のような 1 回限りの単発プログラムとがあり，利用者は自身の IT スキルとスケジュールに応じてプログラムを選択することができる。

デンマークの公共図書館における多彩なプログラムの開催には，公民館のような施設が

存在しないデンマークの文化施設事情も関係している。公共図書館はコミュニティの文化活動の主要な部分を引き受けているため，IT，スポーツ，芸術等の多岐に渡るテーマがプログラムとして実施されている。

また，近年「コミュニティセンター（Medborgercentre）」機能をもった公共図書館が生まれ，図書館の提供するサービスの範囲が拡大している。コミュニティセンターとは，文化局主導により実施されたナショナル・プロジェクトで，2016 年現在，デンマーク全土に 16 館あるが，いずれも貧困層や移民が多く居住する地域に立地している[111]。16 館のコミュニティセンターでは，図書館機能を基盤としながら，就労，教育，保健，市民権等に関する多様なボランティア活動や相談サービス，教育プログラムが展開されている。コミュニティセンターでは，図書館の枠を超えた分野横断型の連携が重視されており，コムーネ内の他部署，学校，NGO，企業，個人等の多様なアクターとの協働によって活動が行われている[112]。

1.6.3. デンマークにおける近代公共図書館制度の創始

デンマークにおいて，近代的な公共図書館制度が構築されたのは 19 世紀後半から 20 世紀前半にかけてのことである。義務教育制度や公教育制度が完成したことにより，19 世紀には人々の識字能力や文書の読解力は飛躍的に向上し，民衆の間で読書欲が高まっていた。19 世紀前半にも民衆を対象とした図書館は存在したものの，その経営は個人の善意による寄付金や寄贈図書に依存しており不安定であった。また利用者数も限定的であった[113]。

デンマークの公共図書館に変革をもたらしたのはアンドレーアス・S・スティーンベア（Andreas S. Steenberg）である。教員だったスティーンベアは，勤務先の学校において読書教育を進める中で次第に図書館活動に関心を抱くようになった。その後 40 代にフランス，イギリス，アメリカの公共図書館を視察する機会を得たスティーンベアは，視察先で大きな衝撃を受けることとなる[114]。とりわけアメリカ訪問時に強く感銘を受け，彼はアメリカの公共図書館制度をデンマークへ導入することを決意した。1905 年，彼は「デンマーク民衆図書連盟（Foreningen Danmarks Folkebogsamlinger）」（現在の，デンマーク図書館協会（Danmarks Biblioteksforening））を設立し，1909 年には政府に新設された公共図書館助成委員会（Statens Bogsamlingskomiteen）の代表に就任した[115]。またスティーンベアは，アメリカの公共図書館で使用されていたデューイ十進分類法（Dewey Decimal Classification）を基礎にデンマーク版として改良を加えたデンマーク十進分類法（DK Decimalklassifikation）を 1915 年に作成し，デンマークにおける図書館業務に進歩をもたらした[116]。

スティーンベアとともに，デンマークにおける公共図書館制度の構築に寄与した人物にハンス・O・ランゲ（Hans O. Lange）がいる。1901 年から 1924 年までデンマーク王立図書館の司書として勤務していたランゲは，規模の大小とは無関係にデンマーク全土に存在する全ての公共図書館が統一されたネットワークで結ばれるべきであると考えた。また公共図書館は法的根拠を基に活動すべきであると主張した。加えて，全国規模の図書館ネット

ワークを支えるものとして 1909 年，ランゲはセントラル・ライブラリーの新設を政府に提案した[117]。彼は地域の中央館および分館と，王立図書館との間に両者を繋ぐ役割としてセントラル・ライブラリーが必要であると考えたのである。ランゲが提唱したデンマーク全土に広がるネットワークを基礎とした図書館サービスは，今日もデンマークにおける公共図書館制度の基盤となっている。

スティーンベアやランゲの図書館運動に協力し，デンマークにおける近代公共図書館制度の構築に寄与したのがトマス・ドゥスィング（Thomas Døssing）である。ドゥスイングはスティーンベアとともに，デンマーク十進分類法を作成したほか，1920 年のデンマーク初の公共図書館法制定に貢献した[118]。そして公共図書館法制定後，1920 年から 1942 年までの 22 年間，ドゥスイングは初代図書館局（Statens Bibliotekstilsyn）局長を務め，近代公共図書館制度の基礎を固めた[119]。

今日デンマークにおいて国内のどこにいても統一された手順で市民があるゆる資料へ均等にアクセスできるのは，スティーンベア，ランゲ，ドゥスイングの功績によるところが大きい。

そして看過できないのは，公共図書館制度が整備される以前からデンマークに浸透していた生涯学習思想である。デンマークでは，1830 年代にニコライ・F・S・グルントヴィ（Nikolaj F. S. Grundtvig）が対話を中心とした全人教育を提唱し，成人教育の重要性を主張した。グルントヴィの思想は，「フォルケホイスコーレ（folkehøjskole）」という名の生涯学習機関の創設に結実している[120]。

1783 年から 1872 年までデンマークに生きたグルントヴィは，北欧神話の学者であり，神学者であり，詩人，そして教育思想家であった。彼は，19 世紀初頭の学校教育において主流であった，ラテン語の書物を主な教材として暗記や詰込みを強い，試験の結果で評価する「教育（uddannelse）」に疑問を抱いていた。そして，対話と相互作用を通じて，他者との連帯や，歴史的文脈における自己の存在を自覚することこそ学校で実践されるべきであると考えた[121]。

1844 年にグルントヴィが創設したフォルケホイスコーレには，彼の 1)「生きた言葉（Det levende ord）」の使用，2）対話と相互作用の重視，3）歴史・文学の学び，4）試験の廃止，という 4 つの教育思想が反映された[122]。「生きた言葉」とは，当時の知識人や聖職者が多用していたラテン語とは異なる，民衆が生活実践の中で家族，友，隣人等と語り合う際に使用していたデンマーク語を意味している[123]。フォルケホイスコーレは，異なる経験を持つ他者との「生きた言葉」による対話を中心に歴史や文学等を学ぶ場であった。試験を課さず，学ぶ意欲のある者が自由に学ぶことが可能なフォルケホイスコーレは，当時の農民解放運動に支持されデンマーク中に広まった[124]。

グルントヴィの思想は，「フォルケオプリュスニング（folkeoplysning）」という言葉で表すことができる。フォルケオプリュスニングを直訳すると「国民・民衆の啓蒙」となるが，清水満は“『国民』『民衆』『啓蒙』といった言葉のもつうさんくささのために，肝心のもの

を見失ってしまう恐れがある”と指摘し,「民衆の社会的自覚」という訳語を当てている[125]。今日，フォルケオプリュスニングは狭義では社会教育，成人教育を意味するが，広義では，義務教育も含んだ生涯にわたる教育機会を示す広範な概念である。

なお 2016 年現在，デンマーク国内に 68 のフォルケホイスコーレが存在する[126]。デザイン，スポーツ，手芸等を扱う多様なコースが設置され，今日では歴史や文学以外も学習できるようになっているが，グルントヴィが重視した「生きた言葉」による対話による学びは現在もフォルケホイスコーレにおいて継続的に実践されている。

グルントヴィの影響もあり，デンマークでは 19 世紀半ばから階層とは無関係にあらゆる者が対等に生涯に渡り学ぶことの意義が確認されてきた。こうした，自主的で自由な生涯に渡る学びを承認する機運の中，近代公共図書館制度は形成されたのである[127]。

1.6.4. デンマークの公共図書館に関わる法制度

デンマークにおいて初めて図書館法が制定されたのは 1920 年のことである。前述のスティーンベア，ランゲ，ドゥスイングが中心となり，図書館の設置と運営に関する事項が法律として定められた。これにより，図書館は“知識および情報の提供に資すること”を目的とした施設であることが示された[128]。また政府は地域の公共図書館に対し補助金を交付すること，補助金受給には要件があることが明記された[129]。

その後，デンマークの図書館法は幾度かの改正を経ている。1950 年の法改正では，初めて貸出無料の原則について言及された。加えて，地域の公共図書館の運営の責任は，国ではなくコムーネにあることが定められた[130]。

今日の公共図書館制度の礎となっているのは 1964 年の改正法である。全国のコムーネへ図書館の設置が義務化されたことで，居住地にかかわらず国民は公共図書館を利用できるようになった[131]。また，政府は地域の公共図書館が図書以外の資料を購入することを財政面で支援するとした。

それまで「公共図書館法」という名称であった図書館法は，2000 年に「図書館サービス法（Lov om Biblioteksvirksomhed）」に改称された[132]。そして法の対象を公共図書館のみでなく，国立図書館，大学図書館，研究図書館にまで広げた。同法は公共図書館の目的を“図書，定期刊行物，録音図書，およびその他の適切な資料，例えば音楽，インターネットやマルチメディアを含む電子的な情報源を提供することによって情報・教育・文化を促進することにある”としている[133]。それまで図書館で扱うメディアは“図書とそのほかの資料”と規定されていたが，2000 年の改正により扱うメディアがより広範になった。また 2010 年にも法改正がなされた。2016 年現在の現行法は，2010 年に改正されたものである。

1.6.5. デンマークにおける図書館職員制度

2014 年の統計によると,デンマークの公共図書館に勤務する常勤職員は合計で 3951.8 名[134]である[135]。今日，公共図書館で働く職員は司書のみではない。職員の内訳を見ると，司書

1818.9 名，図書館アシスタント（司書補）31.5 名，事務職員 1475.4 名，その他専門職員 271.4 名，その他 354.5 名となっている[136]。表 1.8 はデンマークの公共図書館に勤務する正規職員数の推移を示したものである。

表 1.8. 公共図書館の正規職員数

（単位：人）

年	司書	図書館アシスタント	事務職員	その他専門職員	その他	計
2010 年	2 079.9	32.3	1 665.4	177.4	410.3	4 489.8
2011 年	2 007.3	32.3	1 543.5	194.8	387.9	4 296.8
2012 年	1 962.1	31.4	1 465.3	199.1	353.6	4 129.5
2013 年	1 909.2	30.3	1 429.5	196.7	344.7	4 020.2
2014 年	1 818.9	31.5	1 367.9	271.4	354.5	3 951.8

出典：“Årsværk på folkebiblioteker efter område og personalekategori.” Statsbiblioteket. を基に筆者作成

司書，図書館アシスタント，事務職員の数は近年，漸次的に減少傾向にある一方，その他専門職員の数は増加している。その他専門職員には，ウェブサイトの管理を担当するスタッフや，IT コンサルタントが含まれる。デジタル化の進展により図書館サービスが高度化する中で，IT スキルを持つ専門家を雇用する公共図書館が増加している。また，その他専門職員には，ソーシャルワーカーも含まれる。公共図書館が不安定な状況に置かれている市民にアプローチする際，社会福祉に関する専門的知識や経験が必要となる。ソーシャルワーカーは司書と協力し，特に訪問を通して図書館サービスを提供するアウトリーチにおいて専門性を発揮している。本研究が対象とする移民サービスにソーシャルワーカーが関与するケースも多い。

デンマークの図書館に司書として勤務するには，「情報学アカデミー（Det Informationsvidenskabelige Akademi）」で司書資格を取得する必要がある。司書の資格は，同校で学士号（図書館情報学）を取得し，その後図書館の現場にて半年間の実習を行うか，もしくは同校で修士号（図書館情報学）を取得することで獲得できる[137]。

デンマークにおいて最初の司書養成機関である「国立図書館学校（Statens Biblioteksskole）」が誕生したのは 1918 年のことである[138]。1920 年に最初の図書館法が制定され，同校は法定の司書養成所として文化局の傘下に置かれた[139]。文化局から離れ独立した機関となったのは 1956 年であった。その後，同校は「デンマーク図書館学校（Danmarks Biblioteksskole）」へと改称し，1973 年にはオルボー（Aalborg）に分校が開校した[140]。

デンマークにおいて図書館学校は創設から 42 年間，高度専門職養成機関として特殊な位置づけにあった。同校が高等教育機関として大学と同等の扱いになったのは 1998 年である[141]。これにより，4 年間に所定の単位を履修した者は，学士号（図書館情報学）が取得できるようになった。同時に，大学院も開かれ，図書館情報学の修士課程が設置された。その後，同校に博士課程が設置されたのは 2004 年である[142]。2010 年，デンマーク図書館学校は情報学アカデミーへと改称され，さらに 2013 年にはコペンハーゲン大学との統合があり，情報学アカデミーはコペンハーゲン大学人文学部に置かれた[143]。

国立図書館学校，およびデンマーク図書館学校の時代には，図書館情報学の授業のみ開講されていたが，現在情報学アカデミーが提供しているカリキュラムは伝統的な図書館学のみでなく，コンピュータや情報処理に関する領域を幅広く網羅している[144]。卒業後の進路も，図書館に勤務する者のみでなく，システム管理者，情報コンサルタント，データベース設計者等，多様化している。

また情報学アカデミーは，現役の司書を対象にリカレント教育のためのプログラムを開講している[145]。近年の図書館サービスの技術的な変化は著しく，リカレント教育プログラムは，現役の司書に最新の専門的な知識や技術に対応するための教育機会を提供している。

1.7. 論文の構成

本論文の構成は以下の通りである。なお，図 1.3 は，論文の構成を図示したものである。

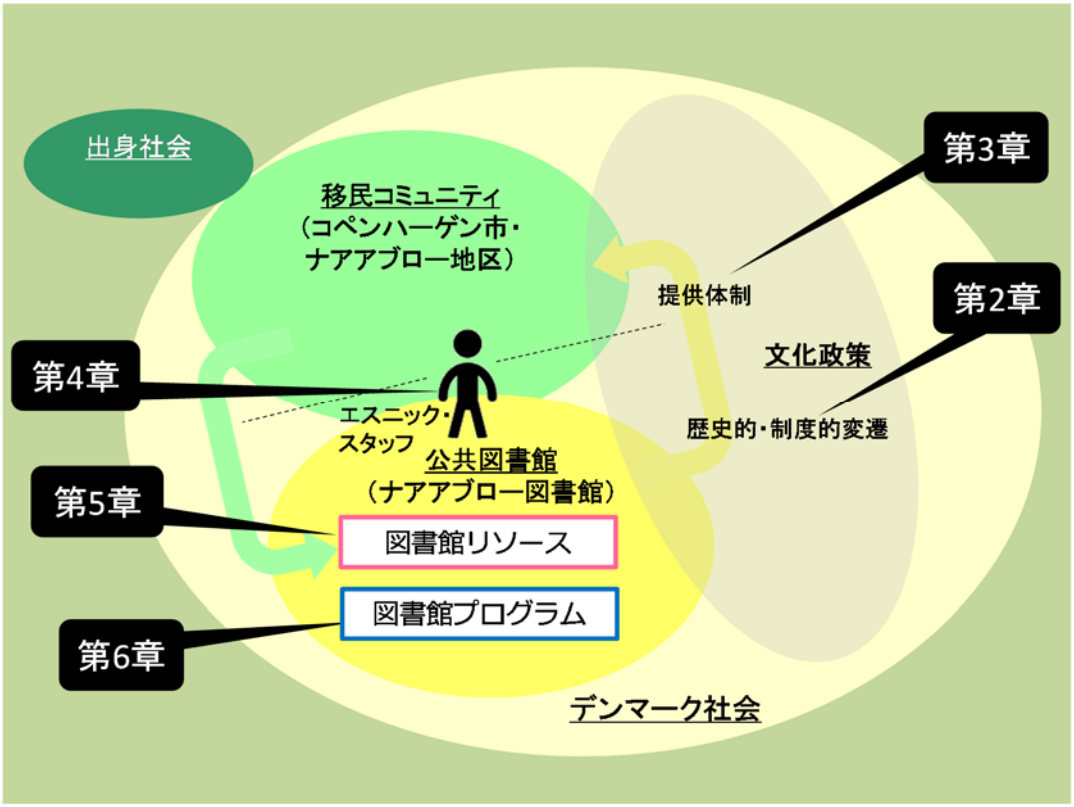

図 1.3.　論文の構成

第 1 章（本章）では，本研究の背景と目的，研究の課題と方法，先行研究，論文の構成を提示し，研究対象であるデンマークの公共図書館制度の概要を述べる。

第 2 章では，デンマークにおいて移民の数が急増した 1960 年代後半以降に焦点をあて，公共図書館における移民サービスに関わる図書館行政の流れや仕組みの歴史的・制度的な展開を明らかにしていく。

第 3 章では，デンマークの公共図書館において移民サービスを提供する際の提供側の体制について検討する。地域レベルの 3 つのアクターと，国レベル 2 つのアクターに属する文化行政担当職員や司書を対象にしたインタビューを通して，公共図書館の移民サービスに関与するアクターがそれぞれどのような機能を持って活動しており，各アクター間でどのような協力体制を取っているかを明らかにする。

第 4 章では，図書館サービスの提供側に関与しながらも，移民の背景を持つ利用者と同様の当事者性を内包する図書館職員を本研究ではエスニック・スタッフと称し，彼らが公共図書館において当事者性を作用させつつ，どのような役割を担っているのかを示していく。コペンハーゲン図書館の 1 館，ナアアブロー図書館に勤務する 4 名のエスニック・スタッフを対象にインタビューを行い，そこから得られるインタビュー・データを分析していく。

第 5 章では，ナアアブロー図書館を利用している移民 10 名を対象にインタビューを行い，彼らの公共図書館に対する意識や，図書館資料および館内施設設備の利用状況について，移民自身の語りを通して明らかにする。

第 6 章では，移民の図書館プログラムとの関わりに焦点を当てる。ナアアブロー図書館で展開されている，デンマーク語「トーククラブ」，アラビア語「トーククラブ」，「地域の母」の 3 つのプログラムにおいて参与観察を行い，移民が移住先での生活のどのような文脈の中で，いかにして図書館プログラムに参加しているのかを明らかにする。

第 7 章では研究結果を総括的に検討し，デンマークの多文化コミュニティにおける公共図書館の役割を，「越境」の概念を分析軸としながら論じ，論文全体をまとめて述べる。

注・引用文献

[1] 広田康生『新版エスニシティと都市』有信堂, 2003, p.296.
[2] Hersberger, Julia A.「コミュニティの果実と土台: グリーンズボロ・カーネギー黒人図書館、1904-1964 年」『場としての図書館：歴史、コミュニティ、文化』［“The Fruit and Root of the Community: The Greensboro Carnegie Negro libary, 1904-1964,” *The Library as Place: History, Community, and Culture*］川崎良孝ほか訳，日本図書館協会，2008, p.143.
[3] Pozzi, Ellen M. 「「アメリカ」に行く: イタリア人近隣社会とニューアーク公立図書館、1900-1920 年」『20 世紀アメリカの図書館と読者層』[“Going to “America”: Italian Neighborhoods and the Network Free Public Library,” *Libraries and the Reading Public in Twentieth-century America*]川崎良孝ほか訳，日本図書館協会, 2014, p.117.
[4] 本研究では，移民の背景を持たないデンマーク人を「ネイティブ・デンマーク人」ない

し「ネイティブのデンマーク人」と表記する。
[5] 本研究におけるデンマーク語の固有名詞のカナ表記は下記の辞典に従うこととする。
新谷俊裕，大辺理恵，間瀬英夫「デンマーク語固有名詞カナ表記小辞典」『IDUN 北欧研究』2009，別冊 No.2. 240p.
[6] Epinion og Pluss Leadership. “Danskernes Kulturvaner 2012,” Kulturministeriet. 2012, p.87-90.
http://kum.dk/uploads/tx_templavoila/endelig_danskernes_kulturvaner_pdfa.pdf, (accessed 2015-08-26).
[7] Fenger-Grøn, Carsten and Malene Grøndahl. *Flygtningenes danmarkshistorie 1954-2004*. Aarhus, Aarhus Universitetsforlag, 2004, p.14.
[8] Nielsen, Jørgen S. *Islam in Denmark: the challenge of diversity.* Lanham, Lexington, 2012, p.2.
[9] 前掲 8), p.3.
[10] Danmarks Statistik. “Folketal den 1. i kvartalet.”
https://www.dst.dk/da/Statistik/emner/befolkning-og-befolkningsfremskrivning/folketal, (accessed 2016-11-17).
[11] Danmarks Statistik. “Indvandrere og Efterkommere.”
http://www.dst.dk/da/Statistik/emner/indvandrere-og-efterkommere/indvandrere-og-efterkommere.aspx, (accessed 2016-04-17).
[12] セントラル・ライブラリーはデンマーク全土に 6 館存在する。セントラル・ライブラリーは文化局の管轄で，4 年ごとに更新される文化局とセントラル・ライブラリーとの間の協定に従って業務が行われている。基本的に，各自治体の公共図書館のみでは収集が難しい資料を調達し提供したり，各自治体の図書館から寄せられる相談に対し専門的なサポートをしたり，国の政策に基づきプロジェクトを実施する際，自治体横断的な連携の調整役として機能している。
Centralbibliotek. “Om Centralbibliotekerne,” http://centralbibliotek.dk/om-centralbibliotekerne?fuld, (accessed 2015-03-18).
[13] Berger, Ågot. “Biblioteksbetjening af Indvandrere i Danmark de Sidste 30år,”*Mangfoldighedens Biblioteker*. Copenhagen, Bibliotekarforbundet, 2001, p.67.
[14] 統合法（Integrationsloven）は統合の定義を，ニューカマーがデンマーク社会の基本的な規範や価値観に基づき，自らのスキルとリソースを活用して他の市民と対等な立場で社会に参画していくこと，と示している。またコペンハーゲン・コムーネの統合政策は，統合とは，異なる背景を持つ人々が共にコミュニティの未来を構築するための双方向的なプロセスであるとしている。
The Employment and Integration Administration, The City of Copenhagen. “Copenhagen’s Integration Policy 2011-2014.” 2011, 17p.
http://www.coe.int/t/dg4/cultureheritage/culture/cities/InclusionPolicyCopenhagen2011.pdf, (accessed 2015-03-18).
[15] Berger, Ågot. “Recent Trends in Library Services for Ethnic Minorities: the Danish Experience,”*Library Management*. Vol.23, No.1/2, 2002, p. 80-81.
[16] Berger, Ågot. *Mangfoldighedens Biblioteker：Flersproglig Biblioteksbetjening i Danmark*. Copenhagen, Bibliotekarforbundet, 2001, p .76-78.
[17] Statsbibliotek. “Om SBCI,” http://www.statsbiblioteket.dk/forbiblioteker/sbci/om-sbci/organisationens-historie, (accessed 2015-03-18).
[18] Harris, Michael H. “The Purpose of the American Public Library in Historical Perspective: A Revisionist Interpretation,” *Library Journal 98*, 1973, p. 2509-2514.
[19] 樋口直人「移民システムと移民コミュニティの形成: 移民ネットワーク論から見た移住

過程」梶田孝道，丹野清人，樋口直人『顔の見えない定住化：日系ブラジル人と国家・市場・移民ネットワーク』名古屋大学出版会, 2005, p.96-101.
[20] McKenzie, Pamela J. et al.「プログラム室の扉の内側:カナダ公立図書館における狭く私的な女性領域の創造」『場としての図書館：歴史、コミュニティ、文化』["Behind the Program-Room Door: The Creation of Parochial and Private Women's Realms in a Canadian Public Library," *The Library as Place: History, Community, and Culture*］川崎良孝ほか訳，日本図書館協会，2008, p.173-198.
[21] Certeau, Michel de『日常的実践のポイエティーク』[*L'invention du quotidien 1: Art de faire*]山田登世子訳，国文社, 1987, p.89-91.
[22] International Federation of Library Association and Institutions, Section of Library Services to Multicultural Populations『多文化コミュニティ：図書館サービスのためのガイドライン第 3 版』[*Multicultural Communities: Guidelines for Library Services 3rd edition*］日本図書館協会多文化サービス委員会訳，日本図書館協会, 2012, p. 38.
[23] 以下の研究が例として挙げられる。1) Malone, Cheryl K. "Toward a Multicultural American Public Library History," *Libraries and Culture.* Vol. 35, No. 1, 2000, p. 77-87. 2) Jones, Plummer Alston. *American Public Library Service to the Immigrant Community, 1876-1948 A Biographical History of the Movement and Its Leaders: Jane Maud Campbell (1869-1947), John Foster Carr (1869-1939), Eleanor (Edwards) Ledbetter (1870-1954) and Edna Phillips (1890-1968).* Thesis (Ph. D.)University of North Carolina at Chapel Hill, 1991, 617p.
[24] 例として以下の研究が挙げられる。1) Al-Qallaf, Charlene L. and Joseph J. Mika. "Library and Information Services to the Arabic-speaking Community: A survey of Michigan Public Libraries," *Public Library Quarterly.* No.28, 2009, p.127-161.; Fisher, Karen E. 2) Joan C. Durrance and Marian B. Hinton. "Information Grounds and the Use of Need-Based Services by Immigrants in Queens, New York: A Context-Based, Outcome Evaluation Approach, " *Journal of the American Society for Information Science and Technology.* Vol. 55, No. 8, 2004, p. 754-766.
[25] 例として以下の研究が挙げられる。Caidi, Nadia and Danielle Allard. "Social Inclusion of Newcomers to Canada: An Information Problem?" *Library & Information Science Research.* Vol. 27, No. 3, 2005, p. 302-324.
[26] 例として以下の研究が挙げられる。1) Audunson, Ragnar et al. "Public Libraries: A Meeting Place for Immigrant Women?" *Library and Information Science Research.* Vol. 33, No.3, 2011, p.220-227. 2) Ulvik, Synnøve. "Why should the Library Collect Immigrants' Memories?: A Study of a Multicultural Memory Group at a Public Library in Oslo," *New Library World.* Vol. 111, No. 3/4, 2010, p. 154-160.
[27] Wiegand, Wayne A. "To Reposition a Research Agenda: What American Studies Can Teach the LIS Community About the Library in the Life of the User," *The Library Quarterly*, Vol.73, No. 4, 2003, p. 369-382.
[28] 前掲 15), p. 79-87.
[29] アウトリーチとは施設入所者，低所得者，非識字者，民族的少数派など，これまでの図書館サービスが及ばなかった人々に対してサービスを広げていく活動を意味する。「アウトリーチ」『図書館情報学用語辞典第 4 版』日本図書館情報学会用語辞典編集委員会編，丸善出版, 2013, p.1.
[30] 前掲 15), p. 81.
[31] 前掲 15), p. 81.
[32] Elbeshausen, Hans and Peter Skov. "Public Libraries in a Multicultural Space: A

Case Study of Integration Processes in Local Communities", *New Library World*, Vol. 105, No. 3, 2004, p. 131-141.
[33] シェラン島は首都コペンハーゲンがあるデンマーク最大の島である。
[34] Skøtt, Bo C. "Ethnic diversity in Danish public libraries," *New Frontiers in Public Library Research*. Carl Gustav Johannsen and Leif Kajberg, eds. Lanham, Scarecrow Press, 2005, p.185-210.
[35] Weisbjerg, Bente and Hans Elbeshausen. "Ilsjælenes Professionalisering: Fra Indvandrerbibliotekar til Integrationsbibliotekar," *Bibliotekarerne: En Profession i et Felt af Viden, Kommunikation og Teknologi.* Trine Schreiber and Hans Elbeshausen, eds. Frederiksberg, Samfundslitteratur, 2006, p.141-174.
[36] Statsbiblioteket, Odense Centralbibliotek, and Århus Kommunes Biblioteker. *Refuge for Integraton: A Study of How the Ethnic Minorities in Denmark Use the Libraries : Abstract and Recommendations*. Aarhus, Aarhus Public Libraries, 2001, 23p.
https://www.aakb.dk/sites/www.aakb.dk/files/files/file_attachments/30._juni_2010_-_958/refuge.pdf, （accessed 2016-05-27）.
[37] 前掲 36), p. 19.
[38] 前掲 6), p.87-90.
[39] Audunson, Ragnar A. et al. "PLACE: Public Libraries – Arenas for Citizenship: An Investigation of the Public Library as a Meeting Place in a Digital and Multicultural Context." https://www.cristin.no/app/projects/show.jsf?id=288092. (accessed 2016-05-27).
[40] Vårheim, Andreas. "Trust and the Role of the Public Library in the Integration of Refugees: The Case of a Northern Norwegian City," *Journal of Librarianship and Information Science*. Vol. 46,No. 1, 2014, p. 62-69.
[41] 前掲 26)-2　Ulvik, Synnøve. "Why should the Library Collect Immigrants' Memories?: A Study of a Multicultural Memory Group at a Public Library in Oslo," *New Library World*. Vol. 111, No. 3/4, 2010, p. 154-160.
[42] 前掲 40)
[43] Audunson, Ragnar. "The Public Library as a Meeting-Place in a Multicultural and Digital Context: The Necessity of Low-Intensive Meeting-Places," *Journal of Documentation*. Vol. 61, No. 3, 2005, p. 429-441.
[44] Berger, Ågot. *Mangfoldighedens Biblioteker: Flersproglig Biblioteksbetjening i Danmark*. Copenhagen, Bibliotekarforbundet, 2001, 142p.
[45] 野入直美「見えない日本人：在日朝鮮人教育における「日本人生徒」の位相」『異文化間教育』No. 22, 2005, p. 42-56.
[46] Wiegand, Wayne A.『メインストリートの公立図書館：コミュニティの場・読書のスペース・1876-1956 年』［Main Street Public Library: Community Places and Reading Spaces in the Rural Heartland, 1876-1956］川崎良孝ほか訳，京都図書館情報学研究会，2012，p.7.
[47] 久野和子「新しい批判的図書館研究としての「場としての図書館」("Library as Place") 研究 ：その方法論を中心にした考察」『図書館界』Vol. 66, No. 379, 2014, p. 274.
[48] 日本大百科全書（ニッポニカ）は，スカンジナビアを"ヨーロッパ北部に位置するデンマーク，ノルウェー，スウェーデンは一般にスカンジナビアとよばれる。しかし厳密な規定はなく，便宜上，狭義にはこの 3 国とし，広義には「北欧」と同義とみてフィンランド，アイスランドを含める場合もある"と定義している。デンマーク，ノルウェー，スウェーデンの 3 ヵ国では共通してノルド語 （北方ゲルマン語） が用いられているため，とりわけ図書館界において図書館資料に関して協働する際，デンマーク，ノルウェー，スウ

ェーデンの 3 ヵ国間で協力関係が結ばれることが多い。本研究では，デンマーク，ノルウェー，スウェーデンの 3 ヵ国を「スカンジナビア」と呼び，上記 3 ヵ国にフィンランドやアイスランドも含める際に「北欧」と呼ぶこととする。村井誠人「スカンジナビア」『日本大百科全書』小学館, 2001.

[49] 政策研究大学院大学のチームによって実施された「オーラル・メソッドによる政策の基礎研究」と題するプロジェクト以降，オーラル・ヒストリーを用いた政策研究が政策学領域において評価されている。伊藤隆『オーラル・メソッドによる政策の基礎研究 ： 平成 12 年度～平成 16 年度科学研究費補助金「特別推進研究(COE)」研究成果報告書』政策研究大学院大学, 2005.

[50] 佐道明広「政策学におけるオーラル・ヒストリーの意義：研究と教育への活用をめぐって」『総合政策フォーラム』Vol.1, No.1, 2006, p.62.

[51] Merriam, Sharan B.『質的調査法入門: 教育における調査法とケース・スタディ』[*Qualitative research and case study application in education*]堀薫夫ほか訳，ミネルヴァ書房, 2004, p.106-109.

[52] 佐藤郁哉は，フィールドノーツの意味を“調査地で見聞きしたことについてのメモや記録（の集積）”と説明している。つまりフィールドノーツは，特定の帳面を指しているのではなく，フィールドワークにおいて記した手書きのノート，電子記録，走り書きしたレシートの裏のメモ等，ありとあらゆる記録の集合がフィールドノーツである。佐藤郁哉「ハードウェアとソフトウェア」『フィールドワーク増訂版：書を持って街へ出よう』新曜社, 2007, p. 215-216.

[53] 藤田結子『現代エスノグラフィー ： 新しいフィールドワークの理論と実践』新曜社, 2013, p.19.

[54] 三浦綾希子『ニューカマーの子どもと移民コミュニティ：第二世代のエスニックアイデンティティ』勁草書房, 2015, p.16.

[55] 前掲 52), p.164.

[56] Københavns Kommune, Økonomiforvaltningen, Velfærdsanalyseenheden. “Faktaark fra Velfærdsanalyse: Befolkningen efter bydele og areal, København 1. januar 2016 og 2015,” http://www.kk.dk/sites/default/files/2016_befolkningen_efter_bydele_og_areal.pdf, (accessed 2016-09-01).

[57] 通貨の換算は，2016 年 1 月 9 日時点のレートを用い，1DKK＝17.19 円として計算している。

[58] Københavns Kommune. “Indkomster: Gennemsnitlig Indkomst efter Køn og Alder - skattepligtig Indkomst,” http://sgv2.kk.dk:9704/analytics/saw.dll?PortalPages&PortalPath=%2fshared%2fStatistik%20Rapporter%2f_portal%2fIndkomster&Page=Tab%2021_4_kbh_dist&Done=PortalPages%26PortalPath%3d%252fshared%252fStatistik%2520Rapporter%252f_portal%252fIndkomster%26Page%3dHovedside%2520Indkomster%26ViewState%3dq1nobg5nm4966kkmklrn7dd93u, (accessed 2016-09-11).

[59] 図書館では，幅約 90cm の棚板により何段かに仕切られているものを一つの単位として，その書架を「連」と呼び，書架収容量の単位としている。「書架」『図書館情報学用語辞典第 4 版』日本図書館情報学会用語辞典編集委員会編，丸善出版, 2013, p. 111.

[60] Københavns Biblioteker. “Internationalt bibliotek,” https://bibliotek.kk.dk/vi-har-ogsaa-4/internationalt-bibliotek, (accessed 2015-11-04).

[61] United Nations Statistics Division. “International migration,” http://unstats.un.org/unsd/demographic/sconcerns/migration/migrmethods.htm, (accessed 2016-05-01).

[62] ビジネス，療養，友人や親族の訪問，聖地巡礼等の目的による 3 ヵ月以内の滞在の場

合，移民（短期）と呼ばれる。
[63] European Commission. “EU Immigration Portal,” http://ec.europa.eu/immigration/glossary_en#glosI, (accessed 2016-05-01).
[64] Danmarks Statistik. *Indvandrere i Danmark 2015*. Copenhagen, Danmarks Statistik, 2015, p.11. http://www.dst.dk/Site/Dst/Udgivelser/GetPubFile.aspx?id=20703&sid=indv2015, (accessed 2016-05-01).
[65] ただし両親のいずれか，もしくは両方がデンマークに生まれ，デンマークの市民権を保有する場合，移民の子孫と見なされている。デンマーク生まれであるが，現在デンマーク国外の国籍を保有している両親を持つ者は統計上，移民の子孫に含まれる。前掲 59)
[66] 資料の貸出手続きには社会保障番号が記された黄色い「健康保険証（Sundhedskort）」が必要である。合法的な滞在者のみ保健カードを取得することが可能であるため，図書館資料の貸出には滞在の合法性が問われる。しかしながら，資料の閲覧や，図書館プログラムへの参加，コピー機や PC の利用において保健カードの有無を尋ねられることはなく，利用者は滞在の合法性と無関係に資料の貸出以外の図書館サービスを受けることができる。コペンハーゲン・コムーネの場合，以下のようなウェブページを通して図書館での資料の貸出手続きを示している。City of Copenhagen. “How Do I Borrow Books at the Library?” http://international.kk.dk/artikel/how-do-i-borrow-books-library, (accessed 2016-05-01).
[67] Basch, Linda et al. *Nations Unbound: Transnational Projects, Postcolonial Predicaments, and Deterritorialized Nation-States.* Langhorne, Gordon and Breach, 1994, p.7.
[68] 伊豫谷登士翁編『移動という経験：日本における「移民」研究の課題』有信堂, 2013, p. 22.
[69] 拝野寿美子『ブラジル人学校の子どもたち：「日本かブラジルか」を超えて』ナカニシヤ出版, 2010, p.23.
[70] 梶田孝道，丹野清人，樋口直人『顔の見えない定住化』名古屋大学出版会, 2005, p. 80.
[71] Urry, John『モビリティーズ：移動の社会学』［Mobilities］吉原直樹，伊藤嘉高訳，作品社，2016，p.17-25.
[72] 柄谷利恵子『移動と生存：国境を越える人々の政治学』岩波書店，2016，p. 32-35.
[73] 前掲 72) p. 28.
[74] 前掲 72) p. 36.
[75] Zielinska, Marie F. “Celebrating 20years: A Concise History of the IFLA Section on Library Services to Multicultural Populations.” IFLA, 2001, p.1-2. http://www.ifla.org/files/assets/library-services-to-multicultural-populations/publications/20-years-mcult-history.pdf, (accessed 2016-05-01).
[76] グループの初期メンバーはカナダ国立図書館勤務のゼリンスカ，デンマークのゲントフテ公共図書館に勤務していたクラーウ=スヴァーツ，スウェーデン文化協会（Statens Kulturråd）勤務のミクロス・グリアス（Miklos Gulyas），ハンガリーのゴーキー図書館（Gorkey Library）に勤務するジュラ・ケルテス（Gyula Kertesz）の 4 名であった。
[77] International Federation of Library Association and Institutions, Section of Library Services to Multicultural Populations. “Multicultural Communities: Guidelines for Library Services.” IFLA, 1987, 14 p.
[78] International of Library Association and Institutions, Section of Library Services to Multicultural Populations. “Multicultural Communities: Guidelines for Library Services.” Hague, IFLA, 1998, 13p. http://www.ifla.org/archive/VII/s32/pub/guide-e.pdf, (accessed 2016-05-01).

[79] International Federation of Library Association and Institutions, Section of Library Services to Multicultural Populations『多文化コミュニティ：図書館サービスのためのガイドライン第 3 版』[*Multicultural Communities: Guidelines for Library Services 3rd edition*] 日本図書館協会多文化サービス委員会訳，日本図書館協会, 2012, 71p.
[80] Zielinska, Marie F. and Francis T. Kirkwood. *Multicultural Librarianship: An International Handbook.* New York, K.G. Saur, 1992, 383p.
[81] International Federation of Library Association and Institutions, Section of Library Services to Multicultural Populations「多文化主義の定義」[“Defining “Multiculturalism””] 日本図書館協会多文化サービス委員会訳, 2005, 2p. http://archive.ifla.org/VII/s32/pub/multiculturalism-jp.pdf, (accessed 2016-05-01).
[82] IFLA/UNSCO「IFLA/UNESCO 多文化図書館宣言：多文化図書館―対話による文化的に多様な社会への懸け橋」[“IFLA/UNESCO Multicultural Library Manifesto: The multicultural library - A gateway to a cultural diverse society in dialogue”]平田泰子訳, 2008, 4p. http://www.ifla.org/files/assets/library-services-to-multicultural-populations/publications/multicultural_library_manifesto-ja.pdf, (accessed 2016-05-01).
[83]日本図書館協会多文化サービス研究委員会『多文化サービス入門』日本図書館協会, 2004, p.9-10.
[84] 前掲 16), p .68.
[85] 前掲 16), p .76-78.
[86] Elkjær, Annemarie et al. “Mens Græsset Gror: Biblioteksbetjening af Indvandrere,” *Bibliotek 70*, No. 2, 1983, p.38-39.
[87] Bekendtgørelse af lov om integration af udlændinge i Danmark. https://www.retsinformation.dk/forms/r0710.aspx?id=163323, (accessed 2016-05-01).
[88] BiblioteksCenter for Integration. “Historien bag,” https://www.statsbiblioteket.dk/forbiblioteker/sbci/om-sbci/organisationens-historie, (accessed 2016-05-01).
[89] “Lov om Biblioteksvirksomhed Chapter2 §14(3).,” https://www.retsinformation.dk/forms/r0710.aspx?id=145152, (accessed 2016-05-01).
[90] 小澤実ほか編著『アイスランド・グリーンランド・北極を知るための 65 章』明石書店, 2016, p.28-33.
[91] National Library of Greenland Groenlandica. “The Cultural Heritage,” https://www.groenlandica.gl/web/arena/kulturarven, (accessed 2016-05-01).
[92] Slots- og Kulturstyrelsen. “Om Biblioteker,” http://slks.dk/biblioteker/om-biblioteker/, (accessed 2016-05-01).
[93] Dyrbye, Martin, et al. *Det Stærke Folkebibliotek: 100 år med Danmarks Biblioteksforening*. Copenhagen, Danmarks Biblioteksforening and Danmarks Biblioteksskole, 2005, p.187-188.
[94] Danmarks Statistik. “Folkebiblioteker efter Område og Aktivitet,” http://www.statistikbanken.dk/10368, (accessed 2016-05-01).
[95] Slots- og Kulturstyrelsen. “Forskningsbiblioteker (Alle betjeningssteder),” http://vip.dbc.dk/lister.php?vis=forsk_alle&PHPSESSID=7bdb9955c90dca2dbc18228ff54f970b, (accessed 2016-05-01).
[96] サービスポイントとは，利用者が図書館サービスを受ける場を意味し，中央館や分館のほか，移動図書館，配本所等が含まれる。「サービスポイント」『図書館情報学用語辞典第 4 版』日本図書館情報学会用語辞典編集委員会編，丸善出版, 2013, p.86.
[97] 配本所とは，図書館から送られてきた資料を利用者に貸し出す場所を意味する。通常，

配本所には利用者から要望があった資料が置かれ，豊富なコレクションが常置されることはない。「配本所」『図書館情報学用語辞典第 4 版』日本図書館情報学会用語辞典編集委員会編，丸善出版, 2013, p.197.
[98] 前掲 92)
[99] 前掲 92)
[100] Slots- og Kulturstyrelsen. “Centralbiblioteker,” http://slks.dk/biblioteker/nationale-ordninger/centralbiblioteker/, (accessed 2016-05-01).
[101] Det kongelige bibliotek Pligtafleveringen. “Pligtaflevering: Bevar Nutiden for Fremtiden.” http://www.pligtaflevering.dk/brochurer/grafiske_branche.pdf, (accessed 2016-05-01).
[102] Statsbiblioteket. “Mission, Vision og Strategi,” http://www.statsbiblioteket.dk/om-statsbiblioteket/Mission%2C%20vision%20og%20strategi/mission%2C%20vision%20og%20strategi, (accessed 2016-05-01).
[103] Svane-Mikkelsen, Jørgen. *The Library System in Denmark*. Copenhagen, Royal School of Library and Information Science, 1997, p.68-70.
[104] Danmarks Statistik. Folkebibliotekernes nøgletal efter område og nøgletal. http://www.statistikbanken.dk/10368, (accessed 2016-05-01).
[105] 同上
[106] “Arrangement,” *Informationsordbogen: Ordbog for Informationshåndtering, Bog og Bibliotek*. Det Informationsvidenskabelige Akademi, eds. Copenhagen. Det Informationsvidenskabelige Akademi. http://www.informationsordbogen.dk/concept.php?cid=4103, (accessed 2016-05-01).
[107] 前掲 92)
[108] Aalborg Bibliotekerne. “Baby Café,” https://www.aalborgbibliotekerne.dk/Default.aspx?ID=377, (accessed 2016-05-01).
[109] Aalborg Bibliotekerne. “It-Café Svenstrup,” https://www.aalborgbibliotekerne.dk/Default.aspx?ID=153&eid=1136&act=1, (accessed 2016-05-01).
[110] Aalborg Bibliotekerne. “Handel på nettet-Nibe,” https://www.aalborgbibliotekerne.dk/Default.aspx?ID=153&eid=1409&act=1, (accessed 2016-05-01).
[111] Kulturstyrelsen, Center for Bibliotek, Medier og Digitalisering. “*Medborgercentrene: Et fremtigt bibliotekskoncept erfaringer og perspektiver fra et forsøgsprojekt med 16 biblioteksbaserede*,” 2012, p.1. http://slks.dk/fileadmin/user_upload/dokumenter/KS/institutioner/biblioteker/Fokusomraader/LaesningLaering/Medborgercentre/Medborgercentre_Pixi.pdf, (accessed 2016-05-01).
[112] Kulturstyrelsen, Center for Bibliotek, Medier og Digitalisering. *“Medborgercentre: Et fremtidigt bibliotekskoncept,”* Copenhagen, Kulturstyrelsen, 2012, p.8-10. http://slks.dk/fileadmin/user_upload/dokumenter/bibliotek/Fokusomraader/Laesning_og_laering/Medborgercentre2012.pdf, (accessed 2016-05-01).
[113] 前掲 103), p.15.
[114] 前掲 103), p.15.
[115] 前掲 103), p.16-17.
[116] Dyrbye, Martin. “Foreign Influence on the Development of the Danish Public Libraries with Emphasis on the Association Denmark’s Popular Book Collections, 1905-

1919," *New Frontiers in Public Library Research.* Carl G. Johannsen and Leif Kajberg, eds. Lanham, Scarecrow Press, 2005, p.239.
[117] 前掲 103), p.15-16.
[118] 前掲 103), p.15-16.
[119] 前掲 116), p.215.
[120] 清水満『生のための学校：デンマークで生まれたフリースクール「フォルケホイスコーレ」の世界』新評論, 1996, p.86-88.
[121] 前掲 120), p.62-63.
[122] 前掲 120), p.102-109.
[123] 前掲 120), p.102-103.
[124] 前掲 120), p.96-102.
[125] 前掲 120), p.62-63.
[126] Højskolernes Hus. "Højskoler i alfabetisk orden," http://www.hojskolerne.dk/hoejskoler/hoejskole-soeg, (accessed 2016-05-01).
[127] Dahlkid, Nan. "Architecture and Design of Danish Public Libraries, 1909-1939: Between Tradition and Modernity," *New Frontiers in Public Library Research.* Carl G. Johannsen and Leif Kajberg, eds. Lanham, Scarecrow Press, 2005, p.219.
[128] 前掲 93), p.18-19.
[129] 前掲 93), p.23-24.
[130] 前掲 93), p.161-162.
[131] 前掲 103), p.25.
[132] 前掲 93), p.239-241.
[133] Lov om Biblioteksvirksomhed Chapter1, § 1.
[134] 人数が小数点になっているのは,（常勤の職員の人数）＋{（非常勤の職員の勤務時間）÷（常勤の職員が勤務すべき時間）}の式で計算しているためである。
[135] Statsbiblioteket. "Årsværk på folkebiblioteker efter område og personalekategori," http://www.statistikbanken.dk/10368, (accessed 2016-05-01).
[136] 同上
[137] Moring, Camilla. "At Blive Bibliotekar: Om Læring og Udvikling af Professionsidentitet i Uddannelse og Praksis," *Bibliotekarerne: En Profession i et Felt af Viden, Kommunikation og Tknologi.* Trine Schreiber and Hans Elbeshausen, eds. Frederiksberg, Samfundslitteratur, 2006, p.97-98.
[138] 前掲 103), p.75.
[139] 前掲 103), p.75.
[140] 前掲 103), p.75.
[141] DBC: Dansk BiblioteksCenter. Faktalink - Hvordan Uddanner Man Sig til Bibliotekar?. http://www.faktalink.dk/titelliste/folkebibliotekets-historie/folkebibliotekerne-i-danmark#section-6, (accessed 2016-05-01).
[142] 同上
[143] Det Informationsvidenskabelige Akademi. "Om Det Informationsvidenskabelige Akademi," http://iva.ku.dk/om-iva/, (accessed 2016-05-01).
[144] Det Humanistiske Fakultet Københavns Universitet. "Uddannelsesstrategi 2015-17 for Det Informationsvidenskabelige Akademi (IVA) Københavns Universitets Humanistiske Fakultet (KU-HUM)" http://iva.ku.dk/dokumenter/Uddannelsesstrategi_2015-2017.pdf, (accessed 2016-05-01).
[145] Uddannelsesservice Københavns Universitet. "Kursussøgning, efter- og

Videreuddannelse,”
http://efteruddannelse.kurser.ku.dk/?PageNumber=1&SearchWord=&Faculty=FACULTY_0004&selectItemFaculty=FACULTY_0004&Period=&selectItemPeriod=&Departments=DEPARTMENT_0074&selectItemDepartments=DEPARTMENT_0074&Language=&selectItemLanguage=, (accessed 2016-05-01).

第2章　デンマークの公共図書館における移民サービスの変遷

2.1. 本章の目的

デンマークでは 20 世紀初頭から移民を受け入れ始めた。当初，図書館における移民サービスは行政主導ではなく，多言語資料は主に民間の団体によって構築されていた。例えば，ユダヤ系のデンマーク人がヘブライ語の資料をシナゴーグで借りていたことが確認されている[1]。図書館の移民サービスを対象とした最初の公的な介入はドイツ出身者を対象に行われた。1950 年代にデンマークとドイツの間で協定が締結され，デンマーク政府はユトランド半島にある「ドイツ図書館（Det Tyske Biblioteksvæsen）」に対して財政的支援を行うこととなった。同様に，ドイツの南シュレースウィヒ（Südschleswig）にある「デンマーク図書館（Det Danske Bibliotek）」はドイツ政府から財政支援を受けた[2]。

デンマークの近代的な公共図書館制度は 1964 年に施行された公共図書館法を基盤にしている。これにより，法的義務として各自治体の公共図書館を運営する体制が整備された。また同時に，貸出無料の原則が導入された[3]。その後の法改正は 1964 年の公共図書館法をもとに行われており，目的条項“公共図書館は図書や他の資料を無料で提供することにより，情報，教育，文化活動の振興に寄与する”は 1964 年から 35 年以上の間，同じ一文が用いられてきた[4]。また，図書館法は 1964 年から繰り返し“図書館はデンマークに居住するすべての人に奉仕すべきである”と強調している[5]。“デンマークに居住するすべての人”という表現は，エスニック・マイノリティの存在を意識して記されている。しかし 1964 年の公共図書館法ではエスニック・マイノリティについて明確な言及はされていなかった。なぜなら 1960 年代前半の移民の数は限定的であったためである。しかし 1960 年代後半にデンマーク政府が不足する労働力を補う目的で移民を受け入れ始めたことで状況は一変する。それを受け，図書館界も移民サービスの提供方法について本格的に議論を始めることとなる。

本章では，移民の数が急増した 1960 年代後半以降に焦点をあて，デンマークの公共図書館における移民サービスの今日までの歴史的・制度的な変遷を明らかにして行く。ここでは，ベアウアが著書『多様性の図書館：デンマークにおける多言語による図書館サービス（*Mangfoldighedens Biblioteker: Flersproglig Biblioteksbetjening i Danmark*）』[6]の中で用いた時代区分を採用する。ベアウアは，移民政策の変遷と公共図書館サービスの変化との関係性について 3 つの時代区分を用いて説明している[7]。

第 1 段階はデンマーク政府が移民をゲストワーカーとして積極的に受け入れた 1967 年から 1982 年である（2.2 節）。

第 2 段階は 1983 年から 1995 年までの期間である（2.3 節）。1983 年に公共図書館法が改正され，新たに 1）図書館は移民のデンマーク社会への統合[8]のプロセスにおいて重要な存在であること，2）図書館は移民の出身社会の言語や文化へのアクセスも支援することが明記された[9]。また，この法改正にともない，新たに国立施設として「移民図書館」が設置された[10]。

第 3 段階は，セントラル・ライブラリーおよび地域の公共図書館の移民サービスに対する関心が高まり，プロジェクト単位で移民サービスの拡充が図られた 1996 年から 2001 年までの期間である（2.4 節）。

そして本章では，ベアウアの上記 3 つの時代区分に 2001 年から 2014 年までの動向を第 4 段階（2.5 節）として加えている。第 4 段階は，プロジェクトの対象がより明確に据えられ，特定のグループに焦点を当てた事業が展開された期間である。

2.2. 公共図書館における移民サービスの草創期

1960 年代後半はデンマークの公共図書館全体が繁栄した時期であった。新設の図書館が次々に誕生し，新たな司書が大量に雇用された。この繁栄期には，特別な利用者グループに焦点を当てた図書館の設立についても議論され，病院図書館や，視覚障害者を対象とした図書館が誕生した。そしてその流れの中で，移民を対象とした図書館サービスについても検討されるようになった。

2.2.1. 移民サービスの始動

1969 年，ゲントフテ（Gentofte）にあるセントラル・ライブラリーに当時勤務していた司書のヘリェ・ステンキレ（Helge Stenkilde）が率先して移民を対象とした資料の中心的なコレクションを構築し始めた。1970 年，ステンキレは『ボーウンス・ヴェアデン（*Borgens Verden*）』に記事を投稿し，移民のためのコレクションについて“外国人も他の住民と同様に様々な図書館サービスの選択肢を持つことができる”と記している[11]。ゲントフテに特別多くの移民が居住していたわけではない。しかしながら，ゲントフテには当時から今日にいたるまでコペンハーゲンを含むエリアのセントラル・ライブラリーが立地している。首都のコペンハーゲンには多数の移民が居住しているため，ゲントフテ・セントラル・ライブラリーはコペンハーゲンに暮らす移民のためのコレクションを構築する必要性を察知していたのである[12]。

1970 年，ゲントフテ・セントラル・ライブラリーはゲストワーカーのためのコレクションを構築するために，国の「図書館局」の特定分野予算から 66,000 デンマーク・クローネ[13]の資金を獲得した[14]。この資金によって構築されたコレクションは「ゲストワーカー・コレクション（Gæstearbejdersamling）」と名付けられた。ゲストワーカー・コレクションには，まず各言語 100 から 200 点の資料が 8 言語で収集された。同時に，それらのコレクションは“資料は他の施設へ移動可能にし，他館も利用できるよう保障すべきである”とし，デンマーク全土の図書館へ貸し出し可能であることが定められた[15]。当時の移民の大半は生産年齢に属するゲストワーカーであったため，収集された資料は成人を対象としたフィクションが中心で，児童書は含まれていなかった[16]。

1973 年，ステンキレは「ゲントフテにおけるゲストワーカー・コレクションに関する報告（1970-1972 年）および将来のコレクションの構想（“Beretning om

Gæstearbejdersamlingen i Gentofte 1970-72 Suppleret med Betragtninger over Samlingens Fremtid”）」を刊行した[17]。クラーウ=スヴァーツは，ステンキレの報告書について“この報告書にある図書館政策に関する記述は，約 25 年前に刊行されたものであるにもかかわらず，今後の図書館運営の基盤になる内容を含んでいる。報告書は，資料収集の問題により不十分なコレクションを利用者に提供することは，利用者の失望を生み，市民から期待されない図書館に終始すると結論付けた”と述べている[18]。

その他，ステンキレは報告書の中でゲストワーカーへのサービスは，ネイティブのデンマーク人と同様に行われるべきであると強調している。また，多言語資料を収集するプロセスは複雑で，移民に対して図書館サービスを提供した経験を持たない地域の図書館が各館で多言語資料を管理することは困難であると述べた[19]。特に困難な作業として多言語資料の選書を挙げ，資料の内容からどの資料を購入すべきか，という判断を付けにくいとした。その上で，今後も継続してデンマーク全土の多言語コレクションを管理する中心的存在となるセントラル・ライブラリーが必要であるとし，ゲントフテ・セントラル・ライブラリーが引き続きその役割を担うとした[20]。同時に，移民が希望の資料を手にするまでに多大な時間が掛かっている課題を取り上げ，利用者からの期待や，地域の図書館からのニーズに応えるには，コレクションの大幅な改良が必要であることを主張した[21]。

1973 年刊行の報告書の中で，ステンキレは既に国レベルで多言語資料を管理する機関の設置を提案している[22]。ステンキレの報告書を受けて，図書館局は同年，ゲストワーカーに対する図書館サービスの組織的，実務的な問題について扱う「在デンマーク外国人労働者及びその家族への図書館サービス委員会」という名称の委員会を創設した[23]。委員会が図書館サービスの主な対象としたのはトルコ，パキスタン，旧ユーゴスラビア，アラブ諸国を出身とする者である。委員会の取り組みについては，1975 年刊行の『外国人労働者と公共図書館（*De Udelandske Arbejdere og Folkebibliotekerne*）』の中で報告されている[24]。

『外国人労働者と公共図書館』は，デンマーク全土の公共図書館に外国人労働者に対して図書館サービスを届ける義務があることを強調した。同時に，地域レベルの移民サービスは，政府予算を受け多言語資料を集中的に管理する国レベルの機関によって支援されるべきであると記した。国レベルで多言語資料を扱う機関を運営する方策として，首都圏に立地する大規模な公共図書館との協力によって運営する案や，独立した組織として地域の図書館に多言語資料を貸し出し，デンマーク全土の司書から寄せられる業務上の相談に応じる案を提示した。そして，国レベルの活動の目的に，1）デンマーク全土の公共図書館から寄せられるニーズに応じてナショナルセンターとして資料を貸し出すこと，2）多言語資料を集中的に収集すること，3）移民のためのコレクションの構築を検討している図書館に対して助言を提供すること，4）多文化に関するプロジェクトを運営すること，の 4 点を挙げた[25]。また，国レベルで多言語資料を扱う機関の蔵書数の目安を打ち出した。

1975 年当時，デンマーク国内に滞在する移民の数は約 32,000 人であったが[26]，委員会は移民 1 人当たり最低でも 4 点の資料が必要であると見積り，約 128,000 点の多言語資料を所蔵する国レベルの機関の設立を提案した[27]。

クラーウ=スヴァーツは，報告書『外国人労働者と公共図書館』について“報告書を見ると，委員会は移民に対し，多様なサービスの選択肢を提示することを通して彼らの新たな知識の獲得と，出身社会の文化の継承を支援しようとしていたことがわかる。また，国レベルの多言語収集機関を設立することは経済性と効率性の両面から見て妥当なことも説明されている”と述べている[28]。

ゲストワーカー評議会（Gæstearbejdernes fællesråd）は『外国人労働者と公共図書館』の内容に同意し，国レベルでの多言語資料の専門機関設立を支持した。クラーウ=スヴァーツは，“『外国人労働者と公共図書館』の刊行後，報告書の内容が即座に図書館政策に反映されるということはなかった。しかしながら，図書館委員会（Bibliotekskommissionen）は移民サービスを重要な分野であると認識し始め，公共図書館法の改正時に検討することを決めた”と述べている[29]。

図書館委員会における審議の間，ゲストワーカー・コレクションはゲントフテ・セントラル・ライブラリーで継続的に管理された。予算も引き続き図書館局から拠出されていた。1977 年，ゲントフテ・セントラル・ライブラリーは私企業から 165,000 デンマーク・クローネ[30]の予算を獲得し，週 20 時間勤務の契約で多言語資料を専門に担当する職員 1 名を雇用した[31]。1970 年代における多言語資料コレクションの運営予算の伸びは大きく，1974 年に 2,100 デンマーク・クローネ[32]であったのが，1979 年には 198,000 デンマーク・クローネ[33]に増額された[34]。

2.2.2. 移民児童への図書館サービス

前述のように，1970 年代初頭の移民はゲストワーカーとして移住した労働者が中心であった。しかし 1970 年代後半に入ると，移民のタイプは徐々に変化した。単身ゲストワーカーとして移住した者が，出身社会から家族を呼び寄せ始めたのである。また，同時期にデンマーク政府は難民の受け入れも行った。移民が家族を呼び寄せ始めたことは，移民児童を対象としたコレクション構築の必要性が生まれたことを意味する。1980 年にはトルコ，旧ユーゴ，パキスタン，モロッコから約 30,000 人がデンマークへ移住したが，そのうち，14 歳以下は 11,000 人であった[35]。この移民の変化に対応すべく，図書館局は 1980 年に「移民児童に対する図書館サービスワーキンググループ（Arbejdesgruppen vedrørende biblioteksbetjening af indvandrerbørn 以下，移民の子どもグループ）」という名称のグループを構成した。移民の子どもグループは同年，報告書『移民児童への図書館サービス（*Biblioteksbetjening af Indvandrerbørn*）』を刊行している[36]。この報告書は，デンマークにおいて移民児童が出身社会の文化との接点を維持しながら，母語を確立していくことの重要性を示している。また，地域の公共図書館に対し，移民児童への図書

館サービスを構築することを薦めており，1 つの言語グループにつき 10 名以上の子どもに資料を届けられるよう取り組むことが望ましいと記した。

世界には，そもそも児童文学や子ども向けの音楽が存在しない社会がある。多言語で児童書のコレクションを構築することの難しさは，そのような社会からどのように児童向けの資料を入手するかという点にあった。そのような社会の文化に関するコレクションを構築する際，移民の子どもグループは，児童文学の数が少ない言語，もしくはデンマーク語で各図書館が独自に資料を創作することを推奨した。同時に，スカンジナビア諸国が協力して多言語資料を新たに生み出すことも検討された。移民の子どもグループの報告書はゲントフテ・セントラル・ライブラリーのゲストワーカー・コレクションに影響を与え，移民児童を対象にした資料が新たに加えられた。既述のように，1975 年に刊行された報告書『外国人労働者と公共図書館』は，成人移民 1 名あたり最低でも 4 点の資料が必要であるとしたが，移民の子どもグループも同様の基準を設けた。つまり，移民児童 1 名あたり 4 点の資料を提供することを目指していた。

2.2.3. 地域の図書館における移民サービスの始動

地域レベルにおいて多言語コレクションを構築する動きは，首都圏のみでなく，他の都市へも広がっていった。当時から図書館はマイノリティ・コミュニティに広く開かれた，無料で拘束のないサンクチュアリであるべきだという考えは広まっており，特に移民児童に対する図書館サービスは即座に着手された。

ヘルスィングウーア（Helsingør）において移民児童に対するサービスを牽引した，スザネ・シュデ（Suzanne Schytt）はヨーナサン・スヴァーツ（Jonathan Schwartz）とともに 1981 年刊行の『ビクセン（*Bixen*）』 に以下のように記した。

> ヘルスィングウーア図書館の児童サービスコーナーでは，いつでも移民の背景を持った子どもが本を借りる姿を目にすることができる。デンマークにおいて最初に移民の数が増加した 1972 年頃からヘルスィングウーア図書館でも移民児童の利用が急増した。デンマーク人の子ども同様，厳しい状況下で生活する移民児童にとっても図書館はサンクチュアリなのである[37]。

1980 年，ヘルスィングウーア図書館は移民児童に対する図書館サービスを拡充するためのプロジェクト案を立て，文化省に助成金の申請をした。プロジェクトでは，移民児童は社会的・教育的なニーズのみならず，文化的なニーズも持っていることが強調された。助成申請は文化省によって承認され，ヘルスィングウーア図書館はプロジェクト専属の職員 2 名を新たに雇用した[38]。新規雇用された職員はトルコ出身者 1 名と，旧ユーゴ出身者 1 名で，週 20 時間の契約で勤務した。彼らは二文化職員（De Tokulturelle Medarbejdere）と称され，特に児童サービスに携わり，通訳，多言語資料の調達，移民関

係の団体との交流，プログラムの運営を担った。当時，弟や妹とともに図書館を訪れ，午後中をヘルスィングウーア図書館内で過ごす移民児童は少なくなかった。ヘルスィングウーア図書館は移民児童にとって余暇をすごす場所になっていたのである。学校に通う移民児童の多くは宿題を行う場として図書館に滞在していたので，その際しばしばネイティブのデンマーク人児童と衝突が起きていた。シュデとスヴァーツはヘルスィングウーア図書館の児童スペースの様子を以下のように記している。

> 移民児童のデンマーク語の能力は高いが，デンマーク人との境界や，出身社会とは異なるデンマーク社会の常識を敏感に感じ取り不安を抱いている。彼らは，落ち着かない家庭環境や周囲からのからかい，親密なコミュニケーションの欠如などの問題を抱えており，論理立てて説明することが難しい苛立ちを感じている。デンマーク人の子どもは少し移民児童を怖がっており，移民児童が本をあるべき場所に戻さないなどで口論になり，デンマーク人と移民児童の間で衝突が起きている。しかし，ひとたび事態が収束すると，子どもはデンマーク人と移民との差異を強く意識することなく，穏やかに話すようになっている[39]。

同様の問題は他の図書館でも起きた。1982 年に刊行された報告書『アヴェズウーア図書館における移民サービス（*Biblioteksbetjening af Indvandrere på Avedøre Bibliotek*）』には，伝統的な図書館サービスと現状との間の均衡をとることが困難になっていると記されている[40]。当時，アヴェズウーア図書館周辺にトルコ出身者が移住し，図書館を利用するトルコ系の移民児童が急増していた。そこで，ヴィズオウア・コムーネ（Hvidovre Kommune）は特別な予算を準備し，トルコ出身の職員を 1 名雇用することを決定した。移民児童に対するサービスに従事する特別な職員を新たに雇用する必要性をコムーネに伝えることは容易ではない。しかしながら，アヴェズウーア図書館は予算の獲得に成功し，課題の発見および移民や移民の家族のニーズに合ったサービスの提供を目指した。

2.2.4. スカンジナビア諸国間の協力関係の構築

1970 年代後半から図書館における移民サービスのためのスカンジナビア諸国間のネットワークが構築された。クラーウ=スヴァーツは 1999 年刊行の『移民への図書館サービスに関するスカンジナビア諸国間協力略史（*Historisk Rids over Udviklingen af det Nordiske Samarbejde i Biblioteksbetjeningen af Indvandrere*）』の中で“スカンジナビア諸国間の協力は 1979 年にスウェーデンのクンゲルヴ（Kungalv）で開催された「公共図書館と移民のための図書（Folkebiblioteken och Invandrerlitteraturen）」という会議の場で具体化された”と記している[41]。会議では下記の事項がスカンジナビア諸国共通の課題として確認された。

・多言語資料に関する指針の作成

・スカンジナビアにおける図書館間相互貸借の協力体制の構築

・翻字，音訳，およびスカンジナビア諸国における図書館間相互貸借や，選書・資料調達に関わるその他の技術的な変換に関する共通規則の確認

・読書に不慣れな移民を対象にした，読みやすい図書（Letlæste Bøger），オーディオブック，音楽の提供

・各国の新聞や雑誌に関する共同調査の実施

・司書教育における移民サービスに関する取扱いの強化

そして当面，1)スカンジナビア諸国共通の多言語資料に関するハンドブックの作成，2)スカンジナビア諸国における図書館間相互貸借の体制整備，3)関連メディアの製作，4)資料の共同購入の 4 点に傾注していくことが決定した[42]。

会議後，ハンドブックの作成を専門に行うワーキング・グループが新たに創設された。同ワーキング・グループが中心となり，1983 年には『キターブ：移民およびマイノリティに関するスカンジナビア諸国の図書館ハンドブック』という名称のスカンジナビア諸国共通の手引きが完成した[43]。キターブとは，「Kulturell Identitet Tryggad Av Biblioteken（図書館における文化的アイデンティティの保障）」というスウェーデン語の頭字語である。また同時に，キターブは「本」を意味するトルコ語およびアラビア語の単語でもある。手引きには図書館における文化的多様性への配慮のあり方について記述されており，例えば，多言語での新聞・雑誌の収集に関する留意点が挙げられている。『キターブ』は 1983 年の刊行以降も修正・加筆が行われ，1985 年[44]，1987 年[45]，1989 年[46]に補足資料が刊行されている。

その他のスカンジナビア諸国間の協力としては，スカンジナビア 3 か国（デンマーク，スウェーデン，ノルウェー）の移民サービスに関する業務を取り仕切るナショナルセンター間で行われた，資料の共同購入および共同目録作業の実施可能性の検証が挙げられる。

このように，デンマークの図書館は移民サービスに取り組み始めた初期の段階から，スウェーデンやノルウェーとの協力体制を整備し，3 か国の協働で図書館の移民サービスを拡充するための現実的な方策を導き出して行った。折しも，スウェーデン，ノルウェーはデンマーク同様，移民サービスの拡充に着手し始めたばかりの時期であった。そのため 3 か国が直面していた課題は類似しており，互いに手を取り合うことで効率的なサービスの拡充を目指していた[47]。

2.3. 公共図書館における移民サービスの発展期

1983 年から 1995 年は地域レベル，国レベルの図書館サービスが発展・強化した期間と特徴付けられる。この発展には「移民図書館」の設立が関係している。また別の要因には首都圏および地方の都市部における個々の公共図書館の体制の強化が挙げられる。

1983 年の公共図書館法改正は，図書館局の移民サービスに対する理解の深化をもたらした。“図書館はデンマークに居住するすべての人に奉仕すべきである”という文言は改正

後も引き続き用いられた。その上で，独立した機関として国立の図書館に移民図書館を加えることが新たに明記された[48]。

1983 年の法改正を受け，1985 年には文化省の省令の中で図書館の移民サービスについて以下のような言及があった。

> 移民サービスは，全ての住民に図書館サービスを届けるという理念のもと，各自治体の図書館の責任において取り組まれる。図書館は，移民の子どもから大人までが資料を借りられる環境を作り，彼らにデンマークにおける実務的，社会的，文化的な事項に関する情報を提供する。さらに，彼らが出身社会の言語および文化を維持するために必要な資料を提供する。ただし，各地域の図書館のみで全ての課題に取り組むことは不可能であるため，地域の図書館を補助する役割が必要である[49]。

このように，1975 年の報告書『外国人労働者と公共図書館』の記述を受け，1983 年から本格的に国レベルと地域レベルの協力による移民サービスの拡充が議論されるようになった。

2.3.1. 移民図書館の設立

1983 年の公共図書館法改正を受け，デンマーク政府は移民図書館を設立するための予算編成に着手した。予算は年 2,000,000 デンマーク・クローネ[50]に決定した[51]。図書館局とコペンハーゲン図書館との議論により，ゲントフテ・セントラル・ライブラリーのゲストワーカー・コレクションは移転されることとなった。図書館局とコペンハーゲン図書館の交渉の初期段階では，移民図書館はコペンハーゲン図書館によって指示される職務体制により，政府の予算を用いて運営されることになっていた。つまり，勤務する職員はコペンハーゲン図書館の人材でありながら，職員の給与や資料費は政府予算から支出される計画であった。しかしながら，予算を割当てることが困難であるため計画は承認されず，図書館局とコペンハーゲン図書館の間の議論は難航した。

ゲントフテ・セントラル・ライブラリーは移民図書館の運営から外れることとなり，1984 年，ゲストワーカー・コレクションとして所蔵していたゲントフテ・セントラル・ライブラリーの資料は，1983 年にバラロプ（Ballerup）へ移築されたばかりだった「公共図書館保存図書館（Folkebibliotekernes Depotbibliotek）」[52]へ移管された。保存図書館は資料保存のための書庫のような場であった。1975 年刊行の『外国人労働者と公共図書館』は移民を対象としたコレクションは利用しやすいよう広く公開されるべきであるとしていた。しかしながら，移民図書館の設立計画は『外国人労働者と公共図書館』の記述とは異なる形で進められた。

それまで開架式で運営されていたゲントフテ・セントラル・ライブラリーのゲストワーカー・コレクションがバラロプにある閉架式の保存図書館へ移動されるという決定に反対

する者は多く，特に移民関係の各種団体は即座に抗議行動を起こした。1984 年 3 月 29 日の『ポリティケン（*Politiken*）』には，「移民連合（Indvandrernes Fællesråd）」代表が“移民図書館の倉庫への移動を受け入れることができない。我々は抗議する。移民図書館を広く公開すべきである”と語った記事が掲載されている[53]。

『サムスピルス・リザー（*Samsplis Leder*）』は，コレクションの将来的な展開とコレクションを設置する場所について十分に検討されることなくコレクションの移動が決められていることに，図書館員連盟も異議を唱えていると報じた。加えて，約 18,000 点の資料がバラロプの倉庫に“葬られる（Begrave）”ことは非難に値し，使命感を持つ司書から意欲を削ぐことになると記している[54]。

新たに内務省に，移民関連の組織の連絡委員会が創設され，移民図書館の設立に関する改善案が提案された。提案書は 1975 年刊行の『外国人労働者と公共図書館』の記述に基づきながら，部分的にイスマイル・アブドゥラヒ（Ismail Abdullahi）が記した『デンマークの移民と図書館（*Indvandreren og Biblioteket i Danmark*）』[55]を参照して作成された。

このように各種団体からの抗議や改善案の提案があったにもかかわらず，1984 年，ゲントフテ・セントラル・ライブラリーから保存図書館へコレクションの移動が決行され，1985 年，移民図書館は業務を開始した。閉架式のサービスに対する不満や抗議も配慮されず，移民図書館は閉鎖的な形態で始動した。以下は移民図書館の活動の目的と役割である[56]。

- 移民図書館は地域の公共図書館の上部組織として，地域の図書館が移民に対し資料を提供可能なよう体制を整備することを活動の目的とする。基盤となる体制は基本的に地域の図書館が構築することを想定する。
- 移民図書館は多言語資料コレクションの構築，資料の装備および提供に関して，地域の図書館を支援する。
- 移民図書館は移民の出身社会の文化や言語に関して継続的に情報を提供しなければならない。また，対象分野の専門性の強化を目指し，地域の図書館に対し，情報提供と助言を行わなければならない。
- 移民図書館は移民関連団体や地域の公共図書館との連絡・調整を行い，移民が確実に公共図書館サービスに関する情報を得られる体制を整備する。

移民図書館の開館直後から難民の数は急増した。これは，1983 年の移民法改正により移民が家族を出身社会から呼び寄せる法的権利を持ったことに起因する。加えて，移民法改正は難民申請希望者にデンマークでの滞在の長期化を認めた。このように，移民図書館が始動した時点で既に計画時より膨大な量の任務を負っていた。

難民の増加に合わせ，新たにペルシャ語とタミル語のコレクションを構築する必要が生まれた[57]。また，移民図書館と地域の図書館間の協力が行われた初期段階では，移民図書館の蔵書数には限りがあった。そのため，移民図書館のコレクションを利用できるのは主に小規模な自治体の図書館で，都市部の図書館は自館で基本的な多言語コレクションを構築しなければならなかった[58]。

1990 年には移民を対象にした資料の共同購入事業が実施されたが，移民図書館の人材不足により 1991 年に終了した。資料の共同購入体制の欠如により，この頃の移民サービスを提供する図書館間の協力体制は虚弱なものに終始した。

2.3.2. 地域の図書館におけるサービスの構築

デンマークの主要都市では，1983 年から 1995 年までの間，地域の図書館における移民の背景を持つ成人および児童のためのコレクションが集中的に構築された。コレクションが発展した要因を以下にまとめる[59]。

- 移民図書館が構築されたことで，サービスの専門性が向上し適切な助言が提供されるようになった。
- 多くの公共図書館において移民の新聞，雑誌，図書の利用や需要が高まり，各館で多言語コレクションを構築し始めるようになった。
- 1983 年の公共図書館法改正により，移民の出身社会の言語の資料を提供することは各公共図書館の責務であるという考えが浸透した。
- 移民図書館運営委員会，「コペンハーゲン・アムト難民・移民委員会（Fagudvalget for flygtninge og indvandrerarbejde i Københavns Amt）」，図書館員連盟「移民・難民グループ（Faggruppe for Indvandrer- og flygtningebetjening）」等の活動により，司書間のネットワークが強化された。
- 図書館員連盟が刊行する専門誌『ビブリオテーク 70（Bibliotek 70）』は，移民サービスについて度々取り上げた。
- 「デンマーク図書館学校」は移民図書館と共同で，トルコ語，ペルシャ語，アラビア語等の言語グループに関するコースを開講した。また 1988 年には移民児童に対する図書館サービスに焦点を当てたコースを開いた。

当時，移民サービスの質は，各館の司書の熱意，優先課題，予算状況に左右されていた。特に大きなコレクションを構築したのはコペンハーゲン周辺のエリアであった。また，オーフース・コムーネ図書館（Århus Kommunes Biblioteker）は 1980 年代に多額の助成金をコムーネから受けており，その助成金の一部を用いて，移民サービスを専門に担当する移民司書を配置した。多くの図書館では児童司書（Børnebibliotekar）が移民司書を兼任していた。児童サービスと移民サービスの関係性についてヘルスィングウーア図書館のシュデは

以下のように述べている。

> ヘルスィングウーア図書館の児童サービスは，サービスの範囲を拡大し，成人も視野に入れた。成人は同時に子どもの親でもある。成人の移民の多くは，自身の読書のためではなく，まず子どものために図書館を訪れていた。我々はまず，子どもを抱えている移民女性に着目した[60]。

このように，子どもを連れて児童サービスを利用する移民が多かったことから，児童サービスの対象を拡張する形で移民サービスは取り組まれた。

しかしながら，オーフース図書館やヘルスィングウーア図書館を除いて，多くの公共図書館において移民サービスは優先課題ではなかった。そのため，若手もしくは移民サービスにほとんど関心のない職員が担当になっており，サービスの専門性と継続性に課題があった。専門性の欠如を妨げる目的で 1984 年に構築されたのが，コペンハーゲン・アムト難民・移民委員会である[61]。

2.3.3. 図書館資料と母語

1980 年代には，移民がアイデンティティを形成していく際に母語が果たす役割とデンマーク語学習の影響について議論された。1980 年に刊行された報告書『移民児童への図書館サービス』は，移民は家庭内では「外国人」にならずに文化や言語と接触することができるとし，移民の人格形成のために出身社会の言語との接触を維持することが重要であるとした。

> 母語の習得は第二言語を学習するのに必須の条件である。以前は海外の文学作品の出版が中心であったが，ここ 2 年間では母語と第二言語の関係に関する多数の出版物が生み出されている[62]。

このように図書館界では移民にとっての母語の重要性と図書館の役割について話し合われた。しかしながら議論が大きく進展することはなく，図書館サービスに変化が起きることはなかった。

2.3.4. 移民児童の図書館への殺到

1992 年には，アヴェズウーア（Avedøre），ヴェスタブロ（Vesterbro），ファーロム（Farum），トストロプ（Tåstrup）の公共図書館において立て続けに問題が起きた。1992 年の『ビブリオテーク 70』の「ヴェスタブロ図書館，移民児童の余暇に関する問題への対応困難（“Vesterbro Bibliotek kan ikke alene klare indvandrerbørnenes fritidsproblemer”）」というタイトルの記事には，ヴェスタブロ図書館に移民が殺到し，収拾が付かない様子が記述

されている[63]。

子どもの権利委員会（Børns Vilkår）の委員長を務めたジョン・A・ハルセ（John A. Halse）は，以下のように述べ，図書館はコミュニティの変化に応じて形態を変えることを望んでいないとした。

> 図書館は移民に対し，貸出を通して資料へのアクセスを可能にしたが，移民は今もなお「高尚な文化の香り（Liflig duft af finkultur）」が漂う館内で，声を潜めて滞在しなければならない。基本的に多くの図書館は成人の利用を前提としている。そのような環境の中で利用者は大きな音をたて，話し，笑うことは不可能である。基本的に，多くの司書は静寂を求める成人の要望を優先させている[64]。

このように，ハルセは公共図書館が移民の子どもを排除しようとしていることを暗示した。ヴェスタブロ図書館の職員はハルセの批判に対抗し，図書館は移民児童のケアセンターではなく，子どもの「預かり所（Opbevaringssted）」でもないと述べた。そして，図書館は公教育の代替として存在する組織ではないため，基本的に公教育に関する責務を負わないとした[65]。この考えは，1992 年に開催された図書館員連盟総会（Bibliotekarforbundets generalforsamling）の場でも確認された。また総会では，社会福祉部門のようにコムーネから特別な助成を受けていない文化部門が移民の支援を行っている事実について非難の声が上がった。文化部門も，新たなコミュニティ（移民コミュニティ）の適正な管理のために配慮されるべきであるという意見である。このことは，総会の場において“コムーネは，移民，特に移民児童が図書館の利用を希望しているという事実に基づき，公共図書館を移民の言語的・文化的統合を促す立場として配置すべきである”[66]という言葉にまとめられた。

このように，1990 年代初頭には公共図書館が移民の支援を行う際の立場と支援の範囲について盛んに議論された。

2.3.5. 図書館員連盟「移民・難民グループ」

移民サービスにおいて図書館員連盟の担う役割は大きい。図書館員連盟に「移民・難民グループ」が作られたのは 1990 年のことである。1983 年に刊行されたスカンジナビア 3 か国の共同指針である『キターブ : 移民およびマイノリティに関するスカンジナビア諸国の図書館ハンドブック』の作成に携わった図書館員連盟の「キターブ委員会（Kitab-udvalget）」のメンバーを中心に，「移民・難民グループ」は構成された。キターブ委員会はとりわけ，移民 1 名当たり 4 冊以上の資料を提供するという基準の順守を重視しており，その考えは「移民・難民グループ」に引き継がれた。活動の初期段階では，同グループは地域の公共図書館に対し移民サービスについて紹介することに専念した[67]。

また図書館員連盟「移民・難民グループ」は，専門雑誌『ブロギーゼ・ブラゼ（*Brogede Blade*）』を定期刊行することなどを通して，全国の移民サービスの実践を共有し，地域の公

共図書館のサービスに取り組む意欲を高めようとした[68]。

その他，1993 年には「図書館の日（Bibliotekets dag）」のイベントの運営にも協力した。1993 年の図書館の日のテーマは「世界の図書館－図書館の世界（Biblioteket i verden – verden i biblioteket）」であった。アヴェズウーア図書館のニールス・E・ピーダスン（Niels E. Pedersen）は，各文化の特色を紹介するのみでなく，異なる文化間の対話の創出を目指したと語っている[69]。

1993 年の「図書館の日」には様々なプログラムが行われた。元文化大臣のユデ・ヒルデン（Jytte Hilden）はスピーチの中で，各コムーネの図書館が，移民サービスを拡充できるよう，セントラル・ライブラリーへ予算を増額することを発表した。しかしながら，ヒルデンがスピーチの中で移民図書館に触れることはなかった[70]。

また，図書館員連盟「移民・難民グループ」は 1990 年代初頭にボスニアから移住した戦争難民を対象にしたコレクションの構築に尽力した。ボスニア人の庇護は特別法の中に明記されていたが，移民図書館のボスニア語資料の購入について内務省と文化省の間で意見の不一致があり，資料費が支給されない状況が続いた。そのため，地域の公共図書館や「赤十字センター（Røde Korscentre）」からボスニア語資料を希望する声が上がっているにもかかわらず，移民図書館に申請できないという事態が起きた。

そこで図書館員連盟「移民・難民グループ」は全国から図書館関係者を招集し，政府に早急な資料費の支給を嘆願する活動を起こした[71]。内務省と文化省の議論は 2 年に渡った。その間，ボスニア難民は公共図書館において出身社会の言語と接触することはほぼ不可能であった。2 年の議論の末，移民図書館と図書館員連盟は補正予算としてボスニア語の資料費を獲得することに成功した。2001 年刊行の『統合の空間（*Frirum til Integration*）』にはボスニア出身の女性の言葉が以下のように記されている。

> デンマークへの移住間もない頃，（図書館に）ボスニア語資料はほとんど存在しなかった。図書館にボスニア語資料が並ぶまでには長い時間を要した。非常に困難な時間だった。コペンハーゲン中の図書館を回ってもボスニア語資料を見付けられない日々が続いた。しかし，幸い徐々に状況は改善されていった[72]。

移民図書館がボスニア語コレクションを構築するまでの過程は，国立施設としての移民図書館の運営にはしばしば困難が伴うことを物語っている。

2.3.6. スカンジナビア諸国間の連携の強化

1979 年にスウェーデンのクンゲルヴで開催された会議の場において，デンマーク，ノルウェー，スウェーデンの 3 か国は協働で 1) スカンジナビア諸国共通の多言語資料に関するハンドブックの作成，2)スカンジナビア諸国における図書館間相互貸借の構築，3)関連メディアの製作，4)資料の共同購入の 4 点に取り組むことになった。会議後，2)，3)，4)に関す

るパイロット・プロジェクトが行われ，調査結果は 1985 年刊行の『北欧における移民を対象にした資料の選択および購入に関する図書館協力（*Nordiskt Bibliotekssamarbete om Urval och Inkop av Media for Invandrare*）』の中で報告された[73]。

プロジェクトの対象になったのはデンマーク，ノルウェー，スウェーデンの主要な図書館である。ノルウェーからオスロのダイクマン図書館（Deichmanske Bibliotek），スウェーデンからストックホルム公共図書館（Stockholm Stadsbibliotek），ゴーテボー公共図書館（Göteborg Stadsbibliotek），マルメ公共図書館（Malmö Stadsbibliotek），そしてデンマークから移民図書館が調査に参加した。上記 5 館は試験的に協働で資料の選択，収集，相互貸借を行った。クラーウ＝スヴァーツは同調査について以下のように述べている。

> この意欲的な取り組みは，試験的に様々な言語で実施された。全般的に満足した結果が得られたが，現行の枠組では費用が掛かり過ぎることが明らかになった。しかしながら，この取り組みを通して少なくともデンマークには副次効果があった。資料選択に関するスカンジナビア共通の方針を確認できたことで，今後デンマーク独自の指針を作成する基盤を構築することができた。また，スウェーデンで適用されている典拠コントロール[74]の方針にならい，デンマークにおける統一標目を定めることができたことも，このプロジェクトによる収穫である[75]。

プロジェクトを通して，各図書館が技術的に異なる手法を用いることは，合理的かつ経済的な資料収集の妨げになることが明らかになった。そしてプロジェクト以降，スウェーデンの民間企業「図書館サービス社(Bibliotekstjänst)」が注釈付きで多言語資料のリストを作成し，スウェーデン，ノルウェー，デンマークの図書館に配布するようになった[76]。

2.3.7. 新たな課題

1983 年にデンマーク政府は地域の公共図書館の上部組織として移民図書館を設立することを認めた。そして，公共図書館法に図書館は移民のデンマーク社会に関する情報収集の援助のみでなく，彼らの出身社会の言語や文化との接触の維持についても支援しなければならないことが示された。しかしながら，法改正直後に急速な変革はなく，統合プロセスにおける図書館の役割に関する理解は限定的であった。

1994 年，『境界なき図書館サービス：デンマークにおける公共図書館の移民・難民に関する分析（*Biblioteksbetjening uden Grænser: En Analyse af Indvandrer- og Flygtningebetjeningen i det Danske Folkebiblioteksvæsen*）』が「デンマーク図書館学校」の学生によって作成された[77]。同報告書はデンマーク全土にあるセントラル・ライブラリーの館長とのインタビュー調査の結果を掲載している。調査の結果，セントラル・ライブラリーの館長の中には，移民サービスの発展には地域の公共図書館を支える上部組織の機能が不可欠で，それはセントラル・ライブラリーの任務であると考えている者がいる一方，移民

サービスはセントラル・ライブラリーの責務ではないとする者もいることが明らかになった。この結果から，同報告書はセントラル・ライブラリーが負っている責務は不明確で，館長の見解は統一されていないと指摘している[78]。

基本的に，セントラル・ライブラリーは上部組織として地域の公共図書館に対し資料，専門的助言，技術的支援を提供する責務を負っている。しかしながら，移民サービスについては移民図書館が地域の公共図書館の上部組織として機能していたため，セントラル・ライブラリーの役割は曖昧になっていた。報告書『境界なき図書館サービス』は，移民サービスに関してセントラル・ライブラリーの責務が曖昧であることは，地域レベルにおける図書館の移民サービスを弱体化させると結論付けている[79]。

しかしながらデンマーク全体で見ると，図書館における移民サービスには進展があった。この進展は，移民図書館，地域の公共図書館の熱心な取り組み，活発な館長らの存在によってもたらされた。同時に，移民図書館や図書館員連盟「移民・難民グループ」の周辺に司書間のネットワークが構築されていった。

移民図書館や図書館員連盟「移民・難民グループ」，一部の公共図書館などの尽力にもかかわらず，移民サービスは利用者のみならず，多くの公共図書館からも周知されていなかった。これには資金の問題が関係している。地域の公共図書館が新たに大きな任務に取り組むには外部資金の獲得が必要であったが，当該分野で申請可能な助成制度は存在していなかった。一方，移民図書館は地域の公共図書館に対し資料提供や技術的支援のみならず，資金面での支援が必要であると認識していたものの，助成制度を構築する財政的余裕はなかった[80]。

このように移民図書館の設立後には，次なる課題として，セントラル・ライブラリーの役割の曖昧さや，移民サービスの整備に必要な資金の不足といった問題が浮上していた。

2.4. 公共図書館における移民サービスの転換期

1990 年代後半になると，セントラル・ライブラリーおよび地域の公共図書館の移民サービスに対する関心は大きく変化した。変化の要因には，移民図書館に関する 2 点の報告書の刊行[81]，1995 年に今後の図書館のあり方を考える「情報化社会の図書館委員会（Udvalget om Bibliotekerne i Informationssamfundet）」が創設されたこと，1999 年に統合法が制定されたことにより，政府，地方両者の統合に対する関心が向上したこと，移民図書館および，図書館員連盟「移民・難民グループ」の継続的活動が実を結んだことなどが挙げられる[82]。

2.4.1. 移民図書館の経営に関する調査

1990 年代後半，移民図書館は複数の課題を抱えていた。主な課題は，1）移民の急増による潜在的利用者の増加，2）利用者からの資料に関する要望の多様化（図書資料のみでなく，多言語で視聴可能な音楽や動画，CD-ROM を収集する必要性が生まれた），3）厳しい財政

状況，の 3 点であった。

上記の課題は，移民図書館に課せられた職務の量と，問題を解決するための財政資源の量との相違に起因していた。現場では，例えば，利用者から予約を受けてから資料を届けるまで約1年を要するという事態が起きていた。特に需要が高い言語の資料については，地域の公共図書館が希望した日程に届けられないことがしばしばであった。このような問題の発生と，文化大臣が移民図書館に財政状況の報告を求めたことを受け，文化省の図書館局は，公共機関を主なクライアントとして解決策の提案業務を行うシンクタンクである「PLSコンサルタント（PLS Consult）」に調査を依頼した。そして，1996年，「PLSコンサルタント」は調査結果をまとめ，『公共図書館の移民図書館：ニーズ・活動・組織体制（*Folkebibliotekernes Indvandrerbibliotek - Behov, Aktiviteter og Organisatorisk Ramme* 以下，『PLS報告書』）』を刊行した[83]。『PLS報告書』は，移民の人口動態の傾向から新たな言語グループが増加していることを示した上で，移民図書館に割り当てられている予算は適当な額ではないと結論付けている。また『PLS報告書』は，移民が，ネイティブのデンマーク人の享受している図書館サービスの質と量に相当するサービスを享受できるよう，予算の増額を推奨している。さらに，エンドユーザーと直接的な接点を持つことは利用者のニーズの詳細な把握と，サービスの発展に繋がるため，『PLS報告書』は移民図書館にコレクションの一般公開と利用者との直接的な接触を求めている[84]。

『PLS報告書』は1997年，『ビブリオテークスプレセン（*Biblioteksspressen*）』の中で2度取り上げられた[85]。ブロゴーオン図書館（Blågårdens bibliotek）の職員であるインゲ・E・アナスン（Inge E. Andersen）は，同報告書の内容に触れながら，多言語資料に関する目録規則の確立と，財政資源および人的資源の増強が必要であると指摘している。また，アナスンは移民図書館を開放するべきであるとした『PLS報告書』の記述に賛同し，以下のように述べている。

> 私は移民図書館を訪問したいと言う移民（の背景を持つ利用者）に“残念ながら移民図書館は非公開の図書館です”と伝え，幾度も彼らを失望させてきた。移民図書館は「移民にとって閉鎖されたメッカ（Et lukket Mekka for indvandrere）」である[86]。

また同じ記事の中で，デンマーク国立図書館に勤務するロルフ・ハペル（Rolf Hapel）は“公共図書館は難民・移民に対して低レベルなサービスを提供することに甘んじていられない。移民サービスはこのように限定的であって良いのだろうか”と読者に問いかけている[87]。

またハペルは，移民図書館を中心とした上部組織構造について，“移民サービスに関する責任を国立機関である移民図書館に一任することは，同時に移民図書館の外部への広がりを抑制し，政策立案者が当該分野を振興していこうという意欲を削ぐ”とした[88]。ハペ

ルの見解は，移民図書館を廃止し，権限をセントラル・ライブラリーに委譲することが望ましいとしていた。

1995 年には，文化省に「情報化社会の図書館委員会」が設置された。同委員会の目的は，これからの図書館の役割を明らかにすることにあった。委員会では『情報化社会 2000 年（*Info-samfundet år 2000*）』における議論を踏まえて話し合われた[89]。ハペルも同委員会のメンバーの 1 人であった。異なる館種の図書館間の協力によって運営されていた「情報化社会の図書館委員会」では，移民図書館の組織としての将来的な立場も議題に挙げられた。同委員会での議論は 1997 年刊行の『情報化社会の図書館に関する報告書（*Betænkning om Bibliotekerne i Informationssamfundet*）』にまとめられている。同報告書は移民図書館をデンマーク国立図書館の組織の傘下に組み込むことを提案している[90]。

『情報化社会の図書館に関する報告書』の提案は，1998 年に政府の「財政委員会（Finansudvalget）」により承認され，移民図書館をデンマーク国立図書館のもとへ移し，国の機関としての移民図書館の機能を維持，強化していくことになった。それゆえ，デンマーク国立図書館への統合の前後で移民図書館の機能が大きく変化することはなかった。デンマーク国立図書館の傘下への移行後の移民図書館の任務は以下の通りである[91]。

- 移民図書館は地域の公共図書館の上部組織として，地域の図書館が移民に対し資料の提供が可能なように体制を整備することを目指す。
- 移民図書館はコレクションの構築，資料の装備および提供に関して，地域の図書館を支援する。
- 移民図書館は移民の出身社会の文化や言語に関して継続的に情報を提供しなければならない。また，対象分野の専門性の強化を目指し，地域の図書館に対し，情報提供と助言を行わなければならない。
- 移民図書館は移民関連団体や地域の公共図書館との連絡・調整を行い，移民が確実に公共図書館サービスに関する情報を得られる体制を整備する。

このように，移民図書館の行政上の位置付けはデンマーク国立図書館の傘下へと移行したが，移民図書館の任務や，物理的な場所に変化はなかった。1998 年に刊行された『移民図書館の戦略およびアクション・プランの構成要素（*Elementer til en Strategi- og Handlingsplan for Indvandrerbiblioteket*）』は，今後の移民図書館の経営に向けた改善案と戦略の検討をしている[92]。また同報告書には，移民図書館の一般公開，貸出文庫の実施，電子サービスの拡充などの提案も含まれている。

2.4.2. 統合法の制定

1999 年には統合法が制定され，地域レベルの難民・移民の統合について各コムーネが権限を持つこととなった。一例を挙げると，移民法は各コムーネに対し移民へデンマーク語学

習の機会を提供することを義務付けるようになった[93]。

また，移民法の制定は地域の公共図書館が移民サービスに取り組む契機となった。つまり，図書館界においても，移民サービスが国レベルのアクターの主導により展開されていた段階から，コムーネ主導の段階へと移行したのである。

加えて，1990 年代末から特定のテーマに焦点を当て，プロジェクト化して課題に取り組むという形態が定着した。そして，プロジェクトの名称や目的に「統合」の文字が頻出するようになった。1990 年代末に着手されたプロジェクトには以下のようなものがある。

- インターネットをベースにした電子サービスのプロジェクトである「FINFO：エスニック・マイノリティへの情報（FINFO: Internetinformation for Etniske Minoriteter 以下，FINFO）」が移民図書館によって実施された。プロジェクト全体の目的は，デンマークのエスニック・マイノリティに対し，統合と社会への主体的参画のための必要条件として，デンマークにおける権利，義務，機会に関する情報へのアクセスを強化することにある[94]。
- 移民の背景を持つ利用者を対象に利用者調査が行われた。調査の結果は『統合の空間』にまとめられた。調査の目的は，デンマークの図書館における移民サービスを改善し，移民・難民の統合の機会を拡げることにあった[95]。
- 1999 年，図書館局は「移民と難民：統合の重要な要素としての図書館（Indvandrere og flygtninge: Biblioteket et vigtigt led i integrationen）」という名称の会議を実施した[96]。

2.4.3. 地域の公共図書館における多言語コレクションの構築

既述のように，1969 年，当時デンマーク国立図書館の職員だったステンキレは，“外国人も他の住民と同様に様々な図書館サービスの選択肢を持つことができる”[97]と述べた。この考えは 1975 年刊行の『外国人労働者と公共図書館』や，1980 年刊行の『移民児童への図書館サービス』にも影響を与えたが，1990 年代には取り立てて強調されることはなくなった。そして，図書館を利用する移民グループの出身社会や規模に応じて，資料を揃える図書館は少なくなった。その一方で，大規模な公共図書館やデンマーク国立図書館のみが積極的にコレクションの改善について議論していた[98]。

これまで論じたように，コペンハーゲン図書館は早い時期から移民サービスに取り組んでおり，移民サービスに潤沢な予算が割り当てられていた。1990 年代後半のコペンハーゲン図書館全体[99]の移民サービスの予算は年間 500,000 デンマーク・クローネから 600,000 デンマーク・クローネであった[100]。なお，デンマーク全体をサービス対象とする移民図書館の当時の予算は年間 700,000 から 800,000 デンマーク・クローネであった[101]。1999 年刊行の『コペンハーゲンにおける難民・移民への図書館サービス（*Biblioteksbetjening af Flygtninge og Indvandrere i København*）』は，多言語コレクションを構築するための年

間 600,000 デンマーク・クローネの予算について検討しており，今後金額を 3 等分して使用するとした。最初の 200,000 デンマーク・クローネは，統合を促進するような資料の購入に当てるとし，例として簡単なデンマーク語で記述された図書，辞典，子どもの言語学習の刺激となるような資料を挙げた。次の 200,000 デンマーク・クローネは，多言語での雑誌や新聞のコレクション構築に，最後の 200,000 デンマーク・クローネはその他の新たな図書資料の購入に充てるとした。このようなコペンハーゲン図書館の潤沢な予算には，厳しい財政状況にあった移民図書館の補助という意味が含まれていた。そのためコペンハーゲン図書館は他のコムーネの公共図書館とは異なった状況にあった[102]。

報告書『統合の空間』は調査結果をもとに，多くのコムーネが低予算で多言語コレクションの構築に取り組んでいる点に言及している。また同報告書は，オーフース・コムーネ図書館の利用者の約 10%はデンマーク以外の文化的背景を持っているにもかかわらず，多言語資料は全体の 1%であるとしている[103]。全体では市民 1 人あたり約 4 冊の資料があることになるが，多言語資料のみに焦点を当てると，移民 5 人で 1 冊の資料を使用するという計算になる。これはオーフース・コムーネ図書館に限った話ではない。コペンハーゲン以外のデンマーク全土の公共図書館が同様の傾向にあった。『統合の空間』の利用者調査に携わっていたハーラル・V・ヒルムクローネ（Harald V. Hielmcrone）は以下のように述べている。

> 難民や移民が人口全体の 10%を占めているので，多言語資料は図書館資料全体の 10%を構成すれば良いという話ではない。図書館は新聞やその他の資料を購入している。文化様式や教育程度などの違いにより，ある利用者グループは資料を頻用し，別のあるグループはほとんど利用しない。しかしながら，それしても 1%と 10%は懸け離れている[104]。

またヒルムクローネは，利用者調査から得られた，移民はネイティブのデンマーク人より資料の利用が少ないという結果について触れ，彼らの出身社会の言語の資料が十分に揃っていないことに原因があるのではないかと述べている。

> デンマーク人がデンマーク語の資料を借りることとは異なり，多言語資料を言語別，さらに主題別に分けると，各主題には僅かな資料しか存在せず，利用者はすぐに読み終えてしまう。例えば，パキスタン出身でウルドゥー語の考古学の資料を求めている者がいれば，同じようにパキスタン出身のウルドゥー語話者であっても，美容に関する資料を求めている者もいる。皆，関心のある主題の本を読むのである[105]。

移民の背景を持つ利用者は，決して出身社会の言語の資料のみを求めているわけではない。彼らは関心のある主題の資料を求めているのである。しかしながら，例えば，ジェンダーに関するフィクション，ノンフィクションの資料を，あらゆるエスニック・グループに均

等に提供することは困難である。イスホイ（Ishøj）やヴォルスモーセ（Vollsmose）の公共図書館周辺には 50 以上の言語グループが滞在しており，全ての言語でデンマーク語のようなコレクションを構築することは物理的なスペースや予算の都合，不可能である。このように，『統合の空間』の刊行をきっかけに移民のニーズの詳細な把握の必要性が高まった。

また，2001 年刊行の『多様性の図書館：デンマークにおける多言語による図書館サービス』のなかでベアウアは以下のように述べている。

> 近年，資料費を増やしている公共図書館が多いが，その資料費が多言語コレクションに充てられることは少ない。多言語コレクションへの要望は増えている一方，多言語資料購入のための予算は低額のままである。私は，移民サービスへの予算を増加するべきであると考える[106]。

このように，統合における図書館の役割は徐々に明確化したが，それが多言語コレクションの発展に繋がることはなかった。これは，多言語資料の提供が，図書館における移民サービスの中心ではなくなったことを意味する。移民サービスは徐々にプロジェクトを中心に展開されるようになっていった。

2.4.4. 移民図書館の経営再建

1990 年代後半から移民図書館の資料費は徐々に削減された。予算の節減により，移民図書館は収集する資料の言語を 50 言語から 30 言語に削減した。これにより，児童書のコレクションを含めエストニア語，ラトビア語，リトアニア語，チェコ語，ハンガリー語等，東欧諸国の言語のコレクションは移民図書館から消失した[107]。

しかしながら，移民図書館は 1999 年に 12.5%であった蔵書貸出率[108]を 2000 年には 35%に伸ばしていた。とりわけ，利用者の多いペルシャ語，トルコ語，ウルドゥー語，ヴェトナム語のなどの資料を新規で約 200 点購入し，集中的に増加させた[109]。特定言語の蔵書数を増やしたとは言え，図書館が新規購入できる資料の数には限界があった。移民図書館の経営について，1996 年刊行の『PLS 報告書』は，共同購入の実施，予約に掛かる時間の短縮，ウェブサイトの構築などを提案している。また同報告書は，資料費の増額を勧めている[110]。

2001 年，ベアウアは自著『多様性の図書館：デンマークにおける多言語による図書館サービス』のなかで，他国の移民図書館と比較調査をすべきであるとし，例としてスウェーデンの「国際図書館」との比較を提案している[111]。一方で，ベアウアはスウェーデンの「国際図書館」は市民に広く開放しており，潤沢な予算を有しているため単純に比較することは容易ではないとも述べている。表 2.1 はスウェーデンの「国際図書館」とデンマークの移民図書館との蔵書や職員数を示したものである。

表 2.1.　スウェーデン「国際図書館」とデンマークの移民図書館との蔵書および職員数の比較

（2001 年）

国	図書館名	蔵書数	言語数	職員数（正規職員）
スウェーデン	国際図書館	220,000点	50言語	27名
デンマーク	移民図書館	130,000点	30言語	注）9名

注）加えて，移民図書館には時間制で勤務する言語コンサルタント（Sprogkonsulent）が勤務している。

出典：Berger, Ågot. *Mangfoldighedens Biblioteker：Flersproglig Biblioteksbetjening i Danmark*. Copenhagen, Bibliotekarforbundet, 2001, p.93. をもとに作成。

表 2.1 が示すように，2 館の蔵書数，収集対象としている言語数，正規職員数には差異があるため，移民図書館の経営再建を検討する際，スウェーデンの「国際図書館」の取り組みをそのまま採り入れることは難しい。しかしながら，ベアウアは「国際図書館」の経営手法の一部は参考になりうるとしている[112]。

2.4.5.　移民サービスのプロジェクト化

1990 年代後半から移民サービスへの関心は徐々に高まり，新たなアプローチの検討や，プロジェクトが始められた。各公共図書館では，以下のような取り組みが行われた。

・多言語ポータルサイトの構築

「FINFO」はデンマークに滞在するエスニック・マイノリティを対象に，多言語で提供されているインターネット上のポータルサイトである。移民図書館を中心に，セントラル・ライブラリーやコムーネの公共図書館，計68館が協力してサイトを運営している[113]。「FINFO」の目的は，民族的・言語的マイノリティに対し，デンマーク社会の権利，義務，機会に関する情報へのアクセスを保障することである。「FINFO」では移民関連の民間団体の情報や，各地方自治体が提供する情報へのリンクも貼られている。また，図書館関係者を対象とした情報も掲載されており，同サイト上で移民サービスの基礎的なガイドや，移民を対象にプログラムを実施する際に役立つリンク集を閲覧することができる。

・図書館局による統合における図書館の役割の提示

1999 年，図書館局は「図書館とエスニック・マイノリティ（“Bibliotek og Etniske Minoriteter”）」という小冊子を作成し，地域の公共図書館，および関係機関に配布した。

「図書館とエスニック・マイノリティ」は統合政策における図書館の役割や，移民サービスにおける IT 支援，イベント，コムーネ内での協力について論じている[114]。図書館局は 1999 年春に移民にとっての図書館の役割について議論する会合が開催された。

・「デンマーク視覚障害者図書館（Danmarks Blindebibliotek）」のサービス対象の拡大

「デンマーク視覚障害者図書館」は小冊子「見知らぬ土地（“Ukendt land”）」[115]を作成した。そして視覚障害を持つ移民や，読みに困難を抱える移民が増加していることに触れ，「デンマーク視覚障害者図書館」はサービスの範囲を広げ，移民の背景を持つ者も対象に含めることを明言した。

・コペンハーゲン図書館における移民利用者の調査と調査報告書の刊行

1999 年，コペンハーゲン図書館は移民の背景を持つ利用者の資料利用に関する調査を行い，調査結果を『コペンハーゲンにおける図書館の難民・移民に対する図書館サービス：誰がどこで何を借りており，それがどのような意味を持つのか？（*Biblioteksbetjening af Flygtninge- og Indvandrere i København: Hvem Låner Hvad - Hvor - og Hva' så?*）』[116]にまとめた。同報告書は，コペンハーゲンにおける利用者の分布と，図書館利用を明らかにすることを通して，コペンハーゲン図書館の予算配分の優先順位を再検討することを目的に作成された。

・移民を対象とした全国規模の利用者調査の実施

2001 年にはオーフース公共図書館，国立図書館，オーゼンセ・セントラル・ライブラリー（Odense Centralbibliotek），図書館局の協力により，移民の背景を持つ者の図書館利用に関する全国規模の調査が行われた。調査の結果は報告書として『統合の空間』にまとめられた。移民のみに焦点を当てた全国規模の利用者調査は，デンマークのみならず，スカンジナビア諸国の中でも初めての試みであった[117]。

・図書館における移民の雇用の促進

「デンマーク図書館学校」と「図書館員連盟」の協力で，「アミールは司書になるべき？（“Skal Amir være Bibliotekar?”）」[118]という小冊子が作成された。同冊子は図書館において，移民の背景を持つ多言語話者の雇用を促進する狙いで作成された。

・オーゼンセの公共図書館における移民の雇用プロジェクト

2009 年，オーゼンセ・セントラル・ライブラリーは「文化ファシリテーター（Kulturbrobyggerne）」というプロジェクトを実施した[119]。同館は，移民の背景を持ち無職の者を集め，1 年間，図書館での職務について教育するコースを開講した。そして，同館はコースを修了した参加者のうち 4 名を正規の職員として雇用することを決定した。この

プロジェクトは，移民の背景を持つ者の図書館への関わり方を変え，その後の図書館における移民サービスの可能性を拡げたとして評価された。

・文化省関係機関の取り組み

2001 年，「デンマーク図書館学校」の「文化政策研究センター（Center for kulturpolitiske studier）」は，報告書『デンマークにおける文化多様性への文化機関の貢献（Kulturinstitutionernes Bidrag til det Kulturelt Mangfoldige Danmark）』[120]を刊行した。同報告書は，文化省傘下の機関における移民関連分野の取り組みを取り上げており，その中で図書館における実践事例も扱っている。

・「デンマーク図書館学校」における研究

2001 年，「デンマーク図書館学校」の研究に対し，文化省は 319,200 デンマーク・クローネ[121]の研究費を助成した。研究題目は「知識社会における図書館のエスニック・マイノリティの統合への貢献：エスニック・サービスと目的志向型文化活動の間で（Undersøgelse af bibliotekernes bidrag til integrationen af etniske minoriteter i vidensamfondet: mellem etnisk biblioteksbetjening og målgruppeorienteret kulturarbejde）」であった。

上記の 1990 年代末から 2000 年代初頭の取り組みから，国レベル，地域レベルの両者において，移民サービスの拡充に焦点を当てる気運や関心が高まっていたことがわかる。特定の図書館のみでなく，デンマークの図書館制度全体で移民サービスを提供する体制を整備しようとしていたことが読み取れる。

2.5. 公共図書館における移民を対象としたプロジェクトの拡充期

2000 年代に入ると，特定分野を一定期間重点的に扱うプロジェクト単位での取り組みが増加した。プロジェクトが増加した背景には，「新公共経営（New Public Management，以下 NPM）」の影響がある。英国やニュージーランドにおいて 1980 年代半ば以降に形成された，民間企業等における経営手法を公共部門で活用することにより，経営の効率化や活性化を図るという NPM の考え方は，1990 年代後半以降，徐々にデンマークの公共部門でも取り入れられるようになった。デンマークにおける NPM は，市場メカニズムの幅広い活用（民営化や，エージェンシー化等）を重視する英国やニュージーランドの NPM とは異なり，公共部門自らが運営を担う形態を維持したまま行政組織の効率化やサービスの向上を重視している点に特徴がある。

デンマークの公共部門全体における NPM への関心の高まりは，図書館界にも影響を与えるようになった。その顕著な例が，図書館局（現在の城・文化局）のプロジェクトである。図書館局のプロジェクトには 2 種類がある。1 種は，政府の文化政策に基づき図書館局主導で展開していくナショナル・プロジェクトで，もう 1 種は図書館局による助成制度を活用

し，助成対象の公共図書館が展開するプロジェクトである。ナナ・カン=クレステンスン（Nanna Kann-Christensen）は，図書館局のプロジェクトが，1）競争原理の導入，2）業績・成果による評価，3）変化を恐れない経営体質の構築，を促しており，それはまさにNPMの影響であると指摘している[122]。

移民サービスもこの傾向と無関係ではない。特に2005年は移民サービスへの関心が高まった年で，移民を主たる対象に据えたナショナル・プロジェクトが図書館局主導で次々に始動した。そして，事業報告として，『ローカルの中のグローバル：統合と図書館（*Det globale i det locale: Integration og biblioteker*）』[123]，「図書館はデンマーク社会への玄関口（“Biblioteket som port til det danske samfund: Vi går i gang”）」[124]，「にぎやかな図書館（“Det urolige bibliotek”）」[125]がいずれも図書館局から2005年に刊行された。また，2005年には特定の対象に焦点を置いた事業も見られるようになった。同年に図書館局から刊行された報告書「女性および女子の統合に焦点をあてて（“Integration med kvinder og piger i fokus”）」[126]，「統合と言語的刺激に焦点をあてて：バイリンガル児童への図書館サービス（“Integration med sprogstimulering i focus: Bibliotekets tilbud til tosprogede småbørn”）」[127]はその顕著な例で，明確に女性やバイリンガル児童に対象を据えた事業が展開されるようになった。またインターネットが普及するのにともない，ウェブサイトを介した多言語での図書館サービスや，移民のITスキルの向上を支援するIT支援サービスも登場する。

2000年代からは，図書館界のみでなく他の機関と協力した移民サービスの取り組みも見られるようになった。特に，「難民・移民・統合省」とは密接な協力関係を構築し，共同で事業を運営するようになった。契機になったのは，2006年の文化省と「難民・移民・統合省」との間のパートナーシップ協定の締結である。パートナーシップ協定は2006年から2012年まで計6年間結ばれており，この間，移民の文化活動へのアクセスを支援するナショナル・プロジェクトには両省からの予算が用いられた[128]。

2006年，国立図書館は移民図書館を統合図書館センターと改称することを発表した[129]。そして統合図書館センターは国内外における当該分野に従事する職員間のネットワーク形成に寄与していく意向を示した[130]。

2.5.1. 移民の背景を持つ女性および女子の支援

2000年代になると，移民の背景を持つ女性や女子児童のデンマーク社会への適応に課題が見られるようになった。外部との接触を断ち，家庭内に引き籠る移民女性や，所定のデンマーク語コースを修了せず，語学学校への通学を辞める女性などの存在が指摘された。このような状況に鑑み，2005年，図書館局は『女性および女子の統合に焦点をあてて』を刊行した[131]。図書館は何らかの理由によりデンマークでの様々な活動への参加の機会が限られている女性および女子が自由に滞在できる場所であると同報告書は伝えた。加えて，図書館は教育に関するカウンセリング，就業支援，宿題支援，言語習得のための刺激を提供するこ

とを通して，移民の背景を持つ女性および女子のデンマークでの生活を支援していくことが可能であるとした。

報告書『女性および女子の統合に焦点をあてて』を受けて，翌 2006 年にはオーゼンセ・セントラル・ライブラリーが，EU の助成事業であった「アル・ドラブ（Al-Drub）」という移民女性の支援プロジェクトのメンバーと協力し，プロジェクト「みんなで新聞閲覧（Vi læser avisen-SAMMEN）」に着手した。「みんなで新聞閲覧」とは，参加者が公共図書館の一角で共に新聞を読み，掲載されている記事について語り合う活動である。移民の背景を持つ女性を主な対象に，15 週間実施された。実際に参加したのは 25 歳から 50 歳までの 19 名の移民女性で，全員が 10 年以上のデンマーク滞在歴を有していた。活動の目的は，参加する移民女性の情報リテラシーおよびアクティブ・シチズンシップの向上にあった[132]。参加者の女性は，週に 2 回から 3 回図書館に集い，まず各自で新聞に目を通した後，関心を持った記事について全体で議論した。また，活動中に扱った記事の内容を図書館の外に出て確認する活動も行われた。参加者は話題に関連する専門家へのインタビューや施設への視察を通して，新聞記事についてさらに理解を深めた[133]。

エルベスハウゼンは，「みんなで新聞閲覧」について参加者の多くは新聞を読むことが習慣化し，またデンマーク語の能力が伸び，デンマーク社会や文化に対する関心が参加前より大きくなったと述べた[134]。

既に取り上げた 2001 年刊行の『統合の空間』は，全国規模での移民の図書館利用を調査した結果として，図書館は移民の女子にとって家庭外で唯一滞在が正当化されている場所であるとした。また，とりわけムスリムの女子は両親によって外出が制限される場合があるが，図書館は公的な文化施設であるため，両親から外出の許諾が得やすく，訪問しやすいとしている[135]。

このような移民の背景を持つ女子が置かれている環境を踏まえ，2007 年に企画されたのが「女子クラブ（Pigeklub）」というプロジェクトである。「女子クラブ」に最初に取り組んだのはバラロプ図書館（Ballerup Biliotek）であった[136]。同館は 13 歳から 19 歳までの移民の背景を持つ 20 名の女子に放課後を過ごす環境を提供した。活動の目的は，移民の背景を持つ女子に，文化，年齢，社会的な背景等を越えた人的ネットワークや友情を築く機会を提供することにあった。基本的に「女子クラブ」の活動内容や活動時間はボランティアを中心に参加者が話し合って決められた。

「女子クラブ」のプロジェクト評価は，小冊子「エスニック・マイノリティの女子児童を対象とする女子クラブ（“Pigeklub for etniske minoritetspiger”）」の中に記されている[137]。同冊子は，「女子クラブ」のニーズは高いため，活動を拡大することを提案している。また，ボランティアは参加者間の衝突の調整等について学ぶ講習の機会を持つべきであるとしている。

2.5.2. バイリンガル児童への支援

2000 年代に入ると，デンマークの図書館は多言語資料の提供のみでなく，多様な文化的背景を持つ者の言語獲得のプロセスを支援することに乗り出した。2005 年，図書館局は報告書「統合と言語的刺激に焦点をあてて」[138]を刊行した。同報告書には，地域の各公共図書館がいかにして言語的な刺激を市民に提供しうるのかを示すアイディアが複数掲載されている。掲載されている事例は全て，公共図書館，学校図書館の発展を支援する目的の「図書館ハーモニカはバイリンガル児童へ向け奏でる（Biblioteksharmonikaen spiller for to-sprogede småbørn）」と言う名称の助成を受けた図書館の取り組みである[139] [140]。同報告書内で紹介されているのは，ノアボー図書館（Nordborg Bibliotek），オーゼンセ・セントラル・ライブラリー，ソルヴァング図書館（Solvang Bibliotek），セービュー図書館（Sæby Bibliotek），ゲレロプ図書館（Gellerup Bibliotek），ハスレ図書館（Hasle Bibliotek），ホーセンス図書館（Horsens Bibliotek），トアンヴィズ図書館（Tornved Bibliotek），ビェアウステズ図書館（Bjergsted Bibliotek），ヘアリウ図書館（Herlev-Bibliotekerne），クーイ図書館（Køgebibliotekerne），レズオウア図書館（Rødovre Kommunebiblioteker），ヴォーディングボー・コムーネ（Vordingborg Kommune）である。同報告書の末尾には，保護者の協力なしに多様な文化的背景を持つ児童の多言語習得を支援することは困難であると記されている。そして，幼少期の親との母語でのコミュニケーションの経験が子どものその後の言語獲得に影響を与えるとし，公共図書館におけるストーリーテリングや読み聞かせ，人形劇等により遊びを通して親子で母語を用いてコミュニケーションを取ることを推奨している[141]。また同時に，移民図書館が作成した小冊子「子どもと読書（“Læs med dit barn”）」を紹介している[142]。

「子どもと読書」は，多様な文化的背景を持つ児童と接する保護者，教員，司書を主な対象として作成された小冊子で，読み聞かせの利点と読み聞かせに適した本の紹介が掲載されている。2005 年，当時の移民図書館がアラビア語，ボスニア語，ペルシャ語，ソマリ語，トルコ語，ウルドゥー語，ヴェトナム語の 7 言語で作成を始めた「子どもと読書」は，その後，言語の変更や内容の更新を繰り返し，2016 年 2 月現在，統合図書館センターによりアラビア語，ボスニア語，英語，ペルシャ語，ポーランド語，ロシア語，ソマリ語，トルコ語，ヴェトナム語の 9 言語で提供されている。「子どもと読書」は単に同じ内容を多言語に翻訳したものではない。移民図書館の職員が言語毎に読み聞かせに適した図書を選択し，冊子上で紹介している。同冊子は，文化局主導のナショナル・プロジェクトである「ブックスタート（Bogstart）」[143]の中で対象家庭に無料で配布されている。

デンマークにおいて本格的に「ブックスタート」が始動したのは 2008 年であった。デンマークでは，「ブックスタート」は主に移民家庭や貧困層の家庭に焦点を当てている。対象家庭へのブックスタートパックの無料配布，各種ワークショップの実施，人形劇やお話し会の開催を通して，子どもの読書推進と豊かな言語能力の発達を支援している。デンマークにおける「ブックスタート」のロゴである，象の親子のイラストが描かれたブックスタートパ

ックの中には専門家によって選ばれた配布年齢に適した絵本と，保護者に子どもの読書の重要性を知らせる CD や資料が入っている。ブックスタートパックは 6 ヵ月, 1 歳, 1 歳半, 3 歳の 4 回，地域にある公共図書館を通して配布される。

「ブックスタート」は当初，2008 年から 2011 年までのナショナル・プロジェクトとして始まった。4 年間の予算は合計 16,000,000 デンマーク・クローネ[144]であった。この予算は主に，ブックスタートパックを構成する資料の作成や図書の購入，「ブックスタート」に携わる職員の育成にあてられた。2008 年 9 月, 図書館・メディア局（Styrelesen for Bibliotek og Medier，2016 年に城・文化局へ改組）は「ブックスタート: ブックスタート・プログラムに参加する図書館のためのガイド（“Bogstart: En vejledning til biblioteker der deltager i Bogstartprogrammet”）」[145]を作成し対象となる公共図書館に配布している。

オーゼンセのヴォルスモーセ図書館（Vollsmose Bibliotek）は 2009 年から継続的に「ブックスタート」に取り組んでいる。 ヴォルスモーセはデンマーク有数の移民が集住する地域である。「ブックスタート」の活動の中で移民家庭を訪問する際，訪問家庭の警戒心を軽減させる工夫が必要となり，ヴォルスモーセ図書館は，アラブ圏から移住したイスラーム教徒の女性を「ブックスタート担当員（Bogstarts medarbejder）」として雇用し始めた。これにより，デンマーク語に不慣れなアラビア語話者や，イスラーム教徒の女性との接触が容易になったと，ヴォルスモーセ図書館に司書として勤務するヴァイスビェアは述べている[146]。

2011 年で終了予定であった「ブックスタート」は 2012 年まで延長された。そして，2013 年から「ブックスタート」の第 2 フェーズが始動した。第 2 フェーズは 2013 年から 2016 年までの予定で，デンマーク全土の 20 地域が対象である[147]。

2.5.3. ウェブサービス

2000 年代に入ると，ウェブサイト上で提供される図書館サービスが増加した。移民サービスも例外ではなく，移民図書館の主導で，多様な文化的背景をもつ者を主たる対象にしたウェブサービスが運営された。

「FINFO」は既述の通り，エスニック・マイノリティを対象に多言語で運営されていたインターネット上のポータルサイトで，元々1996 年にオーフース公共図書館が着手したプロジェクトであった。その後，移民図書館が「FINFO」のコンセプトに賛同し，1999 年からオーフース公共図書館と移民図書館とが共同で運営することとなった。2001 年からは移民図書館が主導で，ナショナル・プロジェクトとして「FINFO」を発展させた。「FINFO」では，国レベルの情報は移民図書館（2006 年に統合図書館センターへ改称）が，地域レベルの情報は事業に協力していた各コムーネが収集および提供を担っていた。このように，国と地域の異なるレベルにある複数の組織が協力して 1 つのポータルサイトを構築するということは，デンマークにおいて革新的な試みであった[148]。

「FINFO」は，デンマークへ移住したばかりの者から長年デンマークに滞在している者まで，滞在歴を問わずあらゆる移民に対して情報提供を行った。各種行政機関が提供する就

労，教育，保健，福祉，文化・娯楽に関する情報にリンクを貼り，多言語でリンクへのアクセスが可能なよう整備した。

2000 年時点では，デンマーク語，英語，ボスニア・セルビア・クロアチア語[149]，ソマリ語，トルコ語，ウルドゥー語，アラビア語，ペルシャ語，アルバニア語，スペイン語，タミル語，ヴェトナム語，クルド語の 13 言語で運営されていた「FINFO」であったが，デンマーク語，英語，ボスニア・セルビア・クロアチア語，ソマリ語，トルコ語，ウルドゥー語，アラビア語，ペルシャ語，ロシア語，アルバニア語，ヴェトナム語の 11 言語になり，2010 年にはデンマーク語，英語，ボスニア・セルビア・クロアチア語，ソマリ語，トルコ語，ウルドゥー語，アラビア語，ペルシャ語，ロシア語になった。そして，2011 年 12 月を以て「FINFO」の更新作業は終了した。オーフース公共図書館の事業として始動した「FINFO」は徐々に運営者や運営形態，言語等を変えながら合計で約 16 年間継続的に運営された。

「FINFO」から派生してできたポータルサイトに「女性版 FINFO（Kvinde FINFO）」がある。「女性版 FINFO」は，2003 年に移民の背景を持つ若い女性を主な対象として構築された[150]。移民図書館（現在の統合図書館センター）が中心となり，約 30 の組織と協力して結婚，妊娠・出産，育児，保健，教育，就労，文化活動に関する情報を多言語で提供した。資金面では一部，難民・移民・統合省が支援をしている。

「女性版 FINFO」は，各分野の関係情報へのリンクを紹介するほか，Q&A コーナーを設けている。一般化することが難しい個別の問題について，移民女性は Q&A コーナーで各分野の専門家に相談することができる。例えば，健康に関する相談であれば有資格の保健師が，デンマーク語学習に関する相談であれば語学学校に勤務するデンマーク語教師が相談に応じている。過去の質疑応答の履歴は「女性版 FINFO」上に掲示されているため，サイト訪問者は過去の履歴から自身の抱える問題と類似した案件を見付け，問題解決に結びつけることが可能である。なお匿名での質問が原則で，質問者個人が特定できないよう配慮されている。

2003 年に創設された「女性版 FINFO」は，2008 年に「FINFO」に統合され，移民女性を対象とした情報ポータルサイトは消滅した。なお，「女性版 FINFO」の成果と評価は 2005 年に移民図書館が作成した『女性版 FINFO：報告と評価（“Kvinde.finfo.dk: Afrapportering og evaluering”）』にまとめられている[151]。

2011 年，「FINFO」に代わり，統合図書館センターは「ビブズーム・ワールド（Bibzoom World）」という名の新たな多言語電子サービスに着手した[152]。「ビブズーム・ワールド」は，世界初の国際電子図書館で，音楽，映像，図書のデータをトルコ語，ペルシャ語，アラビア語，ボスニア・クロアチア・セルビア語，ヴェトナム語，ヒンドゥー語，パンジャビ語，ウルドゥー語，タミル語，クルド語等，10 以上の言語で提供している。

デンマーク国内に居住し，社会保障番号を保有していれば誰でも無料で「ビブズーム・ワールド」を利用できる。1 度の貸出で利用できるのは 24 時間以内であるため，引き続き同一タイトルの利用を希望する場合には 24 時間毎にストリーミングする必要がある[153]。

「ビブズーム・ワールド」は，多言語で電子資料を提供するのみでなく，電子資料に関する記事を掲載している。記事を執筆するのはボランティアである。ボランティアは，「ビブズーム・ワールド」が提供している資料を視聴し，その感想を記事に記している。また，記事にはアーティストによるコンサートや講演会等のイベントや，受賞作品に関する情報も含まれている。

「ビブズーム・ワールド」にはいくつか課題が存在する。世界には電子的な資料の貸出を承認していない地域が存在する。例えば，トルコは映画の電子データの貸出を認めていないため，「ビブズーム・ワールド」はトルコ語の映画の貸出を一切行うことができない。このように，地域によって電子化の許諾状況が異なるため，「ビブズーム・ワールド」で提供する資料はおのずから言語やメディアの種類によって偏りがある。また，現状ではラテン文字でのみ電子資料の検索が可能であるため，ラテン文字での表記が難しいタイトルや作者の資料は検索にしばしば困難が生じる[154]。

しかしながら，「ビブズーム・ワールド」が開設されたことにより，利用者が統合図書館センターの所蔵資料の一部に地域の公共図書館を介すことなく，直接アクセスできるようになったことは意義深い。統合図書館センターは「図書館の図書館」であり施設を一般に公開していないため，これまで利用者は最寄りの公共図書館を介して統合図書館センターの資料を手にしていた。「ビブズーム・ワールド」の誕生により，利用者はいつでも，どこでも多言語資料に直接アクセスできるようになった。

2.5.4. IT 支援

デンマーク政府は，公共部門の効率性と市民の利便性の向上を目指し，公共サービスへのIT の導入を推進している。2007 年には市民ポータル「Borger.dk」の運用が開始された。「Borger.dk」とは，市民と公的機関をワンストップでつなぐオンライン行政サービスである[155]。ここには，年金や税，児童手当，教育サービス，高齢者福祉サービスなど，あらゆる公的なサービスに関する最新の情報が掲載されている。さらに，「Borger.dk」上では800種類を超える行政手続を行うことが可能である。デンマーク政府は，『電子政府戦略2011-2015（“eGOVERNMENT strategy 2011-2015”）』のなかで2015 年までに，市民の行政手続の80%を電子化する方針を打ち出した[156]。同時に，行政手続きのための窓口や郵便による各種申請は段階的に廃止されることになっている。法的拘束力を持って公共サービスの電子化を段階的に推し進めるにあたり，懸念されるのはデジタルデバイドの問題である。特に，高齢者と移民の背景を持つ市民には特別な対応が必要である。

公共図書館は市民が電子的な公共サービスの利用方法を学ぶ場として機能している。

2007年，「図書館・メディア局」は「Borger.dk」の開設にあたり「IT 電気通信局（IT- og Telestyrelsen，現在はビジネス局）」と協定を結び，デジタルメディアの利用を支援する図書館プログラムを強化することを決定した[157]。これを受け，地域の各公共図書館は，電子的な公共サービスの利用方法を始め，メールの送受信，インターネット

検索，インターネット・ショッピング，文書作成等に関するIT講習を積極的に開講するようになった[158]。

中には，移民を主な対象に据えたIT講習も存在する。コペンハーゲンのフーソム図書館は，言語別にトルコ語やシリア方言のアラビア語でIT講習を開講している。移民の背景を持つ者の中には，IT講習の受講を希望していても，言語の障壁があり，デンマーク語で開講されるIT講習に参加できない者も存在する。そこで，フーソム図書館は近隣住民の中に話者の多い，アラビア語とトルコ語を選択し，デンマーク語で講習内容を理解することが難しい移民を対象にIT講習を開講した。

一方，講習形式ではなく，「ITカフェ（IT-café）」と呼ばれる形態で運営されているIT支援も存在する。「IT カフェ」とは，決められた日時に図書館の一角で，IT に関するあらゆる相談を受け付けるサービスである。相談に応じるのは図書館の職員やボランティアのスタッフで，利用者は予約なしに自由に相談をすることが可能である。

図書館における「IT カフェ」の設営を支援するプロジェクトに，「ネットフッド（//Nethood）」がある[159]。2011 年，文化局は移民統合を目指すプロジェクトの 1 つとして，「ネットフッド」に着手した。「ネットフッド」は，文化局が単独で取り組んだ事業ではなく，「難民・移民・統合省」，「まち・住居・地方省（Ministeriet for By, Bolig og Landdistrikter）」，「マイクロソフト社（Microsoft）」，「ANT 財団（ANT-fonden）」，「BRF クレジット社（BRFkredit）」，「新デンマーク人協会（Foreningen Nydansker）」の官民複数の組織の協力によって実施された[160]。同プロジェクトは，主に IT スキルを獲得する機会に恵まれていない住民を対象としており，特に移民の背景を持つ者に焦点を当てている。「ネットフッド」のプロジェクトの中で開設された「IT カフェ」は，「ネットフッド・カフェ（Nethood-café）」と呼ばれており，2015 年 8 月 27 日現在，デンマーク全土で計 24 館の公共図書館に「ネットフッド・カフェ」が存在する[161]。24 館における「ネットフッド・カフェ」の取り組みの様子は，「城・文化局」の「プロジェクト・バンク（Projektbanken）」から確認することが可能である[162]。「ネットフッド」では，基本的にボランティアが中心となり，「ネットフッド・カフェ」を運営する。文化局は 2012 年，「ネットフッド・カフェ」の運営方法について伝達する目的で，「リーダー，ボランティア，コーディネーターのためのマニュアル（“Manual til tovholdere, frivillige og koordinatorer”）」を作成した。全国 24 館の「ネットフッド・カフェ」は同マニュアルに沿って運営されている。

「ネットフッド」以外にも，「IT カフェ」には様々な種類がある。コペンハーゲンのソルヴァング図書館が取り組むプログラム「ハイマナ : 若者のための IT カフェ（Haymana: En IT-cafe for unge 以下，ハイマナ）」もその一つである[163]。「ハイマナ」は 2014 年 9 月に始動した。当初，「カフェ・セルフヘルプ : 若者による若者のための IT カフェ（Café Selvhjælp: Ung til ung IT-café）」という名称であったが，2015 年からトルコ語で「将来」を意味する「ハイマナ」に改称された。「ハイマナ」は，毎週月曜日 16 時から 19 時までの 3 時間，ソ

ルヴァング図書館の一角で開かれている。相談を受けるのは，ソルヴァング図書館の周辺に暮らす 21 歳から 25 歳までの若者 4 名である。4 名中 3 名は移民 2 世で，自身はデンマークで生まれ育ったが，親はデンマークへの移住経験を持つ。「ハイマナ」では，特に進学や就職に関する情報収集の仕方，各種申請書や履歴書の作成方法を重点的に取り扱っている。

ソルヴァング図書館の周辺地域では，移民の背景を持つ者が多数生活しており，特に若年層の高い失業率が問題になっている。「ハイマナ」は周辺地域に暮らす若者の進路決定を支援する目的で考案された。「ハイマナ」の特徴の 1 つとして，相談員自身が求職中の身であることが挙げられる。週に 1 回ではあるものの図書館で働く経験を通して，相談員はプログラムの運営や時間の管理の仕方を学んでいる。このように，「ハイマナ」は若者による若者の IT 支援であり，同時に移民の背景を持つ若者の就業支援にもなっている。

2.5.5. 潜在的利用者へのアプローチ

これまで図書館の移民サービスは，図書館を利用する移民を主たる対象として展開してきた。2010 年代に入ると，統合図書館センターは図書館を利用した経験のない，もしくは図書館の利用頻度の少ない移民に対してアプローチする方途を検討するようになった。

2013 年，統合図書館センターは，文化局から助成を受け，プロジェクト「図書館でデンマーク語を読もう（Læs Dansk på Bibliotekerne）」に着手した[164]。同プロジェクトは，語学学校でデンマーク語を学習中の移民を対象に，統合図書館センターと語学学校との協働で実施された。

なお，ここで示す語学学校とは，各自治体に存在する公営の語学学校を意味する。デンマークの全てのコムーネは，移民に対しデンマーク語学習の機会を提供することを法により義務付けられている。社会保障番号を保有していれば，移民は誰でも無償で週約 18 コマのデンマーク語の授業を受けることができる。教科書についても無償で配布される。ただし，約 3 年間の年限が設けられており，年限内に所定の学習を修了せねばならない。修了すると，就職活動時にデンマーク語能力を証明できるほか，永住権を申請するのに必須の言語に関する要件を満たすことが可能となる。この他に私営の語学学校も存在するが，授業料は有料で，デンマーク語運用能力の公式な証明にはならない[165]。

プロジェクトの対象地域は，コペンハーゲンのフーソム（Husum），ランデメスタヴァイ（Rentemestervej），ソンビュー（Sundby），ソルヴァング（Solvang），ナアアブロー，オーゼンセのヴォルスモーセ，エスビェア（Esbjerg），レングステズ（Ringsted）の 8 地域であった。プロジェクトの目的は，対象となる移民の読書能力の向上と，彼らに図書館は日常的に利用可能な学習空間であると知らせることにあった。加えて，図書館と語学学校の間に持続的で安定的な関係を構築することも目的の 1 つであった[166]。多くの図書館は以前から地域の語学学校と相互関係を持っていたが，インフォーマルな関係であった。そこで，統合図書館センターは，プロジェクト「図書館でデンマーク語を読もう」を通して，公共図書館と語学学校との間に安定的な関係を構築し，語学学校に通う移民がデンマーク語の学習プ

ロセスにおいて継続的に図書館を利用できる体制を整備しようと試みたのである。

プロジェクトではまず，語学学校にて語学教師が生徒に対し，プロジェクト専用に作成された教材を用いてデンマーク語で図書館の利用方法について指導した。その後，語学学校の生徒は図書館を数回訪問し，司書とともに資料の貸出や返却，予約手続き，予約資料の受け取り，レファレンスデスクでの質問等の実践練習を行った。また，語学学校の生徒は，語学教師から指示を受けた筆記，読解，音読，会話等の課題を公共図書館の所蔵資料を利用して取り組んだ。毎回図書館訪問後に，語学学校の生徒は司書にメールを送信することになっており，デンマーク語でメール文書を作成する経験も積んだ。図書館で一通りの講習を終えると，図書館は参加者である語学学校の生徒に修了証を手渡し，講習は修了となった。

プロジェクト「図書館でデンマーク語を読もう」で使用する教材は，当初既製のものを調達する予定であった。しかし，教材が参加者のデンマーク語での読み書きや会話のレベルと適応するように，新たに教材を開発するべきであるという意見が浮上し，議論の末 3 種類の教材を開発することとなった。3 種類の教材とは，語学教師が語学学校で図書館について授業を行う際に使用するテキスト，語学学校の生徒が図書館を訪問した際に用いるテキスト，司書が語学学校の生徒を迎え講習を行う際に使用するテキストを意味する。開発されたテキストは 2013 年のプロジェクト始動時から使用され，プロジェクト完了時に修正および改良が加えられた。作成された教材は「城・文化局」の「プロジェクト・バンク」から入手可能である[167]。

公共図書館と語学学校との関係は「ネットワーク・ミーティング（Netværksmøde）」の場においても強化された。「ネットワーク・ミーティング」には，デンマーク全土の図書館および語学学校の関係者が集まり，各地域における進捗や課題を共有した。ミーティングはプロジェクトの開始時，中盤，終了時の計 3 度開催され，延べ 78 名が参加した。第 1 回の「ネットワーク・ミーティング」は 2013 年 9 月にオーゼンセ・セントラル・ライブラリーにて，第 2 回は 2014 年 1 月にデンマーク国立図書館にて，第 3 回は 2014 年 4 月にソンビュー図書館にて開催された。

プロジェクト「図書館でデンマーク語を読もう」は 2014 年 5 月を以って終了した。プロジェクトの成果は統合図書館センターによって，2014 年 8 月，「図書館でデンマーク語を読もうプロジェクト報告書（“Slutrapport fra projekt Læs dansk på bibliotekerne”）」にまとめられている[168]。

2014 年 4 月，プロジェクト「図書館でデンマーク語を読もう」に代わり，統合図書館センターが新たに着手したのは，プロジェクト「新規利用者？“図書館”の発想転換（Nye Brugere? En 180° Nytænkning af ‘Biblioteket’）」である[169]。このプロジェクトは，多様な文化的背景を持つ新たな図書館利用者を獲得する方法を開発することを目的としている。同プロジェクトが対象としたのは，移民が多く居住する，ヴォルスモーセ，ハザスリウ（Haderslev），スナボー（Sønderborg），ヘアニング，スィルゲボー（Silkeborg），ソンビュー，ソルヴァングに立地する公共図書館，計 7 館である。統合図書館センターは 7 館に

予算を措置し，多様な文化的背景を持つ市民を図書館に引き寄せる方法を考案するよう指示した。

例えばヴォルスモーセ図書館は，託児所に勤務する約 30 名の保育士に対し，図書館資料を活用した託児所での教育プログラムの案を紹介した[170]。スナボー図書館は，デンマークに到着したばかりで難民収容所に滞在中の難民に対し，多様な図書館サービスを紹介した[171]。また，広くスナボーの市民全体に，難民のデンマーク到着までの経緯や出身社会で置かれていた状況について紹介する展示会をスナボー図書館内で企画した。展示会の準備を通して，スナボー図書館は，難民収容所の難民や職員を始め，複数の関係団体との間に協力関係を構築した。

各図書館の進捗状況や課題は，2 回の総会と，5 回のプロジェクト・グループ会議の場で共有された。また，7 館の取り組みの詳細と成果は，統合図書館センターによって 2015 年にまとめられた「新規利用者？“図書館”の発想転換報告書（“Slutrapport fra projekt Nye brugere? En 180° nytænkning af ‘biblioteket’”）」の中で示されている[172]。

2.5.6. 統合の後退と図書館における移民サービス

2011 年 9 月に行われたデンマークの総選挙では，ヘレ・トーニング＝スミト（Helle Thorning-Schmidt）率いるデンマーク社会民主党（Socialdemokraterne）が得票を伸ばし，政権交代が起きた。政権交代の影響は，その後の移民政策にも顕著に表れた。2001 年から 10 年間政権を握っていたデンマーク自由党（Venstre）は，「難民・移民・統合省」を中心として移民の統合を進めていたが，トーニング＝スミト政権は「難民・移民・統合省」を解体し，同省の業務を社会・内務省（Social- og Indenrigsministeriet），労働省（Beskæftigelsesministeriet），法務省（Justitsministeriet）の 3 省に振り分けることを決めた[173]。

「難民・移民・統合省」の解体により，それまで文化省と「難民・移民・統合省」との間で締結していた連携協定は終了した[174]。「難民・移民・統合省」の解体以後，統合という言葉が政策の中で使用される機会は激減し，文化局の図書館政策に関する 10 の重点分野からも統合の文字は消えた。

しかしながら，図書館における移民サービスの全てが消え去ったわけではない。文化局の図書館政策に関する 10 の重点分野には，新たに「シチズンシップ（Medborgerskab）」が加わり，その中で「ネットフッド」や女性を対象にした時事問題を解読するクラブ等が運営されている。また，「ブックスタート」についても文化局の主導で継続的に取り組まれている。このように，これまで統合をキーワードに取り組まれていた事業は，2011 年以降，統合より広い概念の中で，移民に強く焦点を絞り込むことなく実施されている。

一方，統合図書館センターは政権交代の影響を受けることなく 2011 年以降も継続的に運営されており，地域の公共図書館への多言語資料の貸出や，専門的助言の提供，移民サービス拡充のためのプロジェクトの実施等に従事している。なお，2015 年 6 月にも政権交代が

起き，ラース・L・ラスムスン（Lars L. Rasmussen）が首相の職に就いているが，この政権交代による公共図書館の移民サービスへの影響は 2016 年現在確認できていない。

2.6. 第 2 章まとめ

本章の目的は，デンマークにおいて移民の数が急増した 1960 年代後半以降に焦点をあて，公共図書館における移民サービスに関わる図書館行政の流れや仕組みの歴史的・制度的な展開を明らかにして行くことであった。

これまで本章で論じてきたように，デンマークの公共図書館における移民サービスはゲントフテ・セントラル・ライブラリーの一司書であったステンキレの問題提起から始動した。ステンキレは「在デンマーク外国人労働者及びその家族への図書館サービス委員会」の設立，『ゲントフテにおけるゲストワーカー・コレクションに関する報告（1970-1972 年）および将来のコレクションの構想』や『外国人労働者と公共図書館』の刊行を通して，繰り返しゲストワーカーへ多言語資料を提供することの意義と，国レベルの専門機関を中心とした多言語資料の管理の必要性を主張した。そして，ステンキレを中心とした司書らの主張は 1983 年の公共図書館法改正，および 1984 年の移民図書館の設立という形で結実する。この点において，デンマークの公共図書館における移民サービスは地域レベルから国レベルへとボトムアップ型で発展したと言える。

特徴的であるのは，基本的にボトムアップ型で発展しながらも，地域レベルと国レベルの協力体制が整備される以前に，スカンジナビア諸国間の協力関係が構築された点である。ほぼ同時期に公共図書館における移民サービスの必要性を認識し始めたデンマーク，スウェーデン，ノルウェーの 3 カ国は 1979 年の「公共図書館と移民のための図書」という会合を契機として協力体制を整え，スカンジナビア諸国共通の多言語資料に関するハンドブックの作成や，図書館間相互貸借のネットワークを構築した。デンマークにおける国レベルでの移民サービスに関する方針が定まる以前の段階に，国境を越えたスカンジナビア諸国間で多言語資料管理に関する指針が作成されたのは特異である。

1984 年以降，デンマークにおける公共図書館の移民サービスは，移民図書館というナショナルセンターを中心に展開されるようになった。移民図書館は「図書館の図書館」として多言語資料の提供の支援に寄与した。また，1990 年代には地域の各図書館でも多言語資料の拡充が取り組まれるようになった。しかしながら 1990 年代の後半に入ると，移民の背景を持つ利用者の多言語資料に対するニーズが高まる一方で，地域の公共図書館の多言語資料購入のための予算は低額のままであり，また移民図書館の予算も削減の傾向に転じた。

ここまで多言語資料の収集と提供を中心に進めてきたデンマークの公共図書館における移民サービスは，初めて限界に直面する。つまり，デンマークの図書館界は，予算や物理的なスペースの都合により，デンマーク語と同様のコレクションを多言語で構築することは不可能であることを確認したのである。その後，公共図書館の移民サービスは，特定分野を一定期間重点的に扱うプロジェクト単位での取り組みが増加する。これは，移民サービスが

多言語資料重視から，プログラムの運営を支援するプロジェクト重視へと変化したことを意味する。なお，この変化にはNPMも影響しており，図書館局（現在の城・文化局）はプロジェクトの実施を通じて，競争原理の導入，業績・成果による評価，変化を恐れない経営体質の構築，を促していた。

2000年以降，プロジェクト単位での取り組みは更に増加した。地域の公共図書館は，新たに移民を主たる対象としてプログラムを企画する際，外部機関から予算を獲得する必要がある。中でも「城・文化局」の助成事業は，地域の公共図書館にとって最も大きな外部資金源である。2006年から2012年までの6年間，文化省は「難民・移民・統合省」とパートナーシップ協定を締結していたため，この間，移民を対象に企画された図書館のプロジェクトには両省からの予算が付いた。しかしながら，2011年の政権交代を機に，文化省と「難民・移民・統合省」とのパートナーシップ協定は終了し，移民を対象にしたプロジェクトは激減した。これは，プロジェクト単位での移民サービスが，政府機関に財源を求めているため，時の政権の移民政策に大きく左右されることを意味している。

注・引用文献

[1] Berger, Ågot. *Mangfoldighedens Biblioteker：Flersproglig Biblioteksbetjening i Danmark*. Copenhagen, Bibliotekarforbundet, 2001, p .66.
[2] 前掲 1)
[3] Dyrbye, Martin et al. *Det Stærke Folkebibliotek：100 år med Danmarks Biblioteksforening*. Copenhagen, Danmarks Biblioteksforening and Danmarks Biblioteksskole, 2005, p.187-188.
[4] Lov om Biblioteksvirksomhed Chapter1, § 1. https://www.retsinformation.dk/forms/r0710.aspx?id=145152, (accessed 2016-05-01).
[5] "Betænkning om Revision af Biblioteksloven." 1971, p. 24. http://www.statensnet.dk/betaenkninger/0601-0800/0607-1971/0607-1971_pdf/searchable_607-1971.pdf, (accessed 2016-05-01).
[6] 前掲 1), 142p.
[7] 前掲 1), p .66-98.
[8] 統合法（1999年制定・2013年改正）は統合の定義を，ニューカマーがデンマーク社会の基本的な規範や価値観に基づき，自らのスキルとリソースを活用して他の市民と対等な立場で社会に参画していくこと，と示している。またコペンハーゲン・コムーネの統合政策は，統合とは，異なる背景を持つ人々が共にコミュニティの未来を構築するための双方向的なプロセスであるとしている。The Employment and Integration Administration, The City of Copenhagen. "Copenhagen's Integration Policy 2011-2014." 2011, 17p. http://www.coe.int/t/dg4/cultureheritage/culture/cities/InclusionPolicyCopenhagen2011.pdf, (accessed 2015-03-18).
[9] Berger, Ågot. "Recent Trends in Library Services for Ethnic Minorities: the Danish Experience,"*Library Management*. Vol.23, No.1/2, 2002, p. 80-81.
[10]Berger, Ågot. "Biblioteksbetjening af Indvandrere i Danmark de Sidste 30år,"*Mangfoldighedens Biblioteker*. Copenhagen, Bibliotekarforbundet, 2001, p.76.
[11] Stenkilde, Helge. Biblioteksbetjening af Gæstearbejdere. *Bogens Verden*. 1970, Vol.

52, p. 343-344.
[12] Schwartz, Jonathan and Suzanne Schytt. “Indvadrerbørn, Danske Børn og Børnekultur,” *Bixen*. No.2, 1981, p.57-65.
[13] 2016 年 1 月 9 日のレート（1 デンマーククローネ＝17.19 円）で換算すると，66,000 デンマーククローネは 1,134,916 円に相当する。
[14] 前掲 1), p .68.
[15] Kragh-Schwars, Benedikte. “Indvandrerbiblioteket er Blevet 25 år,” *Bogens Verden*. No.1, 1997, p.38.
[16] 前掲 1), p .68-69.
[17] Gentofte Bibliotekerne. *Beretning om Gæstearbejdersamlingen i Gentofte 1970-72 Suppleret med Betragtninger over Samlingens Fremtid*. Gentofte Kommunebibliotek, 1973, 9p.
[18] 前掲 15), p. 37.
[19] 前掲 17), p.5.
[20] 前掲 17), p.8.
[21] 前掲 17), p.7.
[22] 前掲 17), p.5.
[23] Bibliotekstilsynet. *De Udenlandske Arbejdere og Folkebibliotekerne: Betænkning om Biblioteksbetjening af Udenlandske Arbejdere og Deres Herboende Familier*. Copenhagen, Biblioteksscentralen, 1975, p.6.
[24] 前掲 23), 80p.
[25] 前掲 23), p. 8.
[26] “Befolkningsprognoser 1977-2000,” Danmarks Statistik, 1978, p. 40. http://www.dst.dk/Site/Dst/Udgivelser/GetPubFile.aspx?id=19107&sid=befprog1977, (accessed 2016-01-09).
[27] 前掲 1), p. 69.
[28] 前掲 15), p. 38.
[29] 前掲 15), p. 39.
[30] 2016 年 1 月 9 日のレート（1 デンマーククローネ＝17.19 円）で換算すると，165,000 デンマーククローネは 2,837,291 円に相当する。
[31] 週 20 時間勤務の契約であったが，コンサルタント業務を行った際は，件数に応じて追加の給与が支給されていた。
[32] 2016 年 1 月 9 日のレート（1 デンマーククローネ＝17.19 円）で換算すると，2,100 デンマーククローネは 36,110 円に相当する。
[33] 2016 年 1 月 9 日のレート（1 デンマーククローネ＝17.19 円）で換算すると，198,000 デンマーククローネは 3,404,750 円に相当する。
[34] Kakhodaee, Massoud. *Dobbelt Fremmedgjorte Mennesker, Deres Danmark, Deres Bibliotek: Biblioteksbetjening af Indvandrere og Flygtninge med Hensyn til Deres Sociale og Kulturelle Pladsering i Det Danske Samfund.* Copenhagen, Danmark Biblioteksskole, 1996, p. 35.
[35] 前掲 1), p. 70.
[36] Arbejdsgruppen vedr. “Biblioteksbetjening af Indvandrerbørn,” *Biblioteksbetjening af Indvandrerbørn : Rapport fra Arbejdsgruppen vedr. biblioteksbetjening af indvandrerbørn*. Copenhagen, Bibliotekstilsynet, 1980, 43p.
[37] 前掲 12), p. 64.
[38] 前掲 1), p. 72.

[39] 前掲 12), p. 67-68.
[40] Hvidovre Kommunes Biblioteker Avedøre Filialbibliotek. *Biblioteksbetjening af Indvandrere på Avedøre Bibliotek : Rapport 1982*. Hvidovre, Hvidovre Kommunes Biblioteker, 1982, 87p.
[41] Kragh-Schwarz, Benedikte. "Historisk Rids over Udviklingen af Det Nordiske Samarbejde i Biblioteksbetjeningen af Indvandrere." Indvandrerbiblioteket, https://web.archive.org/web/20041024112414/http://www.indvandrerbiblioteket.dk/historie.htm, (accessed 2016-01-09).
[42] 同上
[43] Berggren, Olaf. *KITAB: Kulturell Identitet Tryggad av Biblioteken : Nordisk Bibliotekhåndbok om Innvandrere og Minoriteter*. Kirjastopalvelu OY, 1983, 200p.
[44] Folkebibliotekernes Indvandrerbibliotek. "KITAB: Kulturell Identitet Tryggad av Biblioteken : Nordisk Bibliotekhåndbok om Innvandrere og Minoriteter Tillegg 1985," Folkebibliotekernes Indvandrerbibliotek, 1985, 44p.
[45] Folkebibliotekernes Indvandrerbibliotek. "KITAB: Kulturell Identitet Tryggad av Biblioteken : Nordisk Bibliotekhåndbok om Innvandrere og Minoriteter Tillegg 1987," Folkebibliotekernes Indvandrerbibliotek, 1987, 22p.
[46] Folkebibliotekernes Indvandrerbibliotek. "KITAB: Kulturell Identitet Tryggad av Biblioteken : Nordisk Bibliotekhåndbok om Innvandrere og Minoriteter Tillegg 1989," Folkebibliotekernes Indvandrerbibliotek, 1989, 19p.
[47] Nordens Folkliga Akademi. "Är det Flerspråkliga Biblioteket en för Stor Utmaning för ADB?," Nordens Folkliga Akademi, 1987, 49p.
[48] Lov om Folkebiblioteker, No.242. 1983.
[49] Kulturministeriet. "Kulturministeriets bekendtgørelse," No.384, 1985.
[50] 2016 年 1 月 9 日のレート（1 デンマーククローネ＝17.19 円）で換算すると，2,000,000 デンマーククローネは 34,380,000 円に相当する。
[51] 前掲 1), p. 76.
[52] 保存図書館とは，図書館情報学用語辞典第 4 版では「資料の保存機能に重点をおいた図書館。図書館蔵書のうち利用頻度が低い資料を経済的に保管することを主な目的として設置される。個々の図書館が独自に設置する場合と，複数の図書館が共同で設置する場合がある」と定義されている。デンマークでは 1968 年，国立図書館の傘下に「公共図書館保存図書館」が設立されており，上記の定義の「複数の図書館が共同で設置する場合」にあたる。なお，同館は 1992 年に保存図書館（Depotbiblioteket）と改称されている。
1)日本図書館情報学会用語辞典編集委員会編「保存図書館」『図書館情報学用語辞典』丸善, 2013, p. 229-230.
2)Udgiverselskabet Informationsordbogen. "Depotbibliotek," Informationsordbogen: Ordbog for informationshåndtering, bog og bibliotek. http://informationsordbogen.dk/concept.php?cid=421, (accessed 2016-01-24).
[53] "Vi vil ikke acceptere, at indvandrernes bibliotek skal være et lager." Politiken, 29 March 1984.
[54] Hole, Arni. "Afbestil den flyttebil!." *Samspil*, No. 5, 1984.p.22-23.
[55] Abdullahi, Ismail. *Indvandreren og Biblioteket i Danmark*. Copenhagen, Indvandrernes fællesråd. 1981, 25p.
[56] 前掲 1), p. 77.
[57] 前掲 1), p. 78.
[58] 前掲 1), p. 78.

[59] 前掲 1), p. 78-79.
[60] Schade, Hanne F. “Ja til farverige biblioteker,” *Biblioteksspressen*. No. 11, 2000, p.374.
[61] 前掲 1), p. 80.
[62] 前掲 36), p. 17.
[63] Storch, Vibeke. “Vesterbro Bibliotek kan ikke alene klare indvandrerbørnenes fritidsproblemer.” *B70: Bibliotekarforbundets Blad*, No.15, 1992, p.432-434.
[64] Halse, Aasted J. “Børnebibliotekerne på børnenes præmisser,” *B70: Bibliotekarforbundets Blad*, No. 15, 1992, p.434-435.
[65] 前掲 63)
[66] Kragh-Schwarz, Benedikte. “AV-materialerne vinder terræn i bibliotekernes indvandrerbetjening,” B70, No. 18, 1992, p. p.571-572.
[67] 前掲 1), p.81.
[68] 『ブロギーゼ・ブラゼ』は，図書館員連盟「移民・難民グループ」が 1987 年から 2010 年まで発行していた定期刊行物である。
[69] Pedersen, Niels E. “Debat,” *Bibliotek 70*, No.11, 1993, p.326.
[70] Pedersen, Randi K. “Informations- og kulturtilbud til indvandrere et spørgsmål om demokrati,” *Bibliotek 70*, No.17, 1993. p. 546-548.
[71] 前掲 1), p.82.
[72] Statsbiblioteket et al. Frirum til Integration: En Undersøgelse af de Etniske Minoriteters Brug af Bibliotekerne: Hovedrapport. Aarhus, Århus Kommunes Biblioteker, 2001, p. 55.
[73] *Nordiskt Bibliotekssamarbete om Urval och Inkop av Media for Invandrare*. Lund, Bibliotekstjänst, 1985, 20p.
[74] 『図書館情報学用語辞典第 4 版』によれば，典拠コントロールとは“書誌的記録（書誌レコード）の標目となる個人名，団体名，統一タイトル，シリーズ名，件名などの典拠形を定め，それらが一貫して使用されるよう維持管理すること”と定義されている。「典拠コントロール」『図書館情報学用語辞典第 4 版』日本図書館情報学会用語辞典編集委員会編，丸善出版, 2013, p.114.
[75] 前掲 41)
[76] 前掲 1), p.83.
[77] Andreasen, Wenche C. et al. *Biblioteksbetjening uden Grænser: En Analyse af Indvandrer- og Flygtningebetjeningen i det Danske Folkebiblioteksvæsen*, Copenhagen, Danmarks Biblioteksskole, 1994, 139p.
[78] 前掲 77), p.126.
[79] 前掲 77), p.132.
[80] 前掲 1), p.85.
[81] 2 点の報告書とは，1) PLS consult. *Folkebibliotekernes Indvandrerbibliotek: Behov, Aktiviteter og Organisatorisk Ramme*. Copenhagen, PLS Consult, 1996, 54p. および，2) Hielmcrone, Harald V. *Elmenter til en Strategi- og Handlingsplan for Indvandrerbiblioteket.* Århus, Statsbiblioteket, 1998, 35p. である。
[82] 前掲 1), p.86.
[83] 前掲 81)-1), p.34-37.
[84] 前掲 81)-1), p.35.
[85] 1 度目の掲載記事は，1) Berger, Ågot. “Folkebibliotekernes Indvandrerbibliotek under lup,” *Biblioteksspressen.* No. 2, 1997, p. 36-38. で，2 度目の掲載記事は，2) Andersen, Inge E., et al. “Et Lukket Mekka for Indvandrere: Købt Eller Solgt?

Netværksbiblioteket Bedre Indkøbsmuligheder!," *Bibliotekspressen.* No. 4, 1997, p. 106-111. である。
[86] 前掲 85)-2), p. 107.
[87] 前掲 85)-2), p. 109.
[88] 前掲 85)-2), p. 110.
[89] Forskningsministeriet. *Info-samfundet år 2000*. Copenhagen, Forskningsministeriet, 1994, 461p.
[90] Udvalget om Bibliotekerne i Informationssamfundet. *Betænkning om bibliotekerne i informationssamfundet*. Copenhagen, Kulturministeriet, 1997, 172p.
[91] Hielmcrone, Harald V. "Elementer til en strategi- og handlingsplan for Indvandrerbiblioteket," Copenhagen, s.n., 1998, p. 21-22.
[92] 同上
[93] Ministeriet for Flygtninge, Indvandrere og Integration. "Integrationsloven," http://www.statensnet.dk/pligtarkiv/fremvis.pl?vaerkid=18656&reprid=0&filid=7&iarkiv=1, (accessed 2016-06-09).
[94] Århus Kommunes Biblioteker and Statsbiblioteket. "Evaluering af FINFO: informationsnetværk for etniske minoriteter i Danmark," *Biblioteksstyrelsen*, 2002, 30p.
[95] 前掲 72)
[96] Lylloff, Elisabeth. "Indvandrere og flygtninge: biblioteket er et vigtigt led i integrationsprocessen," *Danmarks Biblioteker*. 1998, p. 18.
[97] 前掲 11)
[98] 前掲 1), p. 88-89.
[99] 当時，コペンハーゲン図書館全体で 20 館が存在した。
[100] 2016 年 1 月 9 日のレート（1 デンマーク・クローネ＝17.19 円）で換算すると，500,000 デンマーク・クローネは 8,595,000 円にあたり，600,000 デンマーク・クローネは 10,314,000 円に相当する。
[101] 2016 年 1 月 9 日のレート（1 デンマーク・クローネ＝17.19 円）で換算すると，700,000 デンマーク・クローネは 12,033,000 円にあたり，800,000 デンマーク・クローネは 13,752,000 円に相当する。
[102] 前掲 1), p. 90-91.
[103] 前掲 72), p. 4-5.
[104] Nielsen, Møller J. "De flittigste biblioteksbrugere," *Samspil,* No. 4, 2001, p. 8-9.
[105] 同上
[106] 前掲 1), p.96.
[107] 前掲 1), p.92.
[108] 蔵書貸出率とは，同一図書についての重複した貸出を除いた貸出回数を，配架冊数で除したものである。
[109] 前掲 1), p.92.
[110] 前掲 81)-1), p.35.
[111] 前掲 1), p.92.
[112] 前掲 1), p.92.
[113] Århus Kommunes Biblioteker. *Rapport om Biblioteksstyrelsens støtte til FINFO 2000: et projekt om information for flygtninge & indvandrere*. Copenhagen, Århus Kommunes Biblioteker, 1998, p. 12.
[114] Biblioteksstyrelsen. "Biblioteker og etniske minoriteter." 1999, 36p.

http://www.bs.dk/publikationer/rv/4/pdf/rv4.pdf, (accessed 2016-01-09).
[115] Danmarks Blindebibliotek. *Ukendt Land: Om Blinde og Svagsynede Indvandrere og Flygtninges Informationsbehov*. Copenhagen, Danmarks Blindebibliotek, 1999, 94p.
[116] Dreyer, Nanna et al. "Biblioteksbetjening af Flygtninge og Indvandrere i København: Hvem Låner Hvad, Hvor - og Hva' Så? : Revision af Nuværende Praksis." Københavns Kommunes Biblioteker, 2000, 28p.
[117] 前掲 72)
[118] Bibliotekarforbundets faggruppe for Indvandrer- og Flygtningearbejde, Danmarks Biblioteksskole. "Skal Amir være Bibliotekar?" Danmarks Biblioteksforening. http://forbindelser.dk/wp-content/uploads/2007/01/Viden_i_dialog_web.pdf, (accessed 2016-02-05).
[119] Elbeshausen, Hans. "Viden i dialog: empowerment i bibliotekets åbne og lukkede læringsrum," Danmarks Biblioteksskole, 2006, p. 11. http://forbindelser.dk/wp-content/uploads/2015/01/Rapport_VideniDialog.pdf, （accessed 2016-06-19）.
[120] Rasmussen, Casper H. and Charlotte L. Høirup. *Kulturinstitutionernes Bidrag til det Kulturelt Mangfoldige Danmark: En Undersøgelse af Kunst- og Kulturformidlingsinstitutioners Tilbud til og Inddragelse af de Etniske Minoriteter*. Copenhagen, Det Interkulturelle Netværk, 2000, 103p.
[121] 2016 年 1 月 9 日のレート（1 デンマーク・クローネ＝17.19 円）で換算すると，319,200 デンマーク・クローネは 5,487,048 円に相当する。
[122] Kann-Christensen, Nanna. "National Strategies for Public Library Development: Comparing Danish and Swedish models for project funding," *Nordisk Kulturpolitisk Tidskrift*. No.1/2, Vol. 14, 2011, p. 33-50.
[123] Madsen, Monica C. *Det globale i det locale: Integration og biblioteker*, Copenhagen, Biblioteksstyrelsen, 2005, 62p. https://www.statsbiblioteket.dk/forbiblioteker/sbci/om-sbci/projekter/konsulenter/global.pdf, (accessed 2016-02-05).
[124] Fangel, Gitte and Inger Frydendahl. "Biblioteket som port til det danske samfund: Vi går i gang." Copenhagen, Biblioteksstyrelsen, 2005, 34p. https://www.statsbiblioteket.dk/forbiblioteker/sbci/om-sbci/projekter/konsulenter/rv9.pdf, (accessed 2016-02-05).
[125] Poulsen, Ann K. and Berit S. Jacobsen. "Det urolige bibliotek." Copenhagen, Biblioteksstyrelsen, 2005, 29p. https://www.statsbiblioteket.dk/forbiblioteker/sbci/om-sbci/projekter/konsulenter/rv10.pdf, (accessed 2016-02-05).
[126] Weisbjerg, Bente L. and Inger Frydendahl. "Integration med Kvinder og Piger i Focus." Copenhagen, Biblioteksstyrelsen, 2005, 42p. https://www.statsbiblioteket.dk/forbiblioteker/sbci/om-sbci/projekter/konsulenter/rv12.pdf, (accessed 2016-02-05).
[127] Ellert, Marianne and Ann K. Poulsen. "Integration med sprogstimulering i focus: Bibliotekets tilbud til tosprogede småbørn." Copenhagen, Biblioteksstyrelsen, 2005, 30p. https://www.statsbiblioteket.dk/forbiblioteker/sbci/om-sbci/projekter/konsulenter/rv11.pdf, (accessed 2016-02-05).
[128] Kulturministeriet and Ministeriet for Flygtninge Indvandrere og Integration. "Samarbejdsaftale mellem Kulturministeriet og Integrationsministeriet," 2010, p.2.
[129] Statsbibliotek. "Om SBCI," http://www.statsbiblioteket.dk/forbiblioteker/sbci/om-sbci/organisationens-historie, (accessed 2015-03-18).
[130] Statsbibliotek. "Indvandrerbiblioteket Bliver til BiblioteksCenter for Integration," http://www.statsbiblioteket.dk/forbiblioteker/sbci/nyheder/nyhedsarkiv-

sbci/sbcinyhedsarkiv2006/indvandrerbiblioteket-bliver-til-bibliotekscenter-for-integration, (accessed 2015-03-18).
[131] 前掲 123)
[132] Madsen, Monica C. “A Course in Newspaper Reading: A Key to Better Integration,” *Scandinavian Public Library Quarterly*. 2005, vol.38, no.4, p.4-6.
[133] Elbeshausen, Hans. *Vi læser avisen-SAMMEN*. Copenhagen, Danmarks Biblioteksskole, 2005, p. 18.
https://web.archive.org/web/*/http://www.odensebib.dk/upload/avisprojekt_evaluering_endeligt.doc, (accessed 2016-2-13).
[134] Elbeshausen, Hans. *Vi læser avisen-SAMMEN*. Copenhagen, Danmarks Biblioteksskole, 2005, p. 20.
https://web.archive.org/web/*/http://www.odensebib.dk/upload/avisprojekt_evaluering_endeligt.doc, (accessed 2016-2-13).
[135] 前掲 72), p. 4.
[136] 前掲 126), p. 11.
[137] Ballerup Bibliotekerne. “Pigeklub for etniske minoritetspiger,” 2007, 8p.
[138] 前掲 127)
[139] 前掲 127), p.7.
[140] 移民児童に対する図書館サービスは，公共図書館のみでなく，移民が多く居住する地域の学校図書館においても取り組まれている。例えば，移民の背景を持つ者が在籍児童全体の約 3 分の 1 を占める，グラズサクセ（Gladsaxe）のヴェアブロー小中学校（Værebro skole）では，放課後，学校図書館において移民児童の学習支援を行っている。しかしながら，デンマークにおいて学校図書館は「子ども・教育・平等省（Ministeriet for Børn, Undervisning og Ligestilling）」の管轄で，公共図書館行政を所管する文化省とは異なる省庁下で動いている。本研究は公共図書館における移民サービスに焦点を当てており，加えて上記のように，デンマークにおいて学校図書館は公共図書館とは別系統で運営されているため，ここでは公共図書館に限定して移民児童に対する図書館サービスを論じる。
[141] 前掲 127), p. 26-27.
[142] BiblioteksCenter for Integration. “Læs med dit barn”
https://www.statsbiblioteket.dk/sbci/Laan/les-med-dit-barn, (accessed 2016-06-09).
[143] ブックスタートとは，生後半年から 3 歳までの乳幼児を対象に，公共図書館を介して，絵本やアドバイス集，絵本のリスト，地域公共サービス情報などの入ったブックスタートパックを配布し，絵本を介して乳幼児と家族のコミュニケーションを豊かにし，子どもの言語能力を育むことを目指した活動である。デンマークの図書館界では，2009 年に図書館・メディア局によって始められた。
[144] 2016 年 1 月 9 日のレート（1 デンマーク・クローネ＝17.19 円）で換算すると，16,000,000 デンマーク・クローネは 275,040,000 円に相当する。
[145] Styrelsen for Bibliotek og Medier “Bogstart - en vejledning til biblioteker der deltager i Bogstartprogrammet,” 2008, 13p.
http://www.bs.dk/publikationer/vejledninger/25/index.htm, (accessed 2016-06-19).
[146] 2014 年 2 月のベンテ・ヴァイスビェアとのインタビューより。
[147] “De deltagende kommuner i Bogstart 2013-2016.” Kulturstyrelsen, 2013, 1p.
http://slks.dk/fileadmin/user_upload/dokumenter/bibliotek/indsatsomraader/boern/Kidsmart/De_deltagende_kommuner_i_Bogstart_2013-16.pdf, (accessed 2016-02-05).
[148] 前掲 94)
[149] 報告書で用いられている表記に従い，ボスニア語・クロアチア語・セルビア語をまとめて記している。

前掲 94), p.7.
[150] BiblioteksCenter for Integration. “Kvinde.finfo.dk: Afrapportering og evaluering,” 2005, p. 2. https://www.statsbiblioteket.dk/sbci/videncenter/projekter/kvinde-finfo.dk/Kvinde.finfo.dk_afrapportering_og_evaluering.pdf, (access 2016-01-09).
[151] 前掲 150), 81p.
[152] Statsbiblioteket. “BibZoom.dk World anno 2011.” https://www.statsbiblioteket.dk/forbiblioteker/nyheder/bibzoom-world-anno-2011, (accessed 2016-01-09).
[153] BiblioteksCenter for Integration. “BiBZOOM world Strategi,” Statsbiblioteket, 2014, p. 3-4.
[154] BiblioteksCenter for Integration. “Bibzoom.dk world: The worlds first digital library for immigrants and refugees,” Statsbiblioteket, 2011, p. 8-9.
[155] 石黒暢「デンマークの電子政府戦略：行政の効率化と市民サービス向上の試み（北欧諸国における情報の収集・管理・公開に関する多角的研究）」『北欧研究』No.20, 2012, p. 119-134.
[156] The Danish Agency for Digitisation. “The Digital Path to Future Welfare: the eGovernment Strategy 2011-2015 eGOVERNMENT strategy 2011-2015.” 2011, 87p. http://www.digst.dk/~/media/Files/Digitaliseringsstrategi/Engelsk_strategi_tilgaengelig.pdf, (accessed 2016-01-09).
[157] Sønderstrup-Andersen, Eva. “Bibliotekerne samarbejder med borger.dk,” Biblioteksstyrelsen, 2008. http://www.bs.dk/publikationer/nfn/2008/3/html/chapter07.htm, (accessed 2016-01-09).
[158] 同上
[159] Kulturministeriet et al. “//Nethood åbne it-caféer: Et tilbud til borgere i udsatte boligområder,” 2012, p. 5. http://slks.dk/fileadmin/user_upload/dokumenter/bibliotek/indsatsomraader/Integration/Nethood/Nethoodfolder_2012.pdf, (accessed 2016-01-09).
[160] 前掲 159), 8p.
[161] 24 館のリストは以下から入手可能である.。 http://slks.dk/fileadmin/user_upload/dokumenter/bibliotek/indsatsomraader/Integration/Nethood/Udsatte_boligomraader_januar_2011.doc
[162] Slots- og Kulturstyrelsen. “Nethood.” http://projekter.kulturstyrelsen.dk/Nethood, (access 2016-01-09).
[163] Slots- og Kulturstyrelsen. “IT-cafe for, med og af unge: brugerinddragelse.” http://projekter.kulturstyrelsen.dk/projekt/it-cafe-med-og-af-unge-brugerinddragelse, (access 2016-01-09).
[164] Slots- og Kulturstyrelsen. “Læs Dansk på Bibliotekerne.” http://projekter.kulturstyrelsen.dk/projekt/laes-dansk-pa-bibliotekerne, (access 2016-01-09).
[165] Ministry of Foreign Affairs of Denmark. “Starting Danish lessons.” http://denmark.dk/en/meet-the-danes/language/starting-danish-lessons/, (accessed 2016-10-18).
[166] Biblioteksscenter for integration. “Slutrapport fra projekt Læs dansk på bibliotekerne.” Copenhagen, Statsbibliotek, 2014, p. 3-4. http://projekter.kulturstyrelsen.dk/sites/default/files/documents/Slutrapport%20fra%20projekt%20L%C3%A6s%20dansk%20p%C3%A5%20bibliotekerne.pdf, (accessed 2016-01-09).

[167] Nielsen, Vibeke and Tina M. Kristensen. “Læs dansk på bibliotekerne Undervisningsmateriale om biblioteket ved introduktion til kursister fra sprogskolen.” Statsbibliotek, 2014, 26p. http://projekter.kulturstyrelsen.dk/sites/default/files/documents/Undervisningsmaterialee%20til%20biblioteksintroduktion%20for%20kursister%20fra%20sprogskolen.pdf, (accessed 2016-02-05).
[168] 前掲 167), 8p.
[169] Slots- og Kulturstyrelsen. “Nye brugere en 180° nytaenking af bibliotek.” http://projekter.kulturstyrelsen.dk/projekt/nye-brugere-en-180-nytaenking-af-biblioteket, (access 2016-01-09).
[170] Bibliotekscenter for integration. “Slutrapport fra projekt Nye brugere?: En 180° nytænkning af biblioteket.” Statsbibliotek, 2015, p.4-5. http://projekter.kulturstyrelsen.dk/sites/default/files/documents/Slutrapport%20fra%20projektNye%20brugere%20final.pdf, (accessed 2016-02-05).
[171] 前掲 170), p. 4-5.
[172] 前掲 170), 11p.
[173] Ministeriet for Flygtninge, Indvandrere og Integration. “Integrationsministeriet er nedlagt og ressortområderne overgået til andre ministerier,” https://www.nyidanmark.dk/da-dk/Nyheder/Nyheder/udlaendingeservice/2011/Oktober/ministeriet_nedlagt.htm, (accessed 2016-01-09).
[174] 文化省と「難民・移民・統合省」との協力協定は，以下に記す 2010～2012 年までを期間とする契約を最後に更新されていない。
Kulturministeriet and Integrationsministeriet. “Samarbejdsaftale mellem Kulturministeriet og Integrationsministeriet 2010-2012.” 2010, 6p. https://www.nyidanmark.dk/NR/rdonlyres/F3D6220D-DAEE-43B4-B4E0-5B9A32711542/0/samarbejdsaftale_mellem_kulturministeriet_og_integrationsministeriet.pdf, (accessed 2016-01-09).

第3章　デンマークの公共図書館における移民サービスの提供体制

3.1. 本章の目的

グローバリゼーションの進展にともない，公共図書館も多様な文化的背景を持つ市民に対するサービスを拡充していかなくてはならない。IFLA／UNESCO の「多文化図書館宣言」は，“多様な文化的背景を持つ市民に対する図書館サービスの運営について“図書館は，単独で活動を展開するのではなく，地域レベル，国レベル，国際レベルで，関連する利用者集団および専門家との協力を促進するべきである”[1]と記しており，異なるレベルのアクターの協力の重要性を説いている[2]。

第 2 章で論じてきたように，デンマークは異なるレベルにあるアクターが協力して公共図書館の移民サービスに取り組んでいる国である。1975 年に「在デンマーク外国人労働者及びその家族に対する図書館サービス委員会」が刊行した報告書『外国人労働者と公共図書館』[3]には，公共図書館の移民サービスに特化したナショナルセンターの必要性が論じられていた。また同報告書には，地域レベルにおいて公共図書館が外国人労働者のための相談所や，労働委員会と協力することが重要であると記されている。その後，1983 年の公共図書館法の改正にともない，新たに国立施設として移民図書館が設置されると[4]，移民に対する公共図書館サービスに取り組む地域レベル，国レベルの協力体制は公式に整備された。その後，移民図書館は 1999 年に国立図書館の一部門となった。しかし，この組織改編によって移民図書館の任務が大きく変化することはなく，移民図書館は継続してデンマーク全土の図書館や関係施設に多言語資料を提供した[5]。2006 年，国立図書館は移民図書館を統合図書館センターに改称することを発表した[6]。そして改称後も基本的に移民図書館と同様のサービスを提供するとした[7]。その一方で，統合図書館センターは新たに，国内や海外の図書館と協力して多言語資料を収集すること，当該分野に従事する職員間のネットワークを構築・管理すること，ナショナル・プロジェクトを調整すること，利用者が求めるサービスの提供を目指しマーケティングを行うこと，多様な文化的背景を持つ人の教育とコミュニケーションの改善に寄与することが求められた[8]。

1999 年に刊行された「図書館とエスニック・マイノリティ」は，地域レベルの中でも複数のアクターの協力によって移民に対する公共図書館サービスは拡充されるべきだとしている[9]。そして，移民の教育・文化活動への参加を支援するための部局横断型のワーキング・グループを自治体に構築することを一案としてあげ，図書館関係者の他，文化系部局の職員，教育分野のコンサルタント，多言語教育の専門家，移民問題のコンサルタント等の協力関係を強化する必要性を説いている[10]。

デンマークにおける移民図書館と地域の図書館との協力体制についてはベアウアの研究の中で取り上げられている[11]。ベアウアは，移民図書館の設立当初，地域の図書館は多言語資料をほぼ移民図書館のコレクションに頼り切っていたと描写している[12]。しかし多言語コレクションは徐々に国レベル，地域レベルの双方の取り組みによって構築されるようになっていった[13]。

2002 年 8 月から 2005 年 8 月までの 3 年間，国立図書館と文化局により「多文化社会におけるエスニック・マイノリティを対象とした図書館サービスのための地域ネットワークのコンサルタント（Konsulenter i Regionale Netværk for Biblioteksbetjening af Etniske Minoriteter i et Kulturelt Mangfoldigt Samfund）」というプロジェクトが行われた。プロジェクトの目的は，移民の統合の場としての図書館の機能を，地域レベルと国レベルのアクターの密接な協力により強化することにあった[14]。

同プロジェクトが終了した 2005 年以降，地域レベルと国レベルのアクターが協力することは前提とみなされ，プロジェクトの報告書等の中であえて言及されることはなくなった。しかしながら，2005 年以降，移民に対する公共図書館サービスを提供するための公共セクターにおける地域レベル，国レベルのアクターの協力形態は多様化しており，その状況を詳細に描く必要があるだろう。

そこで本章は 2005 年以降の動向に焦点を当て，移民に対する公共図書館サービスに関与するアクターがそれぞれどのような機能を持って活動しており，各アクター間でどのような協力体制を取っているのかという点を明らかにしていく[15]。

3.2. 移民サービスに関与する組織の枠組みと本調査の対象

本調査では，デンマークの移民に対する公共図書館サービスに関与するアクターの機能と関係を地域レベルと国レベルから明らかにする。なお自治体の事例としては，コペンハーゲン・コムーネを取り上げる[16]。コペンハーゲン・コムーネを取り上げる理由には，まずデンマークで最も多くの移民を抱える自治体であることが挙げられる。2014 年の統計を見ると，コペンハーゲン・コムーネに滞在する移民やその子孫の数は約 130,000 人で，コペンハーゲン・コムーネ全体の人口に占める割合は 22.7%であった[17]。これは，デンマーク第二の都市オーフース[18]・コムーネほかと比較して群を抜いて大きな数字である。また，コペンハーゲン図書館が常にナショナル・プロジェクトの対象に含まれていることも理由に挙げられる。文化省文化局（Kulturstyrelsen）および統合図書館センターでは，それぞれ移民に対する公共図書館サービスの拡充を目指し，デンマーク全土の公共図書館を対象にナショナル・プロジェクトを展開している。コペンハーゲン図書館は常にナショナル・プロジェクトの対象に選定されているため，ナショナル・プロジェクトにおける地域レベルと国レベルのアクターの協力関係を見るのに適していると言える。

以下に移民に対する公共図書館サービスに関与する組織の枠組みを示す。

コペンハーゲン・コムーネは，人口約 570,000 人，面積約 86.2 ㎢の自治体である[19]。同自治体において，公共図書館に関する事業は文化・レジャー部（Kultur- og Fritidsforvaltningen）内の図書館技術課（Biblioteksfaglig Afdeling）で扱われており，図書館技術課がコペンハーゲン図書館全 21 館の活動を統括している[20]。なお，2013 年の統計では全 21 館の所蔵冊数（図書のみ）の合計は 1,194,179 冊で，職員数は 319.2 人（常勤職員に換算），年間貸出冊数（図書のみ）は 2,650,535 冊である[21]。コペンハーゲン図書館に

は 2007 年から 2011 年までの間，チーム・インテグレーション（Team Integration）と呼ばれるワーキング・グループが存在し，移民に対する公共図書館サービスの拡充を目指していた。

また移民の文化活動への参与を促進する目的で設置されたのはコペンハーゲン・コムーネ文化・レジャー部の統合・レジャー課（Integration og Fritid）で，コムーネ内の図書館や博物館等の文化施設と協力しながら活動した[22]。

インターナショナル・ハウス・コペンハーゲン（International House Copenhagen，以下 IHC）もコペンハーゲン・コムーネ文化・レジャー部の所管である。IHC は移民が各種行政サービスを 1 箇所で受けられるワンストップサービス機関として機能し，書類手続きのみでなく移民の図書館等のコムーネ内文化施設へのアクセスも支援している[23]。

一方，国レベルの図書館行政は主に文化省にある 2 つの組織によって担われている。2 つの組織とは，文化局と国立図書館である。

文化局は 1) 専門的立場から政府に助言するほか，政府の文化政策を計画・実行すること，2) 政府の文化分野の予算を助成金として関係機関に届けること，3) 文化活動の発展に寄与することを目指し，情報の収集と普及に資すること，の 3 点を使命に掲げる政府系機関である[24]。文化局が管轄する図書館は各自治体に存在する公共図書館，各自治体の図書館運営をサポートする役割を持つセントラル・ライブラリー，および研究図書館である[25]。

国立図書館は納本図書館機能のほか，国立オーフース大学（Aarhus Universitet）の大学図書館機能，資料の電子化先導機能，公共図書館のナショナルセンター機能を有している。そして公共図書館のナショナルセンター機能の中で，移民に対する公共図書館サービスを支援する機関として，統合図書館センターが組織されている[26]。

以上に示したアクターの組織体制は図 3.1 の通りである。

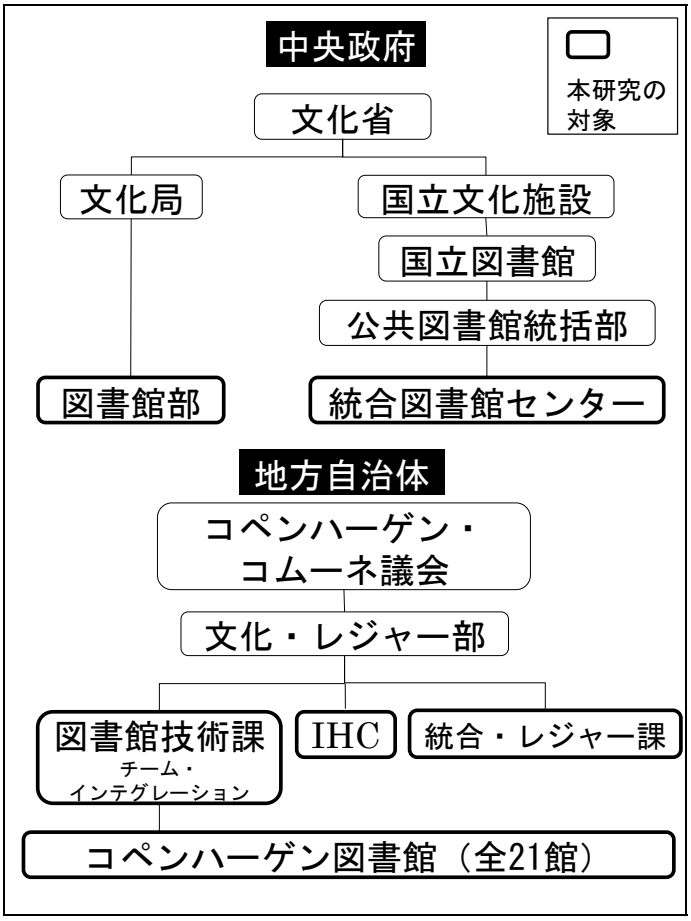

図 3.1.　デンマークの移民に対する公共図書館サービスに関わる国・地域レベルのアクター

本章では，地域レベルにある，コペンハーゲン図書館チーム・インテグレーション，コペンハーゲン・コムーネ統合・レジャー課，IHC の 3 つのアクターを，国レベルでは文化省文化局，統合図書館センターの 2 つのアクターを研究対象とし，文化行政担当職員や図書館員を対象にインタビュー調査を実施した。調査対象者の基礎情報は表 3.1 の通りである。

表 3.1.　第 3 章インタビューの日時・場所・対象者の属性

表記名 （フルネーム）	所属（職名）	性別	年代	インタビュー日時	場所	インタビュー言語
ホルムッジ (Kambiz Hormoozi)	元コペンハーゲン図書館 現オーゼンセ・セントラル・ライブラリー （プロジェクトマネージャー）	男性	50代	2014年3月10日	オーゼンセ・セントラル・ライブラリー内の一室	英語
アンドレースン (Helle Andresen)	コペンハーゲン図書館ソルヴァン図書館 （図書館員）	女性	50代	2014年3月7日	ソルヴァン図書館内の一室	英語
イェンスン (Stine Jensen)	コペンハーゲン・コムーネ　統合レジャー課 （統合コンサルタント）	女性	30代	2014年3月12日	文化・レジャー部オフィス	英語
スコウフォーオズ (Rikke Skovfoged)	コペンハーゲン・コムーネ　統合レジャー課 （統合コンサルタント）	女性	30代	2014年3月12日	文化・レジャー部オフィス	英語
ハンスン (Lise Hansen)	インターナショナル・ハウス・コペンハーゲン （コンサルタント）	女性	40代	2014年2月28日	インターナショナル・ハウス・コペンハーゲン内の一室	英語
ポウルスン (Ann Poulsen)	文化局 （図書館支援担当）	女性	50代	2014年3月6日	文化局オフィス	英語
ニールスン (Vibeke Nielsen)	統合図書館センター （職員）	女性	50代	2014年2月26日	統合図書館センター内の一室	英語

地域レベルに関しては調査者のうち，表 3.1.に示したハンスン，アンドレースン，ホルムッジ[27]，イェンセン，スコウフォーオズの 5 名，国レベルはニールスンとポウルスンの 2 名に対してインタビューを行っている。なお，インタビューの質問項目の主な構成は表 3.2 の示す通りである。

表 3.2.　第 3 章インタビューにおける質問の主な構成

1）移民サービスに着手し始めた経緯と事業概要
・いつ図書館の移民サービスに着手し始めたのか
・どのような経緯で公共図書館の移民サービスに着手することになったのか
・どのような事業を行っているか
・それぞれの事業の進捗はどのようか

2）組織的枠組みと予算体系
・どこの部署に属しているのか
・指示体系はどうなっているか
・予算体系はどうなっているか

3）他機関との関係
・現在，協力関係にある組織はいくつあるか
・どのように協力機関を見付けたのか
・どのように複数の異なる組織とコンタクトを取っているのか。定例のミーティング等はあるか
・特に公共図書館との関係はどうなっているのか
・複数の機関と協働していく難しさは何か

4)今後の展開
・今後どのように展開していくか

インタビューでは基本的に表 3.2 に沿いながらも，その場の状況に応じて適宜ワーディン

グや質問順序を変更しながら柔軟に質問を行った。

3.3. 地域レベルにおける公共図書館の移民サービスを支える体制：コペンハーゲン・コムーネの事例

ここでは地域レベルにおいて移民に対する公共図書館サービスに関わるアクターの機能と関係について検討する。3.3.1.ではコペンハーゲン図書館に存在したチーム・インテグレーションを，3.3.2.ではコペンハーゲン・コムーネ文化・レジャー部の統合・レジャー課を，3.3.3.では 2013 年に新設された IHC を取り上げる。

3.3.1. コペンハーゲン図書館チーム・インテグレーション

コペンハーゲン図書館は 2007 年，図書館サービスの重点分野を 4 つに定め，その一つに移民の統合を設定した。ホルムッジは，**“2007 年，コペンハーゲン図書館は統合，幼児，青少年，学校教育との連携の 4 つの重点分野を設定しました。”**と語っている。それにともない，コペンハーゲン図書館中央館の館長によるトップダウンの指示で，ホルムッジがワーキング・グループ， チーム・インテグレーションのリーダーに就任した[28]。

(1) チーム・インテグレーションの結成

リーダーであるホルムッジはチーム・インテグレーション設立時をふり返り，チームの目標を**“統合が何であるかっていうコンセプトがしっかりすれば，移民はコペンハーゲンの図書館を利用しやすいかもしれないと思ったんです。そういう概念の具体化をチーム・インテグレーションでは行いました。”**と語った。ホルムッジは統合という言葉自体が普及している一方，実際それがどのような状態を意味するのか利用者に理解されていないことを危惧していた。ゆえに，統合という曖昧とした概念を公共図書館サービスの中で具現化して利用者に提示することを目指していたのである。

ホルムッジはチームとして最初に取り組んだ事項について**“それぞれの図書館がそれぞれプロジェクトに取り組んでいたんです。統合のために。＜中略＞でも互いに話し合うようなことはなかったんです。それで私は 12 の図書館を定期的に訪問しました。”**と述べた。そして，複数の図書館を巡回訪問する行為を**“図書館の間にトンネルを掘ること”**と表した。ホルムッジは同じコペンハーゲン図書館の分館でありながら分館間に交流がなく，同様の課題を抱えているのを目の当たりにし，**“トンネルを掘る”**ことを通して，移民に対する公共図書館サービスに関する課題や先進事例をコペンハーゲン・コムーネ図書館全体で共有しようと試みた。

(2) ネットワーク・ミーティング

その後，ホルムッジの方針に賛同したコペンハーゲン図書館の図書館員 8 名が加わりチーム・インテグレーションの活動は本格的に始動した。メンバーは月に一度ネットワーク・

ミーティングという名の会合の際に一堂に会した。メンバーの一人であるアンドレースンはネットワーク・ミーティングの様子について**“取り組んでいることについてだったり，お互いのアイディアだったりを共有していました。それから一緒に何かできないかとか，文化局から予算を獲得する方法について（話し合いました）。”**と描写した。基本的に移民を対象とした図書館プログラムは外部競争資金を獲得して運営される。なかでも文化局が公共図書館を対象に毎年交付している助成事業は公共図書館にとって大きな財源で，文化局から助成を受けるための方策はチーム・インテグレーションに参加するメンバーの関心事項であった。そのためネットワーク・ミーティングでの場で議題として取り上げられていたのである。このようなネットワーク・ミーティングは，ホルムッジの語ったコムーネ内の複数の図書館間に“トンネルを掘る”ことの実践と捉えることができる。

(3) 新規スタッフの雇用

徐々にチーム・インテグレーションの活動が発展していくと，リーダーのホルムッジは多忙を極めるようになった。その当時の様子をホルムッジは**“現場の仕事をしていたら，私の仕事は誰がするのかということになる。＜中略＞それで利用者を直接的にサポートする統合担当員を図書館に置くことにしました。”**と語った。これにより各図書館における移民の背景を持つ利用者への直接的な対応は統合担当員（Integrationsmedarbejder）が行い，ホルムッジはチーム・インテグレーション全体の管理・調整業務に徹するよう業務を分担した[29]。統合担当員はホルムッジの**“他の国から来た人のために何かしたいと思ったら，デンマーク以外の背景を持つ人を組織の中に配置する必要がある”**という意識から，公募により移民の背景を持つ 5 名が選出された[30]。公募の際，求めていた人材についてホルムッジは**“図書館に欠けている能力はなんだろうってことを考えました。＜中略＞図書館はモノカルチャーの場所ではありません。図書館員のみで運営できる所ではないんです。”**と述べた。採用にあたり資格要件は設けず，図書館員以外のキャリアを持つ者も積極的に採用しようとしていたことがわかる。そして選考の結果，ソーシャルワーカー，保育士，コミュニケーション学修士号取得者などの経歴を持つ者が採用された。なお 5 名の統合担当員は採用後，ネットワーク・ミーティングのメンバーに加わっている。

また，同時期にはブックスタート担当員と呼ばれる，ブックスタートに従事するスタッフも 4 名雇用された。ブックスタートはまず移民の背景を持つ家族が多数居住する，不安定な地区（Udsatte Boligområder）[31]に暮らす住民を対象とした。そして，ブックスタートを通して移民のデンマーク語習得を促進すること，文字文化が重要である社会へ円滑に案内することを目指していた。ブックスタート担当員として雇用された 4 名全員が図書館員としての教育を受けた女性である。女性を選出した理由について，ホルムッジは**“ブックスタートの対象エリアには，移民，特にムスリム移民が多くいるんです。それで，女性の方がターゲットグループにアクセスしやすかったし，現状を把握しやすかったんです。”**と述べた。ブックスタートは家庭への訪問を含むサービスであり，主たるサービス対象がムスリム移

民であるというプロジェクトの特性への配慮から，ブックスタート担当員の採用の際には女性が選出されていた。

以上に見られるように，チーム・インテグレーションの活動はネットワーク・ミーティングの場における議論のみの段階から，専門の担当員の配置によって議論を積極的に現場へ反映する段階へと発展した。

(4) チーム・インテグレーションの解体

コペンハーゲン図書館が移民をサービスの重点対象から外したことにより 2007 年から約 4 年間続いたチーム・インテグレーションは 2011 年に解体された。解体後の状況についてアンドレースンは**“チームの中で話していたことは，現在「コミュニティセンタープロジェクト（Medborgercenter）」のグループの中で話し合われていますよ。もちろん多言語資料については話せないけど，移民の若者に関する問題についてだったり，移民とのコミュニケーションについてだったりね[32]。”**と語っている。2011 年に移民というサービス対象別に構成されたワーキング・グループは解体されたが，プロジェクト別に構成されているワーキング・グループの中で，チーム・インテグレーションで議論されていた事項は現在も部分的ながら継続的に扱われていると言える。

3.3.2. コペンハーゲン・コムーネ統合・レジャー課

前述のチーム・インテグレーションは，2007 年から 2011 年までの間コペンハーゲン・コムーネ文化・レジャー部統合・レジャー課との協力により活動が展開されていた。

同課に勤務するイェンセンは同課が担っていた役割について**“私たちの機能っていうのは，統計を集めたり，評価をしたりして，（図書館で行う移民を対象にした）プロジェクトがちゃんと運営できているか確認するようなことなんです。それと，複数の図書館が参加して一緒に語り合って経験を共有する機会を作るってことですね。＜中略＞それから，私たちの部署には新しいプロジェクトを実施するという役割がありました。”**と語った。つまり，同課の主な機能は 1）新規プロジェクトの実施，2）複数の図書館・ボランティアの間の調整，3）文化局助成プロジェクトのデータ集計と評価，の 3 点であると言える。以下，同課の担った機能の詳細について 1 点ずつ見ていく。

(1) 新規プロジェクトの実施

1 点目の「新規プロジェクトの実施」の例には「読書グループ」（Læsegrupper）がある。「読書グループ」とは，グループにおける本の音読と感想の共有によってデンマーク語スキルの向上を目指したプロジェクトである。移民女性を対象に 2012 年春から 2014 年春までの 2 年間，コペンハーゲン・コムーネ内 4 館の図書館で取り組まれた[33]。文化局からの助成を受け，民間団体の読書協会（Læseforeningen）との協働で実施された。プロジェクトの担当者であったスコウフォーオズは「読書グループ」の実施について以下のように説明した。

“各館 4 人のボランティアが中心になって進めていました。みんな読書協会の講習を受けたスキルのある人たちです。”ここで「読書グループ」の運営に携わるアクターの役割を整理すると，統合・レジャー課がプロジェクトの企画を，図書館が資料と場所の確保を，ボランティアが実質的活動の運営を，読書協会がボランティアの育成を担っていたのがわかる[34]。

(2)　複数の図書館・ボランティアの間の調整

2 点目の「複数の図書館・ボランティアの間の調整」について説明するにあたり，イェンセンは「宿題支援（Lektiehjælp）」を実践事例に挙げた。「宿題支援」とは，移民とその子孫を主な対象とし，子どもの宿題や大人のデンマーク語での書類作成を公共図書館の一角でサポートする活動である[35]。イェンセンは統合・レジャー課の「宿題支援」への関与について**“（図書館が「宿題支援」に関して）進捗はどうか？もっとボランティアが必要か？子どもたちの参加はどうか？＜中略＞ということについて話し合うネットワーク・ミーティングを組織していました。”**と述べた。統合・レジャー課は「宿題支援」が円滑に実施されるよう，調整役としてコムーネ内の複数の図書館が集い，進捗状況や課題を共有する機会を作り出していた。

また，同課は図書館間の関係のみでなく，図書館とボランティアの間の関係の調整役としても機能していた。**“異なる図書館のボランティアたちが集まって，顔を合わせて（「宿題支援」について）語り合えるようにしたんです。”**と述べた。ボランティアはしばしば立場上，図書館に対して直接要望を言い出しにくいことがある。その状況に気付いた統合・レジャー課は，図書館とボランティアの間に介入することで両者間のコミュニケーションを支援していた。

このように，統合・レジャー課が複数の図書館の図書館員やボランティアが一同に会する機会を作ることで，共通の課題への対策を検討し，他館の取り組みから示唆を得る機会を創出していた。

(3)　プロジェクトのデータ集計と評価

3 点目の「プロジェクトのデータ集計と評価」の説明に際し，イェンセンは「言葉の入り口（Sprogporten）」を事例に挙げた。「言葉の入り口」とは，2008 年から 2010 年まで文化局の助成を受けて実施されたアウトリーチによる子どもの読書推進活動である。特に移民が多く居住する地区の 0 歳から小学校低学年までに焦点が当てられた[36]。0 歳から 4 歳までの乳幼児に対しては図書館員の家庭訪問を，小学校低学年に対しては図書館員の学校訪問を通して本の読み聞かせを行った。イェンセンは「言葉の入り口」の実施の際に統合・レジャー課が担った役割について，**“よく文化局とコンタクトを取って，図書館からレポートを受け取っているか確認していました。統計データを集めたり，評価をしたり。短い動画も作ったんですよ。”**と語った。文化局から助成を受けているプロジェクトでは事前にベンチマ

ークが設けられ，パフォーマンスを評価する基準が策定される。統合・レジャー課は各図書館から定期的に送付される活動レポートを集計し，事業終了後の評価時に達成度を計り，文化局に報告していた。つまり，プロジェクトが滞りなく進むように助成者と助成対象プロジェクトとの間の仲介役をしていたと言える。

(4)　公共図書館支援機能の終了

上述のように，統合・レジャー課は 1）図書館での新規プロジェクトの実施，2）複数の図書館・ボランティアの間の調整，3）文化局助成プロジェクトのデータ集計と評価の 3 点の機能を担っていた。しかし，これら 3 点の機能全てが 2014 年春をもって打ち切りとなった。この打ち切りはコペンハーゲン・コムーネ文化・レジャー部の組織改編と方針の変更が関係している。今後，同課が担う役割について，イェンセンは**“基本的に移民の子どもを対象に活動します。彼らがコムーネ内の文化・レジャー活動にちゃんと参加できるように支援するんです。学校とコムーネ内の施設と協力して，ボランティアがスポーツなどの案内をするんです。それから，子どもを博物館や劇場に連れて行きます。”**と語った。ここから，今後の同課の業務はスポーツ施設や博物館，劇場との連携に焦点を当てる予定であることがわかる。

3.3.3.　インターナショナル・ハウス・コペンハーゲン

IHC は移民がコペンハーゲン・コムーネで生活する際に必要になる各種行政サービスを 1 箇所で受けられるワンストップサービス機関として 2013 年 6 月にコペンハーゲン・コムーネ中心部に設立された。

(1)　設立の経緯とサービス対象

IHC に勤務するハンスンは，IHC の設立の経緯を**“コペンハーゲン・コムーネは今，国外の才能ある優秀な人材にとって魅力ある都市になるために尽力しているんです。＜中略＞優秀な人材にとって魅力ある都市になるには，少なくとも移住する手続きをできるだけ簡単にする必要があったんです。”**と語った。つまり高学歴・高技能を有する移民を受け入れるための一つの方策として IHC が設立されたのである。そして，移住歴の長い移民ではなく，最近デンマークへ移住した者，あるいはこれからデンマークへの移住を検討している者に主眼を置いて設立された。

IHC には 2013 年秋に文化・レジャー部門が開設され，書類の手続きのみでなく，移民の図書館や博物館等のコムーネ内文化施設へのアクセスについても支援されるようになった。

IHC の主な利用者層についてハンスンは**“仕事がある人も無職の人も，学生も主婦も，いろんな人が来ます。＜中略＞（国籍について）詳細なことは覚えていませんが，大半は EU 圏出身者です。”**と述べている。ここから，様々な職業的立場や経済状況にある人が利用している反面，出身社会は欧州の中でも特に EU 圏出身者が多い傾向がわかる。

(2)　翻訳とイベントの実施

ハンスンは文化・レジャー部門の目下の任務について以下のように述べている。**“特に翻訳に力を入れています。＜中略＞（文化活動に関する情報が）デンマーク語でしか告知されていないので，情報が移民の元に届いていないんです。”**

しばしば公共図書館で実施される初級者用のデンマーク語講座の情報さえデンマーク語でのみウェブ上で告知されている。そこで IHC はまず移民が文化活動へアクセスする際に立ちはだかる言語の障壁を低減することを目下の業務の目標とした。

そのほか，文化・レジャー部門では各種イベントも実施している。ウェルカム・レセプションという名のイベントでは，コムーネ内の図書館や博物館，スポーツ施設が会場にブースを出し，訪れる移民に英語で施設紹介や活動紹介を行っている。2014 年 3 月 5 日に開催されたウェルカム・レセプションでは全 23 ブースの内 4 つにコペンハーゲン図書館の中央館と分館 3 館がブースを構えた。各文化施設のブースでは，パンフレットが配布され，活動紹介は全て英語で行われた。参加者は軽食を取りながらブースで説明に耳を傾けており，堅苦しさのない気楽な雰囲気の催しであった。

(3)　関係施設との協力

ウェルカム・レセプションのようなイベントを始め，文化・レジャー部門のサービスは多数の異なる文化施設との協力によって提供されている。複数の文化施設との協力について，ハンスンは以下のように語っている。**“我々はみんなコムーネの文化・レジャー部の職員ですから，既にネットワークがあるんです。直接集まって話し合うのは 3 カ月に 1 度ですけど，＜中略＞日常的に必要な時に電話したり訪問したりメールしたりしているんです。＜中略＞だから連絡を取るのは難しいことではないんです。”** このように，コペンハーゲン・コムーネ文化・レジャー部にもともと存在していた職員間の関係を IHC での活動に活用していることが示された。既述したコペンハーゲン図書館と統合・レジャー課の関係からもわかるように，IHC の設立以前からコペンハーゲン・コムーネの文化・レジャー部には課や施設の違いを超えた協力関係が存在している。そのため，ハンスンは複数の文化施設との協力を既に慣れ親しんだ仕事の進め方と認識しており，**“難しいことではない”** と発言している。

3.4. 国レベルにおける公共図書館の移民サービスを支える体制

次に国レベルでは移民に対する公共図書館サービスがどのように支援されているのか，文化局と統合図書館センターを取り上げて検討する

3.4.1.　文化省文化局

文化局はデンマーク全土の公共図書館，セントラル・ライブラリー，専門図書館，国立法律図書館（Statslige lovbiblioteker）の活動を支援する役割を担っている。支援の重点分野

は 10 分野が設定されており，移民の統合はそのうちの一つになっている[37]。文化局の各種事業のうち統合分野に関するものは大きく 2 点が挙げられる。1 点は助成金の交付で，もう 1 点はナショナル・プロジェクトの実施である。

(1)　助成金の交付

文化局は毎年公共図書館を対象に助成金を交付している。文化局は毎年 5～6 の重点課題を設定し，応募のあった申請書類の中から課題に適した案件を助成対象として選出する。この助成事業は移民の統合に関する図書館サービスのみを扱ったものではなく，広く公共図書館サービス全体を対象としている。つまり各公共図書館は自館で抱えている課題に最も近い分野を選択し，解決のための策を案件として申請する。移民が多く居住する地域の公共図書館は移民を主たる対象として移民の読書を支援するプロジェクト等を申請している。文化局の職員であるポウルスンは助成事業の対象について**“統合図書館センターも文化局の特定の事業への助成に申請できるんです。図書館のみでなく，図書館に関係している組織は申請可能です。”**と述べている。これまで文化局が助成金を交付したことのある案件には既述のコペンハーゲン・コムーネ統合・レジャー課の「読書グループ」がある。また，次節で述べる統合図書館センターが運営する「図書館でデンマーク語を読もう」も 2013 年に文化局の助成案件に採択，実施された[38]。このように，文化局の助成事業はその助成対象を公共図書館に限定することなく，国レベル，地域レベルの関係組織にまで広く設定している。

(2)　ナショナル・プロジェクトの実施

移民を積極的に生涯学習プロセスに巻き込んでいくために，文化局はこれまでナショナル・プロジェクトを組織してきた。その一例には，「地域の母」がある。「地域の母」とは，2011～2013 年まで文化局の主導で取り組まれた事業で，移民が多く居住する 11 の地域の公共図書館が拠点となった[39]。11 の図書館は文化局から交付された予算を用いてプロジェクトを運営した。プロジェクトの内容は，公共図書館が「地域の母」として選出した移民女性に対して行政サービスに関する講習を開講し，受講した「地域の母」が近所の移民家庭を訪問して図書館で得た情報を口承していくというものである[40]。

このプロジェクトでは，「地域の母」が家庭訪問をする際，統合図書館センターが作成した資料を配布している。統合図書館センターの資料についてポウルスンは以下のように語っている。**“「子どもと読書」という多言語で書かれた資料があります。＜中略＞子どもとどんな風に読書をすればいいのか紹介するための（資料です）。”**

「子どもと読書」とは，もともと統合図書館センターが移民の背景を持つ親に子どもへの読み聞かせに適した図書を知らせる目的で 6 カ国語で作成した資料で，これに着目した文化局が「地域の母」の中での活用を発案した[41]。このように文化局は統合図書館センターの協力を得ながらナショナル・プロジェクトを展開している。

(3)　統合分野の縮小

文化局は重点分野の一つとして図書館における移民の統合に取り組んできたが，現在統合分野は縮小の一途にある。ポウルスンはその理由を**“もう予算が付かないのでその分野（移民の統合）はないんです。現政権は＜中略＞統合にのみ焦点を当てるようなことはしないようにしています。代わりに，今はソーシャルインクルージョンに焦点を当てていると言えますね。統合はその中の一部です。”**と述べた。2011 年から始まったトーニング＝スミト政権は統合より広い概念で移民問題を扱おうとしており，政府系組織である文化局は統合に関わるプロジェクト予算の削減という形で影響を受けているのである。

3.4.2.　統合図書館センター

統合図書館センターが担っている機能は大きく 2 つに分けることができる。統合図書館センターの機能について以下に 1)多言語資料の提供，2)プロジェクトの実施に大別して述べる。

(1)　多言語資料の提供

統合図書館センターの一義的な任務は言語的マイノリティを対象とした公共図書館サービスを支援することにある。公共図書館は各自治体の予算を用いて多言語資料を収集しているが，収集できる資料には予算，収集方法，組織化の面で限界がある。そこで統合図書館センターは 30 以上の言語で図書や CD，DVD を収集し，デンマーク国内の公共図書館，学校図書館，語学学校等へ無料で貸し出している[42]。

資料購入費は毎年，文化省が国立図書館に分配する予算の中から統合図書館センターへの割り当てが決められている。資料費には限りがあるため，収集する資料の言語には毎年優先順位付けがされる。移民の人口構成に鑑みて毎年 3 段階のレベル別に検討される[43]。また，移民統計の推移も参考にされる。統合図書館センターの職員であるニールスンは**“年に一度，移民の統計を見て，（統合図書館センターの）資料のコレクションの割合とのバランスを調整しています。＜中略＞例えば，最近だとフィリピンからの移民が増えてきているんですね。だから，タガログ語の資料を少しずつ増やしているところなんです。”**と述べている。コレクションは常に変化する移民の割合に対応するよう，移民の人口統計を参考に平衡を取るための試みがなされていることがわかる。

また，ニールスンは資料の入手方法について，**“特に需要が多い言語，例えば，アラビア語，トルコ語，ペルシャ語＜中略＞については直接現地に行って資料を購入しています。＜中略＞もちろんオンラインでも購入します。”**と述べた。オンラインでの資料購入が容易になった現在でも，移民の出身社会の言語の資料を揃えるのは容易ではなく，あらゆる方法を駆使して資料の入手に尽力している状況がうかがえる。

多言語の資料は専門の職員によって扱われている。ニールスンは**“ここには多言語で文章を読んだり，書類を書いたり，資料を買い付けたりできる専門のコンサルタントが 10 名**

位いるんです。”と述べ，移民の背景を持つ者をコンサルタントとして雇用し，彼らが中心となって資料の購入や，組織化をしていることを明らかにした。なお，多言語資料のコンサルタントは地域の公共図書館から寄せられる多言語資料に関する相談に応じるアドバイザーとしての役割も担っている[44]。

(2)　プロジェクトの実施

センターは多言語資料を地域の公共図書館に届けるほか，移民に対する公共図書館サービスを拡充するために外部の競争資金（主に文化局の助成）を獲得し，プロジェクトを行っている。「図書館でデンマーク語を読もう」は 2013 年 4 月から 2014 年 4 月まで文化局の助成を受けて実施されたプロジェクトである[45]。このプロジェクトは，公共図書館と語学学校との協力によって移民のデンマーク語の読解力向上を目指した。統合図書館センターはデンマーク語教師としての職歴を持つコンサルタント 1 名を雇用し，デンマーク全土の 8 つの公共図書館を対象館としてプロジェクトを展開した。プロジェクトを担当したニールスンは**“このプロジェクトでは，語学学校の生徒のために教材を作成しています。図書館利用について紹介するためにね。それによって，初めて図書館を利用する前に，語学学校の授業の中で図書館についてイントロダクションをすることができるんです。その後彼らは約 4 回図書館を訪問して，図書館にはどんなサービスがあるのかを学びます。”**と語った。そして，この図書館と語学学校との連携事業について**“図書館の利用者教育が語学学校のデンマーク語教育にもなっている”**と表現した。図書館を利用したことのない移民に公共図書館サービスを紹介したいと考える図書館と，生徒を学校外に連れ出し実践の中で活きたデンマーク語を移民に伝えたいと考える語学学校，双方のニーズに沿うようにプロジェクトがデザインされていると言える。

プロジェクトでの取り組みは年 4 回の「ネットワーク・ミーティング」を介して共有されている。ミーティングはプロジェクトに関与する図書館や語学学校関係者のみならず，プロジェクトに関心を持つ者は誰でも参加可能である。「図書館でデンマーク語を読もう」のプロジェクト期間は 2014 年 4 月をもって終了したが，新たに助成金を獲得し，継続する予定である。

3.5. 第 3 章まとめ

ここでは，本章で明らかになった移民に対する公共図書館サービスに関わるアクターの機能と関係について，1）予算措置，2）資料・専門的助言の提供，3）ネットワーク形成の支援の 3 つの視点からまとめる。

3.5.1.　予算措置

予算措置の流れは図 3.2 に示す通りである。

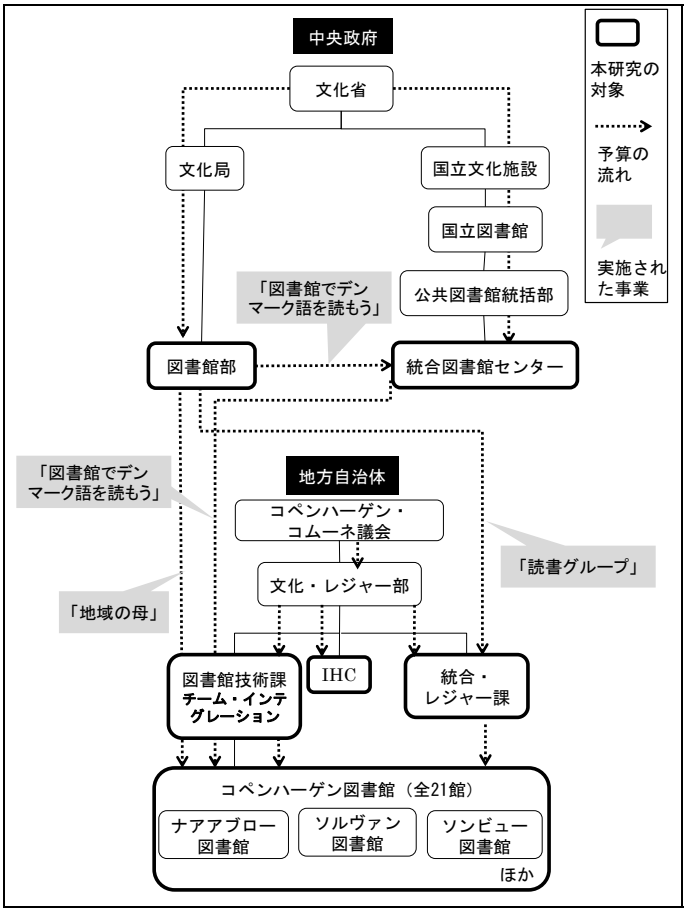

図 3.2.　移民に対する公共図書館サービスに関する予算の流れ

予算の流れは大きく，統合図書館センターおよびコペンハーゲン・コムーネの文化・ レジャー部を介する多言語資料購入の予算経路と，文化局を介するプロジェクト実施のための予算経路とに分かれている。ここでは，後者のプロジェクト予算の経路について言及する。インタビューを通じて，プロジェクト予算は基本的に文化局から拠出されていることが明らかになった。文化局は助成事業とナショナル・プロジェクトという 2 つの方法で移民に対する公共図書館サービスを資金面で支援していると言える。

助成事業を受けて実施された事業の例には統合図書館センターの「図書館でデンマーク語を読もう」とコペンハーゲン・コムーネ統合・レジャー課の「読書グループ」が示されたが，ここで言及したいのは助成対象となっているアクターの多様性である。既述したように，統合図書館センターは国立図書館の傘下にある国レベルのアクターである。一方，コペンハーゲン・コムーネ統合・レジャー課は地域レベルの文化・レジャー部の一部局である。つまり，文化局の助成は国レベル，地域レベルの枠を越え，広く図書館以外の文化系アクターにも助成申請の門戸を開いている。対象を図書館のみに限定せず，広く図書館での活動に関与するアクター全体に広げることで，多様なアクターがプロジェクトを展開することを可能にしている。

3.5.2.　多言語資料・専門的助言の提供

多言語資料および専門的助言の提供の流れは図 3.3 の通りである。

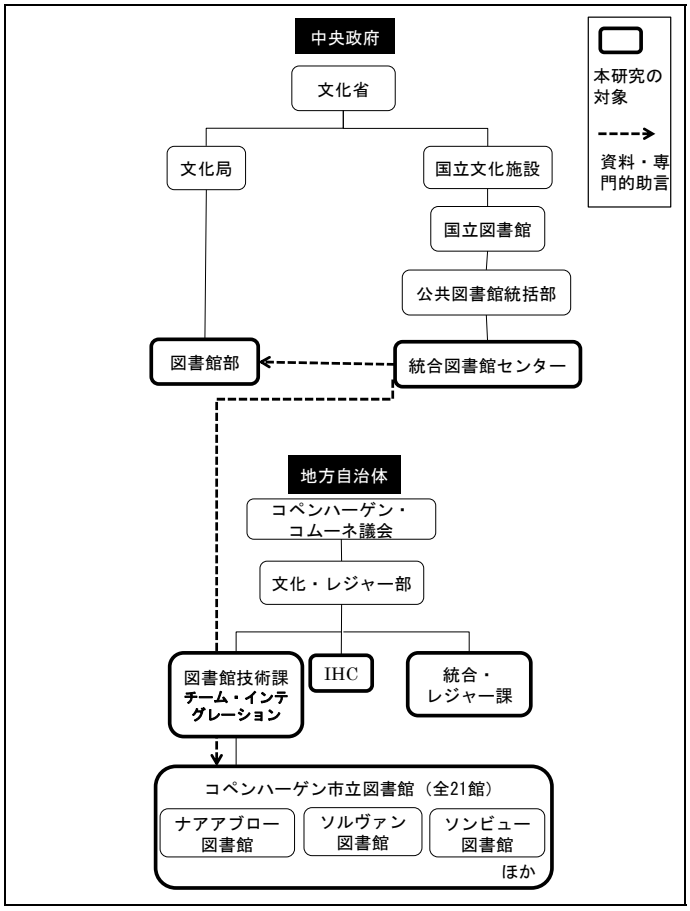

図 3.3.　多言語資料や移民への公共図書館サービスに関する専門的助言の流れ

地域の公共図書館は自治体ごとに収集している多言語資料を配架するほか，統合図書館センターの多言語資料コレクションから定期的にまとめて借りている資料を利用者に届けていることが明らかになった。また，公共図書館からの求めに応じて統合図書館センターは多言語資料に関する助言を提供していた。

このような統合図書館センターによる多言語資料・専門的助言の提供は地域の公共図書館にのみ行われているのではない。文化局へのインタビューを通じて，統合図書館センターによって作成された資料が文化局のナショナル・プロジェクトの中で活用されていることが明らかになった。

つまり，統合図書館センターを起点として，国レベルのアクターから地域レベルのアクターへの縦の協力と，国レベルのアクター間の横の協力とが存在している。このような協力関係は，統合図書館センターの持つリソースや機能が関係諸アクターによって正確に捉えられているからこそ可能になっていると言えるだろう。統合図書館センターが移民に対する

公共図書館サービスを専門に扱うナショナルセンターとして明確な立場に存在するため，多言語資料や専門的助言に関する要望が統合図書館センターに凝集する体制になっている。

3.5.3.　ネットワーク形成の支援

本章のインタビューを通して，調査対象者からネットワークという単語が頻繁に聞かれた。それは他のアクターとの繋がりを新たに構築する，もしくは元々ある繋がりを強化するという文脈で用いられた。移民に対する公共図書館サービスにおけるアクター間のネットワークは図 3.4 の通りである。

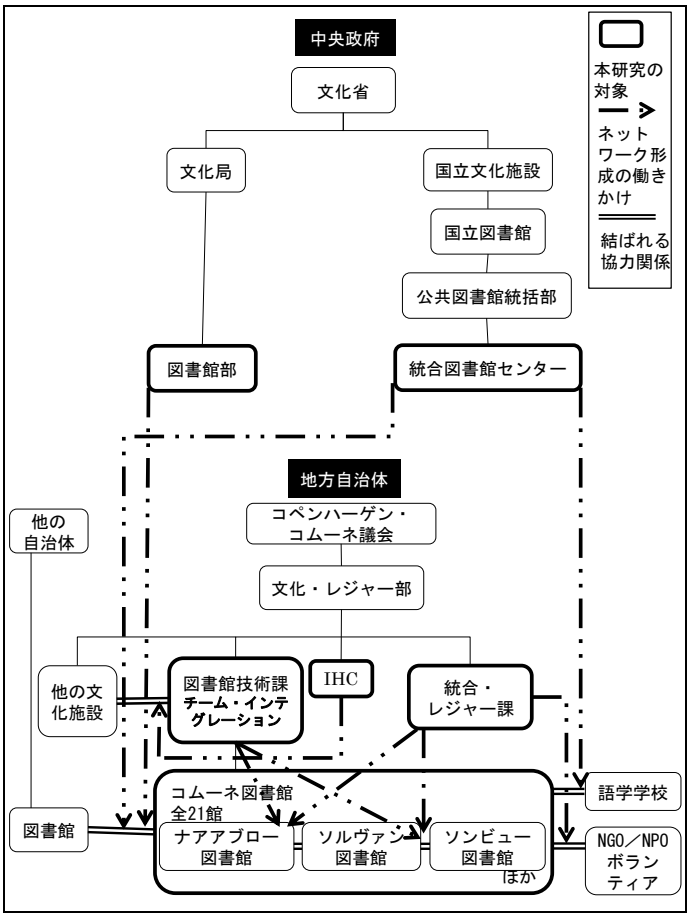

図 3.4.　移民に対する公共図書館サービスに関わるアクター間のネットワーク

図 3.4 が示すように，本章で見てきた全てのアクターに，複数のアクター間の繋がりを構築，もしくは強化するよう働きかける機能が見られた。コペンハーゲン図書館間のネットワークはチーム・インテグレーションや統合・レジャー課によって強化されていた。また，コペンハーゲン図書館と他の自治体の図書館との間の繋がりは文化局や統合図書館センター主導で行われるプロジェクト（「地域の母」や「図書館でデンマーク語を読もう」）の際に構築されていた。そして，コペンハーゲン・コムーネ内における図書館と，博物館等の他の文

化施設との間のネットワークについては，IHC によって強化されていることが見えてきた。さらに，図書館以外のアクターとのネットワークは語学学校との間にも確認できた。統合図書館センターへのインタビューを通じて，公共図書館と語学学校との間の関係は統合図書館センターのプロジェクト「図書館でデンマーク語を読もう」によって強化されていたことが明らかになった。

ネットワークは公共セクター内にとどまらず，民間セクターとの繋がりにまで及んでいる。公共図書館と NGO／NPO との間の関係は，統合・レジャー課の働きかけによってサポートされていることが本章を通して示された。このように，デンマークにおける移民に対する公共図書館サービスに関わるアクターは，異なる 2 つのアクターが協力関係を結ぶことを仲介もしくは支援する機能を有していると言える。

インタビュー中しばしば，ネットワークという語がミーティングの意味で用いられた。既述のように，チーム・インテグレーション，統合・レジャー課，統合図書館センターは「ネットワーク・ミーティング」を組織する機能を持っており，インタビュー中に話が進展するにつれ「ネットワーク・ミーティング」を指して，ネットワークという語が使用されていた。ミーティング，それはすなわち対面的な話し合いの行為である。つまり，デンマークの移民に対する公共図書館サービスに関わるアクター間の関係は対面的な話し合いを重んじて形成されていると言えるだろう。また，「ネットワーク・ミーティング」は業務の一環として実施されていることから，アクター間の繋がりはフォーマルに強化されていることがわかる。換言すれば，情報伝達経路が雑談などにより偶発的に行われるインフォーマル・コミュニケーションによって設けられているのではなく，会合のような計画的かつ広く公開された形で確保され，アクター間の繋がりは増強されているのである[46]。ミーティングを介した対面的かつフォーマルな手法は，デンマークの移民に対する公共図書館サービスに関わるアクター間のネットワーキングに見られた特長と捉えられる。

注・引用文献

[1] IFLA/UNSCO「IFLA/UNESCO 多文化図書館宣言：多文化図書館－対話による文化的に多様な社会への懸け橋」平田泰子訳，2008，p.3. http://www.ifla.org/files/assets/library-services-to-multicultural-populations/publications/multicultural_library_manifesto-ja.pdf, (accessed 2015-03-18).

[2] アクターとは，社会学の構造機能主義等の議論において社会学的分析の原基的単位となる「行為」の帰属する主体と定義付けられている。人間を指す場合と組織や制度を指す場合とがあるが，本稿では，組織を指して用いる。油井清光「行為者」『現代社会学事典』大澤真幸，吉見俊哉，鷲田清一編，弘文堂，2012，p.387.

[3] Bibliotekstilsynet. *De Udenlandske Arbejdere og Folkebibliotekerne：Betænkning om Biblioteksbetjening af Udenlandske Arbejdere og Deres Herboende Familier*. Bibliotekscentralen. 1975, 80p.

[4] Berger, Ågot. “ Biblioteksbetjening af Indvandrere i Danmark de Sidste

30år,"*Mangfoldighedens Biblioteker*. Copenhagen, Bibliotekarforbundet, 2001, p.76.
[5] Mark, Niels. "Indvandrerbiblioteket Som En Del af Statsbiblioteket." *Danmarks Biblioteker*. No.1, 1999, http://www.danmarksbiblioteker.dk/Default.aspx?ID=4278, (accessed 2015-03-18).
[6] Statsbibliotek. Om SBCI. http://www.statsbiblioteket.dk/forbiblioteker/sbci/om-sbci/organisationens-historie, (accessed 2015-03-18).
[7] Statsbibliotek. Indvandrerbiblioteket Bliver til BiblioteksCenter for Integration. http://www.statsbiblioteket.dk/forbiblioteker/sbci/nyheder/nyhedsarkiv-sbci/sbcinyhedsarkiv2006/indvandrerbiblioteket-bliver-til-bibliotekscenter-for-integration, (accessed 2015-03-18).
[8] 前掲 7)
[9] Biblioteksstyrelsen. *Biblioteker og Etniskeminoriteter*. 1999, p.33. http://www.bs.dk/publikationer/rv/4/pdf/rv4.pdf, (accessed 2015-03-18).
[10] 前掲 9), p.13-14.
[11]ベアウアはノルウェーで図書館員としての教育を受けたのち，デンマークのオーフース図書館に勤務した人物である。自身もノルウェーからの移民であることから，特に移民に対する公共図書館サービスに尽力した。また，移民に対する公共図書館サービスに関する書籍や論文，報告書を多数執筆した。主な著作に *Mangfoldighedens Biblioteker : Flersproglig Biblioteksbetjening i Danmark*, Bibliotekarforbundet, 2001, 142p. がある。
[12] Berger, Ågot. "Recent Trends in Library Services for Ethnic Minorities: the Danish Experience,"*Library Management*. Vol.23, No.1/2, 2002, p. 81.
[13] 前掲 12), p.85.
[14] Indvandrerbiblioteket. Konsulenter for Biblioteksbetjening af Etniske Minoriteter: Projektbeskrivelse. https://www.statsbiblioteket.dk/forbiblioteker/sbci/om-sbci/projekter/tidligere-projekter/konsulenter/Projektbeskrivelse.pdf, (accessed 2015-03-18).
[15] 本研究がアクターに着目する理由には，デンマークにおける図書館行政が図書館以外の多様な組織との密接な関係の中で取り組まれていることが挙げられる。その関係は階層やヒエラルキーとは異なる流動的なもので，それまで存在しなかった結びつきが新たに創造されたり，もともとあった繋がりの形態が変化したりしている。デンマークにおける移民に対する公共図書館サービスの提供体制を把握するには，図書館のみに焦点を当てるのではなく，アクターという視点を用い，公共図書館サービスを他の組織との折衝の中で見ていく必要がある。
[16] 本研究では地域レベルの事例としてコペンハーゲン・コムーネのみを取り上げているが，地域レベルと国レベルの協力関係が確認できるのはコペンハーゲン・コムーネに限ったことではない。2002 年から 2005 年には「多文化社会におけるエスニック・マイノリティを対象とした図書館サービスのための地域ネットワークのコンサルタント」というプロジェクトを通してデンマーク全土において地域レベルと国レベルの協力体制が強化されており，その体制は現在も維持されている。
[17] Danmarks Statistik. Indvandrere i Danmark 2014. 2014, p.21-22. http://www.dst.dk/pukora/epub/upload/19004/indv.pdf, (accessed 2015-03-18).
[18] 本稿におけるデンマーク語の固有名詞のカナ表記は下記の辞典に従って記している。新谷俊裕，大辺理恵，間瀬英夫編「デンマーク語固有名詞カナ表記小辞典」『IDUN 北欧研究』2009，別冊 No.2. 240p.
[19] Danmarks Statistik. Areal efter Område 2014. http://www.statistikbanken.dk/18,

(accessed 2015-03-18).
[20] Københavns Biblioteker. Organisering. https://bibliotek.kk.dk/node/1366, (accessed 2015-03-18).
[21] Danmarks Statistik. Folkebibliotekernes Nøgletal efter Område og Nøgletal 2013. http://www.statbank.dk/BIB4, (accessed 2015-03-18).
[22] Københavns kommune Kultur- og Fritidsforvaltningen. *Årsrapport 2012 Integration og fritid*. 2012, p.4.
[23] International House Copenhagen. Expand Your Network. http://subsite.kk.dk/sitecore/content/Subsites/ International House Copenhagen /SubsiteFrontpage/OurServices/ExpandYourNetwork.aspx, (accessed 2015-03-18).
[24] Kulturstyrelsen. Styrelsens Mission og Vision.http://www.kulturstyrelsen.dk/om-kulturstyrelsen/styrelsens-mission-og-vision/,(accessed 2015-03-18).
[25] 前掲 24)
[26] Statsbiblioteket.Organisering. https://www.statsbiblioteket.dk/om-statsbiblioteket/organisering/Organisering, (accessed 2015-03-18).
[27] ホルムッジは 2006 年から約 4 年間コペンハーゲン図書館に勤務した後，2009 年 11 月からオーゼンセ・セントラル・ライブラリーにプロジェクトマネージャーとして所属している。
[28] コペンハーゲン図書館では，市立中央館の館長が文化・レジャー部図書館技術課の課長を兼ねており，チーム・インテグレーションの創設は市立中央館長，兼図書館技術課長の指示によるものだった。
[29] 統合担当員は，コペンハーゲン図書館 21 館のうち，特に移民が多く生活する地区に立地する 5 館に配置された。
[30] 統合担当員はトルコ，レバノン，イラン，イラク，パキスタンの背景を持つ者が選出された。統合担当員のデンマーク滞在歴は一様ではなく，自身が出身社会からデンマークへの移住を経験している 1 世と，デンマークで生まれ育ち，デンマークで教育を受けている 2 世とがいる。
[31] 「不安定な地区」とは，まち・住居・地方省が用いている語で，移民の割合や，犯罪歴を持つ者の数などを考慮しながら，毎年決定される。Ministeriet for By, Bolig og Landdistrikter. Kriterier for Særligt Udsatte Boligområder. http://www.mbbl.dk/kriterier-saerligt-udsatte-boligomraader, (accessed 2015-03-18).
[32] コミュニティセンターとは，2008 年から 2011 年まで文化局主導のもとデンマーク全土 16 の公共図書館を対象に行われたナショナルプロジェクトである。このプロジェクトは住民のコミュニティサービスへの平等なアクセスの保障を目的としており，対象には貧困地域に立地する 16 館が選ばれた。公共図書館が従来からの資料の貸出やレファレンス応対に加え，子どもの宿題支援や法律相談，健康相談等のサービスを提供することを目指した。
Kulturstyrelsen. Medborgercentre. http://www.kulturstyrelsen.dk/fileadmin/user_upload/dokumenter/KS/institutioner/biblioteker/Fokusomraader/LaesningLaering/Medborgercentre/Medborgercentre_Pixi.pdf, (accessed 2015-03-18).
[33] Kultur- og fritidsforvaltningen Integration & Fritid. “Slutnotat for projekt Læsegrupper for etniske minoritetskvinder og deres børn,” 2014, p. 1-2.
[34] デンマークにおける公共図書館サービスには，実施主体が公共図書館ではないプログラムも含まれる。毎年，各自治体は複数の NGO 等と協定を締結し，公共図書館内でのプログラムの運営を NGO 等に委託している。しかしながら，公共図書館の役割は NGO 等にプログラムのための場所を提供しているのみではない。公共図書館は，NGO 等を介して派遣さ

れているボランティアスタッフと NGO 等の職員を集め，定期的にミーティングを開催し，プログラムの進捗状況や課題について把握している。つまり公共図書館はマネジメント役としてプログラムの運営に関与している。

[35] Kulturministeriet and Ministeriet for Flygtninge, Indvandrere og Integration. “Brug biblioteket som et centrum for integration og medborgerskab,” 2007, p. 6. http://www.bs.dk/publikationer/pjecer/brug_bib/pdf/brug_biblioteket.pdf (accessed 2016-10-18).

[36] Københavns Biblioteker. Succes med Projekt Sprogporten. http://demo.bibliotek.kk.dk/biblioteker/blog/succes-projekt-sprogporten, (accessed 2015-03-18).

[37] Kulturstyrelsen. Fokusområder. http://www.kulturstyrelsen.dk/institutioner/biblioteker/fokusomraader/, (accessed 2015-03-18).

[38] 前掲 22), p.21.

[39] Kulturstyrelsen. “Bydelsmødre-grupper ved Biblioteker og Medborgercentre,” 2013, p.1. http://www.kulturstyrelsen.dk/fileadmin/user_upload/dokumenter/bibliotek/indsatsomraader/Integration/Bydelsmoedre/Model_for_bydelsmoedre_i_biblioteker.pdf, (accessed 2015-03-18).

[40] 前掲 38), p.1-2.

[41] Statsbiblioteket. Læs med Dit Barn. https://www.statsbiblioteket.dk/forbiblioteker/sbci/videncenter/sprogstimulering/les-med-dit-barn, (accessed 2015-03-18).

[42] Statsbiblioteket. Bøger, musik og film. http://www.statsbiblioteket.dk/forbiblioteker/sbci/lan/lan, (accessed 2015-03-18).

[43] 3 段階のレベルは，資料収集の優先度を意味する。レベル 1 が最優先資料である。レベル 1 の資料はその年に購入する資料全体のうち，約 70%を，レベル 2 の資料は約 20%を，レベル 3 の資料は約 10%を占めるように調整されている。Statsbiblioteket. Fokussprog2014. http://www.statsbiblioteket.dk/forbiblioteker/sbci/lan/indkob/fokussprog-2014, (accessed 2015-03-18).

[44]Statsbiblioteket. Om BiblioteksCenter for Integration. https://www.statsbiblioteket.dk/forbiblioteker/sbci/om-sbci/om-bibliotekscenter-for-integration-ny, (accessed 2015-03-18).

[45] Statsbiblioteket. Slutrapport fra Projekt Læs dansk på Bibliotekerne. http://projekter.bibliotekogmedier.dk/sites/default/files/documents/Slutrapport fra projekt Læs dansk på bibliotekerne.pdf, (accessed 2015-03-18).

[46] 田尾は“内外の利害関係者との信頼関係が醸成され，その回路がオープンであるほど，情報は正当に伝達される”としている。田尾雅夫「マネジメント I: ビューロクラシーの効用と限界」『公共経営論』木鐸社, 2010, p.169.

第4章　デンマークの公共図書館に勤務する「エスニック・スタッフ」の役割

4.1. 本章の目的

本章では，公共図書館に勤務する移民の背景を持った職員に焦点を当てる。グローバル化にともない近年 1 つのコミュニティに多様な文化的背景を持つ市民が生活するようになっており，図書館界でもコミュニティの文化的多様性を勤務する職員の構成に反映させていくことが必要になっている。IFLA の多文化社会図書館サービス分科会は，多文化サービスの指針を示した『多文化コミュニティ：図書館サービスのためのガイドライン』の第 5 章で「人的資源」について触れ，“図書館は，コミュニティのさまざまな多文化集団の構成を図書館の職員構成に忠実に反映させて，サービス対象となる多文化社会を映す鏡になるように努めなければならない”と記している[1]。IFLA のガイドラインに基づき，各国で多様な文化的背景を持つ職員を採用する取り組みが行われている。代表的な例には米国図書館協会（American Library Association）が実施している「スペクトラム奨学プログラム（Spectrum Scholarship Program）」が挙げられる[2]。「スペクトラム奨学プログラム」とは，米国在住のエスニック・マイノリティに対して図書館情報学修士号（MLS/MLIS）取得等を支援し，図書館に勤務する職員の多文化化を促進することを目指した奨学金制度で，1997 年から継続的に実施されている。

デンマークの図書館界でも，これまで繰り返し多様な文化的背景を持った職員を図書館に配置する重要性が主張されてきた。デンマークにおいて図書館に関与する多様な文化的背景を持つ職員は「エスニック・スタッフ」と称されている。2005 年に図書館局によって刊行された多文化サービスに関する報告書である，「にぎやかな図書館」はエスニック・スタッフについて，“エスニック・スタッフとはエスニックな使節（アンバサダ）と番人を足して二で割ったような存在である。＜中略＞彼ら（エスニック・スタッフ）はネットワークを構築し，図書館の安全性を生み出す。また彼らは言語的な問題を解決する助けになっていく。端的に言えば，エスニック・スタッフは図書館の活動を好ましい状態にし，また統合のために好ましい状態を構築していく”と記している[3]。また，同じく 2005 年に刊行された『ローカルの中のグローバル』は，デンマーク国内における多文化サービスの成功事例としてオーゼンセ・コムーネに立地するヴォルスモーセ図書館を取り上げ，“ヴォルスモーセ図書館がエスニック・スタッフを雇用するリソースを獲得したことは，この成功に関係している。エスニック・スタッフは利用者と接触しコミュニケーションを取る様々な場面で極めて重要な役割を担っている。利用者と職員の両者は，相手が言っていることが何を意味しているのか理解できない場合，エスニック・スタッフを活用することが可能である”としている[4]。ここから，デンマークの図書館においてエスニック・スタッフは職員と利用者とのコミュニケーションを円滑化し，館内の安全性を高めることを期待されている存在であることがわかる。

では，実際に図書館に関与するエスニック・スタッフとはどのような人物で，図書館においてどのような役割を担っているのだろうか。これまで，デンマークにおいてエスニック・

スタッフはインターネットや図書館界の専門誌の一記事として扱われたことはあるものの[5]，学術研究の中で取り上げられたことはなく，彼らの実態は不明確である。

本章では，エスニック・スタッフをデンマーク以外の国をルーツに持つ者として一括りに捉えるのでなく，エスニック・スタッフとして雇用されている 1 人 1 人がこれまでに辿ってきたルートに着目する。近年の移民研究では，移民がどこからきたのか（ルーツ）を問うのみでなく，どのような経路を通って今に至っているのか（ルート）を問う必要性が指摘されている[6]。図書館に勤務する多様な文化的背景を持つ職員はエスニック・スタッフとして一括りに称されているが，実際にエスニック・スタッフとして勤務する者の世代，家庭環境，言語能力，これまでに受けてきた教育等は個々に異なっている。これまで辿って来たルートは，エスニック・スタッフの図書館における役割に影響している可能性があり，ルートと役割を切り離してエスニック・スタッフの実態を論じることは難しい。

そこで本章は，デンマークの首都コペンハーゲンにあるナアアブロー図書館をフィールドに，同図書館に勤務するエスニック・スタッフを取り上げ，彼らが図書館で勤務するまでに辿ってきたルートを示したうえで，彼らの公共図書館における役割を明らかにすることを目的とする。

4.2. 調査対象

本章の対象はナアアブロー図書館に勤務する移民の背景を持ったエスニック・スタッフである。既述のように，ナアアブロー図書館は，利用者の文化的多様性に合わせ，館内の一角に「国際図書館」を設けており，多言語の図書，新聞，雑誌，CD，DVD が開架されている。また，ナアアブロー図書館は多言語資料の提供のみでなく，移民を主な対象にしたプログラムも実施している。このような多言語資料の管理と移民を対象としたプログラムの運営を担当しているのがエスニック・スタッフである。本研究では，ナアアブロー図書館に関与するエスニック・スタッフ 4 名を調査対象とした。4 名の基礎情報は表 4.1 の通りである。

表 4.1.　第 4 章インタビューの日時・場所・対象者の属性

仮名	職名（雇用形態）	性別	年代	出身社会・世代	インタビュー日時	インタビューの場所	インタビュー言語
マハ	文化担当員（パートタイム・任期付）	女性	20代	父アルジェリア，母デンマーク・2世	2013年6月19日	ナアアブロー図書館内の一室	英語
ナハール	文化担当員（パートタイム・任期付）	女性	20代	イラン・1世	2013年6月20日	ナアアブロー図書館内の一室	英語
ユスラ	司書（パートタイム・任期付）	女性	40代	イラク・1世	2013年7月24日	ナアアブロー図書館内の一室	アラビア語
ダバン	文化担当員（フルタイム・任期なし）	男性	30代	イラク（クルド）・1世	2013年8月9日	ナアアブロー図書館内の一室	アラビア語

ナアアブロー図書館には主に移民サービスを担当するフルタイムの文化担当員が勤務している。それがダバンである。彼は一身上の都合により，2012 年 9 月から 2013 年 8 月ま

での 12 か月間休職しており，その間の代役に任期付で雇用されたのがマハとナハールである。ユスラは任期付のパートタイムの司書として雇用されており，移民に対象を限定することなく，カウンターにおける貸出業務やレファレンス業務を担当している。なお，インタビューの際の主な質問構成は表 4.2 に示す通りである。

表 4.2.　第 4 章インタビューにおける質問の主な構成

1）これまで辿ってきたルート
・出身社会
・移住経験
・どこで何年どんな教育を受けたか
・家族構成と家族の職業
・この仕事を始めた経緯
2）公共図書館での役割
・雇用期間
・どのような雇用形態か
・どのような事業を担当しているか
・一日の送り方はどのようか
・どのように担当事業を進めてきたか
・他のエスニック・スタッフと協力することはあるか
・カウンセリング業務ではどんな移民のどのような相談を受けるか
・業務を通じて移民の背景を持つ利用者の変化を感じたか
・外部の関係組織と協力関係はあるか
・エスニック・スタッフとして働くことの難しさは何か
3）これからのルート
・エスニック・スタッフとしての勤務経験はどんな意味を持つか
・公共図書館におけるエスニック・スタッフの業務の今後の課題は何か
・今後どこでどのように働いていきたいか

インタビューでは基本的に表 4.2 に沿いながらも，その場の状況に応じて適宜ワーディングや質問順序を変更しながら柔軟に質問を行った。

4.3. 調査結果

以下，4 名のエスニック・スタッフから得られたインタビュー・データを提示しながら，「図書館での勤務に至るまでに辿ってきたルート」（4.3.1），「図書館におけるエスニック・スタッフの役割」（4.3.2）の順で論じていく。

4.3.1.　図書館での勤務に至るまでに辿ってきたルート

(1)　ダバンのルート

ダバンは 1974 年にイラク北部の都市で，クルド人自治区の主都であるアルビールに生ま

れた。高校までの 18 年間をアルビールで過ごしたが，父親の決断により 1992 年，両親や兄弟と共にイラクを離れることとなった。当時，湾岸戦争は既に停戦を迎えていたものの，戦後の物価高騰や治安の悪化が深刻な状況で，イラクで生活を継続することが難しくなり一家はまず陸路で隣国のトルコへ移動した。

- **高校の途中までイラクでした。イラクで大学へ行きたかったけど，1992 年に移住することになりました。＜中略＞まず何も滞在許可書を持たずにトルコへ入りました。つまり不法入国ですね。それで，イスタンブールのデンマーク大使館に庇護を求めたんです。父はそれが生き延びる唯一の方法だと言いました。【ダバン】**

トルコに入り，ひたすら北西へと進み続けたダバン一家は，辿り着いたイスタンブールの地で亡命庇護を求めた。庇護申請をした先は在トルコ・デンマーク大使館である。ダバン一家が難民としてデンマークへの入国を認められたのは 1993 年であった。それから約 10 年間，ダバンはデンマーク語学校に通学しながら，清掃員，工場での労働等，様々な仕事に従事した。その後ダバンは，結婚，子どもの誕生を契機に，自身の働き方を見直すようになる。

- **これまで深夜も仕事をしてきましたが，妻や子どもができ，深夜の仕事はしたくないと思いました。家族をケアしなければいけませんから。【ダバン】**

勤労形態を変えるには，教育を受けなければいけないと考えたダバンは，まず後期中等教育を修了することを目指し，2002 年ギムナジウム（Gymnasium）に入学した。父の決断により突如イラクを離れたため，ダバンは高等学校を卒業することなくデンマークへ移住し，そのまま時が経過していた。イラクで医師免許を取得し，デンマークでも医師として勤務していた兄の勧めもあり，ダバンは専門職免許の取得を最終目標に掲げ再び教育を受け始めた。ギムナジウムを修了するには 3 年を要した。ダバンはギムナジウム卒業後，ソーシャルワーカーの資格取得を目指して 2004 年，M 高度専門学校に入学する。入学時，彼は 30 歳であった。ソーシャルワーカーを志すに至った動機をダバンは以下のように語っている。

- **人を支援するのが好きだし，この国に来た時に，人が人らしく生きるとはこういうことだと知ったんです。イラクでは全てがサダム・フセインのコントロール下にありましたからね。自分と同じように外国から来た人とこの社会（デンマーク）の橋渡しをしたいと思いました。【ダバン】**

ダバンは自身と同じように越境を経験しデンマークにやって来た者を支援したいとソーシャルワーカーを志し，3 年半の間，進学した学校で社会福祉を学んだ。ソーシャルワーカーの資格を取得し学校を卒業したのは2008年だった。クラスメイトが次々に就職先を決め，

焦りが募っていたある日，ダバンはコペンハーゲン図書館が統合担当員（3.4.1(1)参照）を募集していることを知り，応募書類を送付した。

・　この仕事は偶然インターネットで見つけました。統合担当員として 4 名を募集すると。＜中略＞すごく興味を持ちました。それで応募したんです。当時，楽観視できる状況ではなかったので，同時に他に 2 つか 3 つの仕事にも応募していました。そしたら担当者から電話がかかって来たんです。【ダバン】

2008 年，コペンハーゲン図書館は，移民の生活支援や，移民とネイティブのデンマーク人との接点の構築を目指す担当者を統合担当員と称し，移民の中から選出しようと試みていた。コペンハーゲン図書館の新しい試みに注目が集まり，4 名の統合担当員の募集に，380 名が応募した。面接に進んだのは 380 名のうち 8 名で，そのうち 4 名が統合担当員として採用されることとなった。そしてダバンは 4 名の統合担当員の 1 人に選出された。

・　もともと 3 年のプロジェクトで，司書とは異なるポストなんです。私のような人を図書館に置くのは初めてのことです。通常ソーシャルワーカーはコムーネで働きますから。だから新しい試みで，上手くいくか挑戦しているんです。【ダバン】

ダバンは採用の決め手を，ソーシャルワーカーの資格と，デンマーク語，クルド語，アラビア語，英語を運用可能な語学力にあったと自己評価している。4 名の統合担当員はコペンハーゲン図書館のうち，それぞれ異なる分館に配置された。ダバンの配属はナアアブロー図書館に決まり，2008 年から 3 年間，統合担当員として勤務することとなった。3 年の予定であった統合担当員としての雇用契約期間は 2011 年から 2012 年までの 1 年間延長され，その後さらに，ナアアブロー図書館から正規職員として雇用する申し出があり，ダバンは 2013 年から正規職員としてナアアブロー図書館に勤務している。

(2)　マハのルート

マハはコペンハーゲンにおいて，アルジェリア人の父，デンマーク人の母のもとに生まれた。家庭内では幼少の頃から父親とアラビア語を，母親とデンマーク語を話していた。マハは家庭外の場では専らデンマーク語を使用するため，デンマーク語の読む，書く，話す，聞く，のスキルを偏りなく身に着けている。しかし，アラビア語の使用については父との会話中心であったため，読み書きを体系的に学習する機会なく育った。大学への進学を決意した際，彼女が専攻に選んだのはアラビア語とアラブ文学だった。その理由について，マハは以下のように語っている。

・　（出身校は）K 大学です。（専攻はアラブの）言語と文学です。それから社会問題や政

治の問題，歴史にも触れました。でも私は主に言語を学んでいました。【マハ】

- （アラビア語の）文法を学びたかったので（専攻に選びました）。わかります？話すだけでなく，文法も理解したいと思ったんです。【マハ】
- 学部は 3 年半で，修士は 2 年です。＜中略＞アラブ研究それとアラビア語で修士号を取りました。【マハ】

マハは学部 3 年半，修士課程 2 年の計 5 年間，K 大学にてアラブ研究およびアラビア語を学び，2010 年に修士号を取得した。その後，結婚，出産を経て，本格的に就職活動を開始したのは 2012 年初旬だった。当時デンマークは経済不況に陥っており，マハの就職活動は難航した。定期的にジョブセンターに通い，カウンセリングを重ねる中で，マハは担当のカウンセラーからインターンシップを経験することを提案される。インターンシップの場として提案されたのはナアアブロー図書館だった。マハはナアアブロー図書館でのインターンシップについて以下のように述べている。

- デンマークには失業中の人がインターンシップを受けられるプログラムがあるんです。カウンセラーが，“あなたはこの職場に 4 週間インターンシップに行って”と言うので，私はここに 4 週間来ていました。【マハ】
- 偶然インターンシップ先がここ（ナアアブロー図書館）だったんです。私が申し込んだのではありません。彼ら（ジョブセンター）が，ここ（ナアアブロー図書館）に 1 人分空きがあると言ったんです。そうやって私はここに来ました。そうやって事が進んでいきました。【マハ】

マハの語りから分かるように，彼女は自らの希望ではなく，ジョブセンターのカウンセラーの指示によってナアアブロー図書館における 4 週間のインターンシップを経験した。インターンシップ中，ナアアブロー図書館はマハがアラブ文学専攻だったと知り，彼女にアラブ文学を紹介するプログラムの企画を任せた。

- 本やいろいろな資料の整理をしたり，アラブ文学に関する小さなプロジェクトを行っていました。そんな感じで，なんと言いますか。利用者の繋がりを支援したり。【マハ】

インターンシップ期間の終盤，マハはチーフから正規で文化担当員として勤務するダバンが 1 年間休職する予定で，休職中の代役を探していると知らされる。

- ここのチーフは私がアラビア語を話せること，アラビア語でのコミュニケーションの取り方がわかることを知って，ダバンの役割の一部を担えるかもしれないと考えた

んです。彼（チーフ）は他にダバンのポジションの代理が見付からなかったようです。＜中略＞私たち 2 人とも（マハとナハール）修士課程を終えたばかりで無職だったし，今仕事を見付けることは難しいんです。それで，彼（チーフ）は（ダバンの）仕事を 2 つに分けて任せようとしました。私は仕事が得られてすごく嬉しかったです。【マハ】

既述のように，文化担当員として勤務するダバンはイラク出身のクルド系移民の背景を持つ職員で，ナアアブロー図書館ではアラビア語やクルド語の言語能力を活かして移民に対する図書館サービスに従事していた。ダバンは 2012 年 9 月から 1 年間の休職を希望していたため，チーフはダバンの代役を探し出さなければならなかった。その際にチーフの目に留まったのは，ナアアブロー図書館に関与した経験のある 2 名の女性だった。1 名はアラビア語を話すマハで，もう 1 名は 2012 年 3 月までナアアブロー図書館で修士論文の調査をしており，ペルシャ語とアラビア語を話すことができるナハールである。チーフはダバンの休職期間中，彼が担当していた業務を二分し，マハとナハールに任せることを決断する。こうしてマハは思いがけず，10 か月間ナアアブロー図書館に関与する機会を獲得することになった。

(3)　ナハールのルート

ナハールは 1982 年にイランの首都テヘランに生まれた女性である。彼女は幾度もの移住を経て現在デンマークに滞在している。彼女はこれまで移住毎に移住先の言語を習得しており，複数の言語を運用する能力を身に付けている。

- **私はイランで生まれてアラブ首長国連邦のアブダビで育ちました。その後ドイツのハンブルク，（アラブ首長国連邦の）ドバイ，インドのムンバイで暮らしました。そして今はデンマークにいます。＜中略＞（使うことができる言語は）ペルシャ語，英語，アラビア語，ドイツ語，そしてデンマーク語です。【ナハール】**

ナハールが生まれた当時，イランはイラン・イラク戦争の只中にあった。1984 年，一度沈静化したかに見えた戦況は翌 1985 年になると再び激化し，イラン，イラクの双方が都市へのミサイル攻撃を繰り返していた。再び戦闘が激化していく状況に耐え兼ねたナハールの両親は一家で他国へ移住することを決断する。移住先に選んだのはアラブ首長国連邦のアブダビである。その後，ナハールは高校卒業までの時間を家族とともにアブダビで過ごした。2001 年，ナハールは高校卒業と同時に家族のもとを離れ，ドイツへ渡り，2002 年からハンブルクの大学に進学した。大学ではメディア工学を専攻し，映画学科で映画の製作方法や歴史，音響や光の効果等について学んだ。学部卒業後，ナハールは同大学の大学院に進学しさらに映画についての学びを深め，生まれ育った場所である中東地域における映画文化について研究し，修士論文にまとめた。2007 年，ナハールはドイツを離れ，家族のいるア

ラブ首長国連邦に戻った。彼女の言語運用能力は高く評価され，ナハールはドバイやアブダビで開催された複数の国際映画祭における運営スタッフとして働く機会を得た。国際映画祭の運営の過程で世界各国の人と接し，交渉する経験をしたナハールは，次第に異文化間コミュニケーションに関心を抱くようになっていった。そして 2009 年，再びドイツへ渡り，イェーナにある大学院で異文化間コミュニケーションについて学び始めた。2010 年，ナハールは入学した大学院の学術協定校である隣国デンマークの S 大学の大学院に 1 年間留学する機会を得た。デンマーク滞在中には，その後，夫となる人物との出会いがあった。彼は，デンマークに移住したイラン出身の両親のもとに生まれた移民 2 世だった。ナハールは彼と共にコペンハーゲンで生活を始め，留学期間の終了後もコペンハーゲンに残り，コペンハーゲンを拠点に修士論文を執筆することを決断した。2011 年の夏，コペンハーゲンで修士論文のための調査地を探していた際に友人の紹介で訪れたのがナアアブロー図書館だった。

- **（修士論文の研究の）アイディアをいくつかの組織に送り続けたんですが，どこもそのテーマに関心を抱かなかったんです。そしたら，私の友達がここだったら活動しているかもと言って図書館長を紹介してくれました。そして私は図書館長と話したんです。＜中略＞（館長は）このプロジェクト（KulturSkaberne）について教えてくれました。それで，私はすごく面白いと思ったんです。【ナハール】**

ナアアブロー図書館長との面会で，当時始動したばかりであった「文化クリエイター（KulturSkaberne）」というプロジェクトについて知らされたナハールは，プロジェクト専用の Facebook ページを作成することを提案した。Facebook ページの作成はコペンハーゲン図書館によって承認され，ナハールは修士論文の中で，ソーシャルメディアを介した図書館職員と市民とのコミュニケーションにより，地域の文化活動が構築されていくプロセスについて取り上げることとなった。

- **私のやりたいようにさせて，どうなるか見てみるということになったんです。それで私はコミュニケーション・チームと活動することが承認されて，ミーティングに参加し，アイディアを提供しました。【ナハール】**

コペンハーゲン図書館全館におけるコミュニケーションについて扱うチームへの参加を許可されたナハールは，チームのミーティングに参加しながらプロジェクトの Facebook ページを運営した。2011 年 8 月から調査を行い，調査内容をまとめて修士論文を提出し，2012 年 3 月に修士号を取得した。修士論文の完成により，ナハールとナアアブロー図書館との協力は終わりを迎えた。しかし，その数か月後，ナハールは再びナアアブロー図書館から連絡を受けることになる。

・　修士論文に取り組んでいた何か月か後に，この（文化担当員の）ポジションに就いている人が休職することを知ったんです。＜中略＞それで私の所に電話が来て（代理で働かないかと）打診されたんです。主に私の言語能力が買われて打診されたのだと思います。ナアアブロー図書館（のチーフや館長）は私がいくつかの言語を話し，異文化間コミュニケーションについて学んだことを知っていましたから。【ナハール】

・　ここ（ナアアブロー図書館）が私に電話を掛けて，この仕事に興味があるか尋ねたんです。それで私はどうしようかと考えました。この仕事で最も大きな最も重要なことは，人を助けるということなんです。私は人のお手伝いをすることが大好きなんです。＜中略＞もちろん，プロジェクト管理も好きですよ。でも，この仕事の一番面白いところはコミュニケーションを通して人の支援をすることです。だから，この仕事をしてみようと思いました。【ナハール】

ナアアブロー図書館に文化担当員として勤務していたダバンが 1 年間休職することになり，彼の代役としてナハールに白羽の矢が立ったのである。ナハールは，自身の多言語の運用能力と異文化間コミュニケーションについて学んだ経験が評価され，ナアアブロー図書館から申し出があったのではないかと自己分析している。利用者と直に接し，コミュニケーションを取りながら支援するという仕事の形態はナハールの希望する働き方と一致していたため，彼女はナアアブロー図書館からの申し出に応じることにした。

(4)　ユスラのルート

ユスラはイラク出身の女性である。ユスラが生まれ育ったのは首都バグダッドの南にあるバビロンである。幼少期から読書好きで多くの本に触れて育ったユスラは，司書になることを志した。進学先に選んだのはムスタンシリア大学（Al-Mustansiriya University）で，文学部において図書館情報学を専攻した。4 年間図書館情報学を学んだ後，ユスラは司書として地元にあるバビロン大学図書館に就職した。その後，同郷のバビロン出身である男性と出会い結婚した。バビロン大学図書館には 1988 年から 1993 年まで約 5 年間勤務し，1993 年第一子出産のために退職した。翌々年の 1995 年には第二子を，2000 年には第三子を出産し，ユスラは 3 人の子どもの育児に追われる日々を過ごした。

2003 年 3 月，米国を中心とする多国籍軍がイラクに侵攻し，イラク戦争が開戦したことによりユスラ一家の生活は一変する。戦中のイラクの様子をユスラは以下のように語る。

・　当時，イラクの状況は厳しかったんです。各地で戦争が起き，毎日人が殺されていました。日々どこかで戦闘が行われていました。もう私たちはそういうことに耐えられなくなってしまったんです。全ての場所が危険でした。イラクの至るところが危険な状態でした。【ユスラ】

イラクで生活を続けることは困難であると判断したユスラ一家は安全な地へ移住することを決断する。移住先に選んだのはデンマークである。デンマークを移住先に選択した理由についてユスラは次のように話した。

- **夫が（デンマークへの）難民申請の手続きは最も簡単だと言ったんです。手続きが明示されていたので。（ノルウェーの）オスロも検討しましたけど，オスロは手続きがよくわからなくて。【ユスラ】**

ユスラとユスラの夫は，デンマークは難民申請の手続きが明快であると判断し，一家 5 人で北欧の国デンマークを目指した。当時，デンマーク政府は難民の受け入れに寛容な姿勢をとっていたため，ユスラ一家は大きな問題なく移住の手続きを進めることができた。

2003 年にデンマークへ移住し，ユスラは慣れない土地での育児と語学学校でのデンマーク語の学習に追われる日々を過ごした。デンマークでの生活に慣れてくると，ユスラはイラクで得た知識や経験を活かし，再び司書として働きたいと考えるようになった。ユスラは司書という仕事に対する思いを以下のように告げた。

- **（司書の仕事は）もちろんとても好きです。学んだことですから。大学で学んで修了したことですからね。学んだことは活かしたいですよね。【ユスラ】**

しかし，ユスラはデンマークでも司書として働きたいと決意した後，以下のことに気付く。

- **私はデンマークも（イラクと）同じ司書の資格制度だと思っていたんです。（実際には）全然仕事の仕方が違いました。＜中略＞言語は違うし，コンピュータの使い方も私たちがイラクでしていたのとは違うんです。【ユスラ】**

ユスラはデンマークにはデンマークの司書資格制度が存在し，イラクで取得した資格ではデンマークの図書館において正規の司書として勤務できないことを知る。それでも，なんとか図書館で働くことができないかと調べ，デンマーク王立図書館のアルバイト募集の情報を見付けた。ユスラは王立図書館のもとにあるコペンハーゲン大学図書館の部署で 1 年間アルバイトとして働いた。担当したのは雑務であったが，ユスラは再び図書館で働けることに喜びを感じた。1 年間のアルバイトの契約が終了すると，ユスラは次なる職を求めてジョブセンターへ通った。求職中のことをユスラは以下のように述べた。

- **失業中にジョブセンターへ行っていたんです。それでコースを受けていました。そしたら，ここ（ナアアブロー図書館）で 1 年間働けるという話があったのでここに来ました。ジョブセンターの紹介で来たんです。【ユスラ】**

・　ここ（ナアアブロー図書館）での仕事が見つかったので今ここで働いていますけど，そうじゃなかったら図書館学の修士課程に入るつもりでした。【ユスラ】

ユスラはデンマークにおいて正規の司書として働くには図書館情報学の修士号を取得する必要があると知り，ジョブセンターで求職活動をすると同時に，王立情報学アカデミーの修士課程に進学することを考え始めていた。その矢先，ジョブセンターの紹介でナアアブロー図書館に勤務できることになり，ユスラは 2012 年 11 月から 1 年間の契約で，非正規の司書としてナアアブロー図書館で働き始めた。

4.3.2.　図書館におけるエスニック・スタッフの役割

4 名のナアアブロー図書館における役割を（1）レファレンスへの対応，（2）言語の翻訳および規範の解説，（3）経験の共有，（4）生き抜くスキルの獲得支援，（5）需要の把握と図書館サービスへの反映，の 5 項目に分け，以下に示していく。

（1）　レファレンスへの対応

ナアアブロー図書館には，様々な情報要求を持った利用者が訪れる。ナアアブロー図書館に勤務する職員は，利用者の情報要求を把握し，求める情報の所在へと案内している。非正規の司書としてナアアブロー図書館に勤務するユスラは，自身の主な業務を貸出およびレファレンスへの対応であると述べ，以下のように語った。

・　利用者から“この資料はありますか？”と尋ねられたら，コンピュータのシステムで検索します。もしこの図書館にない場合には他の図書館からこの図書館に取り寄せる手続きをします。【ユスラ】

ユスラはナアアブロー図書館のカウンターに立ち，貸出業務を行いながら，関連業務として資料予約や相互貸借などを担当している。利用者の求めている資料がコペンハーゲン図書館の蔵書にない場合，同一機関に所属しない図書館から資料を借りる手続きを行っている。貸出自体とそれに関連する資料予約や相互貸借を行う，いわゆる「貸出サービス」を通してユスラは，利用者の情報要求に応えているのである。情報要求を持ってユスラの元へ訪れる利用者は特に，移民の背景を持つ者が多いと言う。

・　彼らは（アラブ出身者は私の元に）質問に来ますよ。本やその他のことについて。＜中略＞女性が最も多いですね。デンマーク語を話さず，デンマークについてあまりよく知らない女性たちです。女性たちがあれはどこ，このことについて聞きたい，と言ってよく質問しにきて，そのまま少しお喋りをすることがあります。＜中略＞デンマーク語を話せない人は特に女性に多いんです。それで，彼女たちは図書館で私に質問するんで

す。デンマーク語はわかりませんからデンマーク人に質問できないんです。それで，私に質問します。私は彼女たちから話を聞いて少しお手伝いします。【ユスラ】

ユスラはアラブ出身者が質問に来ることが多いと述べた上で，特にアラブ出身の女性が多く質問にやって来ると語っている。そして，多くはデンマーク語のスキルに乏しく，デンマークでの生活事情に精通していない女性であると描写した。ユスラが示すように，移民女性のデンマーク語未習得者の割合は決して軽視できない状態にある。

2010 年，ロックウール・ファンデーション(Rockwool Foundation)は，移民の語学学校におけるデンマーク語学習に関する調査を行い，その結果，語学学校に通う 5 分の 1 の女性が，最終試験を通過しておらず未修了であると報告した。この結果を報じた『The Copenhagen Post』紙は，“デンマーク語の語学学校は，移民の背景を持つ女性のデンマーク語教育に失敗しており，統合のプロセスには課題が見える”と論じている[7]。

デンマーク語に不慣れな移民女性は，ネイティブのデンマーク人司書へ質問することに躊躇いがあることがユスラの発言から見て取れる。彼女たちはナアアブロー図書館の館内でアラビア語を話すユスラを発見し，ユスラであればアラビア語で質問可能と判断し質問にやって来るのである。彼女たちは，直面する課題を解決するのに必要な情報を入手することを求める情報要求を抱えているが，デンマーク語で質問できないという言語上の障壁が存在している。ユスラは彼女たちの言語上の障壁を回避し，情報要求を満たすことを支援する役割としてナアアブロー図書館に存在していると言える。

またエスニック・スタッフは，図書館資料のみならず図書館プログラムの案内も行っている。文化担当員は主に移民の背景を持つ利用者を対象に，ナアアブロー図書館の一角でカウンセリングを行っている。カウンセリングでは，月曜日から金曜日までの週 5 日，文化担当員が移民の背景を持つ利用者のあらゆる相談に応じている。文化担当員の 1 人であるマハはカウンセリングを通して移民の抱える課題の解決方法の 1 つとして図書館プログラムを紹介することがあると述べている。

- 相談の中で“あーこういう問題を抱えているんですね。それならこれやこれ（プログラム）に参加してみてはどうですか？”という風に話しています。＜中略＞それはいつもやっていることです。何か少しでも役に立ちそうだなと思ったらプログラムの紹介をしています。【マハ】

ナアアブロー図書館では，語学学習や IT に関する多様なプログラムを実施している。しかし，プログラムの存在を知らない移民も多く存在する。文化担当員は，カウンセリングを通して，図書館プログラムの内容が移民の課題解決に結び付きそうな場合，プログラムへの参加を促している。文化担当員からカウンセリングに訪れる移民に伝えられるプログラムの案内は，相談者の口から，さらに別の移民へ伝搬される。

・　利用者は口頭で伝えていますよ。＜中略＞以前（図書館プログラムに）参加したことがある人が友達を連れてくるとか。そうやって広まっています。【マハ】

マハは，移民の背景を持つ利用者の多くが口承による情報伝達を重んじていることを熟知しており，1 人の相談者への案内がその他多数の移民への案内になると考えている。このようにエスニック・スタッフは，1 名の相談者への案内はその背後にいる多数の移民への案内になると信じ，カウンセリングを通じて課題を抱える移民を図書館プログラムへと案内している。

エスニック・スタッフが案内するのは図書館資料やプログラムに留まらない。上記したカウンセリングにおいて，移民から寄せられる相談の解決に図書館外の専門機関や専門家の助けが必要と判断できる場合には，適所への案内を行っている。文化担当員の 1 人であるダバンが“どこに行けば支援が得られるのかを伝えるために私はここに座っています”と語るように，ナアアブロー図書館から館外の専門機関へと情報の道行案内をすることは文化担当員の主要な役割になっている。

ナアアブロー図書館では，館外の専門家が館内に出向き，移民の相談に対応する時間も設定されている。文化担当員のナハールは，相談者を専門家へ案内する過程を以下のように描写する。

・　相談に来る人には“もし私に答えられない専門的な質問があるなら，月曜日か木曜日に来て”と言っています。社会問題の専門家（ソーシャルワーカー）のカウンセリングを無料で受けられるんです。全て無料です。第一木曜日の 4 時から 6 時に来れば，資産や法律に関する相談ができます。弁護士が無料で相談に応じます。【ナハール】

ナハールは相談者の相談内容を吟味し，専門知識が必要であると判断した場合には相談者を専門家の元へ案内している。ナアアブロー図書館にはソーシャルワーカーや法律家が利用者の相談に応じる日が設定されている。ナハールは相談者へ専門家がナアアブロー図書館に訪れる日程を伝え，専門家に相談するよう促している。

以上見てきたように，ナアアブロー図書館のエスニック・スタッフは，特に移民の背景を持つ利用者が持つ情報要求に対応し，図書館資料や図書館プログラム，図書館外の専門機関や専門家への案内を行っている。このような職員の役割は図書館において特段目新しいものではない。公共図書館は従来からレファレンスサービスを行っており，その中で図書館外の機関への問い合わせや仲介を行うレフェラル・サービスにも取り組んできた。その意味において，エスニック・スタッフは，従来から司書が担ってきたレファレンス対応の役割を，特に移民の背景を持つ者に焦点を当てながら取り組んでいると言える。

(2)　言語の翻訳および規範の解説

ナアアブロー図書館の文化担当員によるカウンセリングには，様々な文化的背景を持つ移民が相談に訪れる。相談者の大半は自身が出身社会から移住した経験を持つ移民 1 世である。彼らの多くは生活上何らかの課題を抱えていても言語上の障壁があり，デンマーク語を用いて課題を解決することが困難であるため，自身の母語等を使用して相談可能なナアアブロー図書館へ相談にやって来る。文化担当員のナハールとマハは次のように述べている。

- **一番多いのは翻訳です。シンプルな翻訳です。デンマークに来るとデンマーク語で書類を受け取るんです。たいていの書類はデンマーク語で書かれています。だからデンマーク語を知らないと書類の内容がわからないんです。それで，多くの人が翻訳のためにここに来ます。それが一番多いかな。【ナハール】**
- **彼ら（相談者）は電力会社や電話会社，コムーネとかあらゆる所からの手紙を持って来ます。彼ら（相談者）はデンマーク語力に乏しいんです。それで手紙を読むことができないんですね。だから私は翻訳して内容を伝えています。【マハ】**

最も多い相談はデンマーク語文書の翻訳である。相談者は，行政機関，電力会社，電話会社等，様々な機関から届く書類を持参し，ナアアブロー図書館の文化担当員の元を訪れる。相談者は文化担当員の持つ語学力を頼って相談にやって来るのである。相談者の多くは文書に記載されているデンマーク語を自力で理解することが難しいため，文化担当員の力を借りて文書内容を解読しようと文書を片手にナアアブロー図書館を訪れている。

翻訳の対応が可能な言語は，文化担当員によって異なる。ペルシャ語，英語，アラビア語，ドイツ語，デンマーク語の運用能力を持つナハールは“**彼ら（相談者）が一番理解できる言語で話す**”と述べ，その都度相談者に応じて使用する言語を変え，相談者が相談しやすい状態を作り出していると言った。なお，マハはアラビア語，英語，デンマーク語を，ダバンはアラビア語，クルド語，英語，デンマーク語を用いて相談に応じている。

文化担当員の言語運用能力は，書類の解読時のみならず，書類の作成の際にも活かされていた。

- **ビザ申請やパスポート申請のための書類作成を教えます。【ナハール】**
- **ある人は，書類を書いてほしいと言ってやって来ます。デンマーク語があまり得意ではないけれど，ビザであるとか，親戚を呼び寄せるとか，その他の申請をしなければいけない。けれど，彼ら（相談者）はどうやって書類に記入すればいいのかわからないんです。【マハ】**

書類の作成には，言語運用能力や文書作成の作法に加え，デンマーク社会の諸規範に関す

る理解が必要となる。デンマーク語の基礎的な運用能力を有していても，文書の作成となると他者の支援が必要となる場合もある。翻訳の難しさは，単に言語上の変換と割り切れないところにある。文化担当員は，言語から言語への翻訳をするのみでなく，その背後にあるデンマーク社会における法規範や道徳規範を，文化担当員自身の知識や経験に基づき，相談者に解説している。

- **この国においてどんな行為が適切で，どんな行為が不適切かも伝えています。それは私に課せられた任務だと思っています。時々，彼ら（移民たち）は何が適切か不適切かもわからず表現してしまうことがあります。法に触れることを誤って認識していることもあります。そういうことを伝えているんです。【ダバン】**

言語の翻訳に加え，デンマーク社会の規範や価値観の解説をする文化担当員は，異文化間のインタープリターとしての役割を担っていると言える。しかしながら，文化担当員もあらゆる相談に関わる諸規範を把握しているわけではない。翻訳を求められる文書の内容が自身の知識や経験では解決できない内容を含んでいる場合，新たに情報を収集する必要が生まれる。

- **問題周辺のルールとか制度を知らないと対応できないことは，毎回調べます。全てオンラインで調べられますから。もしオンラインで調べて分からなかったら，答えてくれそうな場所に電話して聞きます。【マハ】**
- **彼（双子の兄）は法律家で，犯罪に関する全ての法律を知っています。時々，人々（相談者）は私にそういう内容の（法律に関する）質問をします。そんな時，法律に詳しい人が周りに居るので私は答えを探しやすいんです。【ダバン】**

文化担当員は，インターネットや電話で関連機関にコンタクトを取り，諸規範を確認してから相談者が持参する書類の解読や作成に対応している。また，ダバンが語るように，文化担当員個人が持つソーシャル・ネットワークがデンマーク社会における規範の把握を助けている場合もある。文化担当員は，自身の知識や経験，関連機関や自身の持つソーシャル・ネットワークから得られる情報を駆使して，相談に訪れる移民に対し，言語の翻訳および諸規範の解説を行っている。

しかし，文化担当員の中には，解せない思いを抱きながら相談者に向き合っている者もいる。

- **私は彼ら（相談者）がどんな状況に置かれてきたのかを知らないし，もちろん私が彼らを非難することはできません。だから，なぜなのか（デンマーク語を学ばないのか）を問うことはしません。でも不思議に思うことはよくあります。すごくたくさんの人が**

デンマーク語を話さずに生活しているのはなぜなのか不思議に思います。【マハ】

既述のように，マハはアルジェリア出身移民を父に持つが，彼女自身はデンマークで生まれ育っている。母親はネイティブのデンマーク人であり，これまで教育の全てをデンマークで受けてきた。マハはデンマーク語を母語として使用しており，外国語として学習した経験を持っていない。デンマーク語を外国語として習得する経験をしていないマハは，相談に来る者がデンマーク語習得の必要性を強く感じながら話そうとしない様子を理解できずにいる。

(3)　経験の共有

カウンセリングに訪れるのは，必ずしも具体的な相談内容がある者ばかりではない。文化担当員のマハは相談に訪れる者の傾向を以下のように話す。

・　多くの人はイラク出身です。戦争があってここに逃れた人たちです。＜中略＞難民で，トラウマがあってデンマーク語をほとんど学んでいない人たちです。戦争でトラウマ的経験をして，何かをするために集中することが難しい人たちなんです。【マハ】

マハは相談に訪れる移民の傾向を，移民 1 世で 40 歳以上のアラビア語話者が多いと描写し，中でも戦争が原因でデンマークへ逃れた，精神的に深く傷を負っているイラク出身難民が多いと述べている。既述したように，書類の翻訳等を依頼するためにカウンセリングにやって来る移民ももちろん存在する。その一方で，特段何か解決を求めるわけでなく，文化担当員にただ話を聞いてもらいたいとやって来る者も存在する。ダバンは，心に傷を負った移民から語られる話の内容について，以下のように述べている。

・　母国で拷問にあっていたこと，精神的な病で今も仕事を見付けられないこと，デンマークで差別的な態度を取られること，経済的に困窮していること，軍人として働いた経験しかないので今自分に何ができるのかわからないこと，そういう話を頻繁に聞きます。【ダバン】

越境以前の戦争経験は，越境後の現在も移民に精神的な影響を与え続けている。また心の傷が原因で，越境後もデンマークにおいて仕事を得られず，困窮した生活を送っていることが窺える。越境以前の経験のみならず，人種差別的な処遇を受け，現在進行形で精神的に傷を負っている場合もある。ダバンはそのような精神的な苦痛を訴える移民に対して，特別なことは何もしていない。彼は相手に共感しながらひたすら話を聞いている。

・　そういう人（心に傷を負った人）が私の所に話しに来たら，私にはそれがどれほど辛

く，大変なことなのか理解することができます。ただ戦争を経験したというだけでなく，どんな思いで移動してきたのか共感できるんです。＜中略＞完全に自信を失っている人も多いですよ。自分では何もできないと思っています。だから出掛けたくないし，質問もしたくないし，そうして完全に孤立していきます。そういう人も，母語で話せるし，同じ経験をしているので私には話せるという場合があります。【ダバン】

既述のように，文化担当員のダバン自身，10 代の頃に湾岸戦争を経験している。戦争後に出身社会が荒廃していく様子，近親者の死，物価の急騰等をダバン自身が目の当たりにしている。相談に訪れる移民と文化担当員であるダバンとが共通して持つ，戦争経験や越境経験を共有することにより，相談者はデンマークにおいて完全に心を閉ざし，孤立した状態から 1 歩抜け出すことが可能になる。その行為はさながら，心理カウンセリングのようであるが，文化担当員は専門の心理カウンセラーではないため，当然ながら治療行為をすることはできない。あくまで，文化担当員は心に傷を負い孤立した移民の「共感する他者」，あるいは「経験を共有する他者」として存在している。しかしながら，「経験を共有する他者」の存在は孤立する移民にとって僅かながら現況を改善する手立てにもなり得るのである。

文化担当員のダバンには，カウンセリングに訪れる移民と経験を共有するために心掛けていることがある。相手との距離の取り方である。

- 通常アラブ圏から来た人はすごくオープンに他者に親切に接します。そういうコミュニケーションの取り方がお互いにわかるんです。＜中略＞一歩踏み込んだり，後ろに引いたり，深刻な問題か，そんなに深刻じゃないか判断したり，この人とこの話題を話せるか，そういうことを計算して相談に来る人と話しています。【ダバン】

ダバンは，コミュニケーションの取り方を適宜調整してカウンセリングに訪れる者と接している。イラクを出身としているダバンは，アラブ系の移民のコミュニケーションの取り方を自然に会得している。カウンセリングの際，ダバンはこれまで辿ってきたルートにおいて会得したコミュニケーション・スキルを用いて，経験の共有が可能な状態を構築している。

(4) 生き抜くスキルの獲得支援

ナアアブロー図書館は，多言語資料の提供や翻訳のほか，ブックスタートの実施を通して，移民の言語運用能力の向上を目指している。ナアアブロー図書館ではブックスタートの対象を特に貧困層や移民の家庭に限定し，6 か月，1 歳，1 歳半，3 歳の 4 回，絵本などの入ったパッケージを対象年齢の家庭に配布している。6 か月，1 歳の時には，対象となる家庭を訪問してパッケージを届け，1 歳半の際には対象となる家庭の者が図書館へパッケージを受け取りに訪れ，3 歳の時には幼稚園でお話し会を開催しパッケージを配布している。ブックスタートの運営を担当していたのは，文化担当員のマハである。マハは，6 か月，1 歳の

子を持つ家庭の訪問を担当し，もう 1 名の司書が 1 歳半，3 歳に対するパッケージの提供を行っていた。マハは 6 か月，1 歳の子を持つ家庭の訪問について以下のように述べた。

・　6 ヶ月と 1 歳の時には，事前にカードを送って，近々あなたのお家を訪問しますよ，と知らせています。この日のこの時間に。そしたら私はパッケージを持ってお家を訪問します。そして本を取り出して保護者と話をして，子どもに本を見せて一緒に読書することの重要性を伝えています。言葉の習得の話もしています。【マハ】

マハは訪問する家庭において持参したパッケージの中身を提示しながら，子どもとの読書の重要性と読書の仕方について紹介した。家庭内言語とデンマーク語との二言語を使用する環境で子どもを育てる場合，幼少期の言語活動が重要な意味を持つ。マハは移民 2 世として自身の経験を含めながら訪問先で早期からの読書の重要性を伝えている。加えて，パッケージの中に含まれているもの以外にもナアアブロー図書館は多数絵本を所蔵していること，デンマーク語以外の言語の児童書も所蔵があることを伝えていた。訪問する家庭には事前にカードで訪問日時を知らせ，不信な訪問でないことを示している。マハはブックスタートにおける自身の働きぶりを高く評価する。

・　実際，私はこのプロジェクト（ブックスタート）にすごく上手く関与していたと思います。訪問すると，（訪問家庭の人は）快く話を聞いてくれて，その後も図書館に来てくれることもありました。【マハ】

もともと司書であるネイティブのデンマーク人女性が，1 人でブックスタートに関する全ての業務を担当しており，家庭訪問もネイティブのデンマーク人女性の担当だった。その後，マハが雇用されたことにともない，家庭訪問はマハの担当となった。訪問する家庭の女性は，自身と同じようにヒジャブと呼ばれるスカーフを頭に纏い，アラビア語を話すマハを受け入れ，彼女の話に耳を傾けた。訪問先の女性は自身とマハとの間に，容姿や言語の共通点を確認し，不安を軽減させることができた。そして，マハは，家庭訪問が新たな図書館利用を生み出すことに結びついたと自己評価している。このように，文化担当員は自身の持つ民族的背景や，言語能力を活かしながら，地域の移民家庭が豊かな言語運用能力を獲得できるよう支援している。

文化担当員が支援しているのは，言語の運用能力ばかりではない。IT スキルの育成にも関与している。ダバンは IT 講習について以下のように語っている。

・　来週私は IT 講習を始めます。＜中略＞15 人の女性（が参加します）。私は彼女たちに会ったことがないんです。その内の 1 人で私の知人が，私に電話をかけてきて，女性のクラブに参加している仲間 15 人が（IT を）学びたいって言っていると伝えたんです。

それはすごく良い事だと思います。もし彼女たちが IT を学んだら，そういう能力がなければ得られなかったことを得るチャンスができるんです。IT は（デンマーク社会において）必要とされている能力の１つです。【ダバン】

ダバンは利用者からの求めに応じ，移民女性を対象としたアラビア語での IT 講習をナアアブロー図書館に開設している。ダバンは，参加者である移民女性の要望に従い講習内容を組み立てており，言わばテイラーメイド（tailor-made）の IT 講習を展開している。ダバンが語るように，今日デンマーク社会において IT スキルは“必要とされている能力”である。行政への各種申請，銀行取引，交通 IC カードのチャージ等は電子的に行われており，IT スキルはデンマークで生活を営む上で必須の能力となっている。

以上見てきたように，文化担当員は，デンマーク社会で生き抜く術である言語運用能力および IT スキルの獲得を支援している。勿論，それらのスキルを獲得することによってホスト社会への同化が進むという点も無視できない。しかしながら，移民女性の団体がダバンに IT 講習の開設を求めたように，移民自身の主体的な学びを促す効果も確認できる。移民の背景を持つ文化担当員の存在は，語学力や IT スキルの獲得を，ホスト社会の支配層による強制ではなく，移民自身の自助努力による能力向上へと変化させる可能性を持っている。

(5)　需要の把握と図書館サービスへの反映

非正規で司書をしているユスラは，ナアアブロー図書館においてアラビア語資料の管理も任されていた。ナアアブロー図書館の館内の一角には「国際図書館」と呼ばれる多言語資料コーナーがあり，そこにはアラビア語資料も存在する。ユスラはアラビア語の母語話者であることから，国際図書館のアラビア語コレクションの管理を任された。アラビア語コレクションを充実させるために，ユスラは資料の発注をした。

・　アラビア語の資料がちょっと乏しかったんです。それで，追加で新しい本を（統合図書館センターに）発注しました。＜中略＞彼ら（統合図書館センターの職員）は１年に１度海外へ資料の買い付けに行きます。＜中略＞それで，私は購入すべき資料のリストの作成をしました。それで彼ら（統合図書館センターの職員）は買い付けに行って，購入した資料をデンマークに持って帰り，この図書館に届けてくれます。【ユスラ】

資料の発注先は国立統合図書館センターである。基本的に，公共図書館は各自治体の予算で多言語資料を収集しているが，収集できる資料には予算，収集方法，組織化の面で限界がある。そこで統合図書館センターは 30 以上の言語で資料を収集し，デンマーク国内の公共図書館，学校図書館，語学学校等へ無料で貸し出している[8]。国際図書館に配架されている資料の多くも統合図書館センターがナアアブロー図書館へ貸し出した資料である。ユスラが語るように，統合図書館センターの職員は年に 1 度，特に需要の多いアラビア語やトル

コ語，ペルシャ語の資料を直接現地のブックフェア等へ買い付けに行く[9]。地域の公共図書館は事前に統合図書館センターへ多言語資料の購入希望リストを提出することが可能で，統合図書館センターの担当者はリストに基づき資料を購入する。ユスラはアラビア語資料の購入希望リストを作成し，統合図書館センターへ提出した。リスト作成時のアラビア語資料の選択方法についてユスラは以下のように述べた。

- **（アラビア語話者の利用者に）どんな（アラビア語の）本を読みたいか尋ねています。＜中略＞そうすると，（アラビア語話者の利用者は）本のタイトルや著者名を私に言います。【ユスラ】**

既述のように，ユスラはナアアブロー図書館において貸出やレファレンス業務を担当している。そして，貸出やレファレンス業務を通して接する機会のある利用者に希望資料のリクエストの有無を尋ねていた。ここから，ユスラが移民の背景を持つ利用者の要望を，国際図書館のアラビア語コレクションに反映させようとしていることがわかる。ユスラが特に重点的に需要をコレクションに反映させようとしていた対象は，女性や子どもである。

- **特に女性を対象にして資料を選びました。女性は少し資料の利用が少ないんです。＜中略＞それと，子ども用のアラビア語の本も増やしました。（アラブの背景を持つ）子どもはアラビア語を学ばなければなりません。アラビア語の本を読むことが大切なんです。＜中略＞それでこの図書館に配架して利用者が読めるようにしました。【ユスラ】**

ユスラはレファレンス業務においてアラビア語話者と接する中で，女性と子どものアラビア語資料の利用が少ないことに気付いていた。加えて，3 人の子を持つ母である自身の立場も，女性と子どもを対象にした資料の重点的な拡充に影響していると言える。ユスラは自身の持つ，アラビア語話者で，デンマークで 3 人の子を育てる母であるという特性を活用しながら，アラブ系移民の要望を図書館サービスに反映させている。

4.4. 第 4 章まとめ

4.4.1. エスニック・スタッフの語学力と公共図書館での役割

本章の調査から，ナアアブロー図書館に勤務するエスニック・スタッフは皆，母語以外に複数言語を運用することが可能で，豊かな言語運用能力を身に付けていることが明らかになった。ナハール，ユスラ，ダバンの 3 名は 1 世の移民であるため，自身が国境を越える経験をする中で，母語以外の言語を習得していた。また，デンマークで生まれ育った移民 2 世のマハは，家庭内での父親との会話に加え，大学での学びを通してアラビア語の運用能力を身に付けていた。

そして彼らは豊な語学力を基盤にナアアブロー図書館での職務にあたっていた。レファ

レンスサービスでは，司書のユスラがデンマーク語に不慣れな移民女性の質問にアラビア語で対応し，そのままアラビア語で他愛ない会話を展開していた。カウンセリングでは，文化担当員のマハ，ナハール，ダバンが，相談に訪れる移民によって持ち込まれる多種多様な文書を翻訳していた。ブックスタートでは，文化担当員のマハが自身の持つ語学力や民族的背景を活かしながら，地域の移民家庭を訪問し，図書館資料や図書館サービスを紹介していた。また，司書のユスラの語学力は，アラビア語の図書館資料を拡充していく際にも活かされていた。

移民の背景を持つ図書館利用者，特に移住して間もない移民が公共図書館を利用する際，言語の障壁が立ちはだかる場合がある。情報要求を抱えていても，デンマーク語に不慣れなために自力では解決することができなかったり，解決することを諦めていたりする。豊かな言語運用能力を持つエスニック・スタッフは，そのような利用者が言語の障壁を軽減，あるいは回避させる一助になっていると言える。そして，エスニック・スタッフによる言語の障壁の軽減，回避は，デンマーク語に不慣れな利用者がより気軽に公共図書館へアクセスすることを可能にする。エスニック・スタッフの存在により，移民の背景を持つ利用者は，言語の障壁に囚われず，より気軽に，より身近に公共図書館を利用する。言い換えれば，エスニック・スタッフは，移民が移住先での日常の中に公共図書館を置くことを可能にしている。

マハの“**チーフは私がアラビア語を話せること，アラビア語でのコミュニケーションの取り方がわかることを知って，ダバンの役割の一部を担えるかもしれないと考えたんです**”という発言や，ナハールの“**ナアアブロー図書館（のチーフや館長）は私が幾つかの言語を話し，異文化間コミュニケーションについて学んだことを知っていましたから**”という発言から，元々彼女たちは豊かな言語運用能力が高く評価され採用に至っていたことがわかる。エスニック・スタッフが語学力を発揮しながら職務にあたることは，エスニック・スタッフ採用者の期待通りであるとも言える。

4.4.2. エスニック・スタッフのこれまでの経験と公共図書館での役割

本章では，エスニック・スタッフがナアアブロー図書館での職務にあたる中で，自身のこれまでの経験を基盤にしながら働く姿を確認することができた。

カウンセリングに訪れる移民の背景を持つ利用者の中には，特段何か解決を求めるわけでなく，文化担当員にただ話を聞いてもらいたいとやって来る者が存在していた。彼らは越境以前の出身社会での戦争経験や，デンマーク移住後に受けた差別的処遇等に深く傷ついており，文化担当員に精神的な苦痛を訴えていた。そして，文化担当員は相談者と経験を共有することにより，相談者の「共感する他者」として，相談者の移住先社会における閉塞感を緩和させる一助となっていた。エスニック・スタッフが相談に訪れる移民と経験を共有することは，移住先において閉塞感や孤独に飲み込まれないための生活実践とも捉えることができるだろう。越境を経験した者が移住先において“なんとかやっていく”[10]ための実践なのである。

またエスニック・スタッフは，カウンセリングにおいて，相談者が持参する各種文書を翻訳する際にも自身の経験を基盤にしていた。エスニック・スタッフは，言語から言語への翻訳をするのみでなく，その背後にあるデンマーク社会における法規範や道徳規範を，エスニック・スタッフ自身の経験や知識に基づき，相談に訪れる移民に解説していた。つまり，エスニック・スタッフの豊かな語学力と自身の越境経験を基盤にした解説は，相談者から書類等の翻訳の依頼を受ける際，単なる言葉の翻訳を超え，デンマークにおける規範の伝達に移民当事者の解釈を付与することを可能にしている。このように，自身も移民の背景を持つエスニック・スタッフが，自身の経験を基盤にしながら公共図書館に存在することは，移民の背景を持つ利用者が，移住先において置かれている環境の条件に主体的な解釈を付与することと連動している。

4.4.3. メディエーターとしてのエスニック・スタッフの役割

上に記したように，エスニック・スタッフは豊かな語学力と，自身の経験を基盤に職務に当たっていることが明らかになった。エスニック・スタッフのような役割を担う人物は，しばしば「メディエーター（Mediator）」と呼ばれ，仲介者や橋渡し役と訳されることが多いが，ここで改めて検討する必要があるのは，エスニック・スタッフが「何と何の間」の仲介，あるいは橋渡しをしているのかという点である。エスニック・スタッフが公共図書館における職務の中で行っている「橋渡し」を以下に 2 点から論じたい。

まず 1 点目には，移民コミュニティとデンマーク社会との間の橋渡しが挙げられる。それはつまり，第 1 章の概念規定で示した，＜ホスト社会－移民コミュニティ間越境＞を支える役割と言える。本章で見てきたように，エスニック・スタッフはカウンセリング業務等を通じて，エスニック・スタッフ自身の経験や知識を基盤に，デンマーク社会における法規範や道徳規範を伝達していた。また，デンマーク社会で生き抜いていくために必要なスキルを育成するために，ブックスタートや，IT 講習会の運営に関与していた。そこに見られたエスニック・スタッフの役割は，移民の背景を持つ利用者のデンマーク社会への円滑な適応を促すことにあった。エスニック・スタッフは，移民の背景を持つ利用者が，より密接にデンマーク社会と接点を持つことを支援している。

2 点目に，移民と出身社会との間の橋渡しを指摘したい。これは第 1 章の概念規定で触れた＜出身社会－ホスト社会間越境＞に該当する。上記したように，エスニック・スタッフは，移民の背景を持つ利用者が，デンマーク社会との接点を増加させることを支援していることが明らかになったが，彼らの「橋渡し」の役割はそれのみではない。カウンセリングの中で，特段具体的な相談内容があるわけではないものの，エスニック・スタッフと過去の出身社会での経験を共有させたいと，エスニック・スタッフの元を訪れる利用者の姿を示した。また，利用者とアラビア語を用いてコミュニケーションを取り，利用者の多言語資料への要望を集め，アラビア語コレクションの改善に反映させている姿も明らかになった。このようなエスニック・スタッフの働きは，出身社会との間の接点を維持することに繋がっていると

捉えられる。エスニック・スタッフの存在は，出身社会で経験した過去の記憶へのアクセス，そして出身社会の言語で記述されたメディアへのアクセスを可能にし，出身社会との結び付きの維持を支えている。

上記したように，エスニック・スタッフは，移民利用者とデンマーク社会との間，移民利用者と出身社会との間を橋渡す役割を公共図書館において担っている。エスニック・スタッフが多様な関係を仲介できるのは，エスニック・スタッフ自身が移民の利用者と同じ移民としての背景を持つ当事者であるからに他ならない。エスニック・スタッフが，デンマーク社会か出身社会か，のどちらかではなく，デンマーク社会にも，出身社会にも，移民コミュニティにも関わる，複数の世界のはざまを生きる者であるからこそ，彼らのメディエーターとしての役割が成り立っている。

注・引用文献

[1] International Federation of Library Association and Institutions, Section of Library Services to Multicultural Populations『多文化コミュニティ：図書館サービスのためのガイドライン第 3 版』[*Multicultural Communities: Guidelines for Library Services 3rd edition*] 日本図書館協会多文化サービス委員会訳，日本図書館協会, 2012, 71p.

[2] Office for Diversity, Literacy and Outreach Services. “Spectrum Scholarship Program,” American Library Association. http://www.ala.org/offices/diversity/spectrum, (accessed 2016-02 -05).

[3] Poulsen, Ann K. and Berit S. Jacobsen. “Det urolige bibliotek.” Biblioteksstyrelsen, 2005, p. 17. https://www.statsbiblioteket.dk/forbiblioteker/sbci/om-sbci/projekter/konsulenter/rv10.pdf, (accessed 2016-02-05).

[4] Madsen, Monica C. *Det globale i det locale: Integration og biblioteker*, Copenhagen, Biblioteksstyrelsen, 2005, p. 8. https://www.statsbiblioteket.dk/forbiblioteker/sbci/om-sbci/projekter/konsulenter/global.pdf, (accessed 2016-02-05).

[5] 例えば，Elbeshausen, Hans and Bente Weisbjerg. “Bibliotekaren som Street-walker: Model for Biblioteksarbejdemed Etniske Minoriteter,” *Forbindelser.dk.: Et tidsskrift om Kulturel Mangfoldighed*, 2004. http://forbindelser.dk/bibliotekaren-som-streetwalker-model-for-biblioteksarbejde-med-etniske-minoriteter/, (accessed 2016-02-05).
等がある。

[6] 渋谷真樹「ルーツからルートへ：ニューカマーの子どもたちの今」『異文化間教育』No. 37, 2013, p. 1-14.

[7] “Immigrant Women Run into Language Barrier,” The Copenhagen Post. 22 June 2010. http://www.cphpost.dk/news/national/88-national/49296-immigrant-women-run-into-language-barrier.html, (accessed 2016-02-05).

[8] 和気尚美「デンマークの移民に対する公共図書館サービス：アクターの機能と関係に着目して」『日本図書館情報学会誌』Vol.62, No.3, 2015, p.135-151.

[9] 同上

[10] Certeau, Michel de『日常的実践のポイエティーク』[*L'invention du quotidien 1: Art de faire*]山田登世子訳，国文社, 1987, p.89-91.

第5章　デンマークにおける移民の公共図書館利用

5.1. 本章の目的

ここまで，デンマークの公共図書館における移民サービスを主に提供側から見てきた。第 2 章では，移民サービスの制度的・歴史的な変遷を明らかにし，第 3 章では移民サービスの提供体制について論じた。そして，前章の第 4 章では図書館に勤務する職員として移民サービスの提供側に属しながらも，自身も移民の背景を持つエスニック・スタッフの役割に照射した。

本章からは，移民の背景を持つ利用者を主体に置き，彼らが公共図書館をどのように利用しているのかを明らかにしていく。これまで論じてきたように，デンマークの移民サービスは，地域レベル，国レベル，国際レベルの多様なアクターが協力し，時期によって重点分野や主たる対象の範囲を変えながら提供されている。では移民は，図書館サービスの提供側が描く戦略・計画に沿って公共図書館を利用しているのだろうか。移民の背景を持つ者は，提供側が設定した移民サービスを利用するとしても，提供側の計画をそのまま受け入れているとは限らないだろう。彼らは独自の方法で，彼らの移住先での生活の中の 1 つの場として公共図書館を利用している可能性がある。そのように考えるならば，公共図書館サービスの提供側が移民サービスを計画するという次元とは別に，移民がどのように公共図書館を利用するのかという次元を持つことが必要となる。

よって本章は，デンマークにおいて移民がどのように公共図書館を利用しているかを明らかにすることを目的とする。公共図書館を利用する移民の目線から，どのような背景を持つ移民が，他者と関わりながら，どのように公共図書館を利用しているのかを明らかにしていく。

その際，重視するのはウィーガンドの説く「利用者の生活／人生の中における図書館」という視点である。ウィーガンドは，これまでの図書館研究は図書館内部の閉じられた空間における利用者の過ごし方のみに照射してきたと指摘し，利用者個人の生活や置かれている状況が図書館の利用にどのように影響しているのかという点については十分に検討できていないと述べている[1]。本章では，「利用者の生活／人生の中における図書館」という視点に立ち，移民の声を図書館内部の閉じられた空間の中ではなく，その声が発せられる具体的生活の文脈の中で捉えることを目指す。すなわち，移民の越境経験やデンマークで置かれている状況との繋がりの中で，調査対象者の図書館利用を明らかにしていく。

本章ではまず，5.2 でどのような枠組みの中でインタビュー調査を実施したのかについて述べる。そして，調査から得られたインタビュー・データを 9 の項目に分けて分析し，その結果を 5.3 に示す。最後に 5.4 に分析から導かれた事項をまとめとして記す。

5.2. インタビューの方法と対象

調査地はコペンハーゲン図書館の 1 館であるナアアブロー図書館である。ナアアブロー図書館を利用する移民の視点で，彼らの公共図書館利用を明らかにするために，フィールドワークを行い，フィールドワーク中に許諾が得られた者にインタビューを実施した。調査期間は 2010 年 5 月 22 日から 2010 年 8 月 5 日で，被調査者数は計 10 名である。被調査者の自発的な語りを引き出すために，アラビア語話者に対してはアラビア語を用いてインタビューを行った。またその他の言語話者については英語を用いて調査した。被調査者から得られたインタビュー・データはコーディングを通して，複数の被調査者の発言を横断的に取り上げ，共通のコードが付与されたデータ間にどのような関係性が見られるかを分析した。被調査者であるナアアブロー図書館を利用する移民 10 名の基礎情報は表 5.1 の通りである。

表 5.1.　第 5 章インタビューの日時・場所・対象者の属性

仮名	性別	年代	出身社会（デンマーク移住時期）	インタビュー日時	インタビューの場所	インタビュー言語
バスマ	女性	30代	モロッコ（1997年 ）	2010年5月22日	ナアアブロー図書館外のベンチ	アラビア語
ザフラー	女性	60代	シリア（1990年）	2010年5月26日	ザフラーの自宅	アラビア語
モフセン	男性	40代	モロッコ（2001年）	2010年7月5日	ナアアブロー図書館内の一角	アラビア語
アムナ	女性	40代	パキスタン（1981年）	2010年7月7日	アムナが自営する店の作業室	英語
ハリダ	女性	30代	バングラデシュ（2008年）	2010年7月9日	ハリダの自宅	英語
ワキール	男性	40代	モロッコ（1990年）	2010年7月16日	ナアアブロー図書館内の一角	アラビア語
ハーリク	男性	20代	アルジェリア（2008年）	2010年7月16日	ナアアブロー図書館内の一角	アラビア語
マンスール	男性	40代	アルジェリア（2001年）	2010年8月4日	ナアアブロー図書館内の一角	アラビア語
ハーキム	男性	50代	イラク（2001年）	2010年8月4日	ナアアブロー図書館内の一角	アラビア語
ヒシャーム	男性	30代	シリア（2010年）	2010年8月5日	ナアアブロー図書館内の一角	アラビア語

表 5.1 からわかるように，本調査ではモロッコ，アルジェリア，シリア，イラク，パキスタンの 5 カ国の出身者に対してインタビューを実施した。10 名のデンマークの滞在期間は 4 カ月から 29 年と様々であり，デンマーク語のレベルやデンマーク社会の理解の程度は同様ではない。なお，本調査で用いた質問項目の一覧は表 5.2 の通りである。

表 5.2.　第 5 章インタビューにおける質問の主な構成

番号		見出し	質問事項
1	1-1	インタビューに関する説明	省略
2	2-1	基本属性	お名前は何ですか？
	2-2		ご職業は何ですか？
3	3-1	越境経験	出身はどちらですか？あなたの家族はどちら出身ですか？
	3-2		あなたの母語は何ですか？
	3-3		デンマークにはいつ，どのような目的で来ましたか？
4	4-1	出身社会での図書館利用	出身社会では図書館を利用していましたか？
	4-2		出身社会の図書館とデンマークの図書館に何か違いはありますか？
5	5-1	デンマークでの公共図書館利用	デンマークではどのような館種の図書館を利用したことがありますか？
	5-2		どの位の頻度で図書館を利用しますか？
	5-3		一番直近でいつ図書館を利用しましたか？
	5-4		その時どのように図書館を利用したのか順を追って教えてください。
	5-5		どのような図書館資料を利用しますか？
	5-6		図書館の電子機器類を使うことはありますか？どのように使用しますか？
	5-7		図書館の館内のどの辺のスペースにいることが多いですか？
	5-8		公共図書館は多くのプログラムを開催していますが何か参加したことはありますか？また，それはどのようなプログラムでしたか？
6	6-1	メディア利用	どのようなメディアを使用しますか？
	6-2		その時どの言語を使用しますか？
7	7-1	教育経験	これまで受けてきた教育について教えてください。
8	8-1	地域への帰属意識	デンマークでは近所の人と交流する機会はありますか？
	8-2		地域の行事に参加することはありますか？
9	9-1	交友関係	デンマークに友達はいますか？その方はどのよう

			な民族的背景を持ちますか？
10	10-1	結びの言葉	話したりないことはありますか？
	10-2		さらに何かコメントはありますか？

基本的に表 5.2 の質問項目に従ってインタビューを進めたが, 被調査者の語りの内容に応じて適宜ワーディングや質問の順序を変更した。

5.3. 調査結果

インタビュー・データは，コーディングの作業を通して，1）出身社会の図書館，2）居住地と公共図書館の利用頻度，3）多言語資料コレクション，4）言語の獲得と図書館，5）コンピュータ機器の利用，6）図書館プログラム，7）児童サービス，8）文化担当員，9）場としての図書館，の計 9 項目を抽出し，分析を行った。上記 9 の項目は 10 名の被調査者のインタビュー・データ間に共通した発言が見られた項目や，2 つの相反する発言が見られた項目を中心に抽出した。

5.3.1. 出身社会の図書館

出身社会での図書館の利用経験を，館種を公共図書館に限定せずに被調査者 10 名に質問したところ，4 名は利用経験があると語り，6 名は利用経験がないと答えた。利用経験があると答えたハリダとヒシャムは出身社会での図書館の利用の仕方を以下のように述べた。

・ ハリダ：大学の時は図書館でライブラリー・ワークをしてました。
調査者：ライブラリー・ワークってどんなことですか？
ハリダ：図書館に行って，課題に必要な資料を探してノートに書き写したり，コピーを取ったりするんです。大学の図書館は本を 1 カ月間貸してくれるから，よく行ってました。
＜中略＞
調査者：公共図書館は使ってましたか？
ハリダ：ええ時々勉強しに行っていました。
調査者：本を借りることもあった？
ハリダ：本をちょっと図書館の中で見ることはあったけど，借りた事はないです。借りられるのか，ちょっとわからないですね。コピーはできたのは覚えています。たまにコピーしていましたから。

・ 調査者：シリアでは図書館を利用しましたか？
ヒシャム：たくさん。

調査者：たくさん？どのように利用しましたか。月に何回利用しましたか。
ヒシャム：えーシリアでは5冊。
調査者：月に5冊？
ヒシャム：月に5冊。昔はたくさん時間がありましたから。いつも夜の8時以降に読書ができていたんです。文化や文学や宗教，世界のことについての本を読んでいました。かつては周りの人が知らないことを知ろうとしていたんです。

母国バングラデシュで大学院修士課程を修了しているハリダは，出身社会で大学図書館と公共図書館を利用していたと語った。ハリダは大学図書館を課題に取り組むための場として頻繁に利用していた。その一方，公共図書館については貸出を行っていたかも把握しておらず，複写をする以外にはほとんど活用していなかった。また，ヒシャムの発言では，図書を月に 5 冊図書館から借り，読書を楽しんでいた様子がうかがえる。

一方，出身社会で図書館を利用した経験のない者はインタビューにおいてその理由を語った。アムナとマンスールは出身社会の図書館を以下のように語っている。

- パキスタンでは（図書館を）使ったことはありませんでした。図書館という存在はあったのかもしれないけど。学校に行ける人が使う場所なんです。【アムナ】

- 調査者：アルジェリアでも図書館を利用していましたか？
  マンスール：いいえ。デンマークの図書館のような図書館ではありませんから。学生用の図書館なんです。ここ（デンマーク）のような図書館ではありません。
  調査者：つまり，学校の中の図書館ということですか。
  マンスール：学校の中ではなくて，ここ（デンマーク）にはないかもしれないけど，特に学生のための図書館なんです。

上記の発言から，アムナとマンスールが出身社会の図書館を学校に通う者のための場と認識していたことがわかる。アムナは出身社会であるパキスタンにおいて小学校を中途退学し，家事を手伝いながら生活していた。一方，マンスールは中学校を卒業直後からアルジェリアで仕事を持っていた。出身社会において，彼らは図書館を，公教育にアクセスしている者が学習のために使用するための場であり，公教育を受けていた期間が短い自分自身とは関係のない場であると捉えていた。

表 5.3 は被調査者の出身社会での図書館の利用経験と最終学歴との関係を表したものである。

表 5.3.　出身社会での図書館の利用経験と最終学歴

仮名	出身社会での図書館の利用経験	最終学歴
バスマ	なし	小学校中退
ザフラー	なし	高等学校
モフセン	なし	中学校
アムナ	なし	小学校中退
ハリダ	あり	大学院（修士）
ワキール	なし	中学校
ハーリク	あり	大学学部
マンスール	なし	中学校
ハーキム	あり	高等学校
ヒシャム	あり	高等学校

表 5.3 から出身社会で図書館を利用した経験を有するのは高等学校以上を卒業した者であり，それ以外の者は出身社会では図書館を利用していなかったことがわかる。被調査者の出身社会において，図書館は公教育，特に後期中等教育以上にアクセスしている者の学習のための場として存在していた。出身社会における図書館は，生涯に渡る学習プロセスを支えるための場としては機能しておらず，公教育との接点が途絶えると近寄りがたい場になっていた可能性がある。

教育経験のみでなく，出身社会の情勢も図書館と大きく関係している。ワキールとハーキムは出身社会の情勢の変化と図書館との関係を以下のように語った。

- 正直なところ，（デンマークに来る）前は 1 つも（図書館が）なかったんです。王様，ハサン 2 世の時には 1 つも。でも息子のムハンマド 6 世が王様になって，今はすごく社会全体が良くなりました。図書館にもインターネットが入ったし。図書館は良くなりました。【ワキール】

- “イラクではずっと図書館を利用できていたのに，フセイン政権によって図書館はみな閉鎖されました。”とハーキムは語った。フセイン政権は本を読んでいる人を危険因子とみなし，捕まえていたのだという。（フィールドノーツより）

上記の発言から，ワキールとハーキムの出身社会は情勢が不安定で，図書館が正常に機能できる状態ではなかったことが示されている。ハーキムの出身社会であるイラクでは読書によって命を落とす可能性があると言っても過言ではない。フセイン政権下において，

図書館は政権に対抗する反政府勢力が育つ場として捉えられており，閉鎖を余儀なくされていた。読書をする，図書館を利用するという行為は，当時の政権に取り押さえられる可能性があったため，ハーキムは図書館を利用することが不可能であった。このように出身社会での図書館利用は，社会情勢とも密接に関わっている可能性がある。

5.3.2. 居住地と公共図書館の利用頻度

デンマークにおける公共図書館の利用頻度を尋ねたところ，10 名のうち 9 名は週に 1 回以上公共図書館を利用していることが明らかになった。これは，本調査が公共図書館の利用頻度の高い利用者によるインタビュー・データを中心としていることを示す。ナアアブロー図書館を調査地としたため，ナアアブロー地区に居住している者が 7 名と多く，そのうち 6 名は週に 1 回以上公共図書館を利用していた。

ここで，マンスールとヒシャムの存在に注目したい。マンスールはウスタブローという地区に，ヒシャムはティンビェアという地区に居住しており，ナアアブロー地区からの所用時間はそれぞれ自転車で 15 分程度を要する。ウスタブロー地区や，ティンビェア地区にも公共図書館はある。それにもかかわらず，マンスールとヒシャムはともに日頃ナアアブロー図書館のみを利用していると語る。

- **ウスタブローにも図書館があるんです。私はその近くに住んでいますけど，ここ（ナアアブロー）に毎日来ています。ここが良いんです。ここが一番良い。【マンスール】**

- **ここ以外の図書館は使った事がありません。ここの図書館は妻が教えてくれました。【ヒシャム】**

マンスールとヒシャムの公共図書館の利用頻度は両者ともに高い。マンスールは週に 5 回，ヒシャムは週に 4 回ナアアブロー図書館を訪れている。つまり，両者は居住地区からの距離が近いという理由で利用する図書館を選択しているのではない。では，彼らはどのように利用する図書館を選択しているのであろうか。マンスールは居住地の近隣にあるウスタブロー図書館ではなく，ナアアブロー図書館を利用する理由を以下のように述べている。

- **ナアアブローの図書館は好きだけど，ウスタブローの図書館は好きじゃないです。保守的な感じです。なぜかわからないですけど。デンマーク人だけ。【マンスール】**

上記の発言からマンスールはネイティブのデンマーク人ばかりが利用しているウスタブロー図書館より，ナアアブロー図書館に居心地の良さを感じていることがわかる。既述の

通り，ナアアブロー図書館は地区住民の民族構成上，移民の割合が高いため，ネイティブのデンマーク人のみでなく，多民族が往来している。マンスールは自身と同じように移民の背景を持つ者が多数滞在しているナアアブロー図書館に居心地の良さを感じ，高頻度で利用しているのである。公共図書館を利用する民族の構成や，そこから生み出される館内の雰囲気が被調査者にとって利用館を選択する一因になっている可能性がある。

また，ザフラーの居住地フンディーイ（Hundige）はナアアブロー図書館から離れた場所にあり，電車やバスを乗り継いで片道約 45 分の所に位置している。ザフラーは再婚相手をシリアからデンマークへ呼び寄せる手続きをしており，家族の呼び寄せに関する書類の作成等についてアドバイスを得るために週に 2～3 回ナアアブロー図書館に足を運んでいた。ザフラーの事例において，居住地から図書館までの距離と図書館の利用頻度に影響関係は見られない。ザフラーは，ナアアブロー図書館にイラク出身のアラビア語を話す文化担当員がおり，移民のために行政文書の作成を支援するサービスを提供していると聞きつけ，45 分以上の時間を掛けてナアアブロー図書館に通っている。ザフラーは，自身と同じ移民の背景を持つアラビア語話者が職員にいること，そして，その職員によるサービスが受けられることを理由に，ナアアブロー図書館を利用している。ザフラーの場合，職員の文化的背景や享受できるサービスの内容が利用館と利用頻度を決定している。

一方で，ハリダはナアアブロー図書館から徒歩 5 分の距離に居住しているが，デンマークに移住してから 2 年半の間に図書館を訪れたのは 3 回のみである。ここからも居住地と図書館との距離は必ずしも図書館の利用頻度と影響しているわけではないことがわかる。ハリダは自身のデンマークでの図書館利用を以下のように語っている。

- **ナアアブロー図書館にはヒンディー語－デンマーク語の辞書を使いに行ったことがあるけど，3 回だけ。家にはデンマーク語－英語の辞書があって，それでわかりにくい事がある時に図書館に辞書を借りに行くの。【ハリダ】**

上記の発言では，ハリダが図書館の利用を語学学習のための辞書の利用に限定していることがわかる。ハリダはデンマーク語学校に通学中で，語学学校の課題に取り組む際，辞書を使用している。手持ちのデンマーク語－英語の辞書では理解が困難な場合に，ナアアブロー図書館を訪れ，デンマーク語―ヒンディー語の辞書を使ったという。ハリダは図書館を語学学校の補完的な場として捉えており，デンマーク語学習のプロセスにおいて必要が生じた場合にのみ図書館を訪れている。

5.3.3. 多言語資料コレクション

ナアアブロー図書館では多言語資料を置いたスペースを「国際図書館」と称し，館内の一角にまとめて開架している。同図書館が多言語資料を所蔵していることは被調査者 10 名全員が把握しており，このサービスが移民利用者に既に認知されていた。しかしながら，その

コレクションについては改善を求める声があがっていた。まず指摘されたのはコレクションの古さである。多言語資料の古さについてモフセンとバスマは以下のように語る。

- モフセン：（CD や DVD は）古い。古すぎるんです。
  調査者：じゃあ CD や DVD は使わないですか。
  モフセン：使わないです。古いから。見たことないです。新聞は新しいんだけど。本はみんな 1987 年とか 1990 年とかなんです。すごく古いですよ。新しいのがないんです。新聞も遅れてくるからもう少し早い方がいいです。

- “アラビア語の映画を借りたり，アラビア語の雑誌を見たりもする”とバスマは自身の図書館の利用の仕方を付け足した。“雑誌は古いのしかないんだけど”と言葉を足した。（フィールドノーツより）

モフセンとバスマは，ともにナアアブロー図書館において多言語資料を利用した経験を有している。モフセンはアラビア語の CD，DVD，図書の出版年が古いことを指摘しており，またバスマも雑誌について出版年の古さについて触れている。

またワキールとハーリクは，アラビア語の新聞について以下のように述べた。

- 調査者：ここの図書館にはアラビア語の新聞がありますね。それを読むことはありますか。
  ハーリク：私は使ったことはありません。
  ワキール：サウジアラビアの新聞がたしかありました。アラブと言っても何千キロも遠く離れていますから。遠く離れたサウジアラビアの新聞は読まないですよ。

ナアアブロー図書館の多言語資料のコレクションは言語別に収集されており，国別ではない。ナアアブロー図書館が定期購読しているアラビア語の新聞，『アル・リヤド（Al-Riyadh）』はサウジアラビアの新聞社が刊行しているもので，ワキールの出身国であるモロッコとは地理的に遠く離れている。モロッコとサウジアラビアとは同じアラビア語を公用語にしている国であっても，文化や社会状況に差異がある。そのため，ハーリクとワキールは『アル・リヤド』を閲覧しないと述べているのである。ハーリクとワキールは，出身社会の情報を知るために新聞を読むのであって，アラビア語であれば何れの新聞でも良いというわけではないことを指摘している。

5.3.4. 言語の獲得と図書館

(1) デンマーク語に対する意識

本調査の被調査者 10 名全員がデンマーク社会で生きていくためにはデンマーク語の習得

が必須であると発言した。マンスールはデンマーク語習得の必要性について以下のように語った。

- 言語は必ず理解できないといけないんです。（例えば）日本に行ったなら，日本語ができなきゃいけないんです。できないとね。言葉を理解してこそ，その国の色んなことがわかります。【マンスール】

マンスールは，移住先において言語を習得することは移住先社会の事情を理解するために必要なことだと考えており，デンマーク語学習の重要性を説いている。デンマークへ移住した移民は，政府が無償で提供するデンマーク語学習の機会を得ることができる。デンマークに滞在する移民は語学学校に通学し，専門のデンマーク語教師による授業を受ける中でデンマーク語を体系的に学習することができる。しかしながら，語学学校内での学習のみではデンマーク語を流暢に使えるようになることは困難であるとモフセン，アムナ，ワキールの 3 名は指摘した。

- 言語は学校で文法とかいろいろ習います。でも学校で習っただけでは実生活では使えない。デンマーク人とたくさん話さないと身に着きません。つまり学校で習っただけでは話せないんです。【モフセン】

- 学校に行っただけでは言語は学べません。社会活動の中で学ぶんです。私は（デンマーク社会の）いろんなことを知っています。文化とか歴史とか，デンマーク人に聞いて学ぶんです。デンマーク語だけ話せればいいんじゃなくて，内側から学ぶ。文化や歴史から。そうしたら，デンマーク人も“あっ，この人はわかってる”って思って打ち解けてくれます。【アムナ】

- 語学を仕事の中で身につけたんです。私は昔レストランで働いていました。デンマーク料理の。その時にデンマーク語を覚えたんです。（語学）学校には 5 週間通いました。5 週間から 6 週間くらいかな。でも，実際にデンマーク語が身についたのはレストランでなんです。【ワキール】

上記 3 者は，語学学校に通い，文法や単語をインプットするのみでなく，語学学校外の場で積極的にネイティブのデンマーク人と話す機会を作ることがデンマーク語の習得とデンマーク社会の理解のために必要であると認識している。

被調査者の中には，デンマーク語学習の場としてナアアブロー図書館を利用している者が確認できた。ナアアブロー図書館の図書館資料をデンマーク語学習のために使用しているバスマは，資料の利用の仕方を以下のように語っている。

・　バスマは“デンマーク語の子ども用のお話を借りることがある”と話した。子ども用の本は単語がわかりやすいのでデンマーク語の勉強に良く，デンマーク語の先生も薦めるので使っているという。（フィールドノーツより）

上記の発言から，バスマがデンマーク語で書かれた児童向けの絵本をデンマーク語の学習に転用していることがわかる。バスマは，児童用の図書は文字が大きく，平易なデンマーク語表現が使用されており，イラストも挿入されているためデンマーク語の初学者でもストーリーを追いやすいと語った。「国際図書館」の書架には成人移民を主な対象にしたデンマーク語学習用の教材が開架されている。しかし，バスマが挙げたデンマーク語の児童用図書は「国際図書館」ではなく，児童サービスコーナーに配架されている資料である。バスマは，語学学校のデンマーク語教師から助言を受け，語学学習目的の教材以外の資料をデンマーク語学習のために取り入れている。

またアムナも語学学習用教材以外の資料をデンマーク語の学習に活用している。

・　アムナ：録音資料を借ります。忙しい時でも音を流しておけば聞けるでしょ。
調査者：それは子ども用のものですか。
アムナ：大人用もありますよ。デンマークについてのお話や，いろんな話がありますよ。本全体を音として聞けるんです。私たちは耳からクルアーン（コーランのこと）を覚えるでしょ。だから耳から聞いて理解することには慣れているんです。それに，座って本を読む時間がないから。

アムナの場合，録音図書をデンマーク語学習に用いている。アムナは，ムスリムがクルアーンを耳から聞いて暗唱しているため，聴覚から言葉を習得することに優れていると述べている。また，自営店の経営や，家事・育児で多忙なアムナは，腰を落ち着けて本を読む時間を確保することが難しいが，録音図書であれば他の作業をしながら視聴することができるため，彼女の生活様式に適していると言った。アムナは自身の生活様式や特性に合わせ，自身に適した読書方法として，録音図書を利用していた。アムナは主体的に図書館資料をデンマーク語学習に活用させているのである。

注目したいのは，バスマ，アムナともに母語では非識字という点である。両者ともに出身社会では小学校を中退しており，母語で文字の読み書きをすることができない。デンマークに移住したことをきっかけにデンマーク語習得の必要性が生じ，出身社会ではない土地で生まれて初めて識字能力を身につけている。バスマ，アムナの 2 名は，独自に工夫して多様な図書館資料を使用しながら，生まれて初めての識字能力の獲得に取り組んでいた。

図書館資料の利用のほか，移民はナアアブロー図書館を移民仲間からデンマーク語を習う場として利用していた。移民同士でのデンマーク語学習についてヒシャムは以下のよう

に語る。

- ヒシャム：ここ（ナアアブロー図書館）に来ている目的の１つは語学を学ぶことです。
  調査者：ダバンから？（ナアアブロー図書館に勤務する文化担当員の名前）
  ヒシャム：ダバンからも教わるし，他にも友達がいるから。
  調査者：それはデンマーク人ですか。
  ヒシャム：いいえ。彼らはアラブ人です。でもデンマークに長く住んでいるのでデンマーク語はとても上手です。デンマーク人のように。

ヒシャムはインタビュー時，デンマークへ移住して 4 カ月程度であった。彼はデンマーク語習得の必要を痛切に感じており，ナアアブロー図書館を訪れては移民の背景を持つ仲間から個人的にデンマーク語の基本単語や基本会話を習っていた。ここで言う仲間には，ナアアブロー図書館で出会った者や，ナアアブロー図書館の近隣にあるモスクで出会った者が含まれている。また，ナアアブロー図書館に文化担当員として勤務するイラク出身のダバンの名前も挙げている。ヒシャムの発言が示すように，ナアアブロー図書館においてヒシャムのデンマーク語学習の指導役を担っているのは，アラブ圏出身者である。ヒシャムは，自身と同様にアラブを出身社会とし，外国語としてデンマーク語を学習した経験を持つ者からデンマーク語をインフォーマルに学んでいた。

5.3.5. コンピュータ機器

被調査者の中にはコンピュータ機器を利用するために，公共図書館に足を運ぶ者も存在する。ハーリクは主にコンピュータを利用することを目的に，ナアアブロー図書館を訪れている。

- ハーリク：私はよく（ナアアブロー図書館）に来ています。私は家にコンピュータがあるんです。インターネットもあるんです。けれど，スキャナーはないんです。最初のころは（デンマークに来たばかりの頃は）毎日来ていました。
  調査者：毎日？毎日来ていたんですか。
  ハーリク：はい。コンピュータがなかったので。でも今はコンピュータもインターネットもあるので，ここ（ナアアブロー図書館）に来るのは時々です。

  今日は友達（ワキール）がスキャナーが必要だったから来たんだけど。今，私はうちに何でもあるからね。コンピュータも持ってるし，インターネットも。でもスキャナーだけはない。スキャナーが必要だったから来たんです。【ハーリク】

ハーリクは以前はコンピュータを個人的に所有していなかったため，毎日ナアアブロー

図書館に足を運び，コンピュータを使っていたが，コンピュータを個人所有するようになってからは自宅からインターネットにアクセスできるようになったため，図書館の利用頻度が減ったと語っている。このことから，ハーリクの主たるナアアブロー図書館の利用目的が，コンピュータ機器の利用であることがわかる。また，現在もスキャナーの利用のためにナアアブロー図書館を訪れていることから，コンピュータ機器の利用が図書館利用の主な目的であることに変化がないと言える。自身で所有していない電子機器を使う必要が生じた際，ハーリクは所有する機器を補完する役割としてナアアブロー図書館を訪れていた。

ナアアブロー図書館におけるコンピュータ機器の利用に関する発言は，主に男性の被調査者に見られた。コンピュータ機器をナアアブロー図書館で利用していると語ったのは 10 名中 4 名で，全員男性であった。一方，ナアアブロー図書館でコンピュータ機器を利用している女性は皆無であった。

5.3.6. 図書館プログラム

被調査者にイベントや講習会等の図書館プログラムに参加した経験があるか否かを尋ねたところ，約半数の 6 名が参加した経験があると答え，4 名が今まで一度も参加したことがないと語った。表 5.4 は被調査者のイベントや講習会への参加経験を表したものである

表 5.4. 図書館プログラムへの参加経験

仮名	イベント・講習会の参加経験	参加したイベント・講習会名
バスマ	あり	子どものダンスイベント
ザフラー	あり	コンピュータ講習
モフセン	なし	
アムナ	あり	地域の母※
ハリダ	なし	
ワキール	なし	
ハーリク	なし	
マンスール	あり	トーク・クラブ，コンピュータ講習
ハーキム	あり	トーク・クラブ
ヒシャム	あり	トーク・クラブ

注)「地域の母」とは，講習を修了した移民女性を「地域の母」に任命し，「地域の母」が他の移民女性に，育児，保健，教育，各種行政サービス等，デンマークで生活していく上で必要な情報を口頭で伝達していくプログラムである。

図書館プログラムに参加した経験を持つマンスールはその経験を以下のように語っている。

・　マンスール：コンピュータ講習。火曜日に。水曜日にはあの活動。
　調査者：トーククラブ？
　マンスール：はい。私はここでいろいろ参加してますよ。

マンスールは，ナアアブロー図書館で開催されているプログラムについて熟知しており，曜日別にどのようなプログラムが行われるのかを把握している。彼は，全てのプログラムの中から関心のあるものを選択し，参加している。マンスールは，云わばプログラムの常連参加者と言える。また，バスマは図書館プログラムについて以下のように話す。

・　調査者“図書館ではいろんな活動をしているんだけど，今までに参加したことある？”と質問。するとバスマはナアアブロー図書館がバスマの長女が通っている小学校と協働し，様々な国のダンスを踊るダンスグループを組織しているのだと話した。そのダンスグループの写真はナアアブロー図書館の児童スペースに展示してあるので，それを見れば様子がわかると教えてくれた。バスマはナアアブロー図書館の一角で娘が踊る姿を毎回ではないが，仕事や語学学校がない時に見学するのだと言った。（フィールドノーツより）

バスマはナアアブロー図書館内で実施された子どものダンスイベントを見学したことがあると話す。バスマの場合，自身が学習を目的にプログラムに参加しているのではなく，娘が参加する様子を見学するために図書館プログラムにアクセスしている。

一方，一度も図書館プログラムに参加したことのないハリダは以下のように語っている。

・　調査者：図書館は本やCDを貸すだけではなくて，その他の活動もたくさんしているのね。例えば，＜中略＞宿題支援。他にもたくさんの活動があるんだけど，何か参加したことある？
　ハリダ：いいえ。参加したことは1度もないわ。どんな活動があるかも知らないし。

上記のように，ハリダは図書館プログラムに一度も参加したことがなく，その存在すら知らなかったと話す。一方，図書館プログラムの存在は把握していても，その対象者を誤って認識している場合もある。

・　それ（講習会やイベントなどの活動）は18歳とか20歳とかが参加するものです。それは一若い子のための活動なんです。わかります？私はもうそんなに若くないし。【モ

フセン】

- 調査者：うん。あー図書館には子どもや大人のための活動がたくさんあります。例えば，コンピュータ教室とか。
  ワキール：ここにはないです。別の学校に行かなくちゃ。
  調査者：あります。ありますよ。
  ワキール：この図書館（ナアアブロー図書館）に？
  調査者：うん。この図書館（ナアアブロー図書館）に。
  ワキール：子どものために教えてるんでしょ。
  調査者：大人のためです。

モフセンとワキールは共通して，ナアアブロー図書館でのプログラムを，児童を対象としたものであると認識していた。そして，自身はプログラムの参加対象に含まれていないと考えていた。このように，そもそも図書館プログラムの存在を知らない，あるいはプログラムの参加対象者を子どもに限定して捉えており自身には無関係であると考えている利用者の存在が明らかになった。

5.3.7. 児童サービス

被調査者の中には，子ども用の図書や DVD 等を借りる目的で公共図書館を利用するという者も見られた。アムナは児童サービスの利用について以下のように語った。

- いつも子どものために CD とか DVD とか本を借りていました。子どもが小さかった時の話ですよ。【アムナ】

アムナの子どもは既に親の手を離れて自立して生活しているため，過去を振り返っての発言であるが，子どもの幼少期にはナアアブロー図書館から児童用の CD や DVD を借りていたと言う。ワキールとバスマもナアアブロー図書館で児童用の DVD を借りると発言している。ワキールは，児童用 DVD を借りる理由として，無料であることを挙げている。

- DVD，子どものための。そのために図書館に来ます。子どもの DVD のために。デンマークでは（子どもの DVD は）高いんです。200 クローナ（日本円で約 3,000 円）。とても高いんです。でもここだったら無料ですから。【ワキール】

ワキールは清掃員で，家庭には 10 歳，8 歳，6 歳の 3 人の子どもと妻がいる。彼は家計の状態にゆとりはなく，子どもが視聴したがっている DVD を毎回購入することは不可能であると言った。公共図書館であれば，児童用の DVD を無料で借りることができるため，経

済的な心配をすることなく子どもに DVD を見せることができるのだと述べた。また，バスマも公共図書館の DVD を利用する理由に無料で利用可能であることを挙げている。

- **連れている 6 歳の娘はアニメの DVD が大好きで，ここの図書館（ナアアブロー図書館）に来れば無料でそれらを借りることができるし，ここにないものでも，他の図書館から借りてくれるから，頻繁に来るのだとバスマは言う。（フィールドノーツより）**

バスマは公共図書館を通じて子どものための DVD を無料で借りられることを喜んでいた。そして，彼女は図書館間相互貸借のネットワークを利用すれば，ナアアブロー図書館に開架されている DVD 以外にも多種多様な資料を利用できることを知った。ワキールとバスマは，従来からデンマークの公共図書館が維持してきた無料での資料提供や図書館間相互貸借等の図書館制度を利用し，児童用 DVD にアクセスしている。

また，既述したように，バスマが児童を対象とした資料を娘のためではなく，自分自身の語学学習のために活用していた実践も看過できない。

- **バスマは“デンマーク語の子ども用のお話を借りることがある”と話した。子ども用の本は単語がわかりやすいのでデンマーク語の勉強に良く，デンマーク語の先生も薦めるので使っているという。（フィールドノーツより）**

バスマは文字が大きく挿絵入りで読みやすい児童用の図書資料を自身のデンマーク語の学習用に活用していた。バスマは児童用資料を文字通り児童だけのものと限定して捉えず，成人も利用し得る資料として，自身の生活に採り入れていた。

5.3.8. 文化担当員

第 4 章で既に述べたように，ナアアブロー図書館に勤務する文化担当員のダバンは，移民のデンマーク社会への統合を支援する専門職員として 2008 年からコペンハーゲン・コムーネに雇用されている。ダバン自身も移民経験を有するイラク出身のクルド人で，出身社会の政情不安により 1993 年にデンマークへ移住した。デンマークに移住後，進学する機会を獲得し，大学にて社会福祉について学んだ。現在は自身の越境経験を活かし，コペンハーゲン・コムーネの文化担当員としてナアアブロー図書館において移民がデンマーク社会で教育や就職の機会を獲得する過程を支援している。文化担当員のダバンはクルド語，アラビア語，デンマーク語，英語の 4 ヶ国語を流暢に話す。そのため，彼を頼ってナアアブロー図書館を訪れる移民も存在する。ダバンについてザフラー，マンスールの 2 名は以下のように語っている。

- **“ダバンは親切でよくサポートしてくれる素晴らしい人だ。”とザフラーはダバンを**

評価した。ザフラーは現在再婚相手を出身社会のシリアから呼び寄せるための申請書類を作成しており，それをダバンがサポートしてくれていると語った。（フィールドノーツより）

- マンスール：彼は素晴らしい人ですよ。すごく良くサポートしてくれるんです。とても優しい人です。
  調査者：賢いですし。
  マンスール：はい，賢いですね。彼は人を助けるのが本当に好きなんです。私は彼のこと，すごく好きです。
  調査者：私もです。毎日彼と話すんですか。
  マンスール：毎日彼と話していますね。私が問題を抱えている時，彼は助けてくれます。良い人です。私は毎日ここに来て，彼と会って挨拶を交わしています。良い人です。

ザフラーとマンスールはインタビューの中でダバンの人柄や仕事ぶりを高く評価している。また，マンスールの発言から，ダバンが日常の些細な問題も気軽に相談しやすい相手であることがうかがえる。ヒシャムはこの移民の支援体制を以下のように表現している。

- ここの図書館は時々サポートしてくれます。外国人が居て，言葉がわからない人がいたら助けてくれたり，翻訳してくれたり。デンマーク人ではなく外国人が手伝ってくれます。職員として。ダバンのように。外国人が外国人を手伝っています。【ヒシャム】

ナアアブロー図書館はダバン以外にも，司書やプロジェクト別の担当員として移民の背景を持つ者を採用している。また，配架作業のアルバイトの中にも移民 2 世の若者が多数存在する。移民の背景を持つスタッフによる移民の支援を指し，ヒシャムは“外国人による外国人の支援”と表している。この発言は，ヒシャムがデンマーク人による移民の支援と，移民による移民の支援とを区別していることを意味する。ヒシャムはダバンと顔なじみの関係で，しばしばダバンに相談を求めており，ヒシャム自身，“外国人による外国人の支援”を受けている。

5.3.9. 出会いの場としての図書館

被調査者の中にはデンマークにおいて出身社会とは異なるコミュニケーションの取り方に違和感を抱いている者がいた。また，ネイティブのデンマーク人と移民との間に壁を感じ，疎外感や孤独感に苛まれている者もいた。鬱屈した感情をモフセンとバスマは以下のように表した。

- モフセン：モロッコと比べると交流が少ないです。仲良くなるとたくさん話すんですけ

ど，それまでに距離があるというか。
調査者：わかります。寂しさを感じますか。
モフセン：そうですね。少し。

・　街中を歩いている時に時々嫌な目つきでみられたり，悪口を言っているのを聞いてしまうのだとバスマは説明した。“以前，通りすがりにデンマークから出てけ！って怒鳴られたこともあったわ。”と話すバスマ。そして，“とても悲しかった。”と 2 回言った。（フィールドノーツより）

モフセンは，出身社会とは異なる交流の取り方や少ない会話量に違和感を抱いていた。さらにバスマはネイティブのデンマーク人から差別的扱いを受け，精神的に傷ついた経験があり，以来ネイティブのデンマーク人と必要以上にコミュニケーションを取らないようになったと語った。

デンマーク社会において抱く疎外感や孤独感といった感情を埋めるために，他者とのコミュニケーションの場としてナアアブロー図書館を訪れている被調査者がいる。マンスールは週 5 回ナアアブロー図書館を利用している常連の利用者である。彼はナアアブロー図書館を利用する主な目的を，人と出会い交流することにあると語った。

・　マンスール：外で誰かと話したいんです。家の中に居続けることはできません。
調査者：コミュニケーションが必要？
マンスール：そうそう。コミュニケーション。誰かとコンタクトが取りたいんです。家でインターネットはしたくないんですよ。ここ（ナアアブロー図書館）に来たいんです。家に閉じこもるのは良くない。＜中略＞外に出なくちゃ。すごく大事なことです。私は家にはあまり居ません。外に出て外の人と関係を作ります。デンマークにいるムスリムたちはあんまり外に出てお茶を飲む人は居ません。みんな貧しいんです。外で人に会って話さなくちゃ。ずっと家の中にいたら，牢獄みたいですよ。
調査者：うん。友人はたくさんいるんですか。
マンスール：たくさん居ますよ。みんなここ（ナアアブロー図書館）で働いています。みんな私が毎日ここ（ナアアブロー図書館）に来るって知っているんです。

マンスールはナアアブロー図書館に勤務している職員を指して，友人と表した。彼は図書館に勤務する職員と交流することを楽しみに，毎日ナアアブロー図書館を利用していた。マンスールは，資料を借りること，コンピュータ機器を利用すること，講習に参加すること等以上に，職員と交流できることに価値を置き，ナアアブロー図書館を利用している。実際，マンスールはナアアブロー図書館の「有名人」である。彼がナアアブロー図書館に来館すると，館内に勤務する職員は皆「やあ，マンスール。調子はどう？」と挨拶する。マンスール

はナアアブロー図書館の職員と顔なじみの関係を構築することにより，デンマークにおける日々の孤独を何とかやり過ごしていた。

職員との交流以外に，移民間の交流のためにナアアブロー図書館を利用している者も存在する。ヒシャムはマンスールらとの交流をナアアブロー図書館の利用目的の 1 つに挙げている。

- **うちに居て，ちょっと疲れたりしたら，ここ（ナアアブロー図書館）に来ます。ちょっと本を読んだり，インターネットをしたりして，友人と会います。＜中略＞マンスールに会ったり，アリーに会ったり。【ヒシャム】**

インタビュー時，ヒシャムはデンマークに移住して 4 カ月であったが，彼は既にナアアブロー図書館内に馴染み社会を形成していた。ヒシャムはナアアブロー図書館で，自身と同様にアラブを出身とする者と交流を深め，**“友人”**と呼べる関係を築いていた。ナアアブロー図書館の**“友人”**は複数名存在した。事前に連絡を取ることなく，気が向いた時にナアアブロー図書館を訪れれば，誰かしらの**“友人”**に会うことができていた。

このように，マンスールやヒシャムは，図書館内に勤務する職員や，移民の背景を持つ他の利用者との間に馴染み社会を形成していた。彼らは特段面会の約束を交わすことなく，**“友人”**と交流しており，彼らの馴染み社会は偶発的な出会いによって成り立っていると言える。

5.4. 第 5 章まとめ

5.4.1. 移住先での安息の場としての図書館

ナアアブロー図書館におけるインタビューを通して，被調査者の中にはデンマーク社会での人々のコミュニケーションの取り方や会話量の少なさに寂しさを感じており，家庭の中に閉じこもっていては拭い去れない孤独感や疎外感を癒すために公共図書館を高頻度で利用している移民が存在することが明らかになった。つまり，彼らは移住先での孤独感や疎外感を癒す「安息の場」として図書館を利用していると言える。

「安息の場」としての図書館の利用の仕方には 2 種類があった。1 つは図書館に勤める職員との交流により安息を得ている場合である。ナアアブロー図書館に勤務している職員を友人と感じており，図書館職員との交流を楽しみにナアアブロー図書館を毎日利用している被調査者が存在した。職員との交流を主たる目的として公共図書館を利用しているのである。

また移民間の交流から安息を得ている場合も確認できた。アラブ圏を出身とする移民がナアアブロー図書館に集って馴染み社会を形成し，アラビア語で会話したり，デンマーク語の練習をしたりしていた。このような図書館利用は，移住先社会において孤独に押しつぶされずに生き延びるための，移民の主体的な生活実践とも捉えることができるだろう。同じ文

化的背景を持つ者が，共通の言語を用いて情報を交換し，デンマーク語を学び合うこにより，移民は公共図書館を移住先での生活を支える場として再編している。「安息の場」としての図書館は，同時に移住先での生活を支える場でもある。

5.4.2. 国境間の越境と図書館に対する認識の変化

本章の調査から，被調査者の出身社会では図書館は豊かな教育経験を有する者が利用する場であるとみなされていた可能性が示された。公教育，特に後期中等教育以上にアクセスしている者が，出身社会における図書館の主な利用者となっていた。

一方，被調査者のデンマークでの図書館の利用をみると，教育経験とは無関係に利用していることがわかる。表 5.5 は被調査者の出身社会での図書館の利用経験とデンマークでの図書館の利用頻度を表したものである。

表 5.5. 出身社会とデンマークでの図書館利用

仮名	出身社会における図書館の利用経験	最終学歴	デンマークでの公共図書館の利用頻度
バスマ	なし	小学校中退	週1回
アムナ	なし	小学校中退	週1回
ワキール	なし	中学校	月1～2回
モフセン	なし	中学校	週4回
マンスール	なし	中学校	週5回
ザフラー	なし	高等学校	週2～3回
ハーキム	あり	高等学校	週2～3回
ヒシャム	あり	高等学校	週4回
ハーリク	あり	大学学部	週1回
ハリダ	あり	大学院（修士）	移住してから3回

表 5.5 は，出身社会での図書館利用に最終学歴との関係が見られるのに対し，デンマークでの図書館の利用頻度は学歴とは無関係であることを示している。最終学歴が中学校で，出身社会では一度も図書館を利用したことのなかった者が，デンマークでは週に 4 回，5 回と公共図書館を利用している。出身社会からデンマークへ自身の身体が国境を越えたことを経て，被調査者の図書館に対する認識が「学生のための場」から「誰でも利用可能な場」へと変化したと言える。国境を跨ぐ物理的な身体の越境を経て辿り着いたデン

マークの地で，移民は老若男女，人種や学歴とは無関係に利用可能な場として公共図書館を発見したのである。

出身社会において家庭の事情により止むを得ず小学校を中退し，母語では非識字の状態であったが，デンマークに移住したことをきっかけに，公共図書館の資料を利用して生まれて初めて識字の獲得に取り組む被調査者がいた。国境を跨ぐ物理的な身体の越境を経て公共図書館に対する認識が変化したことで，出身社会では獲得できなかった識字というスキルの獲得に挑むことが可能になったと言える。

5.4.3. 移民の図書館利用と越境

本章の調査から，被調査者がナアアブロー図書館の所蔵しているアラビア語の DVD や雑誌を利用し，出身社会の言語と接している様子が明らかになった。また，デンマークへの移住経験を有する文化担当員と交流することを楽しみにナアアブロー図書館を訪れている被調査者の存在も示された。そのほか，ナアアブロー図書館に出身社会が同じ移民同士で集まり，デンマーク語を学習しているという者も存在した。このように，ナアアブロー図書館は，移民が移住先において出身社会との接点を維持する場として機能していることがわかる。移民は公共図書館において，地理的な距離にかかわらず出身社会との間に結び付きを維持し，想像上で出身社会とホスト社会の間の越境を経験しているのである。

一方で，ナアアブロー図書館は移民がデンマーク社会の規範や習慣，言語と出逢う場としても機能していた。デンマーク語学習のための資料を利用する目的でナアアブロー図書館を訪れている被調査者が存在する。また，デンマークにおいて法律に関係する行政文書を作成する際，その作成方法がわからず，ナアアブロー図書館で指導を受けている者もいた。移民はデンマーク社会へ馴化していくための方途としてナアアブロー図書館のサービスを発見している。つまり，移民は公共図書館において，デンマーク社会との接点を増加させており，移民コミュニティとデンマーク社会との間の越境を経験していると言える。

このように，本章の調査結果が示す範囲では，移民は一方で出身社会の文化や言語との接触の機会を持つために，出身社会とホスト社会との間を越境する場として公共図書館を利用し，また一方ではデンマーク社会の規範の理解や言語の習得を目的に移民コミュニティとデンマーク社会との間の越境を経験する場として公共図書館を利用していた。

デンマーク社会における移民の立場は単純なものではない。そのことは，利用館を決める際にデンマーク人が多い図書館は居心地がよくないと語った発言や，ナアアブロー図書館での移民による移民の支援体制を“**外国人が外国人を支援**”と表現していることからわかる。自分たちはいつまでも“**外国人**”であり，ネイティブのデンマーク人とは異なる存在だと認識している心境が垣間見られる。そのような出身社会と移住先社会との間に揺れる移民の立場と，本研究で明らかになった移民の図書館利用とは密接に関係していると考えることができる。出身社会の情報に接触したいという感情を抱く一方で，デンマーク語を習得し，デンマーク社会に適応していく必要性を感じており，この 2 つの感情が移民の公共図書館

利用に表れている。

注・引用文献

[1] Wiegand, Wayne A. “To Reposition a Research Agenda: What American Studies Can Teach the LIS Community About the Library in the Life of the User," *The Library Quarterly*, Vol.73, No. 4, 2003, p. 369-382.

第6章　移民を対象とした公共図書館プログラムのエスノグラフィー

6.1. 本章の目的

本章では，公共図書館において開催されているプログラムに焦点をあてる。公共図書館は，講座や読書会等，様々な機会を作り，館内の一角や，時には館外において各種催しを展開している。その呼称は統一されておらず，集会活動，イベント，催し等，様々であるが，本章ではプログラムという名称を採用する[1]。本研究が対象とするデンマークでは，公共図書館のプログラムへの移民の参加が確認されており，2012 年に行われた『デンマーク文化習慣調査』[2]では，全体より高い割合で移民が図書館のコースや講習に参加していると報告されている。本章では，公共図書館のプログラムが，移民によって移住先での生活のどのような文脈の中でどのように利用されているのか見ていく。

公共図書館におけるプログラムには，図書館側が企画から運営まで担っているものと，利用者が企画・運営するものとがある。後者の場合，図書館は，いわば場所貸しのような役割に徹することとなる。本章で扱うのは，図書館側が企画や運営に関与しているプログラムである。図書館側がプログラムを設けるということは，図書館側によって定められる意図・目的が存在することを意味する。そして，そこには当該社会の諸力が作用する可能性がある。では，参加者はプログラムを，図書館側が意味づけた機能をもつ場として，そのまま従順に利用しているのだろうか。マッケンジーらは，カナダの公立図書館分館のプログラム室において開催された女性対象の編み物グループと，乳幼児対象のお話会の様子を 2003 年から 2004 年にかけて観察した。そして，参加者が公立図書館のプログラム室という公共スペースを私的スペースに再編している姿を描写している[3]。本章では，移民の背景をもつ利用者を，図書館サービスの提供者側が意図する目的をそのまま受容する者としてではなく，プログラムが行われる場を主体的に利用する者として捉える。そして，彼らが移住先での生活のどのような文脈の中で，いかにして図書館プログラムに参加しているのかを明らかにしていく。

その際，プログラム全体の様子を示すのみでなく，プログラムの参加者のライフヒストリーに迫り，移民個人の生活・人生における図書館プログラムの意味を示して行く。

具体的には，コペンハーゲン図書館の分館の 1 つである，ナアアブロー図書館を舞台に，デンマーク語「トーククラブ」，アラビア語「トーククラブ」，「地域の母」という 3 つのプログラムの様子を描き出す。以下では，まず対象とするプログラムの概要を説明する（6.2）。その後，デンマーク語「トーククラブ」（6.3），アラビア語「トーククラブ」（6.4）の全体像を示した上で，「トーククラブ」に参加する移民のライフヒストリーを示す（6.5）。次に，「地域の母」の全体像（6.6）を明らかにした後，「地域の母」に参加する移民のライフヒストリーを提示する（6.7）。そして本章のまとめを章の末尾（6.8）に記す。

6.2. プログラムの概要

6.2.1. 「トーククラブ」

「トーククラブ」はナアアブロー図書館の一角で行われている活動で，元々は移民のデンマーク語での会話力の向上を目指したものであった。また，さらにはネイティブのデンマーク人と移民との間にコミュニケーションの場を設けることで存在している誤解や溝を埋めることを目指して活動が始動した。その後，アラビア語を学びたいというネイティブのデンマーク人からの要望と，アラビア語を教えたいというアラブ圏出身の移民からの希望が重なり，アラビア語の「トーククラブ」が展開されるようになった[4]。

いずれの「トーククラブ」も，参加希望者の事前の申し込みは必要ない。参加希望者は当日直接活動場所に顔を出せば活動に参加できる。また参加基準はないため，語学力やデンマークでの滞在年数等とは無関係に参加の意思がある者は誰でも活動に加わることが可能である。

なお，本章ではデンマーク語の「トーククラブ」を，デンマーク語「トーククラブ」，アラビア語の「トーククラブ」を，アラビア語「トーククラブ」と記すこととする。

「トーククラブ」の参加者のうち，デンマーク語「トーククラブ」の参加者の一人に対して約 2 時間の半構造化面接を 2 回行った。これは，被調査者の生活や人生において「トーククラブ」という活動が持つ意味を，ライフストーリーとして明らかにすることを目的として実施したインタビューである。

6.2.2. 「地域の母」

「地域の母」は，ドイツのベルリンでの活動事例を参考にデンマークに取り入れられた活動である[5]。この活動の目的は，孤立している女性を支援することにある。女性たちが自分自身や自身の家族に関する事項について，自らが正しいと判断した方へ自分の力で進んでいけるようにすることを目指している[6]。特に主要な対象にしているのは，居住する社会についてあまり理解しておらず，地域の行政システムに疑問を抱いており，デンマーク語を十分に扱うことが困難な移民女性である。

まず，移民が集中的に居住している地区の中からデンマーク語での基本的なコミュニケーションに問題がなく，活動的な移民女性を選出する。選ばれた移民女性は一定期間，講習を受講することになっており，講習の中で育児，保健，教育，各種行政サービス等，デンマークで生活していく上で必要な情報を獲得する。講習が修了すると，晴れて「地域の母」と認められ，活動を開始することができるようになる。「地域の母」は情報伝達役として自身が居住するエリアに暮らす移民女性に講習で得た情報を口承していく。また，「地域の母」が担う役割は情報伝達役のみでなく，同時に相談員の役割も求められている。「地域の母」のメンバーは地域の女性が抱えている悩みに耳を傾け，相談に応じている。

デンマークで最初の「地域の母」は，2008 年に難民・移民・統合省のプロジェクトとして始められた。まずパイロット・プロジェクトとして，8 地域で 8 グループの「地域の母」

が構築された[7]。

2008 年, ナアアブロー地区もパイロット･プロジェクトの対象地区の 1 つに指定された。活動の拠点はナアアブロー図書館である。パイロット・プロジェクトの対象となった 8 グループのうち，ナアアブローは公共図書館を「地域の母」の活動拠点に置くデンマーク唯一の事例となった[8]。ナアアブロー図書館を拠点とした「地域の母」は，2008 年から 2010 年までの 2 年間取り組まれた。2 年の間に難民・移民・統合省から支給された金額の合計は 850,000 デンマーク・クローネ（約 15,831,409 円）であった[9]。活動を取りまとめていたのは，ナアアブロー図書館に勤務する 2 名の司書と，1 名の文化担当員である。2 年間にナアアブロー図書館で講習を受け，「地域の母」として活動をしたのは計 17 名の移民女性であった。17 名には「地域の母」としての活動の対価として賃金が支払われていた。2 名は時給制で，残りの 15 名は活動時間 10 時間ごとの給与計算であった。毎週火曜日には「地域の母」として活動するメンバーが一同にナアアブロー図書館に会す，火曜カフェが開かれた。火曜カフェでは，メンバーから 1 週間の活動状況の報告がされたほか，ナアアブロー図書館の職員から新着情報も紹介された。

筆者がナアアブロー図書館の「地域の母」を調査したのは 2010 年 4 月から 6 月までの約 3 か月である。ナアアブロー図書館を拠点とする「地域の母」は，2010 年 12 月をもって終了したため，筆者が調査を行ったのはプロジェクト期間の終盤と言える。前述のように，2 年間のプロジェクト期間中にナアアブロー図書館を拠点に活動した「地域の母」の総数は 17 名であるが，筆者が調査を行った期間には 3 名が既に活動から離脱していたため，14 名が調査対象となっている。調査期間中, 筆者は火曜カフェに参加し, ミーティングの進行や「地域の母」のメンバー同士のコミュニケーションを観察した。また，火曜カフェの時間が終了しても，メンバーは即座に退席することなく，その場に居座り会話を続けていたため，筆者もその場に残り，メンバーに対し非構造化面接を行った。なお，筆者が火曜カフェに参加する際，「地域の母」を統括するナアアブロー図書館の職員から「地域の母」のメンバーに対して筆者の属性や調査の趣旨に関する説明があったため，筆者は自身の立場を明らかにした上で調査を実施している。なお, 本研究における表記は,「地域の母」とする。「地域の母」という表記にはプロジェクトそれ自体と，プロジェクトのメンバーの 2 つの意味が含まれている。また，「地域の母」のメンバーが情報を伝達する対象となる移民女性のことを，地域の女性と記す。

14 名の「地域の母」のうち，一名については約 2 時間の半構造化面接を 2 回行った。これは，彼女のこれまでの人生において「地域の母」という活動が持つ意味を，ライフストーリーとして明らかにすることを目的として実施したインタビューである。

6.3. デンマーク語「トーククラブ」

本節では，移民にとって，デンマーク語「トーククラブ」がいかなる場となっているのかを明らかにする。

6.3.1. メンバーの基礎情報

筆者が調査を実施した 2013 年 5 月 22 日から 8 月 21 日までの期間に，ナアアブロー図書館のデンマーク語「トーククラブ」に参加した者は総計 20 名であった。メンバーの基礎情報および活動への出欠は表 6.1 の通りである。

表 6.1. デンマーク語「トーククラブ」のメンバー基礎情報

立場	仮名	性別	出身	5/22	5/29	6/5	6/12	6/19	8/21
ファシリテーター	エレン	女	デンマーク	○	○	○	○	○	○
	テレーサ	女	デンマーク	×	×	×	×	×	○
	ボーディル	女	デンマーク	×	×	×	×	×	○
参加者	イマード	男	シリア	○	○	○	○	○	○
	ファリード	男	アルジェリア	○	○	○	○	○	○
	マフムード	男	イラク	○	○	○	○	×	×
	アリ	男	イラン	○	○	○	×	×	×
	パルビン	女	バングラデシュ	○	○	×	○	○	×
	オリバー	男	イギリス	○	×	×	×	×	×
	メイスーン	女	ソマリア	×	○	○	○	×	×
	ナディア	女	シリア	×	○	×	○	○	×
	ターヘル	男	不明	×	×	○	×	×	×
	マヤ	女	不明	×	×	○	×	×	×
	ナジュワ	女	レバノン	×	×	×	○	×	×
	ハイサム	男	モロッコ	×	×	×	○	×	×
	アイマン	男	パレスチナ	×	×	×	○	○	○
	ハーラ	女	モロッコ	×	×	×	○	○	×
	アイシャ	女	ソマリア	×	×	×	○	○	×
	ラシード	男	イラク	×	×	×	×	○	×
	ダリア	女	イタリア	×	×	×	×	○	×
	クマル	男	インド	×	×	×	×	○	×
	マヘシュ	男	インド	×	×	×	×	○	×
	ヴィクラム	男	インド	×	×	×	×	×	○

表 6.1 からわかるように，20 名の参加状況は一様ではない。イマードやファリードのように毎回出席している者もいれば，1 回の出席のみで参加をやめる者もいる。デンマーク語「トーククラブ」は予約制のプログラムではない。毎週水曜日の 16 時から 18 時の活動時間にナアアブロー図書館のプログラム・スペースに集った者が，各回のプログラム参加者ということになる。

観察調査を主な研究方法にしているため，すべての参加者の正確な年齢を観察から把握することはできなかった。プログラム中およびプログラム終了後に筆者が参加者と個別に語り明らかになった範囲では，最年少は 24 歳の女性で，最年長は 58 歳の男性であった。

参加者の出身社会については，参加者自身がプログラム中に出身社会での経験について語っていた場合には参加者の発言から特定した。また，プログラムの合間やプログラム終了後に個別に参加者と話をし，出身を尋ねた場合もある。ターヘルとマヤの 2 名については，プログラム中に出身社会に関する発言がなく，個別に話をする機会も持てなかったため，出身を特定することができなかった。参加者の出身は多様で，12 の国や地域を出身とする者が存在した。特にアラブ圏からの参加が多く，20 名中 9 名はアラビア語話者であった。ファシリテーターのエレンによると，デンマーク語「トーククラブ」の参加者ほぼ全員が自身で出身者社会からの移住を経験している移民 1 世である。

6.3.2. 参加の経緯

参加者が参加に至るまでのルートは 3 つに大別することができる。3 つのルートとは 1）ナアアブロー図書館の職員を介するルート，2）家族や友人を介するルート，3）掲示物を介するルートである。

1）ナアアブロー図書館の職員を介するルートとは，参加者がナアアブロー図書館に勤務する文化担当員や文化担当員からの誘いを受け，デンマーク語「トーククラブ」への参加を決意することを意味する。ファリードはアルジェリア出身の移民 1 世である。高頻度でナアアブロー図書館を利用する中で，ナアアブロー図書館に勤務する文化担当員のダバンとは気心知れた仲になった。2010 年にナアアブロー図書館で「トーククラブ」が始動する際，ファリードはダバンから誘いを受け，プログラムへ参加し始めた。以来，約 2 年半の間，都合が付く限り継続的にプログラムへ参加している。一方，ナディアは，文化担当員のマハからの誘いを受け，デンマーク語「トーククラブ」へ参加し始めた。2012 年夏から 2013 年夏までの 1 年間ダバンは休職しており，その間代理として文化担当員を務めていたのがマハである。ナディアは，資料の返却にナアアブロー図書館を訪れた際，文化担当員のマハと出会い，マハからデンマーク語「トーククラブ」のプログラムの概要を聞いた。ナディアはデンマーク語学校を離れて久しく，再度デンマーク語を学ぶ機会を欲していたため，デンマーク語「トーククラブ」への参加を決心した。

2）家族や友人を介するルートとは，親族や知人・友人からナアアブロー図書館のデンマーク語「トーククラブ」の存在を聞かされ，興味を持って参加を決めることを意味している。イマードはシリア出身の移民 1 世である。ナアアブロー地区からバスと国鉄を乗り継ぎ約 40 分ほどのティンピア（Tingbjerg）という地区で妻と 2 人で生活している。食堂に勤務する妻が無職のイマードに，デンマーク語の学習のために参加してみてはどうかと薦めたのが，ナアアブロー図書館の「トーククラブ」だった。

3）掲示物を介するルートとは，デンマーク語「トーククラブ」に関するお知らせを掲示

板で見付け，活動に興味を抱き参加を決断することを意味する。ナジュワはレバノン出身の移民 1 世である。子どもを連れてナアアブロー図書館を訪れた際，エントランスにある掲示板にあったデンマーク語「トーククラブ」のお知らせを発見し，一度参加してみようと思い立ったという。パルビンはバングラデシュ出身の移民 1 世である。パルビンは現在，語学学校に通学中で，語学学校の掲示板にあったナアアブロー図書館のデンマーク語「トーククラブ」のお知らせを見たことをきっかけに，プログラムに参加するようになった。

筆者が行ったインタビューや観察調査から明らかになった範囲では，参加者がプログラム当日にプログラム・スペースでの活動の様子を見て飛び入りで参加することはなく，事前に 1）ナアアブロー図書館の職員を介するルート，2）家族や友人を介するルート，3）掲示物を介するルートのいずれかからプログラムに関する情報を収集した上で，参加を決断していることが明らかになった。

6.3.3. デンマーク語「トーククラブ」の基本的な展開

デンマーク語「トーククラブ」のファシリテーターは主にエレンが担っており，エレンを中心にプログラムが進行する。活動時間は毎週水曜日の 16 時から 18 時までと設定されているが，実際にプログラムが始まるのは 16 時 10 分から 15 分頃であった。また活動が 18 時まで続けられることはなく，多くの場合，17 時 40 分から 50 分には終了していた。つまり実質的な活動時間は 1 時間 30 分ほどである。デンマーク語「トーククラブ」においてタイムスケジュールは存在しないに等しい。途中に休憩時間を設けること以外，何も事前に決められていない。「トーククラブ」で「トーク」する話題は基本的に参加者が決定することになっており，その日その時プログラム・スペースに集ったメンバーが状況に応じて適宜トピックを選択する。しかし，最初の話題については多くの場合，ファシリテーターのエレンが提案し，プログラムが始動する。表 6.2 は，2013 年 6 月 19 日のデンマーク語「トーククラブ」の活動の流れを示したものである。

表 6.2.　デンマーク語「トーククラブ」活動の流れ

（2013 年 6 月 19 日）

16:15 – 16:20	ファシリテーターの挨拶および最初の話題の提示
16:20 – 16:25	話題: 夏休みの計画について
16:25 – 16:45	話題: 断食について
16:45 – 16:50	休憩
16:50 – 17:45	会食 話題: 夏休みの計画
17:45	終了

2013 年 6 月 19 日 16 時，プログラム・スペースにはファシリテーターのエレンの他にパルビンと筆者の 3 人が着席しているのみだった。パルビンはエレンにデンマーク語学校の試験について相談をしていた。16 時 10 分を過ぎた頃にはダリア，アイシャ，ファリード，アイマン，ナディア，ハーラが現れ，それぞれ好きな場所に席を確保した。図 6.1 は 2013 年 6 月 19 日のプログラム・スペースの座席図である。

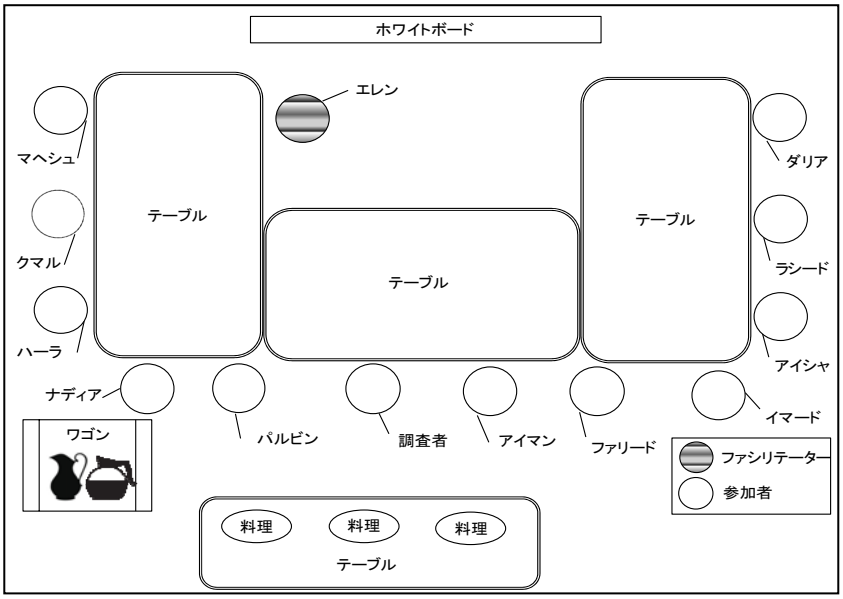

図 6.1.　デンマーク語「トーククラブ」の座席図

（2013 年 6 月 19 日）

エレンが「始めましょう」と合図したのは16時15分だった。合図と同時にプログラム・スペースに現れたのはマヘシュとクマルである。エレンはまず，デンマーク語「トーククラブ」の今後の活動予定について話した。エレンは，6月下旬から8月下旬までの約2カ月間，デンマーク語「トーククラブ」は夏休みに入るため，今回が夏休み前最後の活動になると参加者に伝えた。

16時20分，エレンは最初に語り合う話題を参加者に提示した。最初の話題は「夏休みの計画」である。パルビンは夏休みにオーフースに居る友人のもとを訪問する予定であると話した。また，ファリードは出身地アルジェリアにいる母親のもとへ，ダリアはイタリアの実家へ渡航すると言った。しかし，その他のメンバーは夏休みに特別な予定はなく，いつもと同じ日々であると語った。ナディアは7月上旬から8月上旬までラマダーンであるため，あまり外出したくないのだと述べた。

ナディアの発言を発端に話題は「断食について」に変化した。話題が変化した頃，イマードがプログラム・スペースに姿を現し，ファリードやアイマンとアラビア語で挨拶を交わしてファリードの隣に着席した。ファシリテーターのエレンは，デンマークでは一部のキリスト教徒がイースターと謝肉祭の折に断食を行うと紹介した。マヘシュはヒンドゥー教徒も断食を行うと述べた。ハーラは適度な断食は体に良いのだと言う。アイシャは，ハーラの発言に同意しながらも，デンマークでラマダーンを過ごすことは難しいと語った。そしてその理由を，デンマークでは夏季の間，日の出の時間が早く，日の入りの時間が遅いため，長時間の断食に耐えなければならないからであるとした。ファリードはアイシャの発言に頷き，2013年から先の数年間はイスラーム暦のラマダーンが夏至の時期に当たるため，特に長時間，断食をしなければならないと言った。パルビンは，夜22時頃食事をして就寝し，朝4時頃起床して再び食事をするという生活が1ヶ月間続くのは辛いと述べた。ファシリテーターのエレンはラマダーン月の日没から日の出までの間，どのようなものを食すのか参加者に尋ねた。ハーラは，モロッコではイフタール[10]に魚料理と米を食べると言った。ナディアは，シリアでもよく「マクルーバ」という米料理をイフタールに食べると話した。アイシャは，ソマリアでは「サンブーサ」を食べると述べ，不意に立ち上がって持参したビニル袋からプラスチック容器を開けた。容器の中には三角形をした揚げ物が多数並んでいた。アイシャは容器を指差し“**これがサンブーサです**”と紹介した。アイシャは前回のデンマーク語「トーククラブ」の際にエレンから6月19日に皆で会食をすると聞き，自宅でサンブーサを手作りしてきたと言う。エレンは“**少し休んで，休憩後，食事をしながら話しましょう**”と告げた。

休憩時間になるとエレンはプログラム・スペースから姿を消し，しばらくしてナアアブロー図書館勤務の文化担当員であるマハと共に再びプログラム・スペースに現れた。マハは参加者用の食事を運び，テーブルの上に並べた。マハはイマードからアラビア語で“**これはどこで買ってきたの？**”と尋ねられ，ナアアブロー図書館から徒歩3分ほどの距離にあるアラ

ブ料理店の名前を挙げた。ファリードは店の名前を聞き，何度もその店を訪れたことがあると言った。アイシャは手作りのサンブーサが入った容器をマハが並べた料理の隣に置いた。

エレンは“**食べましょうか**”と言い，参加者に各自好きなだけ料理を皿に盛り，食べられると伝えた。参加者は一列に並び，料理を皿に盛りつけた。料理の匂いに誘われ，新たにプログラム・スペースに現れたのはラシードである。エレンはラシードのデンマーク語「トーククラブ」への突然の参加を歓迎した。ラシードは料理を皿に盛り付け，アイシャの隣に席を確保した。アイシャが手作りしたサンブーサは好評を博していた。アイシャは今回のサンブーサは中に牛挽肉を詰めているが，他に鶏肉や魚，野菜を詰めたものも存在すると言った。マヘシュはサンブーサをインドのサモサに似ていて懐かしいと表した。ワゴンにはお茶やコーヒーも用意されており，参加者は自由に飲み物をカップへ注ぎ，各自の席へ運んでいた。ラシードとクマルは飲み物のワゴンの横に立ちデンマーク語で何やら会話している。その他のメンバーは，食事を続けながら，パルビンの夏休みの計画について語り合っていた。エレンがパルビンに“**DSB（デンマーク国鉄）でオーフースへ行くの？**”と尋ねると，パルビンは頷いた。ダリアはパルビンに事前に DSB のホームページでチケットを探すと，時間帯によって格安のチケットを見付けることができると伝えた。アイシャもダリアの言葉に同調し，当日駅でチケットを購入すると高額であるため，事前に予約することを薦めた。パルビンはオーフースから更に北上し，スケーイン（Skagen）へ渡航する予定であると言うと，ファシリテーターのエレンはスケーインにある友人のサマーハウスに滞在したことがあると言い，その際の思い出を話し始めた。そして，スケーインで訪問すべき場所の名前を挙げ，パルビンに伝えた。

時計が 17 時 40 分を示す頃，エレンは再度，次週から夏休みになること，8 月 21 日から活動が再開することを参加者に知らせ，この日のデンマーク語「トーククラブ」は終了となった。活動終了後，文化担当員のマハが再びプログラム・スペースに姿を現すと，食べ残った料理や飲み物を回収してワゴンに積み，ワゴンを押しながらエレンと共にプログラム・スペースを後にした。

6.3.4. ファシリテーター

デンマーク語「トーククラブ」のファシリテーターはエレンである。8 月 21 日の回のみテレーサとボーディル 2 名もアシスタント役を勤めていたが，通常中心的に活動の進行を行うのはエレンである。エレンは 60 代のネイティブのデンマーク人で，元々，国民学校（Folkeskolen）で英語の教師をしていた。定年退職後，移民や難民の支援活動を行っている NGO「デンマーク難民支援（Dansk Flygtningehjælp）」のボランティア募集を見て，2010 年からナアアブロー図書館の「トーククラブ」でボランティアをするようになった。つまり，2013 年の調査時点でエレンはナアアブロー図書館のデンマーク語「トーククラブ」において約 2 年半のボランティア経験を有していた。

ナアアブロー図書館はデンマーク語「トーククラブ」の活動の運営をデンマーク難民支援

の下部組織，「ボランティア・ネットワーク（Frivillignet）」に委託している。ボランティア・ネットワークは，ボランティアの募集，保険への加入手続，研修，派遣を一手に行う。ゆえに，エレンやテレーサ，ボーディルもボランティア・ネットワークから派遣されたボランティアである。

ナアアブロー図書館はデンマーク語「トーククラブ」の活動を手放しでボランティア・ネットワークに一任しているわけではない。ナアアブロー図書館に勤務する文化担当員も一部活動の運営に関与している。例えば，デンマーク語「トーククラブ」の活動に必要な資料の印刷，ホワイトボード用のペンや軽食，飲料等の手配は全てナアアブロー図書館の文化担当員が行っている。また，毎回プログラムの途中に文化担当員がプログラム・スペースを訪れ，活動の様子を把握するほか，プログラム終了後にはボランティアから文化担当員へ活動の報告がされている。

エレンは基本的にデンマーク語「トーククラブ」での話題の選択を参加者に委ねており，難解な単語が出た場合等に限り，必要に応じてホワイトボードに単語のスペルを記し説明を加える。例えば，6 月 5 日の回に移民とネイティブのデンマーク人との「統合」が話題に挙がった際には，ホワイトボードに「indvandrer（移民）」「immigrant（移民）」「ny dansker（新しいデンマーク人）」「gæstearbejder（ゲストワーカー）」と書き，以下のように説明した。

- **エレンは，indvandrer が最も一般的であるが，英語の immigrant を使うこともあると説明した。また，最近では ny dansker と呼ぶ場合もあり，かつては gæstearbejder という言葉が使われており，時代によって移民の呼び方が変化していると伝えた。【フィールドノーツ／2013 年 6 月 5 日】**

このように，エレンは参加者のディスカッションの内容について補足的に説明を加えることはあっても，彼女が主体になって参加者に教え込む講義形式を採ることはなかった。エレンはプログラムの進行について“**みんな大人ですからね。彼ら（参加者）の主体性を大切にしています**”と語った。

また，エレンは参加者の参加について“**参加したければすれば良いし，休みたかったら休めば良い。これは無料の自由なプログラムなんですから**”と語り，参加者に参加の継続性を問わない姿勢を示した。加えて，エレンは参加者との関係について，あくまでプログラム・スペースに留まったものであり，“**プログラム参加者とナアアブロー図書館以外の場で会うことはないです**”と述べている。

6.3.5. デンマーク語学習について語る

デンマーク語「トーククラブ」では，デンマーク語学習に関する話題が参加者によって頻繁に語られた。「トーククラブ」に参加する者のデンマーク語の能力は異なる。言い淀みの

ないデンマーク語で自身の意見を主張できる者がいれば，4ヵ月前にデンマークへ移住したばかりで，知っているデンマーク語の単語を紡いで意思を示す者もいる。既にデンマーク語で流暢に会話することのできるマハムードは，5月22日のプログラム中に“**デンマークに適応したいなら，デンマーク語を話すことが大切です。デンマーク語が話せなければ馴染めないし，どんどん誤解が膨らみます**”と語った。また，アイシャは6月12日の回でデンマーク語の会話力に乏しい参加者に対して“**デンマーク語で話すことで，相手の対応は変わります**”と主張した。マハムードとアイシャの用いた表現は異なるが，二者ともに共通してデンマーク語の習得はデンマークにおいて，現在置かれている状況を好転させるのに役立つとしている。このように，デンマーク語「トーククラブ」では，高いデンマーク語の能力を持つ者からデンマーク語のスキルに乏しい者に対して，デンマーク語習得の重要性を伝えるメッセージが繰り返し発信されている。

また，デンマーク語習得の重要性のみが主張されているのではなく，具体的な学習方法についても言及されている。5月29日の回では，メイスーンとナディアとの間で以下のようなやり取りが見られた。

- **メイスーン“日常の様々な場面でデンマーク語を学ぶ努力が必要です”**
  ナディア“テレビを見ながら家族でこのデンマーク語の意味は何？って確認しています”
  メイスーン“ブラボー。そういうことが重要なんです”

メイスーンは，デンマーク語学習は語学学校のみで行うものではなく，日常生活のあらゆる場面で学習するものであるとナディアに語りかけ，ナディアは生活の中でのデンマーク語学習の実践を伝えた。

そのほか，図書館資料について言及された場面もあった。6月12日の回では，デンマーク語の語学学校に通学中のアイマンがデンマーク語の学習法について他の参加者に相談した。アイシャがデンマーク語の絵本は役立つと助言したところ，アイマンは絵本は内容が幼稚過ぎると返した。すると，パルビンは“**ライト・ブックス（Lette bøger）が良いと思う**”と発言した。ライト・ブックスとは主に10代を対象に簡便な表現で記述された本のことで，分野はサイエンスフィクション，ファンタジー，恋愛，ミステリー，ホラー等多岐に渡る。パルビンは明解な表現が用いられており，幼稚過ぎない内容であるライト・ブックスをアイマンに薦めた。ハーラはパルビンの言葉に頷き，ナアアブロー図書館のヤングアダルトコーナーに行けばライト・ブックスを見付けることができると言った。加えて，ハーラはデンマーク語の非母語話者向けに出版されている「リーディング・ワークショップ（Læseværkstedet）」と言う名のシリーズが良いと述べ，語学学校の図書室には必ずあると紹介した。パルビンは，“**（リーディング・ワークショップのシリーズは）この図書館（ナアアブロー図書館）にもあります。雑誌や新聞コーナーの近くに**”とハーラの発言に情報を

加えた。このように，ナアアブロー図書館のデンマーク語「トーククラブ」では，デンマーク語を習得するための具体的な学習方法が参加者間で語り合われており，図書館資料を活用した学習方法についても取り上げられている。

6.3.6. 育児を語る

参加者のなかには幼い子どもの育児中で，子連れでデンマーク語「トーククラブ」に出席している者もいる。メイスーンは 6 歳，4 歳，1 歳の 3 人の子どもを連れてプログラム・スペースに現れる。プログラム中，6 歳と 4 歳の子どもはナアアブロー図書館の児童スペースで，末の 1 歳の子はメイスーンの腕の中で過ごす。しかし，プログラムが行われている約 1 時間 30 分の間には倦厭した様子の 6 歳と 4 歳の子どもが幾度もプログラム・スペースにやって来たり，1 歳の子が泣き出したりするので，メイスーンはその都度プログラム・スペースを出て子をあやしていた。6 月 5 日の回には，メイスーンは他の参加者に向けて以下のように語った。

- **（子どもが）うるさくて申し訳なく思います。でも私はこれ（デンマーク語「トーククラブ」）に参加したいんです。ここでみんなと話しをしたいんです。**

【フィールドノーツ／2013 年 6 月 5 日】

メイスーンの言葉に対し，ファリードは“**子どもが小さいなか，こういう活動に参加しているのは素晴らしいと思う**”とメイスーンのデンマーク語「トーククラブ」に参加する姿勢を称えた。他の参加者も問題ないので気にせず参加したら良いと，メイスーンの子連れでの参加を歓迎した。

参加者自身の子どもに関する事柄はしばしばプログラム中の話題として取り上げられる。ナディアはプログラム中，息子について悩みを打ち明けた。9 年生のナディアの息子は，高校への進学を希望しているが，現在の成績では高校へ進学することは難しく，10 年生として 1 年間，進学準備をする必要があるのだが，10 年生にはなりたくないと言っていると言う[11]。その様子を心配するナディアはデンマーク語「トーククラブ」のメンバーに相談を持ちかけた。ナディアの相談に対し，ナアアブロー地区では 10 年生を経て高校へ進学する例は少なくなく，特別問題視することではない，という意見や，9 年生になれば自分の進路は自分で考えられる年齢なので親が過剰に介入する必要はなく，息子の選択を見守れば良いという意見が出ていた。

上記のように自身の子どもに関する話題を取り上げることもあれば，特定の子どもではなく，広く地域の子ども全体について話し合うこともある。5 月 29 日の回では，コペンハーゲン・コムーネ内のスーパーマーケットで移民の背景を持つ若者が店員に対して暴力行為を行った事件について話し合われた。メイスーンは，“**規模の大きさは異なるけれど，こういう問題は日々起きています**”と言い，最近ナアアブロー地区内で目撃した出来事につい

て語った。ある日，メイスーンがバスに乗っていたところ，移民の少年たち 6 名程が乗車してきたが，彼らは無賃で乗車しようとしたため，バスの運転手は少年らに降車を命じた。少年らは不機嫌そうな表情を浮かべながらも素直に運転手の指示に応じたが，少年のうち 1 名は降車際に運転手に向かって口の中に入れていた飴を飛ばしていたと述べた。メイスーンの話を聞いたアリは“**子どもと親がすれ違いの生活を送っているので，親が子どもに何が正しくて，何が間違っているのかを教える時間がないことが問題です**”と述べ，職を複数掛け持ち，朝から晩まで働いている移民は家庭で過ごす時間が短く，子どもを躾ける時間が不足していることを指摘した。

このように，デンマーク語「トーククラブ」には育児の只中にある移民も参加しており，育児は活動中の話題に挙がっていた。また，話題は自身の子どもに関する事柄のみならず，広く地域の子ども全体についても取り上げられていることが確認できた。

6.3.7. デンマーク人について語る

デンマーク語「トーククラブ」では，ネイティブのデンマーク人と移民の「統合」が度々話題として挙がっていた。端を発するのは参加者であることもあれば，ファシリテーターであることもある。

6 月 5 日の回には，参加者が口火を切り，直近に起きたニュースについて議論していた。直近のニュースとは，デンマーク国民党が新聞広告に移民 700 名の名前を挙げ，700 名の中にはテロリストになる危険性を持つ人物が含まれていると掲載したというものだった[12]。アリは“**移民 1 人が悪いことをすると，移民みんなが悪いことをすると思われるのが悲しいです**”と胸中を明らかにした。その後，メイスーンが“**デンマーク人はヒジャブ[13]をした黒い肌の私を変な目で見てきます**”と語ったのを皮切りに，参加者は口々にネイティブのデンマーク人から受けた差別的扱いについて語り始めた。その流れを断ち切ったのはファリードだった。ファリードは以下のように語った。

- **（そのような差別をするのは）デンマーク人全員ではなく，一部のデンマーク人です。デンマーク人を一括りに見るなら，彼ら（デンマーク国民党）も私たちも一緒ですね。**

【フィールドノーツ／2013 年 6 月 5 日】

ファリードは，デンマーク人全体を一まとめにして敵視することは，移民全体が悪者と見做されている事実と何ら変わりなく，差別的行為を行うデンマーク人は全体のうち，極一部と考える必要があると指摘したのである。

6 月 12 日の回には，ファシリテーターのエレンから“**デンマーク人って誰でしょうか？**”という問いかけがあった。エレンの問いかけに対し，すぐに回答する者はいなかった。ナジュワは沈黙を破り，“**難しい質問ですね。わからないです**”と述べた。その後，パルビンは“**デンマーク語で意見を言い合い，互いに言っていることが理解できるようになったらデンマ**

ーク人かな”と発言した。エレンは“**デンマーク語が話せたらデンマーク人なのでしょうか？**”と新たに参加者に質問を投げかけた。この問いかけに応じたのはナディアだった。ナディアは以下のように語った。

- **正直，デンマーク人ってよくわかりません。＜中略＞本や新聞を読んでいるだけではデンマーク人が怖くなります。けれど，この間，近所の猫を世話しているデンマーク人と出会って，話しをしてみたらすごく優しい人で，デンマーク人って悪い人ではないのかもしれないって思いました。**

【フィールドノーツ／2013 年 6 月 12 日】

ナディアは，マスメディアを通して描いていたデンマーク人像は恐ろしいものであったが，直接デンマーク人と会話することで，それまで抱いていたデンマーク人像に誤解があったと気付いたと言う。アイマンは“**たしかに，身近にいる（デンマーク）人はあまり恐くないです**”とナディアに同意した。

上述のように，デンマーク語「トーククラブ」では，繰り返しエスニシティについて取り上げられる。参加者は議論を通して，マスメディアが伝える移民像やデンマーク人像と，実際との差異を確認していく。その議論の過程では，これまで受けた差別的扱いや，心和んだ交流等，参加者自身が身を持って体感したネイティブのデンマーク人とのコミュニケーションの実体験が共有されている。

6.4. アラビア語「トーククラブ」

6.4.1. メンバーの基礎情報

筆者が調査を実施した 2013 年 4 月 5 日から 6 月 14 日までの期間に，ナアアブロー図書館のアラビア語「トーククラブ」に参加した者は 23 名であった。メンバーの基礎情報および活動への出欠は表 6.3 の通りである。

表 6.3.　アラビア語「トーククラブ」のメンバー基礎情報

立場	仮名	性別	出身	4/5	4/12	4/19	5/3	5/24	5/31	6/7	6/14
ファシリテーター	サミーラ	女	イラク	○	×	×	○	○	○	×	×
	マナール	女	イラク	×	○	○	×	×	×	○	○
参加者	ラース	男	デンマーク	○	○	○	○	○	○	×	○
	ヘレ	女	デンマーク	○	○	×	○	×	×	×	×
	ヤイス	男	スウェーデン	○	○	×	×	×	×	×	×
	ターニャ	女	デンマーク	○	×	×	×	×	×	×	×
	アイラ	女	トルコ	○	×	×	×	×	×	×	×
	リーナ	女	デンマーク	○	×	×	×	×	×	×	×
	ダニエル	男	デンマーク	×	○	○	○	×	×	×	×
	カミラ	女	ポルトガル	×	○	×	×	×	×	×	×
	レイラ	女	モロッコ（ベルベル）	×	○	×	×	×	×	×	×
	ソヘイラ	女	モロッコ（ベルベル）2世	×	○	×	×	×	×	×	×
	ドーテ	女	デンマーク	×	×	○	×	×	×	×	×
	トーマス	男	デンマーク	×	×	○	×	×	×	×	×
	ヒバ	女	ソマリア2世	×	×	×	○	○	○	×	×
	カルステン	男	デンマーク	×	×	×	○	○	○	×	×
	ヤコブ	男	デンマーク	×	×	×	○	×	×	×	×
	ヘンリク	男	デンマーク	×	×	×	○	×	×	×	×
	ミケル	男	デンマーク	×	×	×	×	○	×	×	×
	ナザ	女	イラク（クルド）2世	×	×	×	×	×	○	×	×
	エリーネ	女	デンマーク	×	×	×	×	×	×	○	○
	メッテ	女	デンマーク	×	×	×	×	×	×	○	○
	カトリーナ	女	デンマーク	×	×	×	×	×	×	○	○
	ペータ	男	デンマーク	×	×	×	×	×	×	×	○
	イエスパー	男	デンマーク	×	×	×	×	×	×	×	○

表 6.3 からわかるように，23 名の参加者の参加回数は一様ではない。ラースのようにほぼ毎回出席している者もいれば，1 回の出席のみで参加を止める者もいる。アラビア語「トーククラブ」は登録制ではなく，事前の予約も必要ないため，参加者は自身のスケジュールやモチベーションに応じて「トーククラブ」への出席を決めている。

本研究は，参与観察を研究手法に採っているため，全ての参加者の正確な年齢を観察から把握することは不可能であった。筆者が参加者とプログラムの合間やプログラム終了後に会話した際に明らかになった範囲では，最年少では 17 歳の少女が，最年長では 75 歳の男性が参加していた。

参加者の出身社会も多様である。23 名中 18 名は，ネイティブのデンマーク人で，5 名は

移民の背景を持つ者であった。5 名の出身社会は，トルコ，モロッコ，ソマリア，イラク（クルディスタン）である。なお，5 名には自身が出身社会からの移住を経験している移民 1 世と，自身はデンマークに生まれ育ったが，両親，もしくは片親が移住経験を有している移民 2 世とが存在した。

6.4.2. 参加の経緯

6.4.2.1. ネイティブのデンマーク人の参加の経緯

アラビア語「トーククラブ」に参加する者の参加の動機はネイティブのデンマーク人と移民の背景を持つ者とで差異がある。まず，ネイティブのデンマーク人の参加の動機を見ていく。

ラースは 75 歳の男性である。彼は 30 代の頃，4 年ほどヨルダンへ海外転勤していた経験を持つ。ヨルダン滞在中，アラブの文化に魅かれ，アラビア語を習得したいと思っていたが，多忙な毎日であったためアラビア語を落ち着いて学ぶ余裕はなく，挨拶程度を話すのみであった。しかし，退職して時間ができた現在，改めてアラビア語を学びたいと思ったのだという。彼はアラビア語の辞典や教材を購入し自宅でアラビア語を独学しており，アラビア語「トーククラブ」にも毎回それらのアラビア語学習教材を持参して参加した。

エリーネ，メッテ，カトリーナの 3 名はナアアブロー図書館の周辺に居住している。3 名は旧知の仲で，3 名ともナアアブロー図書館の近隣に居住している。アラブ圏出身者が経営している店舗が立ち並び，街を歩けばアラビア語での会話が飛び交っている環境で生活する中で，3 名はアラブの文化に関心を抱いた。ある日，ナアアブローホールでナアアブロー図書館のアラビア語「トーククラブ」に関する情報を見付けたエリーネがメッテとカトリーナを誘い，プログラムへの参加を決めたという。

ラース，エリーネ，メッテ，カトリーナは，関心の程度や関心を持った経緯は異なるが，アラブの文化に興味を示しており，理解の深化を図るためにアラビア語「トーククラブ」への参加を決意している。

また，アラブ社会への関心を既に掘り下げており，アラビア語の基礎を学んだ経験を持つ者も参加している。ターニャは大学で人類学を専攻する 23 歳の学生である。彼女がアラビア語「トーククラブ」に参加したのは，半年間イラクの農村で行ったフィールドワークの結果を卒業論文にまとめている頃だった。イラク滞在中は現地の語学学校に通っていたため，正則アラビア語（フスハー）の基礎的な読み書きが可能である。またイラク方言のアラビア語（アンミーヤ）を用いて会話ができる。ターニャが参加したのはサミーラがファシリテーターを担当した回で，ターニャはサミーラがイラク出身とわかるとイラク方言のアラビア語を話した。

一方，職業上の都合でアラビア語習得の必要性を感じ，アラビア語「トーククラブ」へ参加する者もいた。ダニエルは，ソーシャルワーカーとして働く男性である。彼はナアアブロー地区のミュルナパーケン（Mjølnerparken）を主に担当し，生活保護（Kontanthjælp）を

受給する家庭を訪問している。彼が訪問する家庭にはアラビア語を母語とする人が多い。ダニエルは少しでもアラビア語を話すことができれば，彼らとより打ち解けることができるかもしれないと思い，ナアアブロー図書館のアラビア語「トーククラブ」へ参加することにした。

ミケルはコペンハーゲン警察に勤務する警察官である。近年，ミケルは職務の中でアラブ圏を出身とする犯罪者に事情聴取をする機会が多く，彼らのことをより深く理解するきっかけになればとアラビア語を学び始めた。彼は定期的にアラビア語教室に通っており，同じ教室に通うメンバーからナアアブロー図書館のアラビア語「トーククラブ」の話を聞き，一度出席してみることにした。

ダニエルはソーシャルワーカーとして，ミケルは警察官として，日々職務の中で接するアラビア語話者をより理解したいと思い，アラビア語の学習を開始し，アラビア語「トーククラブ」に出会っている。

また，ナアアブロー図書館のアラビア語「トーククラブ」にはイスラーム教徒との婚姻により，アラビア語を習得する必要性が生じた者も参加していた。

リーナはデンマーク生まれで，キリスト教徒の両親の元に育ったが，モロッコ出身のムスリム男性との婚姻を機に，イスラーム教へと改宗した女性である。リーナは，モロッコに暮らす夫の家族とコミュニケーションを取りたいと，アラビア語の学習を始めた。また，定期的に通うモスクでアラビア語の学習を強く勧められたこともきっかけだった。ナアアブロー図書館の掲示物でアラビア語「トーククラブ」の存在を知ったリーナは，モスクで知り合ったトルコ出身のアイラを誘いプログラムへの参加を決めた。

このように，ネイティブのデンマーク人の参加者の中には，アラブ文化へ惹かれたことによりアラビア語学習を開始した者，職業上アラビア語話者との接点がありアラビア語習得により彼らとのコミュニケーションの円滑化を目指している者，婚姻によりイスラーム教徒に改宗したことをきっかけにアラビア語習得の必要性が生じた者等，多様な動機を持った参加者が混在していることがわかる。

6.4.2.2. 移民の背景を持つ者の参加の経緯

次に，移民の背景を持つ参加者のナアアブロー図書館のアラビア語「トーククラブ」に参加する動機について見ていく。

ヒバはソマリア出身の両親の元に生まれた移民 2 世である。ヒバは家庭外ではデンマーク語を，家庭内ではソマリ語を話す。ソマリアの公用語はソマリ語とアラビア語で，両親は両言語を話すことができる。ヒバは幼い頃，両親にアラビア語の基礎を習ったが途中で学習を止めてしまった。ヒバは“**今も覚えているのは（アラビア語の）基本文字だけ**”と語る。その後も両親は繰り返してアラビア語を学習するようヒバに求めていた。ある日，ナアアブロー図書館に借りていた図書の返却に来たヒバは，館内でアラビア語「トーククラブ」のプログラムを知らせる掲示物を見付け，アラビア語の学習の再開を思い立った。

レイラとソヘイラはベルベル人の母娘である。レイラは自身がモロッコからの移住を経験している移民 1 世で，ソヘイラはデンマークに生まれ育った移民 2 世である。レイラはモロッコの初等学校でアラビア語を学習した経験を持つが，初等学校の低学年時に中途退学したため，アラビア語を習得することはできなかった。ベルベル語話者ばかりが周囲に存在する環境での生活に，アラビア語の必要性は感じなかった。レイラは同じくベルベルの血を引く男性との結婚後，職を求めて夫と共にデンマークへ移住した。そしてデンマークでソヘイラを出産した。ソヘイラはデンマークで教育を受け，現在看護師として勤務している。そのため，家の外ではデンマーク語を，家庭内ではベルベル語を話す。ソヘイラは“**モロッコ政府に何か申請する時，書類はすべてアラビア語で書かなければいけません。今までは知り合いに頼んで記入していました**”と述べ，アラビア語を習得すれば知人に依頼することなく自身で申請書類を作成できると思い，アラビア語の学習を始めた。アラビア語「トーククラブ」については，ナアアブロー図書館を訪れ，掲示物を見たソヘイラが母のレイラを誘い，参加を決断した。

ナザはイラクのクルディスタン（クルド人自治区）を出身とする両親の元に生まれた移民 2 世である。家の外ではデンマーク語を，家庭内ではクルド語を話す。クルド語のほかにアラビア語を話すことができる両親の元に育ったナザは，簡便な内容であればアラビア語の会話を耳で聞いて理解できるようになった。しかし，アラビア語を体系的に学習したことはない。ナアアブロー図書館を訪れた際にアラビア語「トーククラブ」について知り，一度プログラムに参加してみることに決めた。

ヒバ，レイラ，ソヘイラ，ナザは出身社会も母語も異なる。しかしながら，共通して自身，もしくは親の出身国の公用語にアラビア語が含まれている。ソマリアはソマリ語とアラビア語を，モロッコはベルベル語とアラビア語を，イラクはクルド語とアラビア語を公用語としている。彼女たちの母語はソマリ語，ベルベル語，クルド語であるが，彼女たちは出身国のもう 1 つの公用語に関心を抱きアラビア語の学習を始め，ナアアブロー図書館のアラビア語「トーククラブ」と出会っている。

6.4.3. アラビア語「トーククラブ」の基本的な展開

アラビア語「トーククラブ」には，2 名のファシリテーターが存在する。サミーラとマナールである。活動はファシリテーターを中心に，毎回おおよそ同じような流れで進められる。表 6.4 は，2013 年 4 月 5 日のアラビア語「トーククラブ」の活動の流れを示したものである。

表 6.4.　アラビア語「トーククラブ」タイムスケジュール

（2013 年 4 月 5 日）

時間	活動（初級下）	活動（初級上）	活動（中級）
16:00 – 16:10	参加者がプログラム室に集まり始める		
16:10 – 16:15	ファシリテーターが参加者のレベルを確認して3つのグループに分ける		
16:15 – 16:45	基本文字の書き方練習	単語の書き取り	物語の読解
16:45 – 16:55	休憩		
16:55 – 17:15	基本文字の書き方練習	単語の書き取り	物語の感想を記述
17:15 – 17:45	ゲーム・発音練習		
17:45	終了		

2 名のうち，どちらのファシリテーターが担当するのか，どのようなアラビア語の学習レベルの参加者が揃うのか等によって活動の時間配分が多少異なるものの，毎回前半の時間は読み書きの練習に，後半の時間は会話の練習にあてられる。表 6.4 に示した 2013 年 4 月 5 日の活動の流れを，ここからさらに詳しくみていく。

16 時，活動の開始時刻であるが，アイラ，リーナの 2 名の参加者がいるのみである。16 時を 5 分ほど過ぎると，ヘレ，ラースがやって来て椅子に着座する。16 時 8 分，ターニャが登場し，ファシリテーターのサミーラに“**アッサラームアレイコム**”とアラビア語で挨拶する。ターニャはイラク方言のアラビア語でサミーラに自己紹介し，過去にイラクに滞在しアラビア語を学んだ経験があることを伝える。

16 時 10 分を過ぎたころ，ファシリテーターのサミーラの“**それでは始めましょうか**”というデンマーク語での一声でプログラムが始まる。ヘレ，ラースは以前から継続的に参加しているため，サミーラがアラビア語の基本文字学習帳をカラーコピーしたものを持参し，机の上に広げる。アイラとリーナは初めての参加であるため，サミーラがアラビア語学習歴やレベルを確認する。アイラとリーナはアラビア語の基本文字の書き方を学習済みと理解したサミーラは，2 人にアラビア語の単語練習帳をコピーした用紙を配布し，書き取り練習をするよう指示する。一方，サミーラはアラビア語の基礎を学んだ経験があるターニャと筆者に対し，ナアアブロー図書館内にあるアラビア語の児童書の中から好きな本を持って来て読むように指示した。ターニャと筆者は席を立ち，アラビア語資料が並ぶ書架から『タリーン』というシリーズ作品の中の 1 冊をそれぞれ選び，プログラム・スペースに戻った。

16 時 15 分，アラビア語の学習レベルによって 3 つのグループ分けが行われた頃，ヤイスがプログラム・スペースに現れた。サミーラはヤイスにラースの隣に着席するように言った。ヤイスも以前からアラビア語「トーククラブ」に参加しているため，基本文字学習帳のカラーコピーを持参している。図 6.2 は 2013 年 4 月 5 日のプログラム・スペースの座席図である。

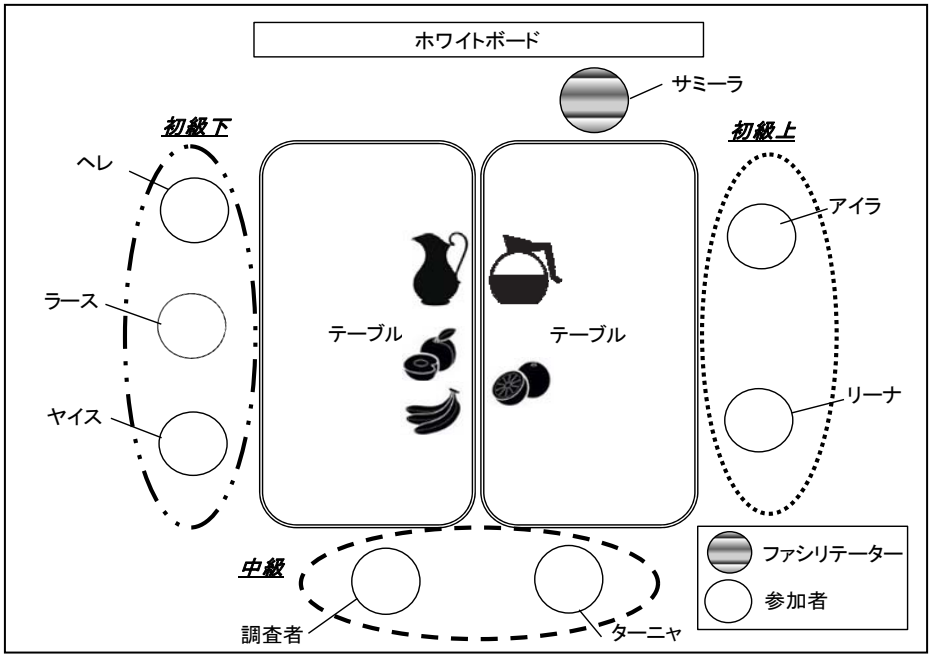

図 6.2. アラビア語「トーククラブ」の座席図

（2013 年 4 月 5 日）

図 6.2 に示すように，参加者はサミーラに促され，アラビア語の学習レベル別に固まって着席した。

16 時 15 分から 3 つのグループが異なる課題に取り組む。サミーラは主に初級下のグループで基本文字の書き方と発音を指導する。アラビア語の基本文字は 1 つの文字が語頭，語中，語尾のどの位置に来るかによって形が変化する。ヘレ，ラース，ヤイスの 3 名は，各文字，3 パターンの変化をアラビア語学習帳のコピーに書き込んで練習する。また，アラビア語の 3 つの母音（あ，い，う）と接合する場合の文字の形の変化も確認する。次に，サミーラは先ほど紹介した文字を含んでいる単語をホワイトボードに書き出し，紹介する。初級上グループのアイラとリーナはサミーラが配布したアラビア語単語帳のコピーに黙々と単語を書き取る。サミーラはおおよそ 10 分に 1 度の間隔で参加者の学習の様子を見まわる。初級上グループでは，サミーラがアラビア語単語帳に記載されている単語を指さし，アイラとリーナが指さされている単語を発音した。中級のグループを見回る際には，サミーラはターニャと筆者に，読んでいる児童書の中に意味が理解できない単語や表現がないかを尋ね

た。フスハー（正則アラビア語）とアンミーヤ（各国の方言）とで単語や表現が異なる場合には，**“イラクのアンミーヤでは●●●と言います”**と補足した。

アラビア語の読み書きの練習は 16 時 15 分から約 30 分間行われ，16 時 45 分頃サミーラがデンマーク語で“**休憩にしましょう**”と言った。机の中央には，コーヒーや水，果物がのった皿があり，参加者は各自自由にそれらを飲食することが許されている。ヘレはポットを手に取り，プラスチック製の 2 つのコップにコーヒーを注ぎ 1 つを自分の元に，もう 1 つをラースの元に置いた。ラースはバナナを 1 本手に取り，“**モウズ（アラビア語でバナナのことを意味する）**”と言う。それを聞いたサミーラは“**ブラボー！ハーザーモウズ（素晴らしい！これはバナナです）**”とアラビア語で応じた。その後もサミーラは机の上にある果物をアラビア語で“**ハーザーボルトカール（これはオレンジです）**”と紹介した。

約 10 分間の休憩を終え，プログラムが再開したのは 16 時 55 分頃だった。参加者は休憩前と同じことに取り組んだ。サミーラは中級のグループの元にやって来て，今読んでいる児童書のあらすじをアラビア語で記すように，ターニャと筆者に指示した。ターニャと筆者はサミーラから白紙を受け取り，そこに『タリーン』のあらすじを記した。サミーラは 17 時 10 分過ぎにターニャと筆者の元に来て，あらすじを記した用紙を回収し，文法や単語の綴りの誤りを赤字で記して返却した。その間，初級下グループは引き続き基本文字の書き方を練習し，初級上グループは単語の書き取りを行った。

17 時 15 分になると，サミーラが“**ゲームをしましょう**”と言い，読み書きの練習は終了した。サミーラは参加者全体を 2 つのチームに分けた。ヘレ，ラース，ヤイス，筆者の 4 名のチームと，もう 1 チームはターニャ，アイラ，リーナの 3 名のチームである。サミーラの手には物のカードと色のカードという 2 種類のカードがあった。サミーラはまず，物のカードに記されている物の名前をホワイトボードに書き出し，次に色のカードに記されている色の名前を書き出した。そして，「ابريق ابيض（白いティーポット）」とホワイトボードに記し，アラビア語では名詞，形容詞の語順になるため，先に「ティーポット」，次に「白い」を置くと説明した。

17 時 30 分前にサミーラの説明は終了し，ゲームがスタートした。各チーム，伏せられているカードの中から，物のカード 1 枚，色のカード 1 枚を引き，カードに記されている物と色の組み合わせをアラビア語で言う事ができると 1 ポイントが入るというのがゲームのルールである。2 チーム交互に回答権が回ってくるようになっており，参加者はチーム内で相談して回答することが許されていた。アラビア語の基礎単語を学習済みであるターニャは，あまり口を開かず，アイラやリーナに回答を促した。もう 1 チームでは，ラースが**“まだ答えは言わないでくれ”**と他のメンバーを制したため，ヘレ，ヤイス，筆者はラースが理解するのを待ってから回答した。途中，「أريكة（ソファ）」という物のカードが出た際，リーナは“**これは女性名詞だから色も女性形にするの？**”とデンマーク語でサミーラに質問した。サミーラは“**その通り**”とデンマーク語で応え，女性名詞と男性名詞の違いを説明した。そして，名詞の性別に応じて形容詞も女性形，男性形に変化すると参加者に伝えた。

女性名詞と男性名詞の説明を終えたところで，時計の針が 17 時 45 分を指しているのに気付いたサミーラは，“**今日は終わりにしましょう**”と言った。ゲームは 1 点差でアイラ，リーナ，ターニャのチームが勝利するという結果に終わった。参加者は荷物をまとめ，**“マアッサラーマ（アラビア語でさようならの意味）”**と言ってプログラム・スペースを後にした。サミーラはゲームで使用したカードを集め，ホワイトボードを掃除した後，プログラム・スペースから立ち去った。

6.4.4. ファシリテーター

ナアアブロー図書館でアラビア語「トーククラブ」を始動させたのはサミーラだった。サミーラはイラク出身の移民 1 世女性である。サミーラにはイラクの小学校でアラビア語を指導していた経験がある。デンマークでもアラビア語を教える機会があれば，と文化担当員としてナアアブロー図書館に勤務し，同じイラクを出身とするダバンに相談したところ，ダバンからナアアブロー図書館でアラビア語を教えたらいいという提案があり，2011 年，ナアアブロー図書館においてアラビア語「トーククラブ」が始まった。

アラビア語「トーククラブ」では，サミーラがファシリテーターとしてプログラムを進行し，ナアアブロー図書館との場所や時間の調整，広報，備品の確保を文化担当員のダバンが務めた。ダバンは 2012 年 8 月から 2013 年 9 月まで休職していたため，その 1 年間については，同じくイラク出身の移民 2 世であるマハがダバンの役割を担った。

2012 年春，サミーラは体調を崩し，1 人でアラビア語「トーククラブ」のファシリテーター役を担うことが難しくなったため，友人で同じくイラク出身のマナールに体調不良時の代役を依頼した。基本的にサミーラがアラビア語「トーククラブ」の実施の中心人物であるが，徐々にサミーラが体調を崩すことが多くなり，マナールに代役を依頼する頻度が増していった。筆者が調査を実施した 2013 年 4 月 5 日から 6 月 14 日までの期間には，観察を行った 8 回のプログラム中，サミーラが 4 回，マナールが 4 回ファシリテーターをしている。このように，ナアアブロー図書館のアラビア語「トーククラブ」の運営はイラクを出身社会とする移民の互助関係によって成り立っている。

サミーラとマナールは共通のテキストを使用し，時間配分もほぼ同様に進行する。しかし，毎回の実施内容について二者間で情報共有をすることはなく，サミーラが既に取り上げた内容をマナールが再び取り上げることがあった。初級下の基本文字の学習では，4 月 5 日に「ذ（ザール）」（アラビア文字の 9 番目に位置する文字）まで進んでいたにもかかわらず，翌 4 月 12 日の回には「ج（ジーム）」（アラビア文字の 5 番目に位置する文字）から始まっていた。

またサミーラとマナールで参加者との接し方は異なる。参加者のヒバは**“サミーラの回にしか参加しません。ここ（アラビア語「トーククラブ」）に来て，サミーラがいなかったら家に帰ります”**と言った。実際，ヒバが参加した 5 月 3 日，24 日，31 日はサミーラがファシリテーターを務めた回である。筆者が理由を尋ねると，ヒバは**“彼女（マナール）は，**

私をソマリーエ（ソマリア人）と呼ぶんです”と述べた。以前，ヒバはマナールがファシリテーターを務める回のアラビア語「トーククラブ」に参加し，マナールがヒバを名前ではなく人種で呼ぶことに不快感を覚えた。そして，それ以来サミーラがファシリテーターをする回のみに参加するようになった。ヒバはマナールと接することを避けるように，サミーラがファシリテーターを行う回のアラビア語「トーククラブ」のみに参加していたのである。調査時，筆者もヒバと同様の経験をしている。筆者はマナールに幾度も名前を告げたが，彼女は筆者をアラビア語で“**ヤバニーヤ（日本人）**”と呼び続けていた。一方，サミーラは必ず参加者を名前で呼んだ。5 月 3 日の回には，カルステン，ヤコブ，ヘンリクの 3 名が初めてアラビア語「トーククラブ」に参加した。サミーラはプログラムが始まると，まず彼らに名前を聞き，ホワイトボードの左下の角に小さく彼らの名前をメモした。そして，プログラム中ホワイトボードのメモを見ながら初参加のメンバーを名前で呼んだ。このように，2 人のファシリテーターの参加者に対する態度には差異があり，参加者の中にはより親近感が持てるファシリテーターの回のみを選択してプログラムに参加している者が存在している。

6.4.5. プログラム中の言語

ナアアブロー図書館のアラビア語「トーククラブ」では主にデンマーク語でアラビア語を指導する間接法[14]が採用されている。そのため，ファシリテーターはアラビア語の基本文字や単語を発音する以外はデンマーク語でプログラムを進める。しかしながら，プログラム中に使用される言語についてもファシリテーター二者の間に違いが見られた。

サミーラは，アラビア語の基本文字の書き方や文法をデンマーク語で説明する。5 月 3 日の回で，初級下レベルのメンバーは「ش（シィーン）」（アラビア文字の 13 番目に位置する文字）を学んでいた。ファシリテーターをしていたサミーラは，ホワイトボードに「ش（シィーン）」を含む単語を شاي (Shay)，شجرة (Shajara)，حشرة (Hashara) と 3 つ記し，アラビア文字の下に読みをアルファベットで書いた。そして，شاي の上にデンマーク語で「Maskulin（男性形）」，شجرة ，حشرة の上に「Feminin（女性形）」と書き加え，デンマーク語で男性名詞と女性名詞の違いについて説明した。

マナールもサミーラ同様，デンマーク語を用いてアラビア語の基本文字や文法を説明しようとしていた。4 月 12 日，マナールは 16 時 10 分のプログラム開始からデンマーク語を用いてプログラムを進行していた。開始から 15 分が経過した 16 時 25 分頃になると，マナールは突然“**英語で話してもいいですか？**”と参加者に尋ね，プログラムを進行する言語をデンマーク語から英語へ切り替えた。しかしながら，完全に切り替わったわけではなく，デンマーク語と英語を混ぜてアラビア語の文字や文法について説明した。プログラムを進行する言語が英語とデンマーク語の混合であることについて参加者のダニエルは“**意味はわかるから，それ（二言語が混ざること）はあまり問題ではない**”と述べた。一方，ヘレは“**すべてアラビア語で話したらいいと思う**”と語った。

以上のことから，アラビア語「トーククラブ」のプログラム中の使用言語はファシリテー

ターの言語能力と密接に関係していることがわかる。ファシリテーターにデンマーク語の能力が十分に備わっていない場合，デンマーク語一言語を用いてプログラムを進行することは難しく，英語との二言語混合になる。参加者の反応は様々で，問題視していない者がいれば，アラビア語でアラビア語を指導する直接法を用いた進行を望んでいる者も存在する。

6.4.6. 多様な学習レベルや学習ニーズ

参加者のアラビア語「トーククラブ」への参加の動機やプログラムの基本的な展開からも見て取れるように，参加者のアラビア語のレベルは一様ではない。また，ナアアブロー図書館のアラビア語「トーククラブ」に求めるニーズも参加者によって異なる。このような参加者の異なる学習レベルや学習ニーズに応じるために，既述のようにファシリテーターは初級下，初級上，中級の 3 つのレベル別グループを作り対応していた。

しかしながら，実際にはナアアブロー図書館のアラビア語「トーククラブ」では対応することができない学習レベルや学習ニーズを持つ参加者が存在している。以下は，4 月 5 日と 5 月 31 日にファシリテーターのサミーラと参加者のターニャ，ナザとの間で交わされたやり取りである。

4 月 5 日のプログラムが終了し，参加者がプログラム・スペースから離れる中，ターニャはサミーラの元へ行き，“**文法はイラクで勉強したのでわかります。もっとアラビア語で会話をしたいんです**”と話した。ターニャは大学の卒業研究の調査でイラクに滞在した経験があり，その際に現地の語学学校で既にアラビア語の基礎的な読み書きを学習していた。ターニャは現在，アラビア語の基礎的な読み書きより，会話を中心に学ぶことを希望しているとサミーラに伝えたのである。サミーラは，ナアアブロー図書館の至近距離にあるミュルナパーケンには，アラブ圏を出身とする両親の元に生まれ育った移民 2 世を主な対象としたアラビア語のクラブが存在することをターニャに伝えた。するとターニャが興味を示したため，サミーラはミュルナパーケンのアラビア語のクラブの開催場所や時間をメモに記し，ターニャに渡した。

また，同様のやり取りは 5 月 31 日の回にも行われていた。参加者のナザは，プログラム中の休憩時間になるとサミーラの元へ行き，“**（ここでの学習内容は）簡単すぎるので帰ります**”と告げた。イラクのクルディスタン（クルド人自治区）を出身とする両親の元に生まれたナザは，アラビア語を体系的に学習した経験はないものの，アラビア文字を使用するクルド語を母語とし，アラビア語を話す両親の元に生まれ育ったため，アラビア語「トーククラブ」での学習内容に物足りなさを感じ，プログラムの途中での帰宅を決めたのである。サミーラはミュルナパーケンのアラビア語クラブをナザにも薦め，ターニャにしたのと同じように開催場所や時間を記したメモをナザに渡した。

以上から，ターニャはアラビア語の会話力を伸ばすことを，ナザはより高度なレベルのアラビア語学習を望んでいるが，ナアアブロー図書館のアラビア語「トーククラブ」では二者の学習レベルや学習ニーズに応じることができていない様子がわかる。この点において，ナ

アアブロー図書館のアラビア語「トーククラブ」が対応できる参加者の学習レベルや学習ニーズには限りがあると言える。しかしながら，対応不可能な学習レベルや学習ニーズを持つ参加者を無視するのではなく，近隣の他のアラビア語クラブを案内することで参加者の多様なレベルやニーズに適した学習の場へと導いている。

6.5. パルビンが語る「トーククラブ」

パルビンはナアアブロー図書館のデンマーク語「トーククラブ」の参加者の一人で，2008年にバングラデシュからデンマークへ移住した経験を持つ女性である。「トーククラブ」の活動時間が終了した直後，筆者は隣席で，まさに家路につこうとしていたパルビンに話し掛け，インタビューの依頼をした。彼女は快諾し，**“こっちの方が落ち着いて話せます”**と筆者を手招きし，「トーククラブ」が開講されているプログラム・スペースを出た。向かったのはナアアブロー図書館内にあるラーニングセンターである。パルビンと筆者はラーニングセンター内の一角に着座しインタビューを始めた。

6.5.1. 「トーククラブ」への参加のきっかけ

パルビンがナアアブロー図書館のデンマーク語「トーククラブ」について知ったのは，デンマーク語学校の掲示板を見ていた時だった。ナアアブロー地区に立地するその語学学校の掲示板には，同地区にあるナアアブロー図書館のプログラムに関する情報も掲示されている。パルビンは掲示板に数ある掲示物の中からナアアブロー図書館のデンマーク語「トーククラブ」と「宿題支援」に関するお知らせを見付け，関心を抱いた。

折しも，パルビンはデンマーク語を継続的に学べる環境を探し求めていた。デンマークでは移民を対象に 3 年を上限とする約 2000 時間のデンマーク語コースが無料で提供されている[15]。コースを修了したことを証明する証書は，デンマークにおいて永住権を獲得するために必要な書類の 1 つである。また，同証書は移民がデンマークで就職活動をする際，基礎的なデンマーク語能力を有することの証しにもなる。デンマーク語コースを最終的に修了するには，筆記試験と口頭試験に合格する必要がある。インタビュー時，パルビンはデンマーク語コースの最終段階におり，最終試験のための準備に追われていた。パルビンは語学学校での所定の授業を全て受講し終えていたが，復習が必要だったため試験準備として成人教育センター（Voksenuddannelse Center，以下 VUC）に通っていた。最終試験の準備を行う様子をパルビンは以下のように語っている。

- **私は AVU（Almen Voksenuddannels：一般成人教育）の語学コースを取っていたんです。＜中略＞でもロックアウト（労働者側のストライキに対抗して，使用者が職場を閉鎖すること）で閉まってしまったんです。＜中略＞それで語学学習のサポートが必要になったんです。それで私はここ（ナアアブロー図書館）に来るようになりました。＜中略＞（語学学校でのデンマーク語）コースはもう修了したんです。ただ追加コースを受**

けるために（成人教育センターに）通っていました。（本来なら）繰り返して学ぶ必要はないんです。私は語学学校のコースを終えていますから。ただ，復習のための語学学習コースを受けていました。でも閉まってしまった。1 週間以上。あっ，1 週間じゃなかった。1 か月。1 か月間閉まっていました。＜中略＞5 月 1 日に閉まって，6 月 6 日に再開したんです。私の試験は 5 月 22 日でした。筆記試験の方。もう 1 つ（口頭試験）は昨日（2013 年 6 月 25 日）でした。

2013 年春，デンマークでは「新しい北欧の学校（Ny Nordisk Skole）」と呼ばれる公立小中学校の教育改革と，教員養成課程の改革が同時に行われた。改革にともない新しく提示された労働条件を承諾できない教員組合は，自治体連合（Kommunernes Landsforening，以下 KL）に対し激しく反発した。教員組合と自治体連合は数回の話し合いの場を持ったが，話し合いは決裂し，ついに使用者側の自治体連合は，教員に対して職場を封鎖することで就労をさせずに給与も支払わないロックアウトを強行した。ロックアウトは 1 か月続き，その間公立の小中学校および，公立の各種教育施設における教育活動の一切が停止した[16]。

語学学校はロックアウトの対象外であったが，成人教育センターは封鎖され，教育活動は停止した。1 か月の封鎖期間中にデンマーク語の筆記試験を控えていたパルビンは慌ててデンマーク語学習が継続できる場所を求めた。そして，語学学校の掲示板にあった掲示物を通してナアアブロー図書館の「トーククラブ」と「宿題支援」に出会ったのである。ゆえに，パルビンはナアアブロー図書館のプログラムに参加する目的を明確にデンマーク語の試験に合格することに置いていた。そして，筆記試験の対策を「宿題支援」で，口頭試験の対策を「トーククラブ」で行おうと考えた。筆者がインタビューを実施した時点において，パルビンは既に筆記試験に合格していた。口頭試験については 1 度受験したが，不合格だったため，再試を受ける必要があった。

- （宿題支援では）試験準備をしたり，文法の問題についてきいたり。（デンマーク語の）試験のために（参加していました）。＜中略＞筆記試験は合格しました。だから，今は口頭試験に焦点を当てないと。

パルビンは上記のように語り，デンマーク語の筆記試験に合格したため，筆記試験の準備と位置付けていた「宿題支援」への参加は終了し，今後は口頭試験の再試験に向けた準備に傾注する意思を示した。

6.5.2. デンマークへの移住と公共図書館との出会い

パルビンがデンマークで公共図書館を利用したのはナアアブロー図書館のプログラムへの参加が初めてのことではない。彼女がデンマークの公共図書館と最初に出会ったのは，2009 年に大学院修士課程で大学院生として学んでいる時だった。パルビンは 2008 年末に

デンマークへ移住後, 2009 年にスウェーデン南部の街ルンドに立地するルンド大学（Lunds Universitet）大学院の公衆衛生学の修士課程に入学した。当時，パルビンは夫と共にデンマークのルングビュー（Lyngby）で生活していたため，大学のあるスウェーデンのルンド（Lund）へは国境を越えて通学していた。修士課程に入学した理由についてパルビンは以下のように語る。

・　（デンマークで）この（医療）分野で仕事を得ようと思ったら，すごく大変なんですね。語学を習得しなければいけないし，その他にも（大変なことがあります）。そういう問題を取り除くのに，修士を取るのが良いのかなと思ったんです。職業選択の幅を広げるために。＜中略＞もっと職業の選択肢を持つためにね。それと，夫とバングラデシュからデンマークへ来たばかりで何もすることがなかったんです。何をすればいいかわからなかった。それで，修士号を取るのは良い考えかなと思ったんです。

パルビンは出身社会のバングラデシュの大学で 2005 年に医学士を取得した。2005 年から 1 年間首都ダッカの公立病院で研修医として働いた後，同病院で 2006 年から 2008 年までの 2 年間，医師として勤務した。2008 年，デンマークの大学院に留学していたバングラデシュ出身の男性と結婚し，パルビンは夫の暮らすデンマークへと移住した。移住後，彼女はこれまでのバングラデシュで構築したキャリアを活かし，医療に携わる職に就きたいと考えたが，就職活動は思うように進まなかった。そこで，医療分野の中でもこれまで専門的な教育を受けたことのない公衆衛生学を大学院で専攻し，“職業選択の幅を広げ”ようと試みた。

修士課程での授業ではたくさんの書籍が課題図書として指定された。パルビンは大学図書館で課題図書を借りようとしたが，他の学生によって借りられており，利用できなかった。その状況を彼女は以下のように語る。

・　大学図書館で（本を）予約することはありませんでした。みんな同じような本が借りたかったんです。でも（大学）図書館には全員のための本はない。それで，コペンハーゲン図書館を利用しました。それと王立図書館。＜中略＞実際，最初は友達から（公共図書館について）聞いたんです。私には中国人の友達がいて。彼女も私と一緒にルンド大学で学んだんです。彼女が本を（公共）図書館で借りていると言ったんです。＜中略＞学術的な本を（公共）図書館で借りていると言ったんです。それを知る前，私は本を買っていたんです。＜中略＞Amazon.com で買えるでしょ。私の夫は学術的な本まで（公共）図書館で借りられると思っていなかったみたいなんです。それで私が彼に，友達が（公共）図書館で学術的な本を借りているみたいなんだけどって話しました。そしたら彼がウェブサイトでどうやって手に入れられるか調べたんです。実際，（公共図書館での貸出の手続きは）そんなに複雑な手順ではなかったんですよ。簡単でした。

パルビンは大学院の授業で使用する図書を大学図書館で借りることができなかったため，インターネットを介した通信販売サイトである Amazon.com を使用し，必要な図書を購入していた。ある日，パルビンはルンド大学の学友である中国出身の女性との会話の中で公共図書館でも学術書を扱っていることを知る。そして既にデンマークで公共図書館の利用経験を持つ夫のサポートを受け，パルビンはデンマークで初めて公共図書館を利用した。当時生活していたルングビューからコペンハーゲンで電車を乗り換えて大学のあるルンドへ向かっていたため，パルビンはインターネット上で予約した資料を自宅から大学への往復の途中で受け取り，返却することができた。

6.5.3. デンマークでの公共図書館利用

2009 年，スウェーデンにある大学院修士課程で学ぶことを機に，大学院の授業で必要な図書をコペンハーゲン図書館で借りるようになったパルビンは，徐々に公共図書館の利用に慣れ，複数の公共図書館を利用するようになった。複数の公共図書館の利用について彼女は以下のように述べている。

- 2 週間前にヴァンリューセ（Vanløse）図書館へ行ったんですけど，すごく気に入りました。ヴァンリューセです。＜中略＞すごく好きです。それから以前はルングビュー図書館へも行っていました。あそこもすごくきれいです。あと，ウスタブロー（Østerbro）図書館もきれいだって聞きましたよ。家から一番近いのはウブロー・イエートヴァイ（Øbro Jagtvej） 図書館です。そこはちょっとうるさい図書館なんですよ。

- ルングビュー図書館は立地はすごくよくて，自然もあってきれいでした。ルングビュー図書館はすごく居心地が良いんです。とっても魅力的です。内装もきれいで。立地もいいし。そういう図書館が私は好きです。でも今の私の家からは遠く離れていますから。

公共図書館を利用し始めた当初，利用の目的を大学院の授業で使用する資料を借りることに置いていたが，次第に館内に居心地の良い場所を見付け，館内での読書を楽しむようになっていった。ルングビューで生活していた間，彼女はルングビュー図書館を頻繁に利用した。パルビンにとってルングビュー図書館は，建築が美しく，腰を落ち着かせて読書を楽しむことのできるお気に入りの場所だった。その後 2011 年，パルビンは夫と共に生活の拠点をルングビューからコペンハーゲンへと移した。転居にともない主にコペンハーゲン・コムーネ内の公共図書館のみを利用するようになった。彼女にとってルングビュー図書館が居心地の良いお気に入りの場所であったため，コペンハーゲンに転居してからもルングビュー図書館のような公共図書館を探し求めた。

コペンハーゲンの転居先から最も近くに立地していたのは，ウブロー・イエートヴァイ図

書館だった。しかし館内は騒々しく，お気に入りだったルングビュー図書館とは異なっていた。コペンハーゲン・コムーネ内でパルビンにとって理想的な図書館はヴァンリューセ地区に立地するヴァンリューセ図書館（正式名称は「文化の駅ヴァンリューセ（Kulturstationen Vanløse）」）だった。自宅からヴァンリューセ図書館まではバスを乗り継ぎ片道約 45 分を掛けて出掛けた。

一方，語学学校の掲示板で見付けたデンマーク語学習を支援するプログラムを実施しているナアアブロー図書館は，パルビンが理想とする建築が美しく，落ち着いて読書が楽しめる図書館とは異なっていた。パルビンはナアアブロー図書館について以下のように話している。

- ここ（ナアアブロー図書館）は，すごくうるさい図書館ですね。私はそんなに頻繁にこの図書館に来ているわけではないんです。そんなに頻繁じゃないです。ここに来るのは「トーククラブ」に参加する時と，あとこの部屋でサポートを受ける時です。先生が指導してくれるんですけど。＜中略＞宿題支援です。それから，本や映画を借りるかな。デンマーク語の映画ね。でも読書のための場所は他の図書館で探します。静かで落ち着く場所をね。＜中略＞この図書館は読書には向いていないと思いますね。いつも何か揉め事があるし。

- 「トーククラブ」のためにここのナアアブロー図書館にも来ますよ。ナアアブロー図書館にはこのようなタイプの活動がたくさんありますね。ナアアブローにはたくさん移民がいますからね。＜中略＞思うに，ルングビュー図書館では宿題支援はやっていないと思います。＜中略＞「トーククラブ」もそうです。他の図書館ではやっていないことです。そういう意味で，この図書館は役に立っています。でも（ナアアブロー図書館は）読書や勉強には良くないですね。

パルビンはナアアブロー図書館を“いつも揉め事がある”騒々しい図書館で，落ち着いて読書を楽しむには適していない場所であると認識している。しかしながら，移民が多く居住しているナアアブロー地区に立地するナアアブロー図書館は，「トーククラブ」や「宿題支援」など，移民を主要な対象に置いたプログラムを複数実施している。その点において，ナアアブロー図書館はかつてパルビンがお気に入りとしていたルングビュー図書館とは異なっていた。そして彼女は，移民を対象にしたプログラムという点に限ってナアアブロー図書館を利用する価値のある場所と見做している。

このように，パルビンは複数の公共図書館を目的に応じて使い分けている。プログラムへの参加のためにナアアブロー図書館を利用する一方，読書のための場所は他の公共図書館に求めていた。彼女はその理由を以下のように語っている。

・　長所と短所がありますね。すべての図書館がそうですが。だから私は１つの図書館に固執するべきではないと思うんです。他の図書館に行けば，また別のわくわくする活動がありますからね。さっき話したように，私の家の近くにはウブロー（イエートヴァイ）図書館があるんです。その図書館では，セーターの一あー。何て言いますか？（筆者が“編み物？”と応じる）編み物。そう。編み物カフェが開かれています。宿題カフェじゃなくて編み物カフェ。＜中略＞だから，それぞれの図書館が異なる活動をしているんです。＜中略＞子どもに焦点を当てた活動をしているところもありますね。いくつかの図書館は子どものために集中的に活動しています。それぞれ違った活動をしています。

コペンハーゲンへ転居し，お気に入りであったルングビュー図書館のような場所を探し求める中で，パルビンは公共図書館によってそれぞれ特徴があり，焦点を当てているサービスが異なっていることに気付いた。そして，1 館の公共図書館であらゆる目的を果たそうとするのでなく，目的に応じて複数の図書館を使い分けるという利用方法を発見したのである。その中で，彼女はナアアブロー図書館をプログラムに参加する目的で利用する場所であると位置付けている。

6.5.4.　バングラデシュでの図書館利用

デンマークに移住してから複数の公共図書館を目的に応じて使い分けているパルビンであるが，移住前のバングラデシュでの図書館利用はどのようであったのだろうか。幼少期の図書館利用についてパルビンは以下のように語った。

・　子どもの頃，幼稚園とか小学校１年生くらいのころ。あの頃は学校にあった図書館に行って，おとぎ話を読んでいましたよ。週に 1 度 1 コマだけ図書館で勉強する時間があったんです。学校には時間割があって，週に１度だけ図書館で勉強したんです。子どもたちは図書館に行って，読みたい本を読むんです。その頃，図書館は良い所だなって思いましたね。たくさんのおとぎ話を読みました。デンマークのおとぎ話も。ハンス・クリスチャン・アンデルセンのお話です。いろんな国のたくさんのお話を読みました。コレクションがすごく良かったんです。すごくそこ（学校図書館）での時間を楽しんでいました。すごく良い影響があったと思っています。

パルビンは教育に対する関心が高く，経済的余裕を持った両親のもとに生まれた。そのため，初等教育の段階から設備の整った環境で学ぶことができた。校内には充実したコレクションを持つ図書館もあり，学校図書館を活用した授業も展開されていた。彼女が生活している環境とは全く異なる世界が描かれている外国の作品を手に取っては，異国の地に思いを馳せ，豊かな時間を過ごした。パルビンは学校図書館で充実した時間を過ごした頃を振り返り，“図書館は良い所だな”と述べている。

しかし，成長とともに学校での勉学が忙しくなり，パルビンが学校図書館で童話を読む機会は次第に減っていった。徐々に図書館を利用しなくなった経緯についてパルビンは以下のように語っている。

・　成長してからも，小説を読んだり，読書をし続けました。でも，本は買っていて，図書館には行かなかった。＜中略＞（バングラデシュ）の教育制度はここ（デンマーク）とは違うんです。すごくプレッシャーが強くて，そんなに時間がなかったんです。勉強に関係する本以外を読む時間（はありませんでした）。勉強の本はほとんど買っていました。マーケットで買っていたので，図書館には行きませんでした。たまに借りることはあったかもしれないけど，頻繁ではありませんでした。勉強の本はたまに借りてたかな。

パルビンはバングラデシュの教育方法は生徒に強い圧力をかけて勉強させる詰め込み型であったため，趣味として読書を楽しむ余裕がなかったと述べた。また，勉学に必要な本は購入していたため，図書館に足を運ぶことはほとんどなかったと説明している。パルビンは大学に入学してからの図書館利用について以下のように語った。

・　（バングラデシュで）大学に通っていた時に，はい，大学に図書館はありましたね。でも私は図書館を使いませんでした。本は全然更新されないんです。古い本ばかりなんです。でも私たちは新しいものを読む必要があったので。でも時々静かな場所で読書したい時に（図書館へ）行きました。そういう目的では時々。でも滅多にありませんでした。頻繁ではありませんでした。＜中略＞（大学図書館を利用したのは）5 年間の大学生活で 3 回位です。なぜなら，全然居心地が良くなかったんです。図書館へ行っている人もいましたけど，私は行きませんでした。グループワークをしなければいけない時に（図書館を）利用している人はいましたよ。でも私は一人で読書したり，教室でクラスメイトと議論したりしていたんです。だから図書館には行きませんでした。

パルビンは 1998 年にバングラデシュの首都にある医療系の大学に入学した。大学には大学図書館があったが，パルビンにとって大学図書館の資料のコレクションは満足できるものでなく，館内の居心地も良くなかった。そのため在学中に大学図書館を利用することはほとんどなかったと言う。

このように，バングラデシュでのパルビンの図書館利用は 7 歳頃までに限られており，それ以降は図書を購入し，入手していた。つまり，バングラデシュでは約 20 年間図書館をほとんど利用することなく過ごし，2009 年，デンマークで中国出身の友人からの言葉をきっかけに，20 年ぶりに図書館と再会したことになる。

6.5.5.　「トーククラブ」への期待と現実

ここまで示したように，バングラデシュでは約 20 年間ほとんど図書館を使わなかったパルビンであるが，デンマークへの移住後，大学院の学友から聞いた話をきっかけに再び図書館を利用し始めた。次第に彼女の図書館を利用する頻度は増し，複数の図書館を目的に応じて使い分けるようになる。そして，デンマーク語の試験に合格する，という明確な目的を持ってナアアブロー図書館で実施されている，「トーククラブ」などのプログラムに参加するようになった。

参加前，彼女は「トーククラブ」に大きな期待を寄せていたが，現実の「トーククラブ」は彼女の期待したものとは異なっていた。「トーククラブ」への期待と現実について彼女は以下のように語っている。

- **「トーククラブ」の構成がどうなっているのか私にはよくわかりませんが，語学教育のクラブではないんです。「トーククラブ」は語学教育もカバーすべきだと思いますけど。私たちが（デンマーク語で）話す時，発音や文法は訂正されるべきです。私が（「トーククラブ」に）期待していたことはそういう事なんです。もし私が間違った言い方をしたら，彼女（ファシリテーター）が訂正をする，そういうやり方（を望んでいます）。＜中略＞彼女はいろんな状況を想定して，デンマークでの生活，行事，公の場とかジョブセンターではこうやって話すべきとか。そういうこと（講習）を想像していました。私が「トーククラブ」について聞いた時，指導が受けられると思っていました。**

デンマーク語の試験に合格する，という明確な目的を持っていたパルビンは，「トーククラブ」に「指導」を期待していた。彼女が誤った文法や語法を用いて話した際，ファシリテーターがそれを指摘し，訂正するような形式で進む活動を想定していたのである。しかし，実際に「トーククラブ」は異なっていた。ファシリテーターは，参加者が自らの意見をデンマーク語を紡いで発言することを重視しており，会話の中に多少の文法や語法の誤りがあってもそれを指摘し，“**指導**”することはなかった。パルビンは一度口述試験を受験したが不合格だったため，再試験を受けなければならなかった。彼女は再試に備えて正しく文法や語法を用いて話す訓練が必要であると感じていた。そのため，会話に文法や語法の正しさを求めない「トーククラブ」の進め方について多少の不満を抱きながら活動に参加し続けていたのである。

しかしながら，パルビンが不満を態度に表すことはなく，プログラム中には話題に応じて能動的に発言していた。

「トーククラブ」での話題が，おすすめの本について及んだ際には，“**オーディオブック（lydbog）が（デンマーク語の学習に）おすすめです**”と発言し，自身のデンマーク語の学習方法を他の参加者に告げた。加えて，ナアアブロー図書館ではどの位置にオーディオブックを設置しているかも合わせて知らせた。

また，パルビンの専門である，医療に関する話題になった際には，会話量が大きく増した。ファシリテーターは，デンマークでは医療改革が進められており，今後 10 年ほどの間に医療の効率化を目指して，地域病院を徐々に閉鎖し，レギオーン（Region）毎に 5 つの巨大な公立病院を建設して中央集権化を強める計画があることを告げた。またそれにともない，医師や看護師の集団解雇が進められると述べた。これからデンマークで医療分野の職に就きたいと考えているパルビンにとって，この問題は他人事ではなく，矢継ぎ早に**“病院の数を減らして十分な医療は提供できるの？”“なぜデンマークではこんなに私立病院の数が少ないの？”**とファシリテーターに質問を投げ掛けた。彼女はさらにファシリテーターに質問を続け，途中からパルビンとファシリテーターの二者のみの議論になるほどの白熱した様子であった。

また，参加者全員で夏休みの予定について話した際には“**オーフースからユラン（Jylland）半島の先端のスケーインに行く計画を立てています。夫と友人家族とともに**”と話し，旅程の詳細を説明した。以下は，その時の様子をフィールドノーツに記したものである。

- **パルビンが夏休みの計画を話すのを聞いていたヘレ（ファシリテーター）は，“積極的に話しているからすごく（デンマーク語での会話が）上手になったみたい”と伝えた。それを聞いていた参加者の 1 人のアイシャ（仮名・ソマリア出身女性）は，“本当にうまくなってると思う。以前より話し方がなめらかになった”と言った。そしてパルビンは照れながら“少しずつ（デンマーク語を話すことが）怖くなくなってきた”と応じた。**

【フィールドノーツ／2013 年 6 月 14 日】

事前に話題を設定せず，参加者やファシリテーターの関心により，その場その場で話題が決定していく「トーククラブ」の中で，パルビンは毎度話題に応じて語ることのできることを探し出し，主体的にデンマーク語を用い，発言してきた。その行為を繰り返すことで，パルビンはデンマーク語を話すことに対する恐怖心を軽減させていると語っている。そして，能動的にデンマーク語を話そうとするパルビンの姿勢を称え，ファシリテーターは**“積極的に話しているからすごく上手になったみたい”**とパルビンに告げている。また，参加者のアイシャもパルビンの姿勢を認めていたため，ファシリテーターの言葉に同意しパルビンを称えている。このように自己の能動的な行為が他者によって肯定されるという，ファシリテーターや参加者とのコミュニケーションを通して，パルビンはデンマーク語を話すことに対する抵抗を徐々に軽減させている。

前述したように，パルビンは“**指導**”を行わない「トーククラブ」の手法は期待とは異なると発言し，不満を示していた。しかし，実際の「トーククラブ」の場では，不満を抱きながらも継続して主体的に参加し，他者とのコミュニケーションを通してデンマーク語に対する恐怖心を緩和させている様子が明らかになった。

6.5.6.　「トーククラブ」での他者との関係

パルビンには，他者とのコミュニケーションを円滑に行うために，戦略的に行っていることがある。それは特にアラブ圏出身の女性を意識して取られる行為である。パルビンの戦略的な行為を記録したフィールドノーツを以下に示す。

- 録音に使用していた IC レコーダーを止めた直後，パルビンはヒジャブを留めていたピンの位置を直しながら，バングラデシュで生活していた頃はヒジャブを着けておらず，デンマークに来てからも大抵の時間はヒジャブを着用していないことを明かした。デンマーク語学校と図書館に来る時に限り，ヒジャブを纏うのだと言う。語学学校や「トーククラブ」にはアラブ圏出身のムスリマ（イスラーム教徒の女性）が複数いる。彼女たちは皆ヒジャブを巻いており，ヒジャブを着用することが望ましいと思っている。彼女たちに接近するにはヒジャブが必要だと語った。

【フィールドノーツ／2013 年 6 月 20 日】

パルビンはヒジャブを纏うことで，語学学校や「トーククラブ」での多数派であるアラブ圏出身の移民女性と容姿に共通点を持とうと努めていることがわかる。そして，共通点を持つことで，アラブ圏出身の移民女性と友好的な関係を築こうとしている。しかしながら，同時にパルビンはアラブ圏出身の女性移民に対し不満も抱いている。パルビンはアラブ圏出身者に対する思いを以下のように語っている。

- ほとんどのメンバーはアラビア語圏からの女性なんですね。彼女たちの多くはアラビア語で話すんです。私たちはデンマーク語で話しにここ（ナアアブロー図書館）へ来ているんです。だから，もっと（デンマーク語で話すことを）徹底してほしいです。それと（プログラム全体を）体系化してほしい。＜中略＞私たちは 2 時間，あの場（「トーククラブ」の部屋）に座っているでしょ。2 時間は長くもないし，短くもない。この 2 時間は，良い機会だと思うんです。もっと実りある時間にできるんじゃないかな。

「トーククラブ」はデンマーク語の会話力の向上を目的にしているプログラムであるにもかかわらず，アラブ圏出身の移民がアラビア語で会話している様子に対し，パルビンは不満を抱いている。アラブ圏出身の移民は「トーククラブ」の参加者の中で多数派であることから，アラビア語での会話は一層大きな存在感を放って非アラビア語話者のパルビンの耳に届く。デンマーク語の会話力を向上させ，デンマーク語の試験に合格することを目的にプログラムに参加しているパルビンは，デンマーク語の中にアラビア語が入り交ざって聞こえてくることに不快感を示している。

パルビンはヒジャブを纏い，戦略的にアラブ圏出身者と友好な関係を築こうとしていると同時に，プログラム中にアラビア語を多用する彼女たちに対し不満を募らせていた。パル

ビンは多数派であるアラブ圏出身の移民を強く意識しながら「トーククラブ」に参加している。

6.5.7. パルビンにとっての「トーククラブ」

パルビンが一歩「トーククラブ」の場の外に出ると，デンマーク語を用いて能動的に話をする機会はほとんどない。語学学校や「トーククラブ」での時間を除けば，デンマーク語で話すのはほとんど買い物をする時のみで，それも挨拶程度のコミュニケーションである。また，ネイティブのデンマーク人の中に友達と呼べる存在はいない。隣人との間にも会話らしい会話はない。ネイティブのデンマーク人とのコミュニケーションについてパルビンは以下のように語っている。

- **（デンマーク人と話すのは）すごく稀ですね。デンマーク人と話すのは簡単じゃないです。たぶん話したくないんじゃないかな。＜中略＞（バングラデシュにいる）母は近所の人の活動についてよく知っています。あの人は結婚したとか，あの家族には新たに子どもが生まれたとか，そういうこと。＜中略＞（筆者の“今あなたは近所の人との間にそういう関係はありますか？”の質問に対して）あんまりないですね。ただ，こんにちはっていうだけです。**

パルビンは，ネイティブのデンマーク人とのコミュニケーションに困難を感じており，会話をすることは容易ではないと述べる。彼女はネイティブのデンマーク人が“**（私とは）話したくないんじゃないかな**”と感じているため，彼女からデンマーク語で会話を切り出すことはない。

しかしながら，前述したように，「トーククラブ」の場では，パルビンが何度も主体的に発言する様子が確認できた。つまり，デンマーク語「トーククラブ」は，パルビンのデンマークでの生活においてデンマーク語を能動的に話すことができる希少な機会となっていると言える。パルビンはネイティブのデンマーク人とのデンマーク語でのコミュニケーションを“**簡単じゃない**”と言っているが，移民が多く集まる「トーククラブ」ではデンマーク語で多弁に振る舞っていた。同じような境遇に置かれている者が集まる場であるからこそ，パルビンは「トーククラブ」の場で躊躇いなくデンマーク語で語ることができている。

6.6. 「地域の母」

ここでは，ナアアブロー図書館を拠点として移民女性を主な対象に実施された「地域の母」というプロジェクトを取り上げる。

6.6.1. メンバーの基礎情報

ナアアブロー図書館の「地域の母」メンバーは計 14 名である。メンバーの基礎情報は表

6.5 の通りである。

表 6.5.　「地域の母」メンバー基礎情報

仮名	年齢	出身	母語	滞在歴 ※カッコ内は移住時の年齢
ムナ	43歳	レバノン	アラビア語	25年（18歳）
ラシャ	43歳	レバノン	アラビア語	24年（19歳）
ゼナ	不明	レバノン	アラビア語	19年（不明）
ヌール	不明	レバノン	アラビア語	16年（不明）
ハナン	45歳	パレスチナ	アラビア語	18年（27歳）
ウマイマ	40歳	パレスチナ	アラビア語	17年（23歳）
アスマー	38歳	パレスチナ	アラビア語	16年（22歳）
レイラ	36歳	イラク	アラビア語	13年（23歳）
リーナ	26歳	イラク	アラビア語	8年（18歳）
ドゥニヤ	26歳	モロッコ	アラビア語	7年（19歳）
アミーラ	43歳	ソマリア	ソマリ語	18年（25歳）
ファーイザ	不明	ソマリア	ソマリ語	16年（不明）
ファティマ	不明	ソマリア	ソマリ語	13年（不明）
アムナ	50歳	パキスタン	ウルドゥー語、パシュトゥー語	29年（21歳）

表 6.5 からわかるように，「地域の母」の属性は多様で，年齢は 26 歳から 50 歳まで，デンマーク滞在歴は 7 年から 29 年までの者がいる。デンマークへ流入した経緯もそれぞれ異なり，ゲストワーカーとして移住した者もいれば，政治的理由により難民として出身社会からデンマークへ逃れた者もいる。14 名のうち多くは，18 歳を過ぎてからデンマークへ移住している。つまり，「地域の母」の多くが出身社会からデンマーク社会へと適応する過程を身を持って経験しており，その過程での自身の失敗談や留意点を実体験として語ることができるのである。

14 名の職業は様々である。レイラのように，イラク大使館に勤務しながら「地域の母」の活動に参加している者がいれば，アムナとラシャのように自身でエスニック商店を経営している者もいる。また，ファーイザのように主婦として家事をしており，職を持っていない者もいる。

「地域の母」のメンバーになるに至った経緯も多様である。

ドゥニヤは元々ナアアブロー図書館の清掃員だった。館内の清掃をしている際に，「地域の母」の活動について知らせる掲示を目にし，興味を抱いたと言う。また同時期に，司書からも「地域の母」の活動への誘いを受け，参加を決意した。

ゼナとムナはミュルナパーケンというナアアブロー地区の中でも特に移民が集中的に居

住している公営の集合住宅地で，住民間の円滑な交流を促進するコミュニケーション担当員（Kommunikationsambassadør）をしていた時に「地域の母」のことを知ったと話す。

アミーラは友人からナアアブロー図書館での「地域の母」に関する噂を聞き，興味を持ったのでナアアブロー図書館を訪れ，カウンターで職員に活動の詳細について質問したことがきっかけである。

14 名の異なるデンマーク滞在歴や職業，「地域の母」への参加の経緯が示すように，「地域の母」のメンバーは統一された一定の手法で集められたのではない。また，「地域の母」になるための特別な規定もない。基本的に，自ら身をもって移住の経験をしており，「地域の母」として活動する意志を持っていれば，あらゆる移民女性が「地域の母」として活動できる可能性を有している。

6.6.2. 「地域の母」と地域の女性との関係

「地域の母」と相談者の女性との関係は，ケースに応じて様々である。ドゥニヤは“**まるで友達のようで，時々一緒にレストランで食事することもあります**”と語る。1 回の面会では相談が終わらず，同じ相手から複数回にわたり相談を受けることもある。顔を合わせる回数が増すにつれて徐々に関係が深化していき，次第に友達のような関係に発展している場合がある。

一方，ヌールは「地域の母」と相談者の女性との関係を「友達」とは違うところに位置付けており，“**友達には言えなくても，私たちには話せるようなことがあるんです**”と述べている。近しい関係にあるからこそ利害が発生するために話せない話題がある。相談者の女性からすれば，いわば赤の他人である「地域の母」が相談に応じることで，利害を気にすることなく話すことができる話題も存在する。また，相談者の女性が目下対峙している課題について，「地域の母」も以前対峙した経験がある場合，相談者の女性は先輩に意見を求めるように自身の直面している課題について打ち明けることもある。

友達，友達とは違う間柄，という表現の違いはあるものの，「地域の母」と相談者の女性は，精神的にある程度打ち解けた関係を構築している。では，「地域の母」はなぜそのような関係を相談者の女性との間に構築することができているのだろうか。ヌールは“**同じ言語を話すので，より詳しく状況を説明できるんです**”と語り，相談者の女性とコミュニケーションをとる際に用いる言語が関係構築に作用しているとした。ヌールはレバノン出身で，アラビア語を母語とする女性である。ヌールは主にアラビア語話者の女性を対象に「地域の母」の活動を展開した。相談者の女性によってデンマーク語のレベルは異なる。デンマーク語が流暢に操れる段階にない女性にとって，現在自身が置かれている状況や抱えている課題をデンマーク語で他者に伝えるということは精神的な重圧となりうる。母語で自身の置かれている状況を説明できることにより，相談者の女性は精神的な重圧を軽減し，詳細を語ることができる。

また，「地域の母」の立場も，相談者の女性との間の関係構築に影響する。ドゥニヤは“**エ**

キスパートで，彼女（相談者の女性）より上の立場にあるって態度は絶対に表しません”と言う。「地域の母」のメンバーは一定期間の講習を受けた上で活動を展開するが，ソーシャルワーカーでも専門的な移民問題のカウンセラーでもない。あくまで「地域の母」である。その立場は相談者の女性の立場と近似している。相談者の女性は，自身と似た立場にあり，立場の優劣を感じない存在である「地域の母」に，相談を打ち明けるのである。

6.6.3. 火曜カフェ

火曜カフェはプロジェクトを担当する司書 2 名によって進められる。以下はある日の火曜カフェの様子である。

- 司書が新たにナアアブロー図書館で始める「専門家貸出（Lån en expert)」という若者の進路選択を支援するプロジェクトの説明を行った。一通り説明が終わるとメンバーはプロジェクトの詳細について“何歳が対象なの？”“成人も参加できるの？”と質問した。

【フィールドノーツ／2010 年 5 月 25 日】

「専門家貸出」は若年層の進路選択を支援する取り組みである。若者が専用のウェブサイト上に掲載されている職業リストの中から興味のある職業を選択し，「貸出手続き」を行うと，選択した職業に従事している人を近隣の図書館で一定時間「借りる」ことができるというサービスである。これにより，若者は興味のある職業に従事している人物から直接，職務内容や経験談を聞くことができる。ナアアブロー地区では若年層の失業率の高さが以前から問題視されており，若者の就業率向上を目指して「専門家貸出」の実施に至った。司書は，「地域の母」の活動の中で，若者の就業に関する問題を抱えている人がいたら，「専門家貸出」を案内するようにと「地域の母」に伝達した。

このように，火曜カフェでは担当の司書がナアアブロー図書館の新たな試みや，各種行政サービスに関する新着情報を「地域の母」に知らせる場となっている。「地域の母」のメンバーは火曜カフェで得る新着情報や更新情報を，各自が持つネットワークを使い，それぞれの持ち場で地域の女性に情報を伝達していく。

また火曜カフェでは，メンバーから「地域の母」として活動している中で抱く課題や疑問が報告されることもある。その場合には，司書がファシリテーター役となり，「地域の母」のメンバーの課題を引き出し，全体で共有している。

6.6.4. 地域の女性へのアプローチ

「地域の母」が地域の女性へアプローチする際，その方法は基本的に「地域の母」のメンバー自身の判断に委ねられている。各家庭を訪問しても良いし，街中で井戸端会議のように立ち話をしている女性にアプローチしても良い。自営業をしている者は自身の店の店先で

「地域の母」の活動をしても良い。地域の女性へのアプローチの方法についてヌールは以下のように述べている。

- 火曜カフェの後，ヌールは“心を固く閉ざして，家の中に引き籠っている人もいて，そういう人にはこちらが出向くことでサポートをすることができる”と話した。

【フィールドノーツ／2010 年 6 月 1 日】

何らかの理由で精神的に傷を負い，外出が困難になり，家の中に閉じ籠っている女性にはアウトリーチの方法が有用であるとしている。

ナアアブロー地区の「地域の母」の活動対象地は 2 箇所に大別できる。ミュルナパーケンとグラネトレカント（Grønne Trekant）である。

ミュルナパーケンとグラネトレカントの両エリアとも，ナアアブロー地区の中でも特に移民の背景を持つ住民が多く居住している区域である点で共通した特徴を持つ。しかしながら，火曜カフェにおいて「地域の母」のメンバーから報告される活動状況は 2 つのエリアで全く異なっていた。

ミュルナパーケンを拠点に活動するゼナやムナは「地域の母」の活動を始める前から存在したグループにアプローチしたため活動を軌道に乗せるのは難しいことではなかったと認識している。

- ムナはミュルナパーケンに居住しているので，ミュルナパーケン内で実施されているプロジェクトや活動中のグループのことを詳細に把握している。既存の保健クラブ（Motionsklub），婦人会（Kvindeklubben）にアプローチし，それらの活動に関わる女性とコンタクトを取った。ゼナは，ミュルナパーケンでは，どこの誰が孤立化し，引き籠っているのかという情報が把握されているので，アプローチすべき人はすぐにわかったと言う。

【フィールドノーツ／2010 年 6 月 1 日】

ミュルナパーケンはデンマークで最も有名な移民の居住区の 1 つであるため，「地域の母」が活動を展開する以前から官民，複数の支援が入っている。それらの支援を受けて構築されたプロジェクトやグループとコンタクトを取ることから着手したゼナやムナは，ミュルナパーケン内に活動の基盤となるネットワークを張ることに成功した。加えて，そもそもミュルナパーケンに暮らす女性が公的な機関からの支援によって運営される活動に参加することに慣れており，特段「地域の母」の活動に懐疑的な者がいなかったことも，ゼナやムナの活動のしやすさと関係している。

一方，グラネトレカントを拠点に活動する「地域の母」は活動を始めてすぐに壁にぶつかってしまった。既存のプロジェクトやグループが運営されていなかったグラネトレカント

では，「地域の母」の活動に疑心を抱く女性が多く，リーナは“**スパイだと思われたこともあった**”と語った。そのため，家庭訪問を通して女性にアプローチするのではなく，まず郵便受けに「地域の母」の活動を知らせるパンフレットを投函したり，グラネトレカントのエリア内で立ち話をしている女性に近付いていくことから活動を始動した。またナアアブロー地区の広報誌にも活動情報を載せた。それにより，徐々に「地域の母」の活動はグラネトレカントでも知られるようになった。“**今はもう私たちをスパイだと思う人はいなくなった**”とリーナは言う。

このように同じナアアブロー地区の中であっても，活動区域が変わると地域の女性たちの「地域の母」に対する反応は全く異なる。「地域の母」のメンバーは画一化された手法で対象にアプローチするのではなく，対象の反応に合わせ，臨機応変にアプローチの仕方に変化を加えている。

6.6.5. 火曜カフェにおける言語別グループ

火曜カフェでは，基本的にデンマーク語を用いて全体のディスカッションを行う。ただし，デンマーク語が使用されるのは全体に向けて発言する際のみで，ミーティング中の私語や休憩時間中の会話は同じ出身社会の者同士で出身社会の言語を用いて会話していた。

図 6.4 は 2010 年 5 月 18 日に実施された火曜カフェにおける参加者の座席図を示したものである。縞模様の円はアラビア語話者を，無地の円はアラビア語以外の言語話者を意味する。ソファ 1 にレバノン出身者が，ソファ 2 にソマリア出身者が集中しており，同じ出身社会の者同士で語りやすい座席の位置関係になっていることがわかる。

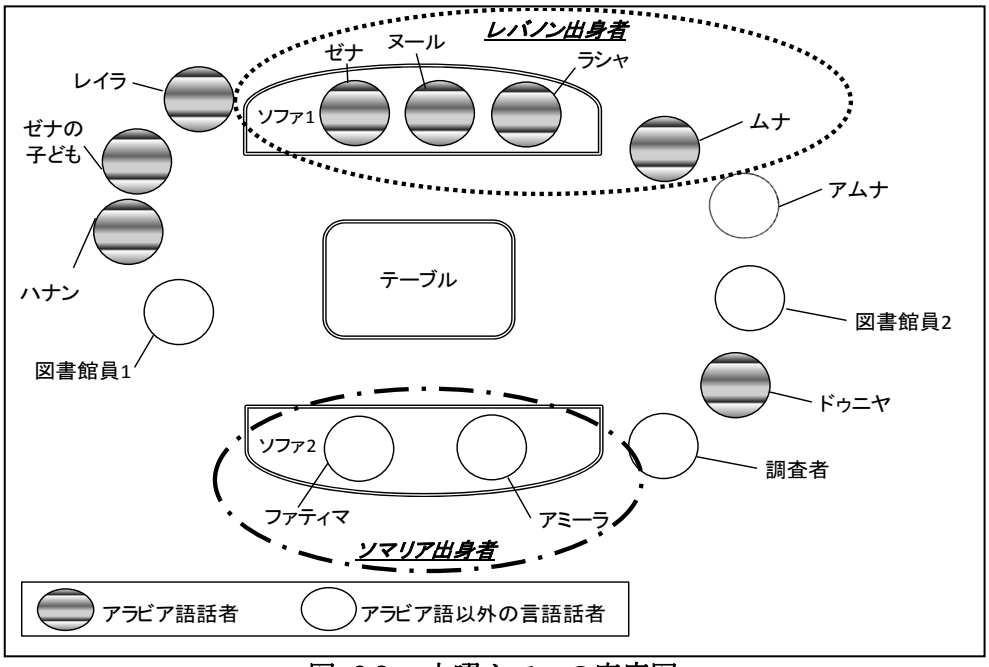

図 6.3. 火曜カフェの座席図

（2010 年 5 月 18 日）

発言量に注目すると，ムナやラシャの発言量が多く，プロジェクトを担当する司書と議論を交わす機会も頻繁である。また，デンマーク語で込み入った議論になった際には，デンマーク語に不慣れなメンバーに対してムナやラシャが率先してアラビア語に訳して意味を伝えている。

2010 年 6 月 1 日の火曜カフェでは，プロジェクトを担当する司書からアンケートが配布され，14 名のメンバーは質問項目に従ってアンケート用紙に記入した。アンケートは基本属性に関する質問を除くと全 7 問から成っており，全て自由記述式であった。アンケート記入中の様子を観察すると，ミーティング中にデンマーク語で発言していたメンバーでも，アンケートをデンマーク語で記入するのに充分な読み書きの能力は備わっていない場合があることがわかる。例えば，レイラは自力でアンケート用紙に記入されている事項を理解し，回答していくことが難しいため，ラシャに助けを求めていた。ラシャはアンケート用紙の質問事項を音読し，レイラに意味を教える。レイラは質問に対する回答をデンマーク語とアラビア語を混ぜてラシャに伝え，レイラはそれをデンマーク語に訳し，レイラの回答用紙に記入していた。

「地域の母」のデンマーク滞在歴やデンマーク語の能力は一様ではない。同じ言語話者間で，デンマーク語能力に長けているメンバーがデンマーク語があまり流暢ではないメンバーをサポートしながら「地域の母」としての活動を進めている。

しかし見方を変えると，発言量が多く，ミーティング中の私語や休憩時間中の会話にアラビア語を用いるアラビア語話者は火曜カフェの中で一際大きな存在感を放っている。アムナはアラビア語話者のメンバーについて以下のように語った。

- **彼女たち（アラビア語圏出身の参加者）にとってアラビア語が話せるってことが大事なんです。覚えてる？あなた（筆者）がアラビア語が話せるってわかった時，彼女たちの態度が途端に変わったでしょ？そういうこと。アラビア語で結びついているんです。**

【アムナ／インタビュー／2010 年 5 月 18 日】

アムナはミーティング中，自分にはわからない言語で楽しそうに語らうアラビア語話者の様子に戸惑いを隠せないでいる。アラビア語話者が結束し，デンマーク語能力を互いに補い合いながら火曜カフェに参加している様子は，アラビア語話者ではないメンバーには違和感を生んでいる。「地域の母」のメンバーは言語別にマジョリティとマイノリティが存在しており，言語的多数派は相互に支え合いながら活動に参加している。その一方で，言語的少数派は，超えることのできない言語の壁を感じながら「地域の母」の活動を継続している。

6.6.6. 「地域の母」と公共図書館

既述のように，ナアアブローにおける「地域の母」はナアアブロー図書館を拠点としてい

る。「地域の母」のメンバーは，活動の中でナアアブロー図書館をどのような場として捉えているのだろうか。

「地域の母」は火曜カフェの場でナアアブロー図書館の図書館サービスについて情報を得ている。近日ナアアブロー図書館で開催されるイベントや，講習会に関する情報，新着資料に関する情報などを聞いた「地域の母」は，その情報を地域の女性に口承で紹介している。地域の女性に図書館サービスについて伝えることについてラシャは以下のように述べた。

- **図書館ではたくさんイベントをやっています。図書館は職探しなど，いろんな支援をしてくれます。図書館を本を借りる以外の目的でも使うことができると（相談者の女性に）伝えているんです。（相談者の女性は）私が図書館のイベントについて話すと驚いていますよ。**

【ラシャ／インタビュー／2010 年 4 月 27 日】

ラシャは，ナアアブロー図書館を利用したことのない女性にとって，公共図書館が資料を貸す以外のサービスを行っているということは新しい情報であるとしている。既述のように，ナアアブロー図書館では就職支援や，デンマーク語学習の支援などを行っている。そのようなイベントや講習会に関する情報は，地域の女性の課題解決の一助となり得る。そのためラシャは，ナアアブロー図書館が提供する図書館サービスについて地域の女性に伝えることに一定の価値を置いている。

また，ナアアブロー図書館が提供する図書館サービスについて口頭で紹介するのみならず，相談者の女性をナアアブロー図書館に連れてきている「地域の母」もいる。

- **ある女性の相談を聞いて，それなら図書館に行くのが良いと思って，ここ（ナアアブロー図書館）のソーシャルワーカー（文化担当員）の所に連れてきたことがあります。**

【レイラ／インタビュー／2010 年 4 月 13 日】

ナアアブロー図書館には「文化担当員」と呼ばれる職員が勤務している。基本的にナアアブロー図書館における移民に対する図書館サービスは「文化担当員」によって運営されている。若年層の進路選択を支援するプログラムや，宿題支援，デンマーク語や英語，アラビア語の「トーククラブ」などは「文化担当員」が運営を管理している。「文化担当員」は，自らイラクから移住した経験を持ち，デンマークに移住してからソーシャルワーカーの資格を取得した人物だ。加えて，クルド語，アラビア語，デンマーク語，英語を流暢に操る能力を有している。レイラは相談者の女性の話を聞き，ナアアブロー図書館の「文化担当員」にコンタクトを取ることで，より専門的な助言が得られるだろうと判断した。そして，相談者の女性を文化担当員の元へ連れていったのである。このように，ナアアブロー図書館が提供する図書館サービスの中に相談者の課題解決に繋がる内容を含むものがある場合，「地域の

母」は相談者を図書館サービスへと橋渡しする役割を果たしている。

「地域の母」のメンバーは，ナアアブロー図書館が提供している図書館サービスを地域の女性が抱える課題解決に繋がるものと認識し，時には相談者の女性を直接ナアアブロー図書館へ連れてきている一方，図書館を地域の女性の相談に応じる場所として利用している者はいない。ムナは相談者と話しをするのに適した場所について以下のように語っている。

- **家の中で話すのが一番ですね。＜中略＞特に他の人に言えない個人的な問題について話す時には。図書館でも悩みを話すことはできるんですけど，人が多いから個人的な相談はできないって人がいるんです。他の人には聞かれたくない個人的な悩みについては家の中で話すのが一番です。**

【ムナ／インタビュー／2010 年 6 月 15 日】

基本的に「地域の母」はどこで地域の女性と話をしてもいいことになっており，活動場所に関する制約は設けられていない。自由に活動場所を選択できる中で，ムナが地域の女性の相談に応じるのに適している場所として挙げたのは家の中だった。そしてその理由を，内密な内容でも他者の目を気にせず語り合うことができるからだとした。一方で，図書館は多くの見知らぬ他者が滞在し，誰に話を聞かれているかわからない場であるため，内密な内容を語ることは難しいとしている。

6.6.7. 自身の経験を語る

「地域の母」のメンバーはナアアブロー図書館から伝えられた情報のみを相談者の女性に伝えるのではない。ファーイザは“**まず自分のことを話して，私の経験を伝えるようにしています**”と述べる。「地域の母」自身がこれまで身をもって経験してきたことも対話の中で相談者の女性に伝えているのである。ファティマは，「地域の母」が自身の経験を相談者の女性に伝えることの意味を以下のように語っている。

- **相談者の女性は多様な可能性を聞くことができるんです。＜中略＞（デンマーク社会との）いろんな向き合い方を知ることは選択肢が増えることなので（相談者の）女性にとって良いことだと思います。**

【ファティマ／インタビュー／2010 年 5 月 25 日】

デンマーク社会における移民女性の生き方の選択肢は多様に存在する。しかしながら，孤立した状態に置かれ，その多様な可能性に気付いていない移民女性も存在する。「地域の母」は自身の経験を語ることで，相談者の女性に多彩な選択肢を提示しようとしている。「地域の母」が経験を語ることは，相談者の女性ばかりでなく，「地域の母」自身にも新たな気付きをもたらしている。ゼナは以下のように語る。

・　いろんな女性と話すほど，学ぶことがあります。私のような経験をしている人が他にもいるんだと気付くんです。＜中略＞（相談者の女性は）私の話を聞いてくれ，そして彼女たちからも私に情報を与えてくれるんです。

【ゼナ／インタビュー／2010 年 4 月 20 日】

ゼナは経験を語り，相談相手の課題を聞くことを通して，自身と相手との課題の間に存在する類似点を発見している。そして，自身の経験は決して個人固有のことではなく，他者と共有しうる話なのだと気付く。また，相談相手とのコミュニケーションにより，「地域の母」も新たな情報を獲得している。

一方，相談相手に自身の経験を話すことで，自身のこれまでの経験が頭の中で整理された「地域の母」もいる。レイラもその 1 人である。

・　これまで私が子どもとどうやって接してきたか，今はとてもよくわかるんです。＜中略＞以前より強くなった気がするし，子育てに詳しくなりました。

【レイラ／インタビュー／2010 年 4 月 20 日】

レイラは相談相手に育児に関する自身の経験を語ることを通して，これまでの自身の子どもとの向き合い方を改めて振り返る機会を得た。自身の経験を他者に伝えるには，ある程度，内容を整理する必要がある。レイラは育児経験を語るというプロセスのなかで，自身の過去の経験を整理し，経験を客観的に見る視点を持ったのだ。そのプロセスを通じて，自分のやってきたことがよく分かるようになったと述べている。

6.6.8.　プロジェクト終了後の「地域の母」

ナアアブロー図書館を拠点とする「地域の母」プロジェクトが終了を間近に控えた頃，火曜カフェでは，「地域の母」のメンバーによって今後の展望が語られた。

「地域の母」のプロジェクト名を挙げて活動を継続したいと述べたのはラシャのみであったが，他のメンバーも「地域の母」での経験を活かして未来を切り開いていこうとしていることが垣間見えた。ハナンは特に 10 代の青少年に対する支援に注力したいと語り，アスマーはトラウマ的経験をしている子どもをサポートしたいと言った。ウマイマは異なる文化的背景を持つ人を対象に高齢者福祉施設，もしくは児童養護施設を開設することが夢だと話す。

「地域の母」の活動を通して，他者の抱える課題に耳を傾け，解決を目指してサポートしていくことに，やりがいを感じたメンバーは，「地域の母」の活動に近い分野に関心を抱いている。

一方で，「地域の母」に参加する以前から抱いていた夢の実現を目指している者もいる。

アムナは念願かなって自身で開店させることができたエスニック雑貨の店の運営を軌道に乗せ，店の経営について心配をせずにいられる状態を目指している。これから自身の店を持ちたいと考えているのはゼナである。衣類品を扱う店を経営することを目指して，専門学校で商業について学び始めた。ゼナは，既に自身の店を持っているラシャやアムナと「地域の母」の活動を通して出会い，強く背中を押してもらったと語った。

6.7. アムナが語る「地域の母」

ナアアブロー図書館で行われている「地域の母」のメンバーの一人にアムナがいた。アムナはパキスタン出身の移民で 1981 年にデンマークへ移住した。1963 年生まれであるため，人生の 7 割弱の時間をデンマークで過ごしていることになる。火曜カフェの終了後，参加者同士が思い思いに会話をしている時間に筆者はアムナに「地域の母」での活動についてインタビューしたいと告げた。すると彼女は快諾し，**“それなら私の店にいらっしゃい”**と言った。彼女の店はナアアブロー図書館から徒歩で 15 分ほどの距離に立地する。主に南アジアの衣装や雑貨を扱う店である。7 畳ほどの店舗スペースの奥には店で販売する衣類や小物を作るための作業スペースがあった。インタビューは作業スペースで行われた。作業スペースではバングラデシュ出身のハリダが忙しそうにミシンを使い，アムナの指示に従って洋服を仕立てていた。インタビュー中，アムナも手を休めることなく，糸で作った小さな飾り玉をスカーフに縫い付ける作業をしていた。

6.7.1. 私的実践から「地域の母」へ

アムナは 2005 年に店を始めた。開店直後から多くの人が店を訪れ，中でも特にムスリム移民の背景を持つ女性が集うようになった。訪問者はアムナの店の店先で家庭内のこと，仕事のこと，抱えている悩み等をひとしきり話し，帰っていく。元々，ハリダもアムナの店に訪れた客だった。店先でハリダの話を聞いている中で，ハリダが裁縫が得意で求職中だとわかったアムナは自身の店でハリダを雇用することを決めた。アムナは店先で行っていた客の相談に応じる行為を以下のように語っている。

- **私は「地域の母」という言葉はずっと知らなかったんです。ただ，同じようなことを個人的にやっていました。**

移民女性の相談にのり，必要に応じて情報提供や助言を提供するという「地域の母」の活動内容を，アムナは「地域の母」の存在を知る以前から自身の経営する店の店先で実践していたのである。アムナが初めて「地域の母」について知ったのも店で客と話している時だった。

- **ある日，一人の女性（アミーラ）がこの店に来て，お店を売る気はないかと（私に）**

尋ねたんです。私はなんでこの店を売らなきゃいけないのよって答えて。その彼女もヘナ（ミソハギ科のヘナという植物を染料にしたボディペイント）とか手芸をやっていて，お店を開きたかったみたいなんです。だから，お店を開くには費用がこの位かかるとか，こういう手続きが必要だとかって教えてあげました。そうやって彼女と話してたら，彼女が講習会を図書館で受けてるって話したんです。それで，何の講習会か聞いたら，「地域の母」の講習会だって教えてくれましたよ。

アムナは店に来たアミーラの話を聞き，初めて「地域の母」の存在を知った。そして，自身が普段店先で実践していることは，近所のナアアブロー図書館ではプロジェクトとして取り組まれており，プロジェクトに参加すれば謝金を受けながら講習を受けられると知った。そして，すぐにプロジェクトへの参加を決め，アミーラから聞いたナアアブロー図書館の電話番号に連絡した。

6.7.2. 火曜カフェと司書との関係

「地域の母」への参加を決めたアムナは約 10 週間の講習に参加した。講習はテキストに従い，テキスト内の各トピックについて講習の参加者全員で話し合いながら進められた。講習では，例えば，デンマークでの子どものしつけの仕方や，一般的な一日のタイムスケジュールなどが扱われた。

講習の受講が終了すると，アムナはナアアブロー図書館から証書を受け取り，正式に「地域の母」となった。講習終了後もアムナは週に 1 度，毎週火曜日にナアアブロー図書館に足を運び，火曜カフェに参加した。客としてアムナの店を訪問し，アムナに店を売って欲しいと頼んだアミーラも，ナアアブロー図書館を拠点に活動する「地域の母」となり，火曜カフェで毎週顔を合わせる仲間となった。

ナアアブロー図書館を拠点とした「地域の母」はナアアブロー図書館に勤務する司書のイェーネが統括していた。火曜カフェを進行していたのもイェーネである。アムナは火曜カフェの様子を以下のように語る。

- イェーネが図書館にはこんな資料があるとか，こういう活動があるとか紹介します。時には，こんな講習会があるから出てみないか，とかね。

ミーティングでは，イェーネが「地域の母」のメンバーに対し，図書館の新着資料や直近に開催されるイベントや講習会の情報を伝えている。そして，その情報を「地域の母」は各自の持ち場で地域の女性に伝達する。アムナは時々イェーネと電話で連絡を取り，活動の進捗を伝えたり，活動中に生じた疑問を投げ掛けたりしていた。電話での報告や相談，火曜カフェでのコミュニケーションを通して，アムナとイェーネは徐々に打ち解けていった。以下はある日の火曜カフェ終了後のアムナとイェーネのやり取りの様子である。

・　家路につこうとしたアムナをイェーネが引き止めた。イェーネは一旦オフィスに戻り，すぐにまたアムナの前に現れた。片方の手には白いカバンを持っている。イェーネはアムナにカバンを手渡し，“また修理してほしい”と頼んだ。アムナは快諾し，“スカーフはもう少し待ってね”と言った。

【フィールドノーツ／2010 年 5 月 11 日】

アムナが裁縫に長けており，自営の店を構え手製の衣類や雑貨を販売していることを知ったイェーネは，カバンの修理や，衣料小物の仕立てをアムナに依頼するようになった。「地域の母」に関する事項を話し合うのみでなく，私物の修理や仕立てを行うようになり，イェーネとアムナの関係は，司書とプログラム参加者という立場から一歩私的な関係へと深化している。

6.7.3.　「地域の母」の活動

元々，自身の店先で客の悩み相談に応じていたアムナにとって，「地域の母」の活動は難しいものではなかった。講習で得た情報を，店を訪れる移民の背景を持つ女性に伝えるという行為を繰り返した。

・　ある人がこの店に来て，私に相談をするんですね。そしたら私は“それに関して支援が必要ならこの場所へ行くといいわよ”って教えるんです。＜中略＞時には講習会を紹介したりもします。

時には具体的な相談事項なくアムナに話し掛ける者もいる。そのような人たちは，デンマークで友達と呼べる存在が少なかったり，自分の話を聞いてくれる存在がいないために店を訪れるのだとアムナは語る。

・　それが何？って思うときもあるけど，彼女たちはただ誰かに（話を）聞いてもらいたいだけなんです。でも本当に助けを求めている時には適する情報を与えていますよ。実際，たくさんの人が来ます。そして情報を得て喜んで帰っていく人もたくさんいます。

話の冒頭部分を聞いた限りでは特に具体的な相談内容が見えて来ない場合でも，じっくり相手の話に耳を傾ける中で，現在置かれている相手の状況や，抱えている悩みが見えてくる。アムナは店先で時間をかけて相手の話に耳を傾ける。彼女は繰り返し“信頼”という言葉を使い，支援をする前に信頼関係を築くことの重要性を指摘する。

・　彼女たち（店の客）は何かを買いに来て，そしていろいろ話しているうちに気付くん

です。この人（アムナ）は自分をサポートしてくれるんだと。＜中略＞だから，支援する前に信頼関係を作ることが大切です。

・　オープンに話を聞いていれば，相手も私のことを徐々に信頼していきます。信頼がなかったら話したがりません。

焦らず徐々に“信頼関係”を構築し，心理的距離を縮めていく中で，自身と相手との関係を，店の店主と客という関係から，相談員と相談者の関係にシフトさせていく。そうして徐々に“信頼関係”が構築されていくと，話の内容も他愛もない日常の話から，自身の生い立ちや境遇など一身上のことに関する打ち明け話へと変化していく。相談相手がアムナに持ち掛ける相談内容は実に多様であった。

・　住む場所に関することとか。＜中略＞子どもに関することとか。旦那が刑務所にいる話とか。理由はいろいろですよ。ドラッグを売ってたりとかそういうことです。＜中略＞女性が妊娠したんだけど男性は認めないとか，そういう事です。もういろんな相談があります。

居住地，子どもの教育，犯罪，妊娠等の多岐に渡る相談内容について，アムナはナアアブロー図書館での「地域の母」の講習で得た情報のほか，30 年以上デンマークに滞在している自身の経験を用いて相談に応じている。

6.7.4.　パキスタンからデンマークへ

アムナはパキスタンのあまり裕福でない家庭で育った。家族は両親と 7 人の兄弟で，男の子は学校に通うことが許されていたが，アムナとアムナの姉は教育を受けることが許されていなかった。アムナの両親は女子教育を重要視していなかったのである。そのため，アムナは出身社会の言語であるパシュトゥー語とウルドゥー語を聞き取り，話しをすることはできるが，読み書きすることはできない。18 歳になったアムナは出身社会で偶然一人のデンマーク人男性と出会い，結婚を約束した。デンマーク人男性は出身地のデンマークでの暮らしを望んだため，1981 年，アムナは彼と共にデンマークへ移住する。デンマークでの生活はパキスタンでの生活と異なり，アムナにとってすべてが目新しく，すべてが新たな挑戦だった。まずデンマーク語学校へ通ったが，識字能力を習得するのも初めてであれば，教育を受けることも初めての経験だった。周囲の人を見よう見まねしてデンマーク語の授業の内容について行った。

・　周りに座っている人の様子を見ながら単語を覚えて。そしたら 1 か月後には少しだけ話せるようになってました。

デンマーク語学校を修了した後は，周囲にいるネイティブのデンマーク人とのコミュニケーションの中でデンマーク語を体得していった。語学学校を出てからのデンマーク語の学習についてアムナは以下のように語る。

- 彼女（ハリダ）は学校を出て，大学に行って，デンマークでも語学学校に行っています。でもデンマーク語はあまり知らないんです。学校に行っただけでは言語は学べません。社会活動の中で学ぶんです。私はいろんなことを知っています。文化とか歴史とか，デンマーク人に聞いて学ぶんです。デンマーク語だけ話せればいいんじゃなくて，（デンマーク社会の）内側から学ぶ。文化や歴史から。そうしたら，デンマーク人も“あっ，この人はわかってる”って思って打ち解けてくれます。

アムナは語学学校での学びのみではデンマーク語習得には限界があり，実生活の中でネイティブのデンマーク人と交流することを通して初めてデンマーク語を体得することができると言う。そして，デンマーク語のみ切り離して考えるのではなく，デンマーク社会の基盤にある文化や歴史に対する関心をネイティブのデンマーク人に示しながらコミュニケーションをとることが重要であると指摘した。

アムナがデンマークで習得したことは，デンマーク語のみではない。アムナは“すべてをデンマークで習いました”と話す。英語も，裁縫も，イスラーム教に関する知識にいたるまで，その全てをアムナはデンマークで習得した。

6.7.5. 移住の経験を語る

アムナはデンマークに移住してから，2 度の出産と 2 度の離婚を経験した。移住先の地で女手一つで 2 人の息子を育てることは決して容易ではなかった。朝から晩まで工場で働き収入を得ながら息子を育てあげた。加えて，アムナには自身の店を持つという目標があったため必死だった。念願の店を開店してからも，店の経営が軌道に乗るまでは辛苦の時を過ごした。

- この店の後に老人ホームで 4 時半から夜の 11 時まで働き続けました。だから今もこの店があるんです。この店のために私は毎日もがいていますよ。＜中略＞それに加えて，家で料理を作ったり，店の品物を手作りしたり。もう本当に疲れました。お金を得るって本当に大変です。簡単ではない。この店を始めた時は何もなかったんです。何も。でも，おそれずに進むことが大事。簡単ではないけれど。それが成功に結び付く。

アムナはこれまで，未知の事であっても，まず挑戦し，必死にもがき続ける中で希望の光を見付けてきた。そして，自身の経験から，やってできないことはないと悟った。

- 貧しいから何もできないって思うのは間違いなんです。まずはやってみなくちゃわからない。なんでも自分でできるんです。

そして，アムナは「地域の母」として，デンマークにおけるこれまでの自身の挑戦の日々を相談相手に伝えていく。

- 相談相手には私も同じような経験をして克服できたんだから，あなたもきっと克服できるはずって話すんです。そんな問題はなんてことないわよって。もちろん今のあなたにとっては大きな問題かもしれない。でも，なんてことない。解決できるって伝えます。

デンマークに移住してからのアムナの，識字習得，出産，離婚，就職，子育て，開業などに対峙した体験談は，手痛い思い出も，歓喜した瞬間も，悲傷の出来事も含まれている。アムナが語る，喜怒哀楽の心理描写を含んだ体験談は，生々しいほどの臨場感を持つ。そしてその臨場感は“なんてことない。解決できる”という言葉に説得力を足している。アムナは当時抱いた感情を混ぜながら経験を語ることで，悩みの渦中にいる相談相手の背中をそっと押している。

6.7.6. アムナにとっての「地域の母」の活動

アムナが，講習や火曜カフェで得た情報，自身の経験を語ることで，相談相手は暗闇の中に一筋の光を見出し，表情を明るくして店を後にする。この一連のやり取りは，アムナの心も明るくした。そして，アムナは「地域の母」の活動を個人的にライフワークにしようという思いに至った。

- 私はこの活動がすごく好きなんです。図書館のプロジェクトが終わって給料をもらえなくなったとしても続けたいです。何て言うか，この活動は（私に）幸せを与えてくれるんです。

ナアアブロー図書館を拠点にした「地域の母」はプロジェクト期間の終了を迎えたため，プロジェクトとして「地域の母」の活動を続けることはできない。もともと店先で個人的に客の悩み相談に応じており，ナアアブロー図書館の「地域の母」に参加すれば謝金を受けながら講習も受講できると知ってプロジェクトへの参加を決意したアムナであったが，プロジェクト終了時には謝金の有無ではないところに遣り甲斐を見出していた。店先で誰かの相談に応じることは，金銭にならなくとも，精神的な充足をもたらす行為であると，アムナは認識を新たにしたのである。ナアアブロー図書館を拠点としたプロジェクトとしての「地

域の母」は終了したが，アムナの店先での「地域の母」の実践はライフワークとしてこれからも継続していく。

6.8. 第 6 章まとめ

6.8.1. 非定型的学習空間

本章でこれまで見てきたように，ナアアブロー図書館のデンマーク語「トーククラブ」，アラビア語「トーククラブ」は，いずれも事前予約を必要とせず，継続的な参加を強制しない自由なものであった。これらの図書館プログラムでは，事前に活動時間が設定されてはいるものの，活動時間内のタイムスケジュールは固定されておらず，ファシリテーターの判断と当日の参加者との相談に基づき活動を展開していた。各プログラムの参加者の出欠状況からも見て取れるように，自由度が高く非定型的（インフォーマル）な図書館プログラムは，参加者によって多様な距離の取り方を可能にしている。

また，ファシリテーターのスキルや指導方法も一様ではなかった。パルビンが“**私が「トーククラブ」について（話を）聞いた時，指導が受けられると思っていました**”と語っていたように，図書館プログラムにより定型化された“**指導**”を求めて参加した参加者は，非定形的なプログラムの在り方に不満を漏らしていた。「トーククラブ」の参加者の中には，ナアアブロー図書館の「トーククラブ」を語学学校の補完として利用している者もいた。その場合，参加者は図書館プログラムに「語学学校のような」“**指導**”を求める。しかし，「トーククラブ」は参加者が思い思いにデンマーク語を使用して会話することを重視しており，そこに正しさを問うことはほとんどない。このように，定型的な学びを図書館プログラムに求める参加者にとって，自由度が高い図書館プログラムは，期待とは異なるものとなっていた。

しかしながら，図書館プログラムが非定型的であるからこそ見られた特徴もあった。例えば，デンマーク語「トーククラブ」に子連れで参加し，プログラム・スペースの外で子どもの面倒を見ては，またプログラム・スペースに戻り，を繰り返しながら断続的にプログラムに参加する移民女性の姿を示した。また，デンマーク語「トーククラブ」にて参加者全員で食事をしながら会話をしていた際，移民女性が手作りの郷土料理を持参したことをきっかけに，会話の話題が郷土料理になっていったのを確認した。このように図書館プログラムが非定型的であるからこそ展開できる話題や，自由な形式であるからこそ断続的に参加できる移民が存在するのである。

6.8.2. デンマーク社会に対する肯定と否定の混在

本章では，デンマーク語「トーククラブ」において参加者がデンマークで差別的処遇にあった経験を語る姿を示した。しかし，その一方でネイティブのデンマーク人との友好的な交流についても語られており，1 つのプログラムの中でデンマーク社会に対する肯定的な見方と否定的な見方が混在していた。

また「地域の母」のメンバーの 1 人であるアムナは，デンマークに移住後に受けた，自身

の手痛い思い出も，歓喜した瞬間も全て当時の感情を混ぜながら伝えることを通して，相談に来た移民女性の背中を押していた。彼女はデンマーク社会を悲観するのではなく，肯定するわけでもなく，彼女にとってのデンマークでの現実を相談に来る女性に伝達しているのである。

このように，ナアアブロー図書館のプログラムは，デンマーク社会に対する肯定感を強めるための活動ではなく，否定的な意見を賛美するための活動でもなく，肯定と否定とが混然一体となっているあり様を提示する場になっていた。

6.8.3. 出身社会の異なる移民との接触

本章では，図書館プログラムを通じて多様な民族的背景を持つ移民が接触する様子を伝えた。「地域の母」では，出身社会の異なる移民女性が出会い，励まし合う姿を示した。また，デンマーク語「トーククラブ」では，ネイティブのデンマーク人とデンマーク語で会話することに躊躇いを感じている移民が，移民同士でのデンマーク語の会話により漸次的に自身のデンマーク語運用能力に自信を付けていく姿を確認した。つまり，参加者が，デンマーク語を用いて移民間で会話することは，ネイティブのデンマーク人とのデンマーク語会話の段階へと弾みをつけることに繋がっていたのである。

その一方で，出身社会の異なる移民が接触する際，相手を警戒したり，戦略的に友好的な関係を築こうとする移民女性の実践も見受けられた。デンマーク語「トーククラブ」において，普段着用しないヒジャブを纏い，アラブ圏出身の移民と接触するパルビンの行為は，その一例である。このように移民は，図書館プログラムにおいて，出身社会の異なる他の移民と，時に励まし合い，また時に警戒し距離を取って接触していることが明らかになった。

6.8.4. 移民によるプログラムの主体的な解釈と越境

本節ではここまで，デンマーク語「トーククラブ」，アラビア語「トーククラブ」，「地域の母」の 3 つのプログラムにおいて見られた移民のプログラム参加の特徴として，「非定型的学習」，「デンマーク社会に対する肯定と否定の混在」，「出身社会の異なる移民との接触」を挙げてきた。これらの特徴に一貫して見られるのは，移民の背景を持つ参加者がナアアブロー図書館で開催されているプログラムに多様な解釈を付与しているということである。

6.8.1「非定型的学習」で示したように，移民の背景を持つ参加者の中には，基本的にデンマーク社会への適応を目的としたデンマーク語「トーククラブ」というプログラムの場に，出身社会の郷土料理を持参し，出身社会との接点を自ら創出している者の姿があった。

また，6.8.2「デンマーク社会に対する肯定と否定の混在」では，デンマーク語「トーククラブ」が，移民の背景を持つ参加者にとって，デンマーク社会の政治の在り方や，ネイティブのデンマーク人について，肯定的にも否定的にも議論できる場として存在していることを指摘した。これは，プログラムへの参加を通して参加者の移民が，デンマーク社会の価値観に近付くことも，一歩遠ざかり移民間の結束を強化する場にもなり得ることを意味して

いる。

6.8.3「出身社会の異なる移民との接触」では，参加者の移民女性が，プログラムを介して，出身社会の異なる移民と友好関係を築き紐帯を強めたり，警戒心を抱き距離を置いたりしていることを示した。

加えて本章では，元々ネイティブのデンマーク人の参加を想定していた，アラビア語「トーククラブ」に，移民 2 世が参加する様子も提示した。親の出身社会の公用語にアラビア語が含まれており，移民 2 世は自身のルーツと関連する言語としてアラビア語の学習に着手していたのである。

ここまでの議論を総じるならば，移民は 1 つのプログラムへの参加を通して，デンマーク社会への順応を目指したり，出身社会との接点を忍ばせたり，移民間の結び付きを強めたり弱めたりしていると言える。参加者の移民は自身の置かれている環境や状況に合わせて，図書館プログラムに，独自に多様な解釈を加えながら参加しているのである。それは，移民が解釈主体性を自身に保持したままにデンマークの公共図書館と関わっていると捉えることができる[17]。移民は，図書館プログラムへの参加を通して，コミュニティを越えてデンマーク社会への適応を進める場合があれば，地理的距離にかかわらず見えない国境を越えて出身社会との繋がりを維持する場合もあり，また出身社会の異なる移民との間の繋がりを強めたり弱めたりすることもある。デンマーク社会，出身社会，他の移民との距離の取り方を主体的・戦略的に変化させながら移民は図書館プログラムに参加しているのである。

注・引用文献

[1] 図書館情報学用語辞典は，「集会活動」として掲載しており，その定義を「市民の文化活動のために，公共図書館が施設や資料を提供して，読書会，研究会，映画会，資料展示会などを開催すること」としている。本章では，国際的に使われている，「プログラム」を採用するが，図書館情報学用語辞典における「集会活動」とほぼ同義として用いる。

[2] Epinion og Pluss Leadership. “Danskernes Kulturvaner 2012,” Kulturministeriet. 2012, p.87-90. http://kum.dk/uploads/tx_templavoila/endelig_danskernes_kulturvaner_pdfa.pdf, (accessed 2015-08-26).

[3] McKenzie, Pamela J. et al.「プログラム室の扉の内側:カナダ公立図書館における狭く私的な女性領域の創造」『場としての図書館: 歴史、コミュニティ、文化』[“Behind the Program-Room Door: The Creation of Parochial and Private Women’s Realms in a Canadian Public Library,” *The Library as Place: History, Community, and Culture*] 川崎良孝ほか訳，日本図書館協会，2008, p.193-194.

[4] Uddannelses- og Forskningsministeriet. “Nørrebro Bibliotek modtager Den Europæiske Sprogpris.” http://ufm.dk/aktuelt/pressemeddelelser/2013/norrebro-bibliotek-modtager-den-europaeiske-sprogpris, (accessed 2016-10-18).

[5] Christensen, Klavs Odgaard. et al. Projekt bydelmødre: En samlet evaluering. Center for Boligsocial Udvikling, 2010, p.3. http://www.ft.dk/samling/20091/almdel/uui/bilag/159/866317.pdf, (accessed 2015-06-25).

[6] Christensen, Klavs Odgaard; Aner, Louise Glerup; Frederiksen, Nana. Projekt

bydelmødre: En samlet evaluering. Center for Boligsocial Udvikling, 2010, p.3. http://www.ft.dk/samling/20091/almdel/uui/bilag/159/866317.pdf, (accessed 2015-06-25).
[7] 前掲 5), p.2.
[8] パイロット・プロジェクトのうち，唯一公共図書館を拠点に展開していたナアアブローの事例は，2010 年のプロジェクト期間の終了後，公共図書館を拠点に置いた「地域の母」のモデルとなった。2010 年，難民・移民・統合省と文化省の間で連携合意が締結されたことを受け，2011 年からの「地域の母」プロジェクトの対象に公共図書館を含めることとなった。2011 年から 2013 年の 2 年間をプロジェクト期間として取り組まれた難民・移民・統合省の「地域の母」は，プロジェクト対象，計 20 グループのうち，12 グループが公共図書館を拠点とていた。12 の公共図書館を拠点とした「地域の母」は，「図書館での地域の母（Bydelsmødre på bibliotekerne）」という名称で，連携合意に基づき難民・移民・統合省と文化省文化局の二者協力によって実施された。
Frydendahl, Inger. Bydelsmødre-grupper ved biblioteker og medborgercentre. Kulturstyrelsen, 2013, p.2. http://www.kulturstyrelsen.dk/fileadmin/user_upload/dokumenter/bibliotek/indsatsomraader/Integration/Bydelsmoedre/Model_for_bydelsmoedre_i_biblioteker.pdf, (accessed 2015-06-25).
[9] Husted, Marie Gade. Slutevaluering af Projekt Bydelsmødre, Nørrebro. Københavns Kommune Socialforvaltningen, 2010, p.62. http://bydelsmor.dk/media/80d01d7d-0171-4236-9b94-06305b01aea3/458856966/Evalueringer/Evaluering%20af%20Bydelsm%C3%B8dre%20-%20N%C3%B8rrebro.pdf, (accessed 2015-06-25).
[10] イフタールとは，イスラーム教徒が日の出から日没まで飲食を断つ断食月(ラマダン)に，日没後，最初にとる食事のことを言う。
[11] デンマークにおいて，義務教育を受ける学校を国民学校と呼ぶ。国民学校は基本的に 9 年生であるが，10 年生も設けられている。10 年生は国民学校卒業後の進路が定まっていない者，もしくは高校進学を希望しているが，高校入学に必要な学力が十分に備わっていない者が，次のステップに進むための準備を行うクラスである。
Ministeriet for Børn, Undervisning og Ligestilling. “10. klasse”. UddannelsesGuiden. 2015-09-13. https://www.ug.dk/uddannelser/grundskoleundervisning/grundskolemv/10-klasse, (accessed 2015-09-29).
[12] DR. “DF-annonce mistænker nye statsborgere for at være terrorister”. Nyhedder. 2013-05-28. http://www.dr.dk/nyheder/indland/df-annonce-mistaenker-nye-statsborgere-vaere-terrorister, (accessed 2015-09-29).
[13] ヒジャブとはムスリムの女性が頭に巻くスカーフのことを意味する。
[14] 1) Richards, Jack C. and Theodore S. Rodgers. Approaches and Methods in Language Teaching. 2nd ed., Cambridge University Press, 2001, 278p.
2) Richards, Jack C. and Theodore S. Rodgers. 『世界の言語教授・指導法 ： アプローチ&メソッド』[Approaches and methods in language teaching] アナハイム大学出版局協力翻訳チーム訳. 東京書籍, 2007, 342p.
[15] 成人移民に対する無料のデンマーク語コースは 2003 年に制定された「成人外国人のデンマーク語コースに関する法（Act No. 375 of 28 May 2003 on Danish courses for adult aliens）」を法的根拠として提供されている。
[16] Rasmussen, Annette. “Why School Matters to Pupils: The Culture of Schooling as Actions and Accounts during Lockout Time: Contemporary Schooling as Actions and Accounts during Lockout Time”. Oxford Etnography and Education Conference. Oxford,

2014-9-15/17/. Ethnography and Education. http://vbn.aau.dk/da/publications/why-school-matters-to-pupils-the-culture-of-schooling-as-actions-and-accounts-during-lockout-time(94050d6a-d412-433b-ac53-6377710ade87).html, (accessed 2015-08-05).

[17] 岩見和彦は，マス・メディアから送られる情報を受ける時，受け手となる個人は送り手の意図とは別に，自身のコード体系を用いて情報の解読を試みているとし，そのことを「解釈主体性」という語を使って説明している。また新谷周平は，岩見の「解釈主体性」の概念を援用し，中高生のための公的な「居場所」型施設において若者は，施設側のあり方に合わせるのではなく，「解釈主体性」を維持したまま自由に施設を利用していると論じている。本研究では，公共図書館サービスの提供側が設定する移民サービスのあり方とは別に，利用者である移民が自由に解釈を加えながら図書館を利用することを指して「解釈主体性」と呼ぶ。岩見和彦「マス・メディアと青少年」『教育社会学を学ぶ人のために』柴野昌山編，世界思想社, 1985, p.183-198. ; 新谷周平「「居場所」型施設における若者の関わり方：公的中高生施設「ゆう杉並」のエスノグラフィー」『生涯学習・社会教育学研究』No. 26, 2001, p. 21-30.

第7章　結論

7.1. 本章の目的

本章では，まずこれまでの結果から明らかになった事項を総括する（7.2）。その上で，「越境」を分析軸とし，デンマークにおける公共図書館の移民サービスの提供と利用の関係を考察する（7.3）。そして最後に，本研究の限界と今後の課題を提示する（7.4）。

7.2. 研究の総括

本研究は，多様な文化的背景を持つ者が暮らすデンマークのコミュニティにおいて，公共図書館が移民を対象に提供するサービスを移民サービスとして取り上げ，公共図書館が担う役割を，1）公共図書館サービス提供者，2）移民の背景を持つ図書館職員，3）移民の背景を持つ図書館利用者，の 3 者の視点から包括的に明らかにすることを目的とした。そして，以下 3 点の研究課題を検討することを通して研究目的の達成を目指した。

研究課題 1：公共図書館における移民サービスの変遷と提供体制

デンマークの公共図書館における移民サービスの歴史的・制度的な変遷と提供体制について第 2 章と第 3 章で論じた。まず第 2 章では，デンマークの公共図書館における移民サービスの今日までの歴史的・制度的な変遷を明らかにした。第 3 章では，公共図書館の移民サービスに関与するアクターそれぞれが持つ機能や，各アクター間の協力体制の取り方を検討した。

研究課題 2：移民の背景を持つ図書館職員の役割

公共図書館に勤務する，移民の背景を持つ職員をエスニック・スタッフと称し，彼らが公共図書館において当事者性を作用させつつ，担っている役割について第 4 章で論じた。

研究課題 3：移民の公共図書館利用

デンマークに滞在する移民が，移住先における生活の中で，どのように公共図書館を利用しているか，公共図書館は彼らの生活においてどのような場として存在しているかについて第 5 章と第 6 章で論じた。

第 5 章では，公共図書館を利用している移民にインタビューを行い，デンマークにおける彼らの公共図書館に対する意識や利用状況を移民自身の語りを通して明らかにした。

第 6 章では，公共図書館のプログラムが，移民によって移住先での生活のどのような文脈の中で利用されており，彼らにとってどのような場として機能しているのかについて検討した。

以下では，研究課題別に第 2 章から第 6 章までの研究のまとめを行う。

7.2.1. デンマークの公共図書館における移民サービスの変遷と体制

研究課題 1 として挙げた公共図書館における移民サービスの変遷と提供体制を把握するため，移民サービスの歴史的・制度的な変遷と，移民サービスの提供体制について章を分けて論じた。

第 2 章では，デンマークにおいて移民の数が急増した 1960 年代後半以降に焦点をあて，公共図書館における移民サービスに関わる図書館行政の流れや仕組みの歴史的・制度的な展開を明らかにした。デンマークの公共図書館における移民サービスは，ゲントフテ・セントラル・ライブラリーの一司書の問題提起から始動し，その後「在デンマーク外国人労働者及びその家族への図書館サービス委員会」の設立，そして 1983 年の公共図書館法改正，および 1984 年の移民図書館の設立に結実しており，地域レベルから国レベルへとボトムアップ型で発展していた。また，地域レベルから国レベルへの発展と同時にスカンジナビア諸国間の国を越えた協力体制を整え，デンマーク，スウェーデン，ノルウェーのスカンジナビア 3 ヵ国共通の多言語資料に関するハンドブックの作成や，図書館間相互貸借のネットワークを構築していた。1990 年代の後半に入ると，デンマークの図書館界は，予算や物理的なスペースの都合により，デンマーク語と同様のコレクションを多言語で構築することは不可能であることを確認した。そしてその後，公共図書館の移民サービスは，多言語資料重視から，プログラムの運営を支援するプロジェクト重視へとシフトした。2000 年以降プロジェクト単位での取り組みは更に増加し，地域の公共図書館は，移民を主たる対象とするプログラムの財源を，主に「城・文化局」の助成事業に求めるようになっていく。「城・文化局」は政府機関であるため，移民を主たる対象とするプロジェクトの予算は，時の政権の移民政策に大きく左右されるようになっていた。このように，デンマークの公共図書館における移民サービスは，多言語資料重視から，プログラムの運営を支援するプロジェクト重視へとシフトしたものの，常に財政難という課題を抱えていることが明らかになった。

第 3 章では，デンマークの公共図書館において移民サービスを提供する際の提供側の体制について検討した。公共図書館の移民サービスに関与するアクターがそれぞれ持つ機能と，各アクター間の協力体制の取り方について，1）予算措置，2）資料・専門的助言の提供，3）ネットワーク形成の支援の 3 点から考察した。調査対象には，地域レベルにある，コペンハーゲン図書館チーム・インテグレーション，コペンハーゲン・コムーネ統合・レジャー課，インターナショナル・ハウス・コペンハーゲンの 3 つのアクターを，国レベルでは文化省文化局，統合図書館センターの 2 つのアクターを選択し，文化行政担当職員や司書を対象にインタビュー調査を実施した。

調査の結果，1）予算措置に関しては，まずプロジェクトが主に文化局の助成事業によって支えられていることを指摘し，文化局が助成対象を図書館に限定せず，関連アクターにまで広げているため多様なアクターのプロジェクトの実施を可能にしていることを示した。2）資料・専門的助言の提供については，統合図書館センターを起点として，ナショナルレベルのアクターから自治体レベルのアクターへの縦の協力と，ナショナルレベルのアクター間

の横の協力とが存在していることが明らかになった。統合図書館センターが移民に対する図書館サービスを専門に扱うナショナルセンターとして明確な立場にあるため多言語資料や専門的助言に関するニーズは統合図書館センターに凝集する体制になっていると言える。3）ネットワーク形成の支援に関しては，調査で取り上げた全てのアクターに，複数のアクター間の繋がりを構築，もしくは強化するよう働きかける機能が見られたことを示し，各アクターには異なる 2 つのアクターが協力関係を結ぶことを仲介もしくは支援する機能が存在していると結論付けた。加えて，アクター間の繋がりは，定期的なミーティングの開催等により，対面的かつ情報伝達経路にノンフォーマル・コミュニケーションが少ない形で増強されていることを指摘した。

7.2.2.　エスニック・スタッフの役割

研究課題 2 に対応する第 4 章では，図書館サービスの提供側に関与しながらも，移民の背景を持つ利用者と同様の当事者性を内包する図書館職員を本研究ではエスニック・スタッフに焦点を当てた。コペンハーゲン図書館の 1 館，ナアアブロー図書館に勤務する 4 名のエスニック・スタッフを調査対象とし，彼らが公共図書館において当事者性を作用させつつ担っている役割について論じた。そして，エスニック・スタッフの役割を 1）レファレンスへの対応，2）言語の翻訳および規範の解説，3）経験の共有，4）生き抜くスキルの獲得支援，5）需要の把握と図書館サービスへの反映，として提示した。エスニック・スタッフの持つ，豊かな言語能力は，出身社会言語の資料コレクションを拡充する一助となっていた。また，彼らの豊かな言語能力と自身の越境経験を基盤にした解説は，相談者から書類等の翻訳の依頼を受ける際，単なる言葉の翻訳を超え，デンマークにおける規範の伝達に移民当事者の解釈を付与することを可能にしていた。加えて，エスニック・スタッフが相談に訪れる移民と出身社会での経験を共有することは，相談者の移住先社会における閉塞感を緩和させる可能性を持っていることを指摘した。

7.2.3.　移民の図書館利用

研究課題 3 の移民背景を持つ図書館利用者の利用行動を把握するため，第 5 章と第 6 章では，コペンハーゲン図書館の 1 館であるナアアブロー図書館を利用する移民を対象とし，彼らの公共図書館利用について論じた。

第 5 章では，ナアアブロー図書館を利用している移民 10 名を対象にインタビューを行い，彼らの公共図書館に対する意識や利用状況を彼らの公共図書館に対する意識や図書館資料，および館内施設設備の利用状況について，移民自身の語りを通して明らかにした。

調査の結果，移民の出身社会での図書館利用は教育歴と密接に関係しており，高学歴な移民ほど図書館を利用している傾向が見られた。しかし，デンマークでは教育歴とは無関係に図書館を利用していることから，デンマークへの移住の前後で図書館に対する認識が変化していることを指摘した。つまり，出身社会では教育歴が公共図書館利用を妨げる障壁とし

て存在していたが，国境を越えるという経験が図書館利用の障壁を取り外す契機となっていた。

また，移民の図書館の利用頻度と居住地からの距離には因果関係がなく，遠方から高頻度でナアアブロー図書館に通う者の姿が明らかになった。むしろ利用に影響を与えている要素として挙げられるのは，図書館利用者の民族構成である。インタビューを通じて，ネイティブのデンマーク人のみが利用している公共図書館を避け，移民の背景を持つ利用者が多い公共図書館を好んで利用している移民の存在が確認できた。公共図書館の利用者の民族構成や，そこから生み出される館内の雰囲気が移民の図書館利用と関係している。

加えて，移民がナアアブロー図書館を一方で出身社会の文化や言語との接触の機会を持つために利用し，また一方ではデンマーク社会の規範の理解や言語の習得を目的に利用していることを指摘した。具体的には，移民の背景を持つ利用者はナアアブロー図書館において，多言語で提供されている DVD や雑誌を利用し出身社会の言語と接している一方，デンマーク語学習のための資料を利用し，コムーネに申請する書類の作成方法を相談している。＜出身社会－ホスト社会間越境＞と＜ホスト社会－移民コミュニティ間越境＞の両方を同時に経験している彼らの立場が，このような利用行動に影響を与えていると捉えられる。

そのほか，移民の中にはデンマーク社会での人々の交流の取り方や会話量の少なさに孤独感を感じている者がおり，疎外感や閉塞感を癒す「安息の場」として図書館を利用している移民が存在することが示された。「安息の場」の構成要素の 1 つにはエスニック・スタッフの存在が確認できる。中には，エスニック・スタッフとコミュニケーションを取ることを主な目的として公共図書館を利用している移民も存在していた。デンマーク社会と移民コミュニティという 2 つのコミュニティの境界に立つエスニック・スタッフの存在は，移民の背景を持つ利用者の抱える閉塞感を緩和する一助となっていた。

第 6 章では，第 5 章の調査では十分に検討することができなかった図書館プログラムに注目した。ナアアブロー図書館で展開されている，デンマーク語「トーククラブ」，アラビア語「トーククラブ」，「地域の母」の 3 つのプログラムにおいて参与観察を行い，移民が移住先での生活のどのような文脈の中で，いかにして図書館プログラムに参加しているのかに迫った。参与観察の結果，デンマーク語「トーククラブ」は移民にとって語学学校の学習を補完する場であり，デンマーク社会の習慣や規範を確認する場となっていた。アラビア語「トーククラブ」は，移民 2 世が自身のルーツに関係する言語としてアラビア語を学ぶ場となっていた。また，「地域の母」に参加している移民女性は，自身の過去の経験を整理し，経験を客観的に見る視点を獲得していることが明らかになった。

7.3. 公共図書館で経験する越境

本節では，研究結果を総括的に検討し，デンマークの多文化コミュニティにおける公共図書館の役割を，3 つの越境の概念を軸として論じる。3 種の越境とはすなわち，多言語資料の利用やプログラムへの参加を通じて，出身社会の言語や文化との関係を維持する＜出身

社会－ホスト社会間越境＞，ホスト社会の言語の習得や，ホスト社会の人との交流を通して，ホスト社会と移民コミュニティとの間の文化的差異を越えていく＜ホスト社会－移民コミュニティ間越境＞，出身社会を異にする他の移民と折衝し，両者の文化間にある差異を状況に応じて相互的に調整するプロセスである＜異郷出身者間越境＞を指している。なお，ここで言う越境には，移民がデンマークの公共図書館で経験する現実，想像上，仮想上の移動が含まれている。

図 7.1 は，デンマークに滞在する移民が公共図書館で経験する越境を描いたものである。

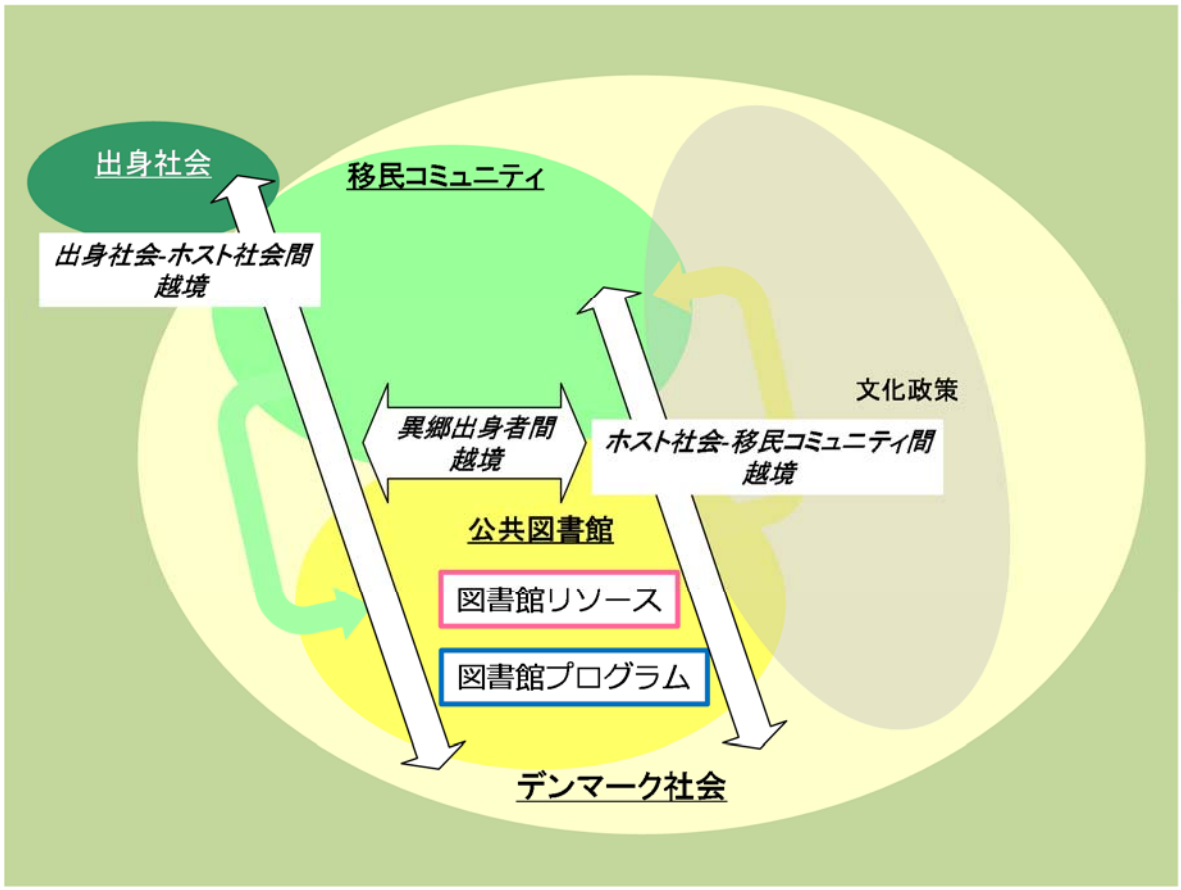

図 7.1.　公共図書館で経験する 3 種の越境

以下，7.3.1，7.3.2，7.3.3，7.3.4 では，主に移民の利用者が経験する越境について論じ，7.3.5 では図書館サービスの提供側による越境のマネジメントについて示し，7.3.6.では越境とエスニック・スタッフとの関わりについて詳述していく。

7.3.1.　公共図書館で経験する「出身社会－ホスト社会間越境」

＜出身社会－ホスト社会間越境＞とは，移民がホスト社会に居住しながら，出身社会との関係を維持するプロセスを意味する。例えば，移住先に居住しながら，一時的に出身社会へ

帰省することや，移住先から出身社会に暮らす親族の元へ送金することは，出身社会と絆を保っている行為であるため，＜出身社会－ホスト社会間越境＞と言える。また既述の通り，ここで論じている越境には想像上，仮想上の移動も含まれるため，例えば，電話やメール，SNS 等を介して出身社会に暮らす人との関係を維持する行為も＜出身社会－ホスト社会間越境＞にあたる。

ここで示す＜出身社会－ホスト社会間越境＞は，自身が出身社会からホスト社会への移住を経験している移民 1 世に限定されない。自身が出身社会からの移住経験をしていない 2 世，3 世の移民であっても＜出身社会－ホスト社会間越境＞を経験している場合がある。現在居住している社会と，自身の民族的ルーツとなる社会との間の関係を維持するプロセスが続く限り，移民の子孫も＜出身社会－ホスト社会間越境＞を経験しているのである。それは移民と移民の子孫自身の帰属意識と密接に関係している。ホスト社会での生活が長期化し，4 世，5 世という世代になった際，移民の子孫が，ホスト社会を自身のルーツと捉えるようになったならば，＜出身社会－ホスト社会間越境＞を経験することはなくなるのである。

また，＜出身社会－ホスト社会間越境＞の「出身社会」とは，必ずしも 1 つの社会に限定されない。例えばモロッコ出身者とスペイン出身者とがデンマークで結婚，出産し，生活の基盤をデンマークに置いた場合，生まれた子どもは自身の民族的ルーツをモロッコとスペインの両社会にあると考える可能性がある。このように，＜出身社会－ホスト社会間越境＞の指す「出身社会」とは，移民自身あるいは移民の子孫自身が持つ帰属意識と密接な関係があり，どこを「出身社会」と捉えるかは当事者のアイデンティティの置き方によって決まる。

本研究でのここまでの検討を通じて，移民は＜出身社会－ホスト社会間越境＞を公共図書館においても経験していることが明らかになった。公共図書館で経験する＜出身社会－ホスト社会間越境＞とは，移民が公共図書館における多言語資料の利用やプログラムへの参加を通じて，出身社会の言語や文化との結び付きを維持することを意味する。

本研究では，移民の背景を持つ利用者が，公共図書館において出身社会の言語や文化と継続的に接触している様子を繰り返し示してきた。第 5 章では移民の背景を持つ利用者が CD や DVD，新聞等の多言語資料を利用していることを明らかにし，彼らが想像上の世界で出身社会との間を往来している様子を示した。その上で，移民の背景を持つ利用者から多言語資料の古さや，言語のみでなく地域性にも注目した資料収集が求められていることを指摘した。第 4 章では，エスニック・スタッフが豊かな語学力を活かし，移民の背景を持つ利用者から得られる多言語資料への要望を聞き取り，多言語資料の拡充を図っていた。また，エスニック・スタッフはカウンセリングに訪れる移民と，戦争経験等の出身社会での経験を共有させながら相談者に寄り添っていた。第 6 章で取り上げた図書館プログラム，アラビア語「トーククラブ」では，移民 2 世の女子が自身の民族的背景にある国の，公用語の 1 つとしてアラビア語に関心を抱き，アラビア語「トーククラブ」に参加していた。つまり，移民 2 世も図書館サービスを介して，自身の民族的ルーツと考える社会の言語や文化との関係を

維持しようと試みていることが明らかになった。

このように，多言語資料や図書館プログラム，エスニック・スタッフとの接触を通じて，移民の背景を持つ利用者は地理的距離や，出身社会からの移住経験の有無にかかわらず，現在生活しているホスト社会と，自身の民族的なルーツである社会との間の関係を維持しているのである。

7.3.2. 公共図書館で経験する「ホスト社会－移民コミュニティ間越境」

＜ホスト社会－移民コミュニティ間越境＞とは，移民が移住を認められたホスト社会において，移民コミュニティの中で生活を完結させるのではなく，ホスト社会の言語の習得や，ホスト社会の人との交流を通して，ホスト社会と移民コミュニティとの間の文化的差異を越えることを意味する。

デンマークの状況に沿わせて例示するならば，移民が語学学校に通い，デンマーク語を習得することは＜ホスト社会－移民コミュニティ間越境＞に該当する。また，移民がデンマークの伝統的な祭事に参加し，デンマークの文化を理解することも＜ホスト社会－移民コミュニティ間越境＞である。

＜ホスト社会－移民コミュニティ間越境＞は公共図書館の中においても確認することができた。公共図書館で経験する＜ホスト社会－移民コミュニティ間越境＞とは，移民が公共図書館において，ホスト社会の言語の習得や，ホスト社会における人との交流を通して，ホスト社会と移民コミュニティとの間に存在する文化的差異を越えることを意味する。移民の背景を持つ図書館利用者は，公共図書館サービスを介して，デンマーク社会の文化，社会規範や価値基準と出会っていた。

例えば第 5 章では，移民の背景を持つ利用者が，図書館資料である辞書や，デンマーク語の絵本，録音図書等を巧みに活用し，デンマーク語学習に取り組んでいる姿を示した。前項において，移民の背景を持つ利用者が図書館資料を利用することを＜出身社会－ホスト社会間越境＞の一例として示した。その一方で，移民の背景を持つ利用者は，図書館資料をデンマーク語学習にも役立てていることから，図書館資料の利用は＜ホスト社会－移民コミュニティ間越境＞を経験することにも繋がっていると言える。

第 6 章で見た図書館プログラム，デンマーク語「トーククラブ」では，移民の背景を持つ参加者が，互いに学習方法を紹介し合いながらデンマーク語を学ぶ様子が明らかになった。また，プログラムの中でファシリテーターは折に触れてデンマーク文化を解説しており，移民の背景を持つ参加者は，デンマーク語を学ぶと同時にデンマーク文化に関する情報を得ていた。

第 4 章では，移民の背景を持つ利用者が各種文書を持参してエスニック・スタッフのもとを訪れ，翻訳を依頼していることを示した。そしてエスニック・スタッフは，相談者から書類等の翻訳の依頼を受ける際，単なる言葉の翻訳を超え，エスニック・スタッフ自身の解釈を加えながらデンマークにおける社会規範や価値基準を相談者に伝達していた。

このように，移民は公共図書館において，図書館資料や図書館プログラムを通じてデンマークの言語，文化，価値基準や社会規範に触れているのである。これは公共図書館において，移民が移民コミュニティとデンマーク社会の間に存在する文化的差異を越えた往来を経験していると捉えることができる。

7.3.3. 公共図書館で経験する「異郷出身者間越境」

＜異郷出身者間越境＞とは，移民が移住を認められたホスト社会において，出身社会を異にする他の移民と折衝し，両者の文化間にある差異を状況に応じて相互に調整しようと試みるプロセスを意味する。

例えば，『2200N：オラクル，シャワルマ，ステレオタイプを打砕く（*2200N: Orakler, shawarmaer og bristede fordomme*）』は 2010 年に出版された図書である[1]。セルビア，モロッコ，レバノン等の異なる民族的背景を持つ 14 名の 10 代の若者が，自らの生活しているコペンハーゲンのナアアブロー地区についてそれぞれの視点で書き記し，14 の短編を 1 冊の本としてまとめ出版した。これは，コペンハーゲン・コムーネの文化レジャー部により 2009 年から 2010 年まで実施された事業である。プロジェクトの企画は文化レジャー部の担当者が発案したものであるが，図書の構成や記事の執筆，編集作業は全て 14 名の若者が行っている。14 名の若者は，異なる出身社会を背景に持つ他者と接触し，差異や類似点を相互に調整しながら 1 冊の図書の出版を経験した。このような活動は，＜異郷出身者間越境＞を示す例として挙げることができる。

本研究でのここまでの検討を通じて，移民の＜異郷出身者間越境＞は公共図書館にも見られることが明らかになった。公共図書館で経験する＜異郷出身者間越境＞とは，移民が公共図書館において，出身社会の異なる移民と折衝し，両者の文化間にある差異を状況に応じて相互に調整しようと試みるプロセスである。

これまで見てきたように，公共図書館サービス，特に図書館プログラムにおいて移民の背景を持つ利用者は，多様な人々と接触していた。ネイティブのデンマーク人としての背景を持つ，図書館プログラムのファシリテーターや，図書館職員，プログラムの参加者と出会うことがあれば，同郷出身の移民利用者同士で図書館内に集い，馴染み社会を形成している場合もあった。そして，移民の背景を持つ利用者は，公共図書館において自身とは出身社会を異にする移民とも接触していた。

第 6 章で取り上げた，デンマーク語「トーククラブ」，アラビア語「トーククラブ」，「地域の母」の 3 つの図書館プログラムでは異なるエスニック・グループに属する移民間のコミュニケーションの様子を示してきた。特にデンマーク語「トーククラブ」は出身社会の異なる移民が密接に関わり合うプログラムである。デンマーク語「トーククラブ」では，プログラム参加者が，ソマリア出身者の持参したソマリア伝統料理を食しながら，それぞれの出身社会におけるラマダーン月に食すイフタールの違いについて語り合い，その差異を認め合う様子を確認した。

このように，デンマークの公共図書館は，移民と異なる出身社会から移住して来た移民とが，文化的差異を越えて折衝し，互いに差異を認め適応することを経験する場になっている。

7.3.4.　移民の背景を持つ利用者が経験する 3 種の越境

本節でここまで論じてきたように，デンマークに滞在する移民にとって，公共図書館は 3 種の越境を経験する場として存在していた。

アメリカの図書館情報学者であるポッシは，1920 年代，アメリカに滞在していたイタリア系移民の図書館利用を“アメリカへ行く（Going to America）”と表した[2]。これは，当時のイタリア系移民が公共図書館へ行くことが，アメリカ文化に触れ，アメリカの社会規範や価値基準を知り，アメリカ化されることであったのを指している。

ポッシの表現を本研究に当てはめて論じるならば，デンマークにおいて移民が公共図書館を訪れることは必ずしも，「デンマークへ行く」ことではなかった。デンマークにおいて移民が公共図書館に行くことは，時に「故郷へ帰る」こと＜出身社会－ホスト社会間越境＞であり，時に「デンマークへ行く」こと＜ホスト社会－移民コミュニティ間越境＞であり，また時に「他の移民との間の差異を調整する」こと＜異郷出身者間越境＞であった。

このような 3 つの越境は個々に分離したものではない。＜出身社会－ホスト社会間越境＞，＜ホスト社会－移民コミュニティ間越境＞，＜異郷出身者間越境＞は，同時発生的で相互に密接に関連し合っている。

第 6 章で取り上げたように，「地域の母」のプログラムは，デンマークの言語や文化，社会規範を理解するプロセスに，出身社会を異にする移民との折衝が介在していた。つまり，プログラムの参加者は，出身社会の異なる移民との間で，＜異郷出身者間越境＞を経験しながら，同時に，移民コミュニティとデンマーク社会との間の＜ホスト社会－移民コミュニティ間越境＞を経験している。また第 6 章のデンマーク語「トーククラブ」では，ラマダーンの際に参加者がイフタールをともに食している光景を示した。このように移民がデンマーク語学習のプロセスにおいて，出身社会の文化と接触したり，出身社会の異なる他の移民との間で文化的差異に調整することは，＜出身社会－ホスト社会間越境＞，＜ホスト社会－移民コミュニティ間越境＞，そして＜異郷出身者間越境＞を同時に経験することである。デンマークに滞在する移民にとって公共図書館とは，相互に重なり合う 3 種の越境を経験する場なのである。

付言すれば，第 6 章で示したように，移民は図書館サービスの中で＜出身社会－ホスト社会間越境＞，＜ホスト社会－移民コミュニティ間越境＞，＜異郷出身者間越境＞を主体的に解釈しながら利用していた。つまり，移民は自身の置かれている環境や状況に合わせて，図書館サービスに，独自に多様な意味付けをしながら 3 種の越境を経験していた。換言すれば，移民はデンマークの公共図書館において，解釈主体性を自身に保持したままに 3 種の越境を経験している。デンマーク社会，出身社会，他の移民との距離の取り方を主体的・戦略的に変化させながら移民は図書館を利用しているのである。

7.3.5.　提供側による越境のマネジメント

看過できないのは，公共図書館における越境が，デンマークの公共図書館サービスの枠組みの中に存在しているということである。3 種の越境が，公共図書館サービスの提供側のマネジメントの範囲内にあると言うことは否定できない事実である。

第 2 章で確認したように，デンマークの公共図書館は 1969 年にゲントフテ・セントラル・ライブラリーが移民のための資料を収集した時点から今日まで継続的に多言語資料コレクションを移民に対して提供しており，移民が出身社会との間で＜出身社会－ホスト社会間越境＞を経験する体制を構築してきた。また多言語資料のみではない。特に 1990 年代後半からは図書館プログラムの運営を支援するプロジェクト重視に切り替わり，多様なプログラムが展開されてきた。図書館プログラムの中には，プログラムに参加する移民が，プログラムを通して，＜出身社会－ホスト社会間越境＞，＜ホスト社会－移民コミュニティ間越境＞，＜異郷出身者間越境＞を経験することを予め企図しているものも存在する。例えば，第 6 章で見てきた「地域の母」では，もともと移民女性による移民女性の支援という形態がプロジェクトの枠組みに組み込まれている。つまり，＜異郷出身者間越境＞を介した＜ホスト社会－移民コミュニティ間越境＞は，あらかじめ図書館サービスの提供側がプロジェクトの計画段階で企図していたことなのである。

公共図書館における移民サービスの多言語資料重視からプロジェクト重視への傾向は，近年さらに顕著になりつつある。この傾向は，図書館サービスの提供側が越境のマネジメントの重点を，出身社会の文化との結び付きを維持する＜出身社会－ホスト社会間越境＞から，デンマーク社会との接点を持つ＜ホスト社会－移民コミュニティ間越境＞へと移行させていることを意味する。プロジェクト重視の潮流のなか，図書館サービスの提供側は，プログラムを通じて，移民の円滑なデンマーク社会への適応の促進に重きを置いている。そこには，移民として移住した以上，ホスト社会の慣例に応じていくことは前提であるとする，ホスト社会側の思惑が見える。

しかしながら，提供側の越境のマネジメントは主眼を＜ホスト社会－移民コミュニティ間越境＞に置きつつも，完全に一極集中に転じたわけではない。継続して，移民に対する図書館サービスの中に＜出身社会－ホスト社会間越境＞や＜異郷出身者間越境＞を組み込んでいるのである。公共図書館における移民の＜出身社会－ホスト社会間越境＞と＜異郷出身者間越境＞の機会は，以下 2 者の存在により維持されている。

1 点目には，法定ナショナルセンターとしての統合図書館センターの存在を指摘したい。第 2 章で論じたように，統合図書館センターは，1984 年に設立された移民図書館の時代から継続して，多言語資料の収集・組織化・提供に取り組んでおり，デンマーク全土の人々の多言語資料への平等なアクセスを保障し続けてきた。また第 3 章では，統合図書館センターが言語別に 10 名のコンサルタントを配置し，定期的に移民の統計を参照しながら，コレクションの構成を改善している様子を示した。このように，統合図書館センターが多言語資

料を継続的に提供することは，移民の背景を持つ利用者に対し，出身社会の文化との接点，すなわち＜出身社会－ホスト社会間越境＞の機会を提供し続けていることを意味している。

統合図書館センターが，継続的に多言語資料提供に従事しているのは，法定のナショナルセンターであることに由来する。繰り返し述べて来たように，統合図書館センターの前進の移民図書館は，前年の公共図書館法の改正を受けて 1984 年に誕生した国立組織である。移民図書館はその後 1999 年に国立図書館の傘下に入り，2006 年には統合図書館センターへと改称している。このように組織改編や改称はあるものの，多言語資料を専門に扱うナショナルセンターとしての統合図書館センターの立場が法律によって維持されていることにより，公共図書館を利用する移民の多言語資料を介した＜出身社会－ホスト社会間越境＞の機会は保たれているのである。

2 点目には，エスニック・スタッフの存在を挙げる。図書館サービスの提供側は，エスニック・スタッフを雇用することで，コミュニティの文化的多様性を図書館に勤務する職員の構成に反映させてきた。繰り返し述べたように，デンマークの公共図書館における移民サービスは，その重点対象を多言語資料からプログラムへと移行してきている。この移行とエスニック・スタッフの存在は無関係ではない。プログラム重視の流れのなか，図書館サービスの管理・運営者は，エスニック・スタッフを主にプログラムの運営を担当する者として公共図書館に配置している。

7.3.6.　3 つの越境を支えるエスニック・スタッフ

第 4 章で見てきたように，公共図書館に勤務するエスニック・スタッフは，巧みな言語運用能力と，自身のこれまでの経験を基盤にして，移民利用者と出身社会の間，移民利用者とデンマーク社会の間，移民の背景を持つ者同士の間を橋渡す，メディエーターとして機能していた。換言すれば，エスニック・スタッフは移民の背景を持つ利用者の，公共図書館において＜出身社会－ホスト社会間越境＞，＜ホスト社会－移民コミュニティ間越境＞，＜異郷出身者間越境＞を支えているのである。

自身が移民の背景を持つ公共図書館のエスニック・スタッフは，移民利用者と同じ当事者性をもつ。ここで言う当事者性とは，出身社会，デンマーク社会，他の移民との関係が複雑に交差する間に立ち，「行った来たり」を繰り返していることを意味している。エスニック・スタッフ自身が，＜出身社会－ホスト社会間越境＞，＜ホスト社会－移民コミュニティ間越境＞，＜異郷出身者間越境＞という相互に重なり合う越境を経験することができる当事者であるため，エスニック・スタッフを介して提供される移民サービスは必ずしも＜ホスト社会－移民コミュニティ間越境＞に偏重せず，＜出身社会－ホスト社会間越境＞や＜異郷出身者間越境＞の機会が維持されているのである。

公共図書館はホスト社会側が運営する施設でありながら，そこで提供されているサービスが必ずしもデンマーク社会への＜ホスト社会－移民コミュニティ間越境＞を促すものではなく，出身社会との接点を維持し，移民間の結びつきに影響を与える，＜出身社会－ホス

ト社会間越境＞と＜異郷出身者間越境＞の機会にもなっているのは，エスニック・スタッフによるところが大きい。

ここで改めてデンマークの公共図書館における移民サービスの変遷を振り返る。移民サービスが始動して間もない時期には，デンマークの図書館界は多言語資料の収集と提供に注力していた。その後，次第に公共図書館における移民サービスは，図書館プログラムを介した移民のデンマーク語やITスキル等の獲得支援に傾注するようになっていった。つまり，多言語資料コレクションが整備された時期から，図書館プログラムが拡充された時期へと移行している。

これらの多言語資料コレクションと図書館プログラムは，それらの存在を知りアクセスする利用者がいて初めて意味を持つ。つまり，多言語資料のコレクションや図書館プログラムへのアクセスの回路を作るための仕掛けや仲介者が必要となる。エスニック・スタッフは利用者を多言語資料コレクションへと導き，図書館プログラムにおけるコミュニケーションを促進させ，プログラムに厚みを持たせる役割を担い得る。移民の背景を持つ利用者の，資料や図書館プログラムへのアクセスを向上させる存在として，エスニック・スタッフは大きな可能性を有している。

7.3.7. デンマークにおける公共図書館の移民サービスに見られる課題

最後に本研究を通して明らかになった，デンマークにおける公共図書館の移民サービスの課題を「越境」の視点から2点挙げたい。

1点目の課題は，公共図書館における越境を経験することができていない，移民の背景を持つ潜在的図書館利用者へのアプローチである。本研究の第2章の2.5.5で見たように，これまでにも潜在的図書館利用者を対象としたプロジェクトは着手されている。しかしながら，これまで移民の背景を持つ10代男子については，プロジェクトの対象として焦点を当てられることはなかった。移民の背景を持つ10代男子の図書館利用を促すような働きかけが今後求められる。

2点目の課題は，エスニック・スタッフの不安定な立場にある。第4章で調査対象とした4名のエスニック・スタッフのうち，正規職員は1名のみであった。また，公共図書館におけるエスニック・スタッフの職に就くまでの4名のルートに，共通点は見られず，偶発的であったことが明らかになった。既述のように，エスニック・スタッフは公共図書館における越境を支える役割を担っており，彼らの立場の不安定性は，そのまま公共図書館における越境の不安定性に結びつく。今後エスニック・スタッフの雇用を安定化させることが必要となる。

本研究を通して上記2点が課題として浮かび上がったが，デンマークの公共図書館における移民サービスの特長である地域レベル，国レベル，国際レベルに敷かれている協力体制を活用しながら今後上記の課題が解決されることを期待する。

7.4. まとめ

以上の検討を踏まえ，本研究は以下，3 点を結論として挙げる。

1）デンマークの公共図書館は，移民が＜出身社会－ホスト社会間越境＞，＜ホスト社会－移民コミュニティ間越境＞，＜異郷出身者間越境＞という相互に重なり合う 3 種の越境を経験する場として存在している。
2）移民サービスの提供側は，越境のマネジメントを行っており，近年＜ホスト社会－移民コミュニティ間越境＞に注力する傾向にある。しかし，法定のナショナルセンターである統合図書館センターと，エスニック・スタッフの存在により，公共図書館において移民が＜出身社会－ホスト社会間越境＞，＜異郷出身者間越境＞を経験する機会は保持されている。
3）複数の世界のはざまを生きるエスニック・スタッフは，＜出身社会－ホスト社会間越境＞，＜ホスト社会－移民コミュニティ間越境＞，＜異郷出身者間越境＞の 3 種の越境を経験することが可能で，公共図書館にとって移民の背景を持つ利用者の多様な生き方を支えるために不可欠な存在である。

本研究はデンマークの公共図書館における移民サービスを，1）公共図書館サービス提供者，2）移民の背景を持つ図書館職員，3）移民の背景を持つ図書館利用者，の 3 者の視点から包括的に明らかにした。多文化コミュニティにおける公共図書館という場の意味を，「提供」か「利用」かという二項対立で論じるのではなく，双方向の力学が作用する相互作用的で複雑な関係の中に見たという点において，本研究はこれまでの図書館研究に新たな視座を提供したと言えるだろう。

7.5. 本研究の限界と今後の課題

本研究の限界と課題を，公共図書館における移民サービスの提供者，エスニック・スタッフ，移民の背景を持つ図書館利用者の 3 者の視点から示したい。

まず，公共図書館における移民サービスの提供側の体制に関する研究の課題としては，移民政策と公共図書館における移民サービスの関係の検討が挙げられる。本研究では，主に第 2 章および第 3 章で公共図書館における移民サービスの歴史的･制度的変遷と提供体制について論じてきた。しかしながら，デンマークにおける移民政策の変化が及ぼす公共図書館の移民サービスへの影響については十分に検討することができなかった。特に，2010 年前後から見られる，統合から社会的包摂への政策方針の移行と，移民サービスの変化は呼応している可能性があり，今後実証的に明らかにしていく必要がある。加えて，移民を主たる対象に据え公共図書館において実施されている各種プロジェクトの事業評価も今後の研究の中で検討したい点である。本研究では第 2 章および第 3 章で文化局や，統合図書館センターを中心に展開されている助成事業やプロジェクトを提示した。しかし，事業報告書を精査し，事業の成果や評価方法について論じることはできていない。今後は NPM の影響も勘案し

つつ，移民を主な対象に展開されているプロジェクトについて更に検討を深めたい。

次にエスニック・スタッフに関する研究の課題を示す。本研究では，第 4 章においてナアアブロー図書館に勤務する 4 名のエスニック・スタッフを対象に調査を行った。ナアアブロー図書館におけるエスニック・スタッフの役割は明らかになったものの，他の図書館ではまた別な役割が存在している可能性があるため，今後調査対象範囲の拡大が必要となる。また，エスニック・スタッフを世代別に見るという視点を採用することも今後検討していきたい。1 世，2 世，3 世のどの世代に属するかによって，移民がホスト社会において置かれている立場や言語運用能力，出身社会への向き合い方には差異があり，その差異はエスニック・スタッフの公共図書館における役割と何らかの関係があると推測できる。今後は世代という視点においても対象を拡大し，異なる世代に属するエスニック・スタッフ間の役割の差異を精査していく。

最後に，移民の背景を持つ利用者に関する研究の課題としては，多様な文化的背景を持つ複数のエスニック・グループや，複数の世代の移民を射程に入れた調査が挙げられる。本研究は，図書館を利用している移民を，「移民の背景を持つ利用者」と一括して捉えてきた。しかしながら，実際には多様なエスニック・グループがデンマークの公共図書館を利用しており，エスニック・グループごとに異なった図書館の利用をしているかもしれない。また，本研究では移民 1 世が調査の主な対象であった。しかし，2 世や 3 世等の移民の子孫は，移民 1 世とは異なった図書館利用をしている可能性がある。今回はアラブ出身者の移民 1 世がインタビューイーの中心となったが，今後はアラブ出身者以外の図書館利用についても世代別に検討していく必要がある。さらには，「越境」の概念における境界線の引き方についても精査する必要性がある。そもそも「越境」という概念は，2 つの事象の間に境界が存在することを前提としている。本研究では結論として，＜出身社会－ホスト社会間越境＞，＜ホスト社会－移民コミュニティ間越境＞，＜異郷出身者間越境＞を提示したが，そこで引いている境界線は，移民の背景を持つ利用者が当事者として引く境界とは異なる可能性がある。在日ブラジル人の教育の問題について研究する拝野は，境界線の引き方について“(移民が) 越境経験を積み重ねる中で，既存の境界がもはや不可視のものになるかもしれない。あるいは，全く異なる場所に境界を引き直すかもしれない”と述べている[3]。移民の背景を持つ利用者がどこに境界線を引いているのかについて検討を深めるために，引き続き当事者の視点を保持しつつ今後の研究の中で，「越境」の境界線の引き方について詳しく検討したい。

注・引用文献

[1] Hygge Factory. *2200 N : Orakler, shawarmaer og bristede fordomme.* 2010, 173p.

[2] Pozzi, Ellen M. 「「アメリカ」に行く: イタリア人近隣社会とニューアーク公立図書館、1900-1920 年」『20 世紀アメリカの図書館と読者層』[“Going to”America”: Italian Neighborhoods and the network free public library,” *Libraries and the reading public in twentieth-century America*]川崎良孝ほか訳，日本図書館協会, 2014, p.115-131.

[3] 拝野寿美子『ブラジル人学校の子どもたち：日本かブラジルかを超えて』ナカニシヤ出版，2010, p. 218.

謝辞

本研究を遂行するにあたり，多くの方々からご高配賜りました。

筑波大学大学院図書館情報メディア系の吉田右子先生には，博士前期課程から博士後期課程に至る長きに渡り，ご指導いただきました。吉田先生がいらっしゃらなければ，この論文を完成させることはできませんでした。吉田先生の「大丈夫」という言葉に幾度も背中を押していただきました。深く感謝いたします。

副指導教員の平久江祐司先生，溝上智惠子先生，本論文の審査を通じご指導いただきました松本浩一先生，綿抜豊昭先生，放送大学教養学部の岩崎久美子先生には査読の労をとっていただきました。審査において細部に渡る貴重なご指摘をいただき，博士論文として体裁を整えることができました。深く御礼申しあげます。

東洋大学国際地域学部の髙橋一男先生には，学部時代からフィールドワーカーとしてのフィールドとの向き合い方についてご指導いただきました。ここに感謝の意を表します。デンマーク滞在時には，コペンハーゲン大学情報学アカデミーのハンス・エルベスハウゼン先生にご指導いただきました。インフォーマントとなる人物をご紹介いただいた他，デンマークにおける公共図書館事情を基礎からご教示いただきました。本当にありがとうございました。

そして，デンマークにおいてフィールドワークを実施するにあたり，継続的に協力いただいたディレア・サリフ氏，ヘレ・アンドレースン氏，アン・ポウルスン氏，キャンビズ・ホルムッジ氏，ベンテ・ヴァイスビェア氏にはどんなに感謝してもし尽くせません。

最後になりましたが，フィールドワークの実施を快諾してくださったナアアブロー図書館，そして，インタビューを受けていただいた移民の背景を持つ利用者の方々に心から感謝いたします。移住先において置かれている状況は過酷ながらも，強く逞しく生きる彼らの姿に，私自身強く励まされました。本当にありがとうございました。

今後も一層精進し，移民の背景を持つ人びとの移住先における情報ニーズと，彼らに対する情報サービスについて研究を継続していく所存です。

2017 年 1 月

和気尚美

文献リスト

本研究において参考にした文献を，著者名順（欧米文献についてはABC順，日本語文献については50音順）に一覧する。なお，無署名の記事については便宜的にタイトルに基づいて配列する。

1. 欧米文献

- Aabø, Svanhild et al. “How Do Public Libraries Function as Meeting Places?” *Library and Information Science Research*. Vol. 32, No. 1, 2010, p. 16-26.
- Aabø, Svanhild. “The Value of Public Libraries: a Socio-Economic Analysis,” *Verso Un Economia Della Biblioteca Finanziamenti. Programmazione E Valorizzazione In Tempo Di Crisi*. Massimo Belotti, eds. Milano, Editrice Bibliografica, 2011, p. 169-176.
- Aabø, Svanhild and Ragnar Audunson. “Use of Library Space and the Library as Place,” *Library and Information Science Research*. Vol. 34, No. 2, 2012, p. 138-149.
- “Aktiviteter,” Aalborgbibliotekerne. https://www.aalborgbibliotekerne.dk/Default.aspx?ID=5, (accessed 2016-02-09).
- “Baby Café,” Aalborgbibliotekerne. https://www.aalborgbibliotekerne.dk/Default.aspx?ID=377, (accessed 2016-05-01).
- “Handel på Nettet-Nibe,” Aalborgbibliotekerne. https://www.aalborgbibliotekerne.dk/Default.aspx?ID=153&eid=1409&act=1, (accessed 2016-05-01).
- “It-Café Svenstrup,” Aalborgbibliotekerne. https://www.aalborgbibliotekerne.dk/Default.aspx?ID=153&eid=1136&act=1, (accessed 2016-05-01).
- Abdullahi, Ismail. *Situationsbeskrivelse: Indvandreren og Biblioteket i Danmark*. Copenhagen, Indvandrernes Fællesråd i Danmark, 1981, 50p.
- Alabi, Jaena. “Racial Microaggressions in Academic Libraries: Results of a Survey of Minority and Non-minority Librarians,” *The Journal of Academic Librarianship*, Vol. 41, No. 1, 2015, p. 47-53.
- Al-Qallaf, Charlene L. and Joseph J. Mika. “Library and Information Services to the Arabic-Speaking Community: A Survey of Michigan Public Libraries,” *Public Library Quarterly*. No.28, 2009, p.127-161.

- Ammitzbøll, Pernille and Lorenzo Vidino. “After the Danish Cartoon Controversy,” *Middle East Quarterly*. Winter, 2007, p. 3-11. http://www.meforum.org/1437/after-the-danish-cartoon-controversy, (accessed 2015-10-11).
- Andersen, Inge E. et al. “Et Lukket Mekka for Indvandrere: Købt Eller Solgt? Netværksbiblioteket Bedre Indkøbsmuligheder!,” *Biblioteksspressen.* No. 4, 1997, p. 106-111.
- Andersen, John et al. “From ‘Book Container’ to Community Centre,” *The International Handbook on Social Innovation: Collective Action, Social Learning and Transdisciplinary Research*. Frank Moulaert, Frank, eds. Cheltenham, Edward Elgar, 2013, p. 197-206.
- Andreasen, Wenche C. et al. *Biblioteksbetjening uden Grænser: En Analyse af Indvandrer- og Flygtningebetjeningen i Det Danske Folkebiblioteksvæsen*, Copenhagen, Danmarks Biblioteksskole, 1994, 139p.
- Arbejdsgruppen vedr. “Biblioteksbetjening af Indvandrerbørn,” *Biblioteksbetjening af Indvandrerbørn : Rapport fra Arbejdsgruppen vedr. biblioteksbetjening af indvandrerbørn*. Copenhagen, Bibliotekstilsynet, 1980, 43p.
- Århus Kommunes Biblioteker. *Rapport om Biblioteksstyrelsens Støtte til FINFO 2000 : et Projekt om Information for Flygtninge & Indvandrere*. Copenhagen, Århus Kommunes Biblioteker, 1998, 90p.
- Århus Kommunes Biblioteker and Statsbiblioteket. “Evaluering af FINFO: Informationsnetværk for Etniske Minoriteter i Danmark,” *Biblioteksstyrelsen*, 2002, 30p.
- Audunson, Ragnar. “The Public Library as a Meeting-Place in a Multicultural and Digital Context: The Necessity of Low-Intensive Meeting-Places,” *Journal of Documentation*. Vol. 61, No. 3, 2005, p. 429-441.
- Audunson, Ragnar et al. ”Public Libraries, Social Capital, and Low Intensive Meeting Places,” *Information Research*, Vol. 12, No. 4, 2007, paper C20. http://informationr.net/ir/12-4/colis/colis20.html, （accessed 2016-05-27）.
- Audunson, Ragnar. “Biblioteket Mye Mer Enn Bibliotek,” Kommunal Rapport. September 2008. http://kommunal-rapport.no/politikk/2008/09/biblioteket-mye-mer-enn-bibliotek, （accessed 2016-05-27）.

- Audunson, Ragnar and Svanhild Aabø. “The Library as a Meeting Place in Different Urban Communities,” *City Life and Library Service*. 2010, p. 189-201.
- Audunson, Ragnar et al. “Public Libraries: A Meeting Place for Immigrant Women?” *Library and Information Science Research*. Vol. 33, No.3, 2011, p.220-227.
- Audunson, Ragnar A. and Svanhild Aabø. “Biblioteket Som Motor i å Skape Lokalsamfunn med Sammenhengskraft i En Flerkulturell Storbykontekst,” *Nordisk Tidsskrift for Informationsvidenskab og Kulturformidling*. Vol. 2, No. 1, 2013, p. 39-50. http://www.ntik.dk/2013/Nr1/Audunson.pdf, （accessed 2016-05-27）.
- Audunson, Ragnar A. and Svanhild Aabø. “From Collections to Connections: Building a Revised Platform for Library and Information Science,” *Information Research*, Vol. 18, No. 3, 2013, paper C29. http://www.informationr.net/ir/18-3/colis/paperC29.html, （accessed 2016-05-27）.
- Ballerup Bibliotekerne. “Pigeklub for Etniske Minoritetspiger,” 2007, 8p.
- Basch, Linda et al. *Nations Unbound: Transnational Projects, Postcolonial Predicaments, and Deterritorialized Nation-States.* Langhorne, Gordon and Breach, 1994, p.7.
- Bente Vedel Larsen. “Rapport Vedr. Lektiecafé på Solvang Bibliotek 2007-08, ” Statsbiblioteket. 2009, 4p. http://www.statsbiblioteket.dk/sbci/lektiecafe/Rapport_Solvang_Biblioteks_lektiecafe.pdf, (accessed 2015-11-01).
- Berger, Ågot. “Folkebibliotekernes Indvandrerbibliotek under Lup,” *Biblioteksspressen.* No. 2, 1997, p. 36-38.
- Berger, Ågot. “Biblioteksbetjening Af Indvandrere i Multikulturelle Byer : Studierejse - Sverige, Holland, Frankrig Og England,” Multicultural Articles and Publications. 1998. http://www.lasipalatsi.fi/~karilam/mcl/uusi/articles/berger/, （accessed 2016-05-27）.
- Berger, Ågot. *Mangfoldighedens Biblioteker: Flersproglig Biblioteksbetjening i Danmark*. Copenhagen, Bibliotekarforbundet, 2001, 142p.
- Berger, Ågot. “Recent Trends in Library Services for Ethnic Minorities: The Danish Experience,” *Library Management*. Vol. 23, No. 1/2, 2002, p.79-87.
- Berger, Ågot. “Usability Studies and Focusgroups as Methods for Developing Digital Public Library Services in a Multiethnic Society,” *New Frontiers in*

Public Library Research. Carl Gustav Johannsen and Leif Kajberg, eds. Lanham, Md., Scarecrow Press, 2005, p.127-142.

- Berggren, Olaf. *KITAB: Kulturell Identitet Tryggad av Biblioteken : Nordisk Bibliotekhåndbok om Innvandrere og Minoriteter*. Kirjastopalvelu OY, 1983, 200p.
- "Gadeuro på Nørrebro Breder,"Berlingske Tidende. 2008-02-14. http://www.berlingske.dk/koebenhavn/tidslinje-gadeuro-paa-noerrebro-breder-sig, (accessed 2015-11-21).
- "Betænkning om Revision af Biblioteksloven," 1971, 102p. http://www.statensnet.dk/betaenkninger/0601-0800/0607-1971/0607-1971_pdf/searchable_607-1971.pdf, (accessed 2016-05-01).
- Bibliotekarforbundets Faggruppe for Indvandrer- og Flygtningearbejde, Danmarks Biblioteksskole. "Skal Amir være Bibliotekar?," Danmarks Biblioteksforening. http://forbindelser.dk/wp-content/uploads/2007/01/Viden_i_dialog_web.pdf, (accessed 2016-02-05)
- Bibliotekarforbundets Faggruppen for Indvandrer- og Flygtningearbejde. *Brogede Blade.* Copenhagen, Bbibliotekarforbundet, 1987-2010.
- BiblioteksCenter for Integration. "Kvinde.finfo.dk: Afrapportering og Evaluering," 2005, 46p. https://www.statsbiblioteket.dk/sbci/videncenter/projekter/kvinde-finfo.dk/Kvinde.finfo.dk_afrapportering_og_evaluering.pdf, (access 2016-01-09).
- BiblioteksCenter for Integration. "BiBZoom.dk World: The Worlds First Digital Library for Immigrants and Refugees," Statsbiblioteket, 2011, p. 8-9.
- BiblioteksCenter for Integration. "BiBZOOM World Strategi," Statsbiblioteket, 2014, p. 3-4.
- Biblioteksscenter for Integration. "Slutrapport fra Projekt Læs Dansk på Bibliotekerne," Copenhagen, Statsbibliotek, 2014, 8p. http://projekter.kulturstyrelsen.dk/sites/default/files/documents/Slutrapport%20fra%20projekt%20L%C3%A6s%20dansk%20p%C3%A5%20bibliotekerne.pdf, (accessed 2016-02-05).
- Biblioteksscenter for Integration. "Slutrapport fra Projekt Nye Brugere?: En 180° Nytænkning af Biblioteket," Statsbibliotek, 2015. http://projekter.kulturstyrelsen.dk/sites/default/files/documents/Slutrapport%20fra%20projektNye%20brugere%20final.pdf, (accessed 2016-02-05).

- BiblioteksCenter for Integration. “Historien bag,” STATS bibliotek. https://www.statsbiblioteket.dk/forbiblioteker/sbci/om-sbci/organisationens-historie, (accessed 2016-05-01).
- BiblioteksCenter for Integration. “Læs med dit Barn,” STATS biblioteket. https://www.statsbiblioteket.dk/sbci/Laan/les-med-dit-barn, (accessed 2016-06-09).
- BiblioteksCenter for Integration. “Lektiecaféer,” STATS biblioteket. http://www.statsbiblioteket.dk/sbci/videncenter/lektiecafe/lektiecafe, (accessed 2015-11-01).
- Biblioteksscenter for Integration. “Projekter,” STATS biblioteket. http://www.statsbiblioteket.dk/forbiblioteker/projekter/projekter, (accessed 2015-11-01).
- Bibliotekstilsynet. *De Udenlandske Arbejdere og Folkebibliotekerne: Betænkning om Biblioteksbetjening af Udenlandske Arbejdere og Deres Herboende Familier*. Bibliotekscentralen, 1975, 80p.
- Biblioteksstyrelsen. *Biblioteker og Etniske Minoriteter*. 1999, 36p. http://www.bs.dk/publikationer/rv/4/pdf/rv4.pdf, (accessed 2016-01-09).
- Biblioteksstyrelsen. *Det Urolige Bibliotek*. 2005, p.17, https://www.statsbiblioteket.dk/forbiblioteker/sbci/om-sbci/projekter/konsulenter/rv10.pdf, (accessed 2015-11-04).
- Buttlar, Lois and William Cayon. “Recruitment of Librarians into the Profession: the Minority Perspective,” *Library and Information Science Research*, Vol. 14, No. 3, 1992, p. 259-280.
- Caidi, Nadia and Danielle Allard. “Social Inclusion of Newcomers to Canada: An Information Problem?” *Library and Information Science Research*. Vol. 27, No.3, 2005, p. 302-24.
- “Om Centralbibliotekerne,”Centralbibliotek. http://centralbibliotek.dk/om-centralbibliotekerne?fuld, (accessed 2015-03-18).
- Christensen, Klavs Odgaard. et al. *Projekt Bydelmødre: En Samlet Evaluering. Center for Boligsocial Udvikling*, 2010, 95p. http://www.ft.dk/samling/20091/almdel/uui/bilag/159/866317.pdf, (accessed 2015-06-25).
- Chu, Clara M. “Defining “Multiculturalism”,” IFLANET. 2005-03-18. http://archive.ifla.org/VII/s32/pub/multiculturalism-en.pdf, (accessed 2015-12-09).

- City of Copenhagen. “How Do I Borrow Books at the Library?” http://international.kk.dk/artikel/how-do-i-borrow-books-library, (accessed 2016-05-01).
- “Immigrant Women Run into Language Barreier,” The Copenhagen Post Online. 2010-06-21. http://www.cphpost.dk/news/national/88-national/49296-immigrant-women-run-into-language-barrier.html, (accessed 2011-01-05).
- Cranfield, Andrew. “National Identity as Cultural Policy with Emphasis on the Library as an Institution,” *New Frontiers in Public Library Research*. Carl Gustav Johannsen and Leif Kajberg, eds. Lanham, Md., Scarecrow Press, 2005, p.143-153.
- Daft, Richard L. and Robert H. Lengel. *Information Richness: A New Approach to Managerial Behavior and Organization Design*. Texas, Department of Management, Texas A&M University, 1983. www.dtic.mil/cgi-bin/GetTRDoc?AD=ADA128980, (accessed 2016-06-17).
- Dahlkid, Nan. “Architecture and Design of Danish Public Libraries, 1909-1939: Between Tradition and Modernity,” *New Frontiers in Public Library Research.* Carl G. Johannsen and Leif Kajberg, eds. Lanham, Scarecrow Press, 2005, p.211-227.
- The Danish Agency for Digitisation. “The Digital Path to Future Welfare: the eGovernment Strategy 2011-2015 eGOVERNMENT strategy 2011-2015.” 2011, 87p. http://www.digst.dk/~/media/Files/Digitaliseringsstrategi/Engelsk_strategi_tilgaengelig.pdf, (accessed 2016-01-09).
- Danmarks Blindebibliotek. *Ukendt Land : Om Blinde og Svagsynede Indvandrere og Flygtninges Informationsbehov*. Copenhagen, Danmarks Blindebibliotek, 1999, 94p.
- “Folkebiblioteker efter Område og Aktivitet,” Danmarks Statistik. http://www.statistikbanken.dk/10368, (accessed 2016-05-01).
- “Befolkningsprognoser 1977-2000,” Danmarks Statistik, 1978, p. 40. http://www.dst.dk/Site/Dst/Udgivelser/GetPubFile.aspx?id=19107&sid=befprog1977, (accessed 2016-01-09).
- “Denmark in Figures 2010,” Danmarks Statistik, 2010, 27p. http://www.dst.dk/pukora/epub/upload/14850/dkinfigures.pdf, (accessed 2015-11-03).
- Danmarks Statistik. Folkebibliotekernes Nøgletal efter Område og Nøgletal 2013. http://www.statbank.dk/BIB4, (accessed 2015-03-18).

- Danmarks Statistik. Indvandrere i Danmark 2014. 2014, p.21-22. http://www.dst.dk/pukora/epub/upload/19004/indv.pdf, (accessed 2015-03-18).
- Danmarks Statistik. Areal efter Område 2014. http://www.statistikbanken.dk/18, (accessed 2015-03-18).
- Danmarks Statistik. Indvandrere i Danmark 2015. Copenhagen, Danmarks Statistik, 2015, p.11. http://www.dst.dk/Site/Dst/Udgivelser/GetPubFile.aspx?id=20703&sid=indv2015, (accessed 2016-05-01).
- "Immigrants and Their Descendants and Foreign Nationals," Danmarks Statistik, http://www.dst.dk/HomeUK/Statistics/focus_on/focus_on_show.aspx?sci=565, (accessed 2010-09-11).
- "Indvandrere og Efterkommere," Danmarks Statistik. http://www.dst.dk/da/Statistik/emner/indvandrere-og-efterkommere/indvandrere-og-efterkommere.aspx, (accessed 2016-04-17)
- Danmarks Statistik. Folkebibliotekernes Nøgletal efter Område og Nøgletal. http://www.statistikbanken.dk/10368, (accessed 2016-05-01).
- DBC: Dansk BiblioteksCenter. "Faktalink - Hvordan Uddanner Man Sig til Bibliotekar?". http://www.faktalink.dk/titelliste/folkebibliotekets-historie/folkebibliotekerne-i-danmark#section-6, (accessed 2016-05-01).
- Delica, Kristian N. and Anders Mathiesen. "Et Sociologisk Refleksivt Perspektiv på BUM-Modellen : Skitse Til En Feltanalytisk Anvendelse Af Organisationsanalyse," *Praktiske Grunde Online*. No. 1/2, 2010, p.91-111. http://praktiskegrunde.dk/praktiskegrunde1-2-2010-samlet.pdf#page=91, （accessed 2016-05-27）.
- Delica, Kristian N. "Sociologisk Refleksivitet Og Feltanalytisk Anvendelse Af Etnografi : Om Loïc Wacquants Blik på Urban Marginalisering," *Dansk Sociologi*. Vol. 22, No. 1, 2011, p. 27-45.
- Delica, Kristian N. Biblioteksbaserede Medborgercentre i Udsatte Boligområder: om Praksisformer, Strategier og Social Innovation i Arbejdet med Avanceret Marginalitet, Ph.D. Dissertation, Roskilde Universitet, 2012, 321p.
- Delica, Kristian N. "Er Biblioteksbaserede Medborgercentre Vejen Frem?," *Perspektiv*. December 2012, p. 32-35. http://bf.dk/FagmagasinetPerspektiv/Bladet/2012/~/media/Bibliotekspressen/bladet/2012/Perspektiv11/Perspektiv131212.ashx, （accessed 2016-05-27）.

- Delica, Kristian N. and Ida N. Nilsson. *Medborgercentre: Et Fremtidigt Bibliotekskoncept*. Copenhagen, Kulturstyrelsen, 2012, 83p. http://slks.dk/fileadmin/user_upload/dokumenter/KS/service/publikationer/institutioner/biblioteker/Medborgercentre2012.pdf, （accessed 2016-05-27）.
- Delica, Kristian N. "Biblioteker Og Social Kapital : Et Diskuterende Litteraturstudie Af Nyere Forskning," *Nordisk tidsskrift for informationsvidenskab og kulturformidling*. Vol. 2, No. 2, 2013, p. 33-44.
- Delica, Kristian and Hans Elbeshausen. "Socio-Cultural Innovation Through and by Public Libraries in Disadvantaged Neighbourhoods in Denmark: Concepts and Practices," *Information Research: An International Electronic Journal*. Vol. 18, No. 3, 2013, paper C14. http://InformationR.net/ir/18-4/colis/paperC14.html, （accessed 2016-05-27）.
- Delica, Kristian N. "Beacons of the Experience Economy : Perspectives on Libraries of the 2010s," *Twentyfirst*. No.2, 2014, p. 30-41. http://dspace.ruc.dk/bitstream/1800/14622/1/Twentyfirst_02_KD_final.pdf, （accessed 2016-05-27）.
- Delica, Kristian N. and Hans Elbeshausen. "The Social Library in Three Contexts: Programmes and Perspectives," *Journal of Librarianship and Information Science*. 2015, p. 1-9.
- Demir, Ahmet and Hans Elbeshausen. "Sårbarhed Og Resiliens : Fra Omsorgsfuld Belejring Til Åben Dialog," Kritisk Debat Online. April 2011. http://www.kritiskdebat.dk/articles.php?article_id=988, （accessed 2016-05-27）.
- Dennis, Alan R. and Joseph S. Valacich. "Rethinking Media Richness: Towards a Theory of Media Synchronicity," *Proceedings of the 32nd Hawaii International Conference on System Sciences*. 1999.
- Diaz, Jose and Kristina Starkus. "Increasing Minority Representation in Academic Libraries: the Minority Librarian Intern Program at the Ohio State University," *College and Research Libraries.* Vol. 55, No. 1, 1994, p. 41-46.
- DR. "DF-annonce Mistænker Nye Statsborgere for at Være Terrorister," Nyhedder. 2013-05-28. http://www.dr.dk/nyheder/indland/df-annonce-mistaenker-nye-statsborgere-vaere-terrorister, (accessed 2015-09-29).
- Dreyer, Nanna et al. "Biblioteksbetjening af Flygtninge og Indvandrere i København: Hvem Låner Hvad, Hvor - og Hva' Så?: Revision af Nuværende Praksis," Københavns Kommunes Biblioteker, 2000, 28p.

- Du Mont, Rosemary R. et al. *Multiculturalism in Libraries*. Westport, Greenwood Press, 1994, 240p.
- DuVold, Ellen Merete. "The Meaning of the Public Library in People's Everyday Life: Some Preliminary Results from a Qualitative Study," New Frontiers in Public Library Research. Carl Gustav Johannsen and Leif Kajberg, eds. Lanham, Md., Scarecrow Press, 2005, p.269-284.
- Dyrbye, Martin. "Foreign Influence on the Development of the Danish Public Libraries with Emphasis on the Association Denmark's Popular Book Collections, 1905-1919," *New Frontiers in Public Library Research.* Carl G. Johannsen and Leif Kajberg, eds. Lanham, Scarecrow Press, 2005, p.229-247.
- Dyrbye, Martin et al. *Det Stærke Folkebibliotek：100 år med Danmarks Biblioteksforening*. Copenhagen, Danmarks Biblioteksforening and Danmarks Biblioteksskole, 2005, 271p.
- Elbeshausen, Hans and Bente Weisbjerg. "Bibliotekaren Som Street-walker: Model for Biblioteksarbejdemed Etniske Minoriteter," Et Tidsskrift om Kulturel Mangfoldighed. 2004. http://forbindelser.dk/bibliotekaren-som-streetwalker-model-for-biblioteksarbejde-med-etniske-minoriteter/, （accessed 2016-05-27）.
- Elbeshausen, Hans and Peter Skov. "Public Libraries in a Multicultural Space: a Case Study of Integration Processes in Local Communities," *New Library World*. Vol. 105, No. 1198/1199, 2004, p.131-141.
- Elbeshausen, Hans. "Det Urolige Bibliotek: Bibliotekets Møde med Uroen," Et Tidsskrift om Kulturel Mangfoldighed. 2004. http://forbindelser.dk/det-urolige-bibliotek-bibliotekets-moede-med-uroen/, （accessed 2016-05-27）.
- Elbeshausen, Hans. *Det Urolige Bibliotek: Målgrupperelateret Kulturarbejde som Normimplementering：om Etniske Minoritetsgruppers Kontakt med Danske Folkebiblioteker.* Copenhagen, Danmarks biblioteksskole, 2004, 168p.
- Elbeshausen, Hans and Charlotte Werther. "The Intercultural Encounter Between Danish Public Libraries and Ethnic Minority Users," *New Frontiers in Public Library Research.* Carl G. Johannsen and Leif Kajberg, eds. Lanham, Scarecrow Press, 2005, p. 155-169.
- Elbeshausen, Hans and Charlotte Werther, "The Intercultural Encounter between Danish Public Libraries and Ethnic Minority Users," *New Frontiers in Public Library Research*. Carl Gustav Johannsen and Leif Kajberg, eds. Lanham, Md., Scarecrow Press, 2005, p.155-169.

- Elbeshausen, Hans. “Erfaringsverden: med Verdenen som Erfaring,” Et Tidsskrift om Kulturel Mangfoldighed. 2005. http://forbindelser.dk/erfaringsverden-med-verdenen-som-erfaring/, （accessed 2016-05-27）.
- Elbeshausen, Hans. “Vi Læser Avisen - SAMMEN: Avislæsning som Målgrupperelateret Kulturarbejde : om Etniske Minoritetsgruppers Læring på Odense Centralbibliotek.” *Danmarks Biblioteksskole*, 2005, 31p.
- Elbeshausen, Hans. *Fra Særtjeneste til Mainstreaming*. Copenhagen, Biblioteksstyrelsen og Statsbiblioteket, 2005, 62p. https://www.statsbiblioteket.dk/forbiblioteker/sbci/videncenter/rapporter-og-publikationer/global.pdf, (accessed 2016-05-27).
- Elbeshausen, Hans and Bente Weissberg. “Ildsjælenes Professionalisering: fra Indvandrerbibliotekar til Integrationsbibliotekar,” *Bibliotekarerne : En Profession i Et Felt af Viden.* Trine Schreiber and Hans Elbeshausen, eds. Copenhagen, Samfundslitteratur, 2006, p. 141-174.
- Elbeshausen, Hans. “Zwischen Empowerment und Kulturarbeit: Moderne Öffentliche Bibliotheken und die Integration von Ethnischen Minderheiten in Dänemark,” *LIBREAS: Library Ideas*. No. 6, 2006. http://libreas.eu/ausgabe6/001elb.htm, (accessed 2016-05-27）.
- Elbeshausen, Hans. “Viden i Dialog: Empowerment i Bibliotekets åbne og Lukkede Læringsrum,” Danmarks Biblioteksskole, 2006, 169p. http://forbindelser.dk/wp-content/uploads/2015/01/Rapport_VideniDialog.pdf, （accessed 2016-06-19）.
- Elbeshausen, Hans. *Om at Skabe Forandring en Procesevaluering af Biblioteksstyrelsens Udviklingsprojekt: Konsulenter for Biblioteksbetjening af Etniske Minoriteter*. Copenhagen, Biblioteksstyrelsen, 2006, 109p. http://www.bs.dk/publikationer/rapporter_andre/integration/pdf/elbeshausen.pdf, (accessed 2016-05-27).
- Elbeshausen, Hans. “ Viden i Dialog: Empowerment i Bibliotekets Åbne og Lukkede Læringsrum,” Et Tidsskrift om Kulturel Mangfoldighed. 2007. http://forbindelser.dk/viden-i-dialog-empowerment-i-bibliotekets-aabne-og-lukkede-laeringsrum/, （accessed 2016-05-27）.
- Elbeshausen, Hans. “Active Citizenship: Empowerment, Learning and Cultural Diversity in the Public Library,” *Library Research*. København, Royal School of Library and Information Science, 2007, p.37-39.

- Elbeshausen, Hans. “Knowledge in Dialogue: Empowerment and Learning in Public Libraries,” *Journal of Information, Communication & Ethics in Society.* Vol. 5, No. 2/3, 2007, p.98-115.
- Elbeshausen, Hans. “Lernen und Gegenseitige Anerkennung: Eine Aufgabe Für Öffentliche Bibliotheken?,” *LIBREAS: Library Ideas*. No. 10/11, 2007. http://libreas.eu/ausgabe10/005elb.htm, (accessed 2016-05-27).
- Elbeshausen, Hans. “Soziale Bibliotheksarbeit: Soziale Inklusion und Soziale Anerkennung,” *LIBREAS: Library Ideas*. No. 8/9, 2007. http://libreas.eu/ausgabe8/005elb.htm, (accessed 2016-05-27）.
- Elbeshausen, Hans. “Kreative Læringsrum i en Kulturelt Mangfoldig Omverden: Eksperimentarium for Integration,” Et Tidsskrift om Kulturel Mangfoldighed, 2008. http://forbindelser.dk/kreative-laeringsrum-i-en-kulturelt-mangfoldig-omverden-eksperimentarium-for-integration-vollsmose-bibliotek/, （accessed 2016-05-27）.
- Elbeshausen, Hans. “Socialt Arbejde på Tværs af Kulturerne: Hjertet på Rette Sted - Socialt på Tværs af Kulturelle Forskelle,” Et Tidsskrift om Kulturel Mangfoldighed, 2009. http://forbindelser.dk/om/forbindelser-dk-et-tidsskrift-om-kulturel-mangfoldighed/, （accessed 2016-05-27）.
- Elbeshausen, Hans. *Eksperimentarium for Integration: Evaluering : Kompetenceudvikling: mellem Videndeling og den Udforskende Læring*. Copenhagen, Det Informationsvidenskabelige Akademi, 2010, 59p. http://projekter.kulturstyrelsen.dk/sites/default/files/documents/EFI_rapport_IVA.pdf, （accessed 2016-05-27）.
- Elbeshausen, Hans and Ahmet Demir. “Brosten og Biblioteker:Aydin Soei: Vrede Unge Mænd - Optøjer og Kampen om Anerkendelse i et Nyt Danmark,” Et Tidsskrift om Kulturel Mangfoldighed. 2011. http://forbindelser.dk/brosten-og-biblioteker/, （accessed 2016-05-27）.
- Elbeshausen, Hans and Ahmet Demir. “Sårbarhed og Selvskadende Adfærd Belyst fra Et Multikulturelt Perspektiv,” Kritisk Debat. 2011. http://kritiskdebat.dk/articles.php?article_id=958, （accessed 2016-05-27）.
- Elbeshausen, Hans and Kambiz Hormoozi. “Socialt Entreprenørskab:Biblioteksudvikling i Udsatte Boligområder,” *Danmarks Biblioteker*. No.8, 2011, p. 22-23.
- Elbeshausen, Hans. *Limboland: Projekt Limboland - et Partnerskab mellem Zentropa og Bibliotekerne*. Copenhagen, Det Informationsvidenskabelige Akademi, 2011, 100p.

- Elbeshausen, Hans and Ahmet Demir. “Den Udtryksfulde Krop :om Idræt, Etnicitet og Integration,” Dknyt, 2013. http://dknyt.dk/sider/artikel.php?id=69555&s=anmeldelse%20ad%20antologien%20%22Integration%20gennem%20kroppen.%20Idr%C3%A6t%2C%20etnicitet%20og%20velf%C3%A6rdspolitik.%20Agergaard, （accessed 2016-05-27）.
- Elkjær, Annemarie et al. “Mens Græsset Gror: Biblioteksbetjening af Indvandrere,” *Bibliotek 70*, No. 2, 1983, p.38-39.
- Ellert, Marianne and Ann K. Poulsen. “Integration med Sprogstimulering i Focus: Bibliotekets tilbud til Tosprogede Småbørn,” Copenhagen, Biblioteksstyrelsen, 2005, 30p. https://www.statsbiblioteket.dk/forbiblioteker/sbci/om-sbci/projekter/konsulenter/rv11.pdf, (accessed 2016-02-05).
- The Employment and Integration Administration, The City of Copenhagen. “Copenhagen’s Integration Policy 2011-2014.” 2011, 27p. http://www.coe.int/t/dg4/cultureheritage/culture/cities/InclusionPolicyCopenhagen2011.pdf, (accessed 2015-03-18).
- Epinion og Pluss Leadership. “Danskernes Kulturvaner 2012,” Kulturministeriet. 2012, 381p. http://kum.dk/uploads/tx_templavoila/endelig_danskernes_kulturvaner_pdfa.pdf, (accessed 2016-05-17).
- European Commission. “EU Immigration Portal,” http://ec.europa.eu/immigration/glossary_en#glosI, (accessed 2016-05-01).
- Evjen, Sunniva and Ragnar Audunson. “The Complex Library: Do the Public's Attitudes Represent a Barrier to Institutional Change in Public Libraries?” *New Library World*. Vol. 110, No. 3/4, 2009, p. 161-174.
- Fangel, Gitte and Inger Frydendahl. “Biblioteket som Port til det Danske Samfund: Vi Går i Gang,” Copenhagen, Biblioteksstyrelsen, 2005, 34p. https://www.statsbiblioteket.dk/forbiblioteker/sbci/om-sbci/projekter/konsulenter/rv9.pdf, (accessed 2016-02-05).
- Fenger-Grøn, Carsten and Malene Grøndahl. *Flygtningenes Danmarkshistorie 1954-2004*. Aarhus, Aarhus Universitetsforlag, 2004, 474p.
- Fisher, Karen E. et al. “Information Grounds and the Use of Need - based Services by Immigrants in Queens, New York: A Context - based, Outcome Evaluation Approach.” *Journal of the American Society for Information Science and Technology*. Vol. 55, No. 8, 2004, p. 754-66.

- Flick, Uwe. “Episodic Interviewing,” *Qualitative Researching with Text, Image and Sound*. Martin W. Bauer and George Gaskell, eds. London, Sage Publications, 2000, p.75-92.
- Folkebibliotekernes Indvandrerbibliotek. “KITAB: Kulturell Identitet Tryggad av Biblioteken : Nordisk Bibliotekhåndbok om Innvandrere og Minoriteter Tillegg 1985,” Folkebibliotekernes Indvandrerbibliotek, 1985, 44p.
- Folkebibliotekernes Indvandrerbibliotek. “KITAB: Kulturell Identitet Tryggad av Biblioteken : Nordisk Bibliotekhåndbok om Innvandrere og Minoriteter Tillegg 1987,” Folkebibliotekernes Indvandrerbibliotek, 1987, 22p.
- Folkebibliotekernes Indvandrerbibliotek. “KITAB: Kulturell Identitet Tryggad av Biblioteken : Nordisk Bibliotekhåndbok om Innvandrere og Minoriteter Tillegg 1989,” Folkebibliotekernes Indvandrerbibliotek, 1989, 19p.
- Forskningsministeriet. *Info-samfundet år 2000*. Copenhagen, Forskningsministeriet, 1994, 461p.
- Frandsen, Martin et al. “Fra Biblioteker til Medborgercentre: Socialt Entreprenørskab og Empowermentevaluering i Udsatte Byområder,” *CSE Årsrapport 2008: Socialt Entreprenørskab – et Aktuelt Signalement*. Center for Socialt Entreprenørskab Roskilde Universitetscenter, eds. Roskilde, Roskilde Universitet, 2008, 136p.
- Frydendahl, Inger. Bydelsmødre-grupper ved Biblioteker og Medborgercentre. Kulturstyrelsen, 2013, p.2. http://www.kulturstyrelsen.dk/fileadmin/user_upload/dokumenter/bibliotek/indsatsomraader/Integration/Bydelsmoedre/Model_for_bydelsmoedre_i_biblioteker.pdf, (accessed 2015-06-25).
- Gaus, Eve R. and Terry Weech. “The Meeting Room: Libraries as Community Centers for Culturally Diverse Populations,” *16th BOBCATSSS Symposium 2008*. 2008-01-28/30, 2008, p.221-227.
- Gentofte Bibliotekerne. *Beretning om Gæstearbejdersamlingen i Gentofte 1970-72 Suppleret med Betragtninger over Samlingens Fremtid*. Gentofte Kommunebibliotek, 1973, 9p
- Halse, Aasted J. “Børnebibliotekerne på Børnenes Præmisser.” *B70 : Bibliotekarforbundets Blad*, No. 15, 1992, p.434-435.
- Harris, Michael H. “The Purpose of the American Public Library in Historical Perspective: A Revisionist Interpretation,” *Library Journal*. 98, 1973, p. 2509-2514.

- Hedelund, Lone. “Community Center Gellerup,” Ny i Danmark. http://www.nyidanmark.dk/NR/rdonlyres/8B057C1F-8B45-464D-A2DA-0AC264046977/0/marginaliserede_unge_tema4_lone_hedelund.pdf, (accessed 2015-11-16).
- Hielmcrone, Harald V. *Elmenter til en Strategi- og Handlingsplan for Indvandrerbiblioteket.* Århus, Statsbiblioteket, 1998, 35p
- Højskolernes Hus. Højskoler i Alfabetisk Orden. http://www.hojskolerne.dk/hoejskoler/hoejskole-soeg, (accessed 2016-05-01).
- Det Humanistiske Fakultet Københavns Universitet. “Uddannelsesstrategi 2015-17 for Det Informationsvidenskabelige Akademi (IVA) Københavns Universitets Humanistiske Fakultet (KU-HUM),” http://iva.ku.dk/dokumenter/Uddannelsesstrategi_2015-2017.pdf, (accessed 2016-05-01).
- Husted, Marie Gade. Slutevaluering af Projekt Bydelsmødre, Nørrebro. Københavns Kommune Socialforvaltningen, 2010, p.62. http://bydelsmor.dk/media/80d01d7d-0171-4236-9b94-06305b01aea3/458856966/Evalueringer/Evaluering%20af%20Bydelsm%C3%B8dre%20-%20N%C3%B8rrebro.pdf, (accessed 2015-06-25).
- Husted, Marie Gade. et al. Komparativ Evaluering af Fire Bydelsmødreprojekter i Københavns Kommune. Københavns Kommune Socialforvaltningen, 2011, p.3. http://bydelsmor.dk/media/0eb58e0c-4642-4119-a05c-7bc858eece80/-1866741868/Evalueringer/Bydelsm%C3%B8dre%20KBH,%20komparativ%20rapport.pdf, (accessed 2015-06-25).
- Hvidovre Kommunes Biblioteker Avedøre Filialbibliotek. *Biblioteksbetjening af Indvandrere på Avedøre Bibliotek : Rapport 1982*. Hvidovre, Hvidovre Kommunes Biblioteker, 1982, 87p.
- Hygge factory. *2200 N : Orakler, shawarmaer og bristede fordomme.* 2010, 173p.
- “Section on Library Services to Multicultural Populations,” IFLA Division III, Section 32. IFLANET. http://archive.ifla.org/VII/s32/pub/s32brochure.pdf, (accessed 2011-01-08).
- Indvandrerbiblioteket. Konsulenter for Biblioteksbetjening af Etniske Minoriteter: Projektbeskrivelse. https://www.statsbiblioteket.dk/forbiblioteker/sbci/om-sbci/projekter/tidligere-projekter/konsulenter/Projektbeskrivelse.pdf, (accessed 2015-03-18).

- "Arrangement," *Informationsordbogen: Ordbog for Informationshåndtering, Bog og Bibliotek*. Det Informationsvidenskabelige Akademi, eds. Copenhagen. Det Informationsvidenskabelige Akademi. http://www.informationsordbogen.dk/concept.php?cid=4103, (accessed 2016-05-01).
- Det Informationsvidenskabelige Akademi. "Om Det Informationsvidenskabelige Akademi," http://iva.ku.dk/om-iva/, (accessed 2016-05-01).
- International Federation of Library Association and Institutions, Section of Library Services to Multicultural Populations. "Multicultural Communities: Guidelines for Library Services." IFLA, 1987, 14 p.
- International Federation of Library Association and Institutions, Section of Library Services to Multicultural Populations. "Multicultural Communities: Guidelines for Library Services." Hague, IFLA, 1998, 13p. http://www.ifla.org/archive/VII/s32/pub/guide-e.pdf, (accessed 2016-05-01).
- International House Copenhagen. Expand Your Network. http://subsite.kk.dk/sitecore/content/Subsites/ International House Copenhagen /SubsiteFrontpage/OurServices/ExpandYourNetwork.aspx, (accessed 2015-03-18).
- Jessen, Ole. "Stør Sogning til Folkeinformation i Gellerup," Skræppebladet. 2010-05-04. http://skraeppebladet.dk/blad/2010-04/artikler/stor-s%C3%B8gning-til-folkeinformation-i-gellerup/, (accessed 2015-11-18).
- Jones, Plummer A. American Public Library Service to the Immigrant Community, 1876-1948: A Biographical History of the Movement and Its Leaders : Jane Maud Campbell (1869-1947), John Foster Carr (1869-1939), Eleanor (Edwards) Ledbetter (1870-1954) and Edna Phillips (1890-1968). Ph.D. Dissertation, The University of North Carolina at Chapel Hill, ProQuest Dissertations Publishing, 1991, 617p.
- Kakhodaee, Massoud. *Dobbelt Fremmedgjorte Mennesker, Deres Danmark, Deres Bibliotek: Biblioteksbetjening af Indvandrere og Flygtninge med Hensyn til Deres Sociale og Kulturelle Pladsering i Det Danske Samfund*. Copenhagen, Danmark Biblioteksskole, 1996, 87p.
- Københavns Biblioteker. "Internationalt Bibliotek," https://bibliotek.kk.dk/vi-har-ogsaa-4/internationalt-bibliotek, (accessed 2015-11-04).
- Københavns Biblioteker. Organisering. https://bibliotek.kk.dk/node/1366, (accessed 2015-03-18).

- Københavns Biblioteker. Succes med Projekt Sprogporten. http://demo.bibliotek.kk.dk/biblioteker/blog/succes-projekt-sprogporten, (accessed 2015-03-18).
- "Befolkningskarakteristik Nørrebro & Bispebjerg," Københavns Kommune. http://fcn.kk.dk/index.php?option=com_content&task=view&id=114&Itemid=47, (accessed 2015-11-21).
- Københavns Kommune, Økonomiforvaltningen, Velfærdsanalyseenheden. "Faktaark fra Velfærdsanalyse: Befolkningen efter bydele og areal, København 1. januar 2016 og 2015," http://www.kk.dk/sites/default/files/2016_befolkningen_efter_bydele_og_areal.pdf, (accessed 2016-09-01).
- Københavns Kommune. "Indkomster: Gennemsnitlig Indkomst efter Køn og Alder - skattepligtig Indkomst," http://sgv2.kk.dk:9704/analytics/saw.dll?PortalPages&PortalPath=%2fshared%2fStatistik%20Rapporter%2f_portal%2fIndkomster&Page=Tab%2021_4_kbh_dist&Done=PortalPages%26PortalPath%3d%252fshared%252fStatistik%2520Rapporter%252f_portal%252fIndkomster%26Page%3dHovedside%2520Indkomster%26ViewState%3dq1nobg5nm4966kkmklrn7dd93u, (accessed 2016-09-11).
- Københavns Kommune. "Københavnerkortet." http://kbhkort.kk.dk/spatialmap?, (accessed 2016-05-06).
- Københavns Kommune Kultur- og Fritidsforvaltningen. *Årsrapport 2012 Integration og Fritid*. 2012, p.4.
- Det Kongelige Bibliotek Pligtafleveringen. "Pligtaflevering: Bevar Nutiden for Fremtiden," http://www.pligtaflevering.dk/brochurer/grafiske_branche.pdf, (accessed 2016-05-01).
- Kragh-Schwars, Benedikte. "Indvandrerbiblioteket er Blevet 25 år," *Bogens Verden*. No.1, 1997, p.38
- Kragh-Schwarz, Benedikte. "Historisk Rids over Udviklingen af Det Nordiske Samarbejde i Biblioteksbetjeningen af Indvandrere." Indvandrerbiblioteket, https://web.archive.org/web/20041024112414/http://www.indvandrerbiblioteket.dk/historie.htm, (accessed 2016-01-09).
- Kulturministeriet. "Kulturministeriets Bekendtgørelse," No.384, 1985.
- Kulturministeriet and Integrationsministeriet. "Samarbejdsaftale mellem Kulturministeriet og Integrationsministeriet 2010-2012." 2010, 6p. https://www.nyidanmark.dk/NR/rdonlyres/F3D6220D-DAEE-43B4-B4E0-

5B9A32711542/0/samarbejdsaftale_mellem_kulturministeriet_og_integrations ministeriet.pdf, (accessed 2016-01-09).

- Kulturministeriet and Ministeriet for Flygtninge Indvandrere og Integration. "Samarbejdsaftale mellem Kulturministeriet og Integrationsministeriet," 2010, p.2.
- Kulturministeriet et al. "//Nethood åbne it-caféer: Et tilbud til Borgere i Udsatte Boligområder," 2012, 8p. http://slks.dk/fileadmin/user_upload/dokumenter/bibliotek/indsatsomraader/Integration/Nethood/Nethoodfolder_2012.pdf, (accessed 2016-01-09).
- "De Deltagende Kommuner i Bogstart 2013-2016." Kulturstyrelsen, 2013, 1p. http://slks.dk/fileadmin/user_upload/dokumenter/bibliotek/indsatsomraader/boern/Kidsmart/De_deltagende_kommuner_i_Bogstart_2013-16.pdf, (accessed 2016-02-05).
- Kulturstyrelsen. Fokusområder. http://www.kulturstyrelsen.dk/institutioner/biblioteker/fokusomraader/, (accessed 2015-03-18).
- Kulturstyrelsen. Medborgercentre. http://www.kulturstyrelsen.dk/fileadmin/user_upload/dokumenter/KS/institutioner/biblioteker/Fokusomraader/LaesningLaering/Medborgercentre/Medborgercentre_Pixi.pdf, (accessed 2015-03-18).
- Kulturstyrelsen. Styrelsens Mission og Vision.http://www.kulturstyrelsen.dk/om-kulturstyrelsen/styrelsens-mission-og-vision/,(accessed 2015-03-18).
- Kulturstyrelsen, Center for Bibliotek, Medier og Digitalisering. "Medborgercentrene: Et Fremtigt Bibliotekskoncept Erfaringer og Perspektiver fra et Forsøgsprojekt med 16 Biblioteksbaserede." 2012, 7p. http://slks.dk/fileadmin/user_upload/dokumenter/KS/institutioner/biblioteker/Fokusomraader/LaesningLaering/Medborgercentre/Medborgercentre_Pixi.pdf, (accessed 2016-05-01).
- Kulturstyrelsen. "Bydelsmødre-grupper ved Biblioteker og Medborgercentre," 2013, p.1. http://www.kulturstyrelsen.dk/fileadmin/user_upload/dokumenter/bibliotek/indsatsomraader/Integration/Bydelsmoedre/Model_for_bydelsmoedre_i_biblioteker.pdf, (accessed 2015-03-18).
- Kumaran, Maha. *Leadership in Libraries a Focus on Ethnic-Minority Librarians*. Oxford, Chandos Publishing, 2012, 187p.

- Kumaran, Maha. “Visible Minority Librarians of Canada at Ontario Library Association Super Conference, 2013”, *Partnership: The Canadian Journal of Library and Information Practice and Research*, Vol. 8, No. 2, 2013. https://journal.lib.uoguelph.ca/index.php/perj/article/view/2888/3151#.V0lb7fmLSM8, （accessed 2016-05-27）.
- Kurz, Robin F. Searching for Mirrors: An Exploration of Racial Diversity in South Carolina's Public Library Youth Collections. Ph.D. Dissertation, University of South Carolina, ProQuest Dissertations Publishing, 2012, 320p.
- Lov om Folkebiblioteker, No.242. 1983.
- Lylloff, Elisabeth. “Indvandrere og Flygtninge: Biblioteket er et Vigtigt led i Integrationsprocessen,” *Danmarks Biblioteker.* 1998, p. 18.
- Madsen, Monica C. “A Course in Newspaper Reading : A Key to Better Integration,” Scandinavian Public Library Quarterly. 2005, vol.38, no.4, p.4-6.
- Madsen, Monica C. “Homework and Information Café in the Library: An Open Door,” *Scandinavian Public Library Quarterly*. Vol.38, No.4, 2005, p.6-7.
- Madsen, Monica C. *Det globale i det Locale: Integration og Biblioteker*, Copenhagen, Biblioteksstyrelsen, 2005, 62p. https://www.statsbiblioteket.dk/forbiblioteker/sbci/om-sbci/projekter/konsulenter/global.pdf, (accessed 2016-02-05).
- Malone, Cheryl K. “Toward a Multicultural American Public Library History,” *Libraries and Culture*. Vol. 35, No. 1, 2000, p. 77-87.
- Mark, Niels. “Indvandrerbiblioteket Som En Del af Statsbiblioteket.” Danmarks Biblioteker. No.1, 1999, http://www.danmarksbiblioteker.dk/Default.aspx?ID=4278, (accessed 2015-03-18).
- Ministeriet for Børn, Undervisning og Ligestilling. “10. Klasse”. UddannelsesGuiden. 2015-09-13. https://www.ug.dk/uddannelser/grundskoleundervisning/grundskolemv/10-klasse, (accessed 2015-09-29).
- Ministeriet for By, Bolig og Landdistrikter. Kriterier for Særligt Udsatte Boligområder. http://www.mbbl.dk/kriterier-saerligt-udsatte-boligomraader, (accessed 2015-03-18).
- “Arbog om Udlandinge i Danmark 2004: Status og Udvikling,” Ministeriet for Flygtninge, Indvandrere og Integration. http://www.nyidanmark.dk/bibliotek/statistik/aarbog_om_udlaendinge/2004/aa

rbog_udlaendinge_04/pdf/Aarbog_om_udlaendinge_2004.pdf, (accessed 2015-11-21).

- Ministeriet for Flygtninge, Indvandrere og Integration. "Integrationsloven," http://www.statensnet.dk/pligtarkiv/fremvis.pl?vaerkid=18656&reprid=0&filid=7&iarkiv=1, (accessed 2016-06-09).
- Ministeriet for Flygtninge, Indvandrere og Integration. "Integrationsministeriet er Nedlagt og Ressortområderne Overgået til Andre Ministerier." https://www.nyidanmark.dk/da-dk/Nyheder/Nyheder/udlaendingeservice/2011/Oktober/ministeriet_nedlagt.htm, (accessed 2016-01-09).
- "Factsheet Denmark," Ministry of Foreign Affairs of Denmark. 2006, 4p. http://www.um.dk/um_files/publikationer/um/english/factsheetdenmark/integration/integrationindenmark06.pdf, (accessed 2015-10-30).
- Ministry of Refugee Immigration and Integration Affairs. *Integration 2009: Nine Focus Areas.* Copenhagen, Ministry of Refugee Immigration and Integration Affairs, 2009, 52p. https://ec.europa.eu/migrant-integration/index.cfm?action=media.download&uuid=29C6886F-9C0B-4BE6-F4BDF117059874F0, （accessed 2016-05-27）.
- Ministry of Refugee, Immigration and Integration Affairs. "The Administration Department," The Official Portal for Foreigners and Integration. http://www.nyidanmark.dk/en-us/authorities/the_ministry/the_organisation/the_administration_department.htm (accessed 2015-10-25).
- Ministry of Refugee, Immigration and Integration Affairs. "The Danish Immigration service," The Official Portal for Foreigners and Integration. http://www.nyidanmark.dk/en-us/authorities/the_danish_immigration_service/the_danish_immigration_service.htm (accessed 2015-10-25).
- Ministry of Refugee, Immigration and Integration Affairs. "The eGovernment Department," The Official Portal for Foreigners and Integration. http://www.nyidanmark.dk/en-us/authorities/the_ministry/the_organisation/the_egovernment_department.htm (accessed 2015-10-25).
- Ministry of Refugee, Immigration and Integration Affairs. "The Immigration Department," The Official Portal for Foreigners and Integration.

http://www.nyidanmark.dk/en-us/authorities/the_ministry/the_organisation/the_immigration_department.htm (accessed 2015-10-25).

- Ministry of Refugee, Immigration and Integration Affairs. "The Integration Department," The Official Portal for Foreigners and Integration. http://www.nyidanmark.dk/en-us/authorities/the_ministry/the_organisation/the_integration_department.htm (accessed 2015-10-25).
- "Integration 2009: Nine Focus Areas," Ministry of Refugee, Immigration and Integration Affairs. 2009, 48p. http://www.nyidanmark.dk/NR/rdonlyres/B3D6D658-B4D2-4879-B63B-D61B58CB2131/0/Integration_2009_UK_web.pdf (accessed 2015-10-25).
- "Statistical Overview: Population Statistics on Foreigners," Ministry of Refugee, Immigration and Integration Affairs. 2007, 46p. http://www.nyidanmark.dk/NR/rdonlyres/F47F6F78-32E2-4112-9D0C-4B3B6675A9E5/0/statistical_overview_2007.pdf, (accessed 2015-10-01).
- Moring, Camilla. "At Blive Bibliotekar: Om Læring og Udvikling af Professionsidentitet i Uddannelse og Praksis, "Bibliotekarerne : en Profession i et Felt af Viden, Kommunikation og Teknologi. Trine Schreiber and Hans Elbeshausen, eds. Frederiksberg, Samfundslitteratur, 2006, p.97-118.
- National Library of Greenland Groenlandica. "The Cultural Heritage," https://www.groenlandica.gl/web/arena/kulturarven, (accessed 2016-05-01).
- Nielsen, Jørgen S. ed. *Islam in Denmark : the Challenge of Diversity.* Lanham, Lexington, 2012, 261p.
- Nielsen, Møller J. "De Flittigste Biblioteksbrugere," *Samspil,* No. 4, 2001, p. 8-12.
- Nielsen, Vibeke and Tina M. Kristensen. "Læs Dansk på Bibliotekerne Undervisningsmateriale om Biblioteket ved Introduktion til Kursister fra Sprogskolen." Statsbibliotek, 2014, 26p. http://projekter.kulturstyrelsen.dk/sites/default/files/documents/Undervisningsmateriale%20til%20biblioteksintroduktion%20for%20kursister%20fra%20sprogskolen.pdf, (accessed 2016-02-05).
- Nordens Folkliga Akademi. "Är det Flerspråkliga Biblioteket en för Stor Utmaning för ADB?," Nordens Folkliga Akademi, 1987, 49p.
- *Nordiskt Bibliotekssamarbete om Urval och Inkop av Media for Invandrare.* Lund, Bibliotekstjänst, 1985, 20p.

- "Lidt Nørrebro-historie," Nørrebro Lokalhistoriske Forning Arkiv. http://www.noerrebrolokalhistorie.dk/historie.php, (accessed 2015-11-21).
- Office for Diversity, Literacy and Outreach Services. "Spectrum Scholarship Program," American Library Association. http://www.ala.org/offices/diversity/spectrum, (accessed 2016-02 -05)
- Pedersen, Niels E. "Debat," *Bibliotek 70*, No.11, 1993, p.326.
- Pedersen, Christoffer G. and Pontus Odmaim. "Going Different Ways? Right-wing Parties and the Immigrant Issue in Denmark and Sweden," *Journal of European Public Policy*. Vol. 15, No. 3, 2008, p.367-381.
- Pedersen, Marianne H. and Mikkel Rytter. *Islam og Muslimer i Danmark: Religion, Identitet og Sikkerhed efter 11. September 2001*. Copenhagen, Museum Tusculanum, 2011, 325p.
- "PLACE: Public Libraries – Arenas for Citizenship: An Investigation of the Public Library as a Meeting Place in a Digital and Multicultural Context," CRIStin. https://www.cristin.no/app/projects/show.jsf?id=288092, （accessed 2016-05-27）.
- PLS Consult. *Folkebibliotekernes Indvandrerbibliotek: Behov, Aktiviteter og Organisatorisk Ramme*. Copenhagen, PLS Consult, 1996, 54p.
- Poulsen, Ann K. and Jacobsen B. Sandholdt. *Det Urolige Bibliotek.* Biblioteksstyrelsen, 2005, 29p. http://www.bs.dk/publikationer/rv/10/index.htm, （accessed 2016-05-27）.
- Pozzi, Ellen M. *The Pubilc Library in an Immigrant Neighborhood: Italian Immigrants' Information Ecologies in Newark, New Jersey, 1889-1919*. Ph.D. Dissertation, The State University of New Jersey, ProQuest Dissertations Publishing, 2013, 318p.
- Raddon, Rosemary. "Black and Ethnic Minority Staff: Issues of Recruitment and Training," *Public Library Journal*, Vol. 2, No. 4. 1987, p.62-66.
- Rasmussen, Annette. "Why School Matters to Pupils: The Culture of Schooling as Actions and Accounts during Lockout Time: Contemporary Schooling as Actions and Accounts during Lockout Time," Oxford Etnography and Education Conference. Oxford, 2014-9-15/17/. Ethnography and Education. http://vbn.aau.dk/da/publications/why-school-matters-to-pupils-the-culture-of-schooling-as-actions-and-accounts-during-lockout-time(94050d6a-d412-433b-ac53-6377710ade87).html, (accessed 2015-08-05).
- Rasmussen, Casper H. and Charlotte L. Høirup. *Kulturinstitutionernes Bidrag til det Kulturelt Mangfoldige Danmark: En Undersøgelse af Kunst- og*

Kulturformidlingsinstitutioners Tilbud til og Inddragelse af de Etniske Minoriteter. Copenhagen, Det Interkulturelle Netværk, 2000, 103p.

- Rasmussen, Hans K. *No Entry: Immigration Policy in Europe*. Copenhagen, Copenhagen Business School Press, 1997, 205p.
- "Bekendtgørelse af lov om Integration af Udlændinge i Danmark," Retsinformation.dk. https://www.retsinformation.dk/forms/r0710.aspx?id=163323, (accessed 2016-05-01).
- "Lov om Biblioteksvirksomhed Chapter1, § 1," Retsinformation.dk. https://www.retsinformation.dk/forms/r0710.aspx?id=145152, (accessed 2016-05-01).
- "Lov om Biblioteksvirksomhed Chapter2 § 14(3)," Retsinformation.dk. https://www.retsinformation.dk/forms/r0710.aspx?id=145152, (accessed 2016-05-01).
- Roach, Patrick and Marlene Morrison. "Pursuing the Wind of Change Public Library Services in a Multicultural Britain." *Asian Libraries*. Vol. 8, No. 4, 1999, p. 112-117.
- Sawahiro, Aya and Hans Elbeshausen. "Succesfulde Etniske Minoritetskvinder i Danmark: Hvad Menes med Succes," Et tidsskrift om Kulturel Mangfoldighed. 2009. http://forbindelser.dk/succesfulde-etniske-minoritetskvinder-i-danmark-hvad-menes-med-succes/, （accessed 2016-05-27）.
- "Scandinavian Technical Visits Guide," Scandinavian Tourist Board. http://www.stb-asia.com/ebook/TV2009PDF/10.pdf, (accessed 2015-10-25).
- Schade, Hanne F. "Ja til Farverige Biblioteker," *Biblioteksspressen*. No. 11, 2000, p.374-377.
- Schwartz, Jonathan and Suzanne Schytt. "Indvadrerbørn, Danske Børn og Børnekultur," *Bixen*. No.2, 1981, p.57-65.
- Schwarz, Benedikte K. "Library Service to Arabic Speaking Immigrants and Refugees in Denmark," *66th General conference of IFLA*. IFLA Section on Library Services to Multicultural Populations. Jersalem, Israel. 2000-08-17.
- Skøtt, Bo C. "Ethnic Diversity in Danish Public Libraries," *New Frontiers in Public Library Research*. Carl Gustav Johannsen and Leif Kajberg, eds. Lanham, Scarecrow Press, 2005, p.185-210.

- Slots- og Kulturstyrelsen. “Nethood.” http://projekter.kulturstyrelsen.dk/Nethood, (access 2016-01-09).
- “Om Biblioteker,” Slots- og Kulturstyrelsen. http://slks.dk/biblioteker/om-biblioteker/, (accessed 2016-02-06)
- “Om Biblioteker,” Slots- og Kulturstyrelsen. http://slks.dk/biblioteker/om-biblioteker/, (accessed 2016-05-01).
- Slots- og Kulturstyrelsen. “Forskningsbiblioteker (Alle betjeningssteder),” http://vip.dbc.dk/lister.php?vis=forsk_alle&PHPSESSID=7bdb9955c90dca2dbc18228ff54f970b, (accessed 2016-05-01).
- Slots- og Kulturstyrelsen. “IT-Cafe for, med og af Unge: Brugerinddragelse.” http://projekter.kulturstyrelsen.dk/projekt/it-cafe-med-og-af-unge-brugerinddragelse, (access 2016-01-09).
- Slots- og Kulturstyrelsen. “Læs Dansk på Bibliotekerne.” http://projekter.kulturstyrelsen.dk/projekt/laes-dansk-pa-bibliotekerne, (access 2016-01-09).
- Slots- og Kulturstyrelsen. “Nye Brugere en 180° Nytaenking af Bibliotek.” http://projekter.kulturstyrelsen.dk/projekt/nye-brugere-en-180-nytaenking-af-biblioteket, (access 2016-01-09).
- Sønderstrup-Andersen, Eva. “Bibliotekerne Samarbejder med Borger.dk,” Biblioteksstyrelsen, 2008. http://www.bs.dk/publikationer/nfn/2008/3/html/chapter07.htm, (accessed 2016-01-09).
- Srinivasan, Ramesh and Ajit Pyati. “Diasporic Information Environments: Reframing Immigrant-Focused Information Research,” *Journal of the American Society for Information Science and Technology*. Vol.58, No.12, 2007, p. 1734-1744.
- Srinivasan, Ramesh and Ajit Pyati. “Disporic Information Environments: Reframing Immigrant-Focused Information Research,” *Journal of the American Society for Information Science and Technology*. Vol. 58, No. 12, 2007, p.1734-1744.
- The State and University Library et al. *Refuge for Integration: A Study of How the Ethnic Minorities in Denmark Use the Libraries*. 2001, 23p. http://www.aakb.dk/files/file_attachments/30._juni_2010_-_1006/refuge.pdf (accessed 2015-09-24).

- "Om SBCI," Statsbibliotek. http://www.statsbiblioteket.dk/forbiblioteker/sbci/om-sbci/organisationens-historie, (accessed 2015-03-18)
- Statsbibliotek. "Indvandrerbiblioteket Bliver til BiblioteksCenter for Integration," http://www.statsbiblioteket.dk/forbiblioteker/sbci/nyheder/nyhedsarkiv-sbci/sbcinyhedsarkiv2006/indvandrerbiblioteket-bliver-til-bibliotekscenter-for-integration, (accessed 2015-03-18).
- Statsbibliotek. "Om SBCI," http://www.statsbiblioteket.dk/forbiblioteker/sbci/om-sbci/organisationens-historie, (accessed 2015-03-18).
- "Årsværk på Folkebiblioteker efter Område og Personalekategori," Statsbiblioteket. http://www.statistikbanken.dk/10368, (accessed 2016-05-01)
- Statsbiblioteket. "BibZoom.dk World Anno 2011." https://www.statsbiblioteket.dk/forbiblioteker/nyheder/bibzoom-world-anno-2011, (accessed 2016-01-09).
- Statsbiblioteket. Bøger, Musik og Film. http://www.statsbiblioteket.dk/forbiblioteker/sbci/lan/lan, (accessed 2015-03-18).
- Statsbiblioteket. Fokussprog2014. http://www.statsbiblioteket.dk/forbiblioteker/sbci/lan/indkob/fokussprog-2014, (accessed 2015-03-18).
- Statsbiblioteket. Læs med Dit Barn. https://www.statsbiblioteket.dk/forbiblioteker/sbci/videncenter/sprogstimulering/les-med-dit-barn, (accessed 2015-03-18).
- Statsbiblioteket. Mission, Vision og Strategi. http://www.statsbiblioteket.dk/om-statsbiblioteket/Mission%2C%20vision%20og%20strategi/mission%2C%20vision%20og%20strategi, (accessed 2016-05-01).
- Statsbiblioteket. Om BiblioteksCenter for Integration. https://www.statsbiblioteket.dk/forbiblioteker/sbci/om-sbci/om-bibliotekscenter-for-integration-ny, (accessed 2015-03-18).
- Statsbiblioteket. Slutrapport fra Projekt Læs Dansk på Bibliotekerne. http://projekter.bibliotekogmedier.dk/sites/default/files/documents/Slutrapport fra projekt Læs dansk på bibliotekerne.pdf, (accessed 2015-03-18).

- Statsbiblioteket.Organisering. https://www.statsbiblioteket.dk/om-statsbiblioteket/organisering/Organisering, (accessed 2015-03-18).
- Statsbiblioteket, et al. *Frirum til Integration: En Undersøgelse af de Etniske Minoriteters Brug af Bibliotekerne: Hovedrapport*. Aarhus, Århus Kommunes Biblioteker, 2001, 53p. https://www.aakb.dk/sites/www.aakb.dk/files/files/file_attachments/30._juni_2010_-_958/frirumhovedrapport.pdf, （accessed 2016-05-27）.
- Statsbiblioteket, et al. *Refuge for Integration: A Study of How the Ethnic Minorities in Denmark Use the Libraries : Abstract and Recommendations*. Aarhus, Aarhus Public Libraries, 2001, 23p. https://www.aakb.dk/sites/www.aakb.dk/files/files/file_attachments/30._juni_2010_-_958/refuge.pdf, （accessed 2016-05-27）.
- Steengaard, Jytte. "Sundhedshuset Vest," Ny i Danmark. http://www.nyidanmark.dk/NR/rdonlyres/91023C66-1745-4A68-BAA0-A73D22245370/0/kvindeprogrammet_informationsmoeder_jun09_powerpoint_sundhedshuset_i_gellerup.pdf, (accessed 2015-11-18).
- Stenkilde, Helge. Biblioteksbetjening af Gæstearbejdere. *Bogens Verden*. 1970, Vol. 52, p. 343-344.
- Svane-Mikkelsen, Jørgen. *The Library System in Denmark*. Copenhagen, Royal School of Library and Information Science, 1997, p.68-70.
- Thorhauge, Jens. "Danish Strategies in Public Library Services to Ethnic Minorities," *IFLA journal*. Vol. 29, No. 4, 2003, p. 308-312.
- Uddannelsesservice Københavns Universitet. Kursussøgning, efter- og Videreuddannelse. http://efteruddannelse.kurser.ku.dk/?PageNumber=1&SearchWord=&Faculty=FACULTY_0004&selectItemFaculty=FACULTY_0004&Period=&selectItemPeriod=&Departments=DEPARTMENT_0074&selectItemDepartments=DEPARTMENT_0074&Language=&selectItemLanguage=, (accessed 2016-05-01).
- Udgiverselskabet Informationsordbogen. "Depotbibliotek," Informationsordbogen: Ordbog for Informationshåndtering, Bog og Bibliotek. http://informationsordbogen.dk/concept.php?cid=421, (accessed 2016-01-24).
- Udvalget om Bibliotekerne i Informationssamfundet. *Betænkning om Bibliotekerne i Informationssamfundet*. Copenhagen, Kulturministeriet, 1997, 172p.

- Ulvik, Synnøve. *Biblioteket som Gikk ut av Huset Sitt: Evaluering av Prosjektarbeid ved Torshov Filial av Deichmanske Bibliotek*. Oslo, Høgskolen i Oslo, 1997, 7p.
- Ulvik, Synnøve. "Why Should the Library Collect Immigrants' Memories?: A Study of a Multicultural Memory Group at a Public Library in Oslo," *New Library World*. Vol. 111, No. 3/4, 2010, p. 154-160.
- Ulvik, Synnøve. "How Can the Local Library Become a Meeting Place for Immigrants?," *Nordic Library Conference 2011*, http://www.statsbiblioteket.dk/conference2011/paper-files/How%20can%20the%20local%20library%20become%20a%20meeting%20place%20for%20immigrants.pdf/view, （accessed 2016-05-27）.
- "International Migration," United Nations Statistics Division. http://unstats.un.org/unsd/demographic/sconcerns/migration/migrmethods.htm, (accessed 2016-05-01)
- Vårheim, Andreas. "Social Capital and Public Libraries: The Need for Research," *Library and Information Science Research*. Vol. 29, No. 3, 2007, p. 416-428.
- Vårheim, Andreas et al. "Folkebibliotekets Bidrag til Sosial Integrasjon: Foreløpige Funn fra Place-prosjektet," *Nordisk Kulturpolitisk Tidsskrift*. Vol. 11, No. 1, 2008. p. 8-26.
- Vårheim, Andreas. "Theoretical Approaches on Public Libraries as Places Creating Social Capital," World Library and Information Congress: 74th IFLA General Conference and Council Québec, Canada. http://archive.ifla.org/IV/ifla74/papers/091-Varheim-en.pdf, （accessed 2016-05-27）.
- Vårheim, Andreas; Sven Steinmo and Eisaku Ide. "Do Libraries Matter? Public Libraries and the Creation of Social Capital," *Journal of Documentation*. Vol. 64, No. 6, 2008, p.877-892.
- Vårheim, Andreas. "Gracious Space: Library Programming Strategies towards Immigrants as Tools in the Creation of Social Capital," *Library and Information Science Research*. Vol. 33, No. 1, 2011, p. 12-18.
- Vårheim, Andreas. "Trust and the Role of the Public Library in the Integration of Refugees: The Case of a Northern Norwegian City," J*ournal of Librarianship and Information Science*. Vol. 46,No. 1, 2014, p. 62-69.

- Vårheim, Andreas. “Trust in Libraries and Trust in most People: Social Capital Creation in the Public Library.” *The Library Quarterly: Information, Community, Policy* . Vol. 84, No. 3, 2014, p. 258-277.
- Vesterbrobibliotek. “Vi Læser Avisen Sammen,” Københavnsbiblioteker. http://bibliotek.kk.dk/biblioteker/vesterbro/facilitet/laeser-avisen-sammen, (accessed 2015-11-08).
- Weisbjerg, Bente L. and Inger Frydendahl. “Integration med Kvinder og Piger i Focus.” Copenhagen, Biblioteksstyrelsen, 2005, 42p. https://www.statsbiblioteket.dk/forbiblioteker/sbci/om-sbci/projekter/konsulenter/rv12.pdf, (accessed 2016-02-05).
- Weisbjerg, Bente and Hans Elbeshausen. “Ilsjælenes Professionalisering: Fra Indvandrerbibliotekar til Integrationsbibliotekar,” *Bibliotekarerne: En Profession i et Felt af Viden, Kommunikation og Teknologi.* Trine Schreiber and Hans Elbeshausen, eds. Frederiksberg, Samfundslitteratur, 2006, p.141-174.
- Wiegand, Wayne A. “To Reposition a Research Agenda: What American Studies Can Teach the LIS Community About the Library in the Life of the User,” *The Library Quarterly*, Vol.73, No. 4, 2003, p. 369-382.
- Yoshida, Yuko. “The Public Library as a Space for Informal Learning,”*Scandinavian Public Library Quarterly*. Vol. 42, No. 4, 2009, p.16-17. http://slq.nu/?article=japan-a-japanese-view-on-scandinavian-libraries-the-public-library-as-a-space-for-informal-learning-introduction-public-libraries-and-citizen-participation, （accessed 2016-05-27）.
- Zielinska, Marie F. and Francis T. Kirkwood. *Multicultural Librarianship: An International Handbook*. New York, K.G. Saur, 1992, 383p.
- Zielinska, Marie F. “Celebrating 20years: A Concise History of the IFLA Section on Library Services to Multicultural Populations.” IFLA, 2001, 13p. http://www.ifla.org/files/assets/library-services-to-multicultural-populations/publications/20-years-mcult-history.pdf, (accessed 2016-05-01).

2. 日本語文献

- Urry, John『モビリティーズ：移動の社会学』［Mobilities］吉原直樹，伊藤嘉高訳，作品社，2016，493p.
- 明石浩「実践「場」としての多文化サービス：図書館でベトナム語講座」『図書館評論』No. 47, 2006,　p. 68-74.

・ 浅沼道子「デンマークの外国人政策と開発援助: その相互関連性について」『北欧史研究』No. 24, 2007,　p. 217-222.
・ 新谷周平「「居場所」型施設における若者の関わり方：公的中高生施設「ゆう杉並」のエスノグラフィー」『生涯学習・社会教育学研究』No. 26, 2001, p. 21-30.
・ 新谷周平「講演：居場所・図書館知・社会」『Lisn：Library & Information Science News』No. 142, 2009, p. 1-11.
・ 井口泰「外国人の統合政策および社会保険加入のための基盤整備: EU 等の調査から」『社会保障研究』Vol. 43, No. 2, p. 131-148.
・ 石黒暢「デンマークの電子政府戦略：行政の効率化と市民サービス向上の試み（北欧諸国における情報の収集・管理・公開に関する多角的研究）」『北欧研究』No.20, 2012, p. 119-134.
・ 伊藤隆『オーラル・メソッドによる政策の基礎研究 ： 平成 12 年度～平成 16 年度科学研究費補助金「特別推進研究(COE)」研究成果報告書』政策研究大学院大学, 2005.
・ IFLA 多文化社会図書館サービス分科会 「多文化サービスの意義」 http://archive.ifla.org/VII/s32/pub/s32Raison-jp.pdf, (参照 2010-09-10).
・ IFLA/UNESCO「IFLA/UNESCO 多文化図書館宣言: 多文化図書館－対話による文化的に多様な社会への懸け橋」［IFLA/UNESCO Multicultural Library Manifesto: The Multicultural Library – A Gateway to a Cultural Diverse Society in Dialogue］平田泰子訳, 2009, http://www.ifla.org/files/assets/library-services-to-multicultural-populations/publications/multicultural_library_manifesto-ja.pdf, (参照 2016-5-30).
・ 伊豫谷登士翁『移動から場所を問う: 現代移民研究の課題』有信堂, 2007, 265p.
・ 岩見和彦「マス・メディアと青少年」『教育社会学を学ぶ人のために』柴野昌山編, 世界思想社, 1985, p.183-198.
・ International Federation of Library Association and Institutions, Section of Library Services to Multicultural Populations『多文化コミュニティ: 図書館サービスのためのガイドライン第 3 版』[*Multicultural Communities: Guidelines for Library Services 3rd edition*] 日本図書館協会多文化サービス委員会訳, 日本図書館協会, 2012, 71p.
・ International Federation of Library Association and Institutions, Section of Library Services to Multicultural Populations「多文化主義の定義」[“Defining “Multiculturalism””] 日本図書館協会多文化サービス委員会訳, 2005, 2p. http://archive.ifla.org/VII/s32/pub/multiculturalism-jp.pdf, (accessed 2016-05-01).

・ 上杉富之「人類学から見たトランスナショナリズム研究：研究の成立と展開及び転換」『日本常民文化紀要』No.24, 2004, p.126-84.
・ Vaughn, Sharon et al.『グループ・インタビューの技法』［Focus Group Interviews in Education and Psychology］田部井潤，柴原宜幸訳，慶応義塾大学出版会, 1999, 228p.
・ OECD 編著『移民の子どもと学力: 社会的背景が学習にどんな影響を与えるのか』[Where Immigrant Students Succeed：A Comparative Review of Performance and Engagement in PISA 2003］木下江美，布川あゆみ訳．明石書店, 2007, 246p.
・ 大澤真幸ほか編『現代社会学事典』弘文堂, 2012, 1640p.
・ 大塚和夫ほか編『岩波イスラーム辞典』岩波書店, 2002, 1247p.
・ 大庭穰治「デンマークの公共図書館の現状について」『静岡県立中央図書館報』No. 28, 1993,　p. 4-11.
・ 小澤実ほか著『アイスランド・グリーンランド・北極を知るための 65 章』明石書店, 2016, p.28-33.
・ 外務省「デンマーク王国」http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/denmark/index.html, (accessed 2016-01-05).
・ 片倉もとこほか『イスラーム世界事典』明石書店, 2002, 473p.
・ 柄谷利恵子『移動と生存：国境を越える人々の政治学』岩波書店，2016, 228p.
・ 河野健一「デンマークにおける右派ナショナリズム政党の台頭と移民政策の変容: コペンハーゲンからの報告」『長崎県立大学国際情報学部研究紀要』No. 10, 2009, p.133-139.
・ 川村千鶴子ほか『移民政策へのアプローチ』明石書店, 2009, 288p.
・ 国末憲人『自爆テロリストの正体』新潮社, 2005, 207p.
・ 久野和子「「第三の場」としての図書館」『京都大学生涯教育学・図書館情報学研究』Vol. 9, 2010,　p.109-121.
・ 久野和子「「第三の場」としての学校図書館」『図書館界』Vol. 63, No. 361, 2011, p. 296-313.
・ 久野和子「新しい批判的図書館研究としての「場としての図書館」("Library as Place")研究 ：その方法論を中心にした考察」『図書館界 』Vol. 66, No. 379, 2014, p. 268-285.
・ 小杉泰「イスラーム諸国会議機構」『岩波イスラーム辞典』大塚和夫ほか編，岩波書店, 2002, p.137, 1135-1140.
・ 小杉泰『イスラームとは何か』講談社, 1994, 302p.
・ 小杉山禮子「デンマークの「成人教育」」『社会教育』Vol. 47, No. 8, 1992, p.60-63.

- 小林恭子「外国人嫌いの中の風刺画掲載: デンマーク国内事情とメディアのかかわり方」『新聞研究』No. 658, 2006,　p.51-54.
- 小林卓, 高橋隆一郎「図書館の多文化サービスについて: 様々な言語を使い、様々な文化的背景を持つ人々に図書館がサービスする意義とは」『情報の科学と技術』Vol. 59, No. 8, 2009, p.397-402.
- 小林卓「図書館と多様性: 多文化サービスの視点から」『図書館界』Vol. 57, No. 4, 2005, p.240-249.
- 齋藤修「デンマークの就学前教育制度」『盛岡大学短期大学部紀要』No. 18, 2008, p. 13-19.
- 佐道明広「政策学におけるオーラル・ヒストリーの意義：研究と教育への活用をめぐって」『総合政策フォーラム』Vol.1, No.1, 2006, p.57-70.
- 佐藤郁哉『フィールドワークの技法: 問いを育てる、仮説をきたえる』新曜社, 2002, 346p.
- 佐藤郁哉『フィールドワーク: 書を持って街へ出よう』新曜社, 2006, 313p.
- 佐藤郁哉『質的データ分析法: 原理・方法・実践』新曜社, 2008, 211p.
- 重松信司編『現代アジア移民: その共生原理をもとめて』名古屋大学出版会, 1986, 295p.
- 渋谷真樹「ルーツからルートへ: ニューカマーの子どもたちの今」『異文化間教育』No. 37, 2013, p. 1-14.
- 清水満『生のための学校: デンマークで生まれたフリースクール「フォルケホイスコーレ」の世界』新評論, 1996, 334p.
- 下峠哲朗「イスラーム系移民の生活および生活世界を支える諸要因に関する一考: エスニック・ネットワーク論に基づいて」『淑徳大学大学院研究紀要』No. 12, 2005, p.185-207.
- 白井静子「すべての人に母語で読む権利を保障するスウェーデン」『国際交流』No. 103, 2004, p. 21-24.
- 白水繁彦編『移動する人びと、変容する文化: グローバリゼーションとアイデンティティ』御茶の水書房, 2008, 190p.
- 新谷俊裕ほか「デンマーク語固有名詞カナ表記小辞典」『IDUN 北欧研究』2009, 別冊 No.2. 240p.
- Certeau, Michel de『日常的実践のポイエティーク』[*L'invention du Quotidien 1: Art de faire*] 山田登世子訳, 国文社, 1987, 452p.
- 田尾雅夫『公共経営論』木鐸社, 2010, 432p.
- 堤恵「北欧の移民・難民への図書館サービス: スウェーデンとデンマークの事例から」『カレントアウェアネス』No. 287, 2006,　p. 8-10.
- 内藤正典『ヨーロッパとイスラーム: 共生は可能か』岩波書店, 2004, 207p.

- 中野毅「9.11 同時多発テロとグローバル化」『Sociologica』Vol. 31, 2007,　p.1-29.
- 中野卓, 桜井厚『ライフヒストリーの社会学』弘文堂, 1995, 270p.
- 中村友子「新デンマーク人をめぐる価値と境界の政治: デンマークにおける移民・難民政策とクリーヴィッジ」『Keio SFC journal』Vol. 9, No.1, 2009, p. 101- 114.
- 日本図書館協会多文化サービス研究委員会編「多文化サービス入門」日本図書館協会, 2004, 198p.
- 日本図書館情報学会用語辞典編集委員会編『図書館情報学用語辞典第 3 版』丸善, 2007, 296p.
- 日本図書館情報学会用語辞典編集委員会編『図書館情報学用語辞典第 4 版』 丸善出版, 2013, 284p.
- 根本彰「「場所としての図書館」をめぐる議論」『カレントアウェアネス』No. 286, 2005, p. 21-25.
- 根本彰『場所としての図書館・空間としての図書館 ： 日本、アメリカ、ヨーロッパを見て歩く』学文社,　2015, 125p.
- 根本彰「「場所としての図書館」再考」『現代の図書館』Vol. 51, No. 206, 2013, p. 51-60.
- 野入直美「見えない日本人：在日朝鮮人教育における「日本人生徒」の位相」『異文化間教育』No. 22, 2005, p. 42-56.
- 拝野寿美子『ブラジル人学校の子どもたち：「日本かブラジルか」を超えて』ナカニシヤ出版, 2010, 274p.
- 樋口直人「移民システムと移民コミュニティの形成: 移民ネットワーク論から見た移住過程」梶田孝道ほか『顔の見えない定住化: 日系ブラジル人と国家・市場・移民ネットワーク』名古屋大学出版会, 2005, p.96-101.
- 広田康生『新版エスニシティと都市』有信堂, 2003, 386p.
- 平田泰子「公共図書館の多文化ニーズを進めるために: 情報ニーズ調査の必要性」『カレントアウェアネス』No. 296, 2008,　p. 2-4.
- 藤原和彦『イスラーム過激原理主義: なぜテロに走るのか』中央公論新社, 2001, 254p.
- Friedmann, John『市民・政府・NGO：「力の剥奪」からエンパワーメントへ』［Empowerment：The Politics of Alternative Development］斉藤千宏, 雨森孝悦監訳, 新評論, 1995, 314p.
- Buschman, John E. and Gloria J. Leckie, eds.『場としての図書館: 歴史、コミュニティ、文化』［The Library as Place: History, Community, and Culture］川崎良孝ほか訳, 日本図書館協会, 2008, 405p.

- Pawley, Christine and Louise S. Robbins, eds. 『20 世紀アメリカの図書館と読者層』［*Libraries and the Reading Public in Twenties-Century America*］川崎良孝ほか訳, 京都図書館情報学研究会, 2014, 351p.
- 松原正毅編『世界民族問題事典』平凡社, 1995, p.136-139.
- 丸山英樹「欧州における移民の社会統合と教育政策: 『移民統合政策指標』と『移民の子の統合』報告書から見るドイツとスウェーデン」『国立教育政策研究所紀要』No. 138, 2009, p. 1-16.
- 三浦綾希子『ニューカマーの子どもと移民コミュニティ：第二世代のエスニックアイデンティティ』勁草書房, 2015, 312p.
- 箕浦康子編著『フィールドワークの技法と実際: マイクロエスノグラフィー入門』ミネルヴァ書房, 1999, 229p.
- 村井誠人編著『デンマークを知るための 68 章』明石書店, 2009, 407p.
- Merriam, Sharan B.『質的調査法入門: 教育における調査法とケース・スタディ』［Qualitative Research and Case Study Applications in Education］堀薫夫ほか訳. ミネルヴァ書房, 2004, 418p.
- 八木久美子「ムハンマド風刺画問題についての一考察」『宗教研究』Vol.80, No.4, 2007, p.1168-1169.
- 吉田右子「北欧におけるマイノリティ住民への図書館サービス: デンマークとスウェーデンを中心に」『図書館界』Vol. 59, No. 3, 2007, p. 174-187.
- 吉田右子「北欧のコミュニティと公共図書館」『カレントアウェアネス』No. 295, 2008, p. 21-23.
- 吉田右子「多文化社会図書館サービスとは：デンマークの例」『月刊言語』Vol. 37, No. 9, 2008, p. 54-57.
- 吉田右子『デンマークのにぎやかな公共図書館』新評論, 2010, 268p.
- 吉田右子「生涯学習機関としての北欧公共図書館の役割に関する実証的研究」科学研究費助成事業(科学研究費補助金)研究成果報告書：基盤研究(C)2009-2011 (課題番号：21500234) , 2012, 4p.
- 吉田右子「対話とエンパワーメントを醸成する 21 世紀の北欧公共図書館」『現代の図書館』Vol. 52, No. 2, 2014, p. 112-120.
- 吉田右子「自己との対話・他者との会話 ：21 世紀のデンマーク公共図書館がめざすもの」『図書館雑誌』Vol. 109, No. 4, 2015, p. 220-222.
- 吉武信彦「外国人問題と北欧: デンマークを中心として」『海外事情』Vol. 50, No. 10, 2002, p. 92-105.
- 吉武信彦「デンマークにおける新しい右翼: デンマーク国民党を事例として」『地域政策研究』Vol. 8, No. 2, 2005, p. 21-50.

・ 李其珍「風刺漫画とマス・メディアの「表現の自由」：ムハンマド風刺画事件の一考察」『評論・社会科学』No.82, 2007, p.31-64.
・ Richards, Jack C. and Theodore S. Rodgers. 『世界の言語教授・指導法 ：アプローチ&メソッド』[Approaches and Methods in Language Teaching] アナハイム大学出版局協力翻訳チーム訳. 東京書籍, 2007, 342p.
・ 和気尚美「デンマークにおける移民を対象とした公共図書館サービス:イスラーム系移民の図書館利用に焦点をあてて」筑波大学大学院図書館情報メディア研究科修士論文, 2009, 200p.
・ 和気尚美「デンマークにおける移民の公共図書館に対する意識と利用行動 ：ムスリム移民を対象としたインタビューを通して」『移民研究年報』No.18, 2012, p.121-138.
・ 和気尚美「デンマークの移民に対する公共図書館サービス: アクターの機能と関係に着目して」『日本図書館情報学会誌』Vol.62, No.3, 2015, p.135-151.

全研究業績のリスト

1. 査読制度のある学術雑誌論文

和気尚美「デンマークにおける移民の公共図書館に対する意識と利用行動 ： ムスリム移民を対象としたインタビューを通して」『移民研究年報』No. 18，2012.3，p. 121-138.

和気尚美「デンマークの移民に対する公共図書館サービス ： アクターの機能と関係に着目して」『日本図書館情報学会誌』Vol. 61，No. 3，2015.9，p. 135-151.

2. 著書

和気尚美「第 3 章 複数の支援の網で支える高齢者の読書活動: スウェーデンの公共図書館」『高齢社会につなぐ図書館の役割 ： 高齢者の知的欲求と余暇を受け入れる試み』溝上智恵子，呑海沙織，綿抜豊昭編著，学文社，2012，p. 49-68.

和気尚美「第 5 章 スウェーデンの公共図書館における多様な利用者へのサービス」『読書を支えるスウェーデンの公共図書館: 文化・情報へのアクセスを保障する空間』小林ソーデルマン淳子，吉田右子，和気尚美，新評論，2012，p. 165-192.

和気尚美「第 5 章 ノルウェーの図書館における多様な利用者へのサービス」『文化を育むノルウェーの図書館 ： 物語・ことば・知識が踊る空間』マグヌスセン矢部直美，吉田右子，和気尚美，新評論，2013，p. 207-237.

3. その他

＜学会発表＞

和気尚美「デンマークの公共図書館におけるムスリム移民へのサービス：コペンハーゲン市立図書館ナアアブロー図書館の移民対象プログラムに焦点をあてて」，2011 年日本図書館情報学会春季研究集会，2011 年 5 月，口頭発表.

和気尚美「デンマークにおける移民を対象とした図書館サービスを支える体制」，2014 年日本図書館情報学会春季研究集会，2014 年 5 月，口頭発表.

＜その他の雑誌＞

和気尚美「北欧の公共図書館 ： 移民のくらしのセーフティーネット機能に着目して」『むすびめ 2000： 図書館と日本在住外国人をむすぶ人・ことば・生活・本・情報の通信』No. 88，2014，p. 4-7.

和気尚美「デンマークの公共図書館を利用するムスリム移民のエスノグラフィー」『αシノドス』No. 170+171，2015，p. 141-173.